

# Metal Gear Fate/ Grand Order

daaper

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲で超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

2014年

全てが情報、人も情報、命は本と何ら変わらないモノ

過去の偉人たちの逸話が、物語の主人公が、そんなモノが簡単に誰もが体験し体験出来る時代

だが世界は50年以上ものある支配から解放された

そして新たな世界へと歩み始める

ハズだった

※この作品は受験を控えた作者が勢いで書いてしまった物語です。

来年の受験が終わったら本格的に書こうと思いますが、まだ検証段階の代物です。

ご意見・ご感想がありましたら感想欄に書いていただけると参考になります m

し  
m

# 目次

プロローグ	1	邪竜百年戦争 オルレアン	368
炎上汚染都市冬木：1	39	邪竜百年戦争 オルレアン	：1   2
炎上汚染都市冬木：2	89	邪竜百年戦争 オルレアン	：2   1
炎上汚染都市冬木：3	153	邪竜百年戦争 オルレアン	：2   2
炎上汚染都市冬木：エピソード	212	邪竜百年戦争 オルレアン	：2   2
スネークのステータス	260	邪竜百年戦争 オルレアン	：3   1
幕間：戦力増強（訓練）	263	邪竜百年戦争 オルレアン	：3   2
戦力増強（ガチャ）	298	邪竜百年戦争 オルレアン	：3   2
第1章：邪竜百年戦争 オルレアン	342	邪竜百年戦争 オルレアン	4   1
プロローグ	342		

686	邪竜百年戦争オルレアン	10
	邪竜百年戦争オルレアン	9
	邪竜百年戦争オルレアン	8
	邪竜百年戦争オルレアン	7
613	邪竜百年戦争	6
	邪竜百年戦争オルレアン	5
561	邪竜百年戦争オルレアン	4
	邪竜百年戦争オルレアン	3
539	邪竜百年戦争オルレアン	2
517	邪竜百年戦争オルレアン	1

822	邪竜百年戦争オルレアン	14
787	邪竜百年戦争オルレアン	13
757	邪竜百年戦争オルレアン	12
740	邪竜百年戦争オルレアン	11
712	邪竜百年戦争オルレアン	10



# プロローグ

時が過ぎれば時代は変わる

時代が変われば………一体何が変わるだろうか？

戦争は変わった

世界は何もかもが情報化され、戦争経済という名の世界を回すための歯車に成り果てた。

理不尽を取り除くための発展途上国で起きる武装蜂起はいつの間にか先進国へ資本を捧げる“商品”となった

“商品”は管理されなければ単なるモノでしかない

“商品”を構成する物は人間で管理するのも人間だ

“商品”を売り利益を上げるにはコストパフォーマンスが重要なのは誰でも思いつ

く

それがたとえ命を貨幣として、賭け金として運用されるビジネスだとしても



そう、戦争はビジネスとなった。

ロマンスという物語

- ・ある者は王に忠誠を誓い、そして王と共に国が破滅していく
- ・ある者は人として生まれ、神に試練を与えられ勝手に失望されながらも、全ての困難を弾き貫き通した

・またある者は強く、優しく、そして忠義に厚く、その所為で忠誠を誓った者から疎まれ、殺された

それらの物語に登場する人物たちの騎士道や武勇伝・英雄譚に由来する精神的価値  
彼らは熱狂的な恋と行為を魅せ、魅せられ、誰もが綺麗で、人々に美しいと語り継が

れた物語を構成する

中には神という名の理不尽や、人の醜いモノが湧き出しいつの間にか憎悪にまみれた物語もある

だがそのどれもが例外なく戦場に立ち、そして読んだ人々の心を動かし感動させた  
そして彼らは人々に英雄と称えられ、それぞれの物語の主人公となった

しかし戦争は変わった

戦場には既に主人公という人々の心を動かし感動させる存在のしようは無く、英雄は  
いつか殺人者と成る時代

戦争は人々の心を満たすのではなく、資本主義社会を回す歯車の一部であり “商品”  
の一種

“戦場”は“市場”へと変わった

何もかもが情報化された社会

物語は文字に起こされ、本という形にパッケージされ書齋や図書館に並び管理される。

書齋を管理する人間は物語が読みたくなったら自身の記憶を元に書齋から本を取り出し物語を知る。

図書館なら、まず自動検索機の前に立ち読みたい本の名前を検索する

すると検索機は電子化された情報を管理しているサーバーにアクセスし何処に本があるかを利用者に示す

後は示された情報を元に本を探し出すだけで物語を知ることが出来る  
読みたい本が無いとなれば検索機は立っている人間に本の予約を促す

その全てが高度に、複雑に繋がりがあつた電子による情報網でやり取りされ、借りた人物・借りられた本の名前を結びつけ誰が喜ぶかわからないビックデータとして管理され

る。

図書館でなくとも今はお金と電子による情報網に繋がりさえすれば本は手に入る。

この本を買った人物はこれも買う、あれも買う、ついでにこれが気になっている。

企業は勝手に蓄積されていくデータを元に誰かは知らない人間にこれ見よがしに商品を見せる。

そして嬉々として人々は両手を広げ広告に賛同する……片手はマウスかスマホを握ってるだろうが

その情報の流れとやり取りの対象が命に代わっただけだ

何もかもが情報化された社会

人々は名簿に起こされナノマシンでパッケージングされ軍や民間軍事会社に搬入され管理される

軍を管理する人間は戦いたくなったら、又は戦う必要があれば命令を元に「軍人」を要望通り現地へ出荷する

だがこの方法はあまりにも高く付き、ほとんど採用される事は無くなった  
代わりに軍人でも民間人でも無い

民間の軍事会社でパッケージングされた社員という「商品」が世界各地で生産され出荷され始めた

まず、民間軍事会社（PMC）はクライアントから仕事を受注する

するとPMCはナノマシーンによって管理された「商品」から、受注した仕事を分析し最適な「商品」を出荷する

「ええ、アフガニスタンですね、それならアフリカ系とヨーロッパ人はどうでしょう？

特にアフリカ系なら彼らに何の絡みもありませんから気にすることなく殺せますよ。

しかしそれだけでは不安でしょうからアパッチにLAVを3台ほど付けましか、それともハボックの方が好みですか？」

そんな具合に。

実際は莫大な過去のデータを管理しているサーバーから敵戦力と用意すべき戦力を予想するだけ

そして後は示された情報を元に適切な「商品」をピックアップし出荷するだけ  
適切な「商品」が無ければクライアントが別のPMCに相談するだけ

その全てが高度に、複雑に繋がりがあつた電子による情報網でやり取りされ、クライアントと受注内容を結びつけ誰が喜ぶかわからないビックデータとして管理される。

この仕事内容ならこれだけの戦力で充分、この地域は〇〇人だからアフリカ系の「商品」を出荷すれば受注内容に支障が出ない、ついでにこの地域ではどうやらテロリストがいるらしい、なら彼らに銃を売ろう。

そんな勝手に蓄積し勝手に判断してくれる統計データを元に企業は動く貨幣をやり取りする

今の時代、相応の金と電子による情報網に繋がりがさえすればその人の思い通りに出来る。

ふと、あの物語が読みたい、あの本が欲しいと思えば欲しいものを検索しへカートに投入するを押しだけ。

後はプレミアム会員なら即日配送でその日のうちに届く、物によってはタダで読むことも出来る。

ふと、あの国を蹂躪したい、あの人を殺したいと思えばPMCのサイトを開き〈戦力を投入する〉を押すだけ。

後は追加料金を払えば即日対応でその日のうちに結果が届く、物によっては人々が歓喜に沸く。

〈カートに投入する〉ことも

〈戦力を投入する〉ことも

同じ指でたったワンクリックで簡単に済ませる事の出来る世界

## 戦争は変わった

企業はより効率的な組織運用を求める存在

“商品” 成り立たせる人間にはアップデートされたナノマシンが注入され、精神や肉体を常にモニタリング

人件費を抑えるために労働力の安い国から大量に人々を採用し “消耗品” に仕立て上げる

そしてとにかく “商品” が消耗する事先に一番安い “消耗品” を出荷する  
ひと月経ち、 “消耗品” が劣化してきたら棚卸しの要領で “商品” を交換し新しい “消耗品” を出荷する

この時、決して劣化した “消耗品” は捨てない

戻ってきた “消耗品” をちゃんとメンテナンスし休暇を与えてやれば、何と一番安い “消耗品” から一級品の “商品” が生産されるからだ

もつとも、 “消耗品” が現地で全て消耗した所で惜しくも何とも思わないが。

なら最初からそれなりの “商品” を仕立てあげれば良い



無料のFPSゲームはそれなりの子供たちが喜んでプレーしてくれる

画面に写し出される人間は敵を華麗に倒し、格好良くキメてくれる

12歳以上になった子供たちにはVRでFPSゲームをプレー出来る、もちろん無料で。

すると今まで画面に写し出されていた人間が隣にいる、格好良くキメている

そして何より・・・自分が格好良く、華麗に敵を倒している世界が広がる！

ひと昔前は画質によってゲームのクオリティは評価されていたがそれはあくまで昔の話

今の時代、VRによって現実とも区別がつかない品質の画像が360度に展開する事くらい家で出来る世界

敵を銃でヘッドショットし、ナイフで華麗に薙ぎ倒す

そんな風に遊べる世界

新しいナノマシンを体に初めて投入し、居心地の悪い飛行機に揺られ飛ぶこと数時間

いつも通りに眼の前に敵がいる

いつも通り銃を相手も自分も持っている、ナイフもある  
なら狙いを付けて引き金を引くだけ

いつも通り

スイカのように弾け

目玉が飛び出て

敵の体が重力に抗うことなく崩れ落ちる

それが最初の殺人だとしても誰も気にしない、本人も何とも思わない

強いて言うなら少し生臭い

く  
そう思うのもつかの間、すぐに新しい的が出てきたから今度はフルバーストで撃ち抜

すると真横から駆け抜けて来た敵がいるのに気が付く

ナイフを抜き、振り向きざまに刃を相手の額に押し込みグリグリして刃を抜き

又チャ又チャと音を立てたのも一瞬、すぐに相手の邪魔な体を押し空になったマガジンを交換する

綺麗に敵を倒し、華麗にナイフで相手を倒した自分

そんな姿に酔いしれ、ゲームと同じ様にヘッドショットをきめて、撃ち抜き、ナイフを突き刺す

そこにはもう現実とゲームとの差はない世界

P M CがFPSゲームを無料で配布している世界

……そんな世界、それが当たり前になった時代

それが表の世界では起きていた

そんな世界を変えようと、動いた者たちもいた

その者たちを阻もうと動いた者たちもいた

そしていつの間にかこんな世界を作っていた者たちは最後の蹴りをつけた

あらゆる物を、者を、モノを管理するシステムは破壊されかけたものの、結果は兵器

を管理するシステムだけが破壊され、裏で世界を操っていたと言っても過言ではない存在は消されついに世界は平和への道を……………歩むことは無かった。

あまりにも経済を回す歯車の一部としては肥大していた戦争は、たかが全ての兵器を完全に掌握し管理していたシステムが壊れた程度では消えることは無かった。

民間軍事会社もいつの間にか立て直し、若干の規模縮小は有ったものの、さも当然に存在し続けた。

それでも……………それでも

それでも、世界はとりあえず生きていくには不便ではないと誰もが言える世界へと歩み始めていた。

アフリカの新興国はあまりにも疲弊しすぎた国内の実情に目を向けた。

裏で操っていた存在……………もはやその名を知る人間は両手で数えるほども居ないが、そ

の存在が消えたことによつて世間は無意識下での情報操作は受けなくなり、より軍縮の声を上げた。

全てが情報、人も情報、命は本と何ら変わらないモノ

過去の偉人たちの逸話が、物語の主人公が、そんなモノが簡単に誰もが体験し体現出来る時代

だが世界は50年以上ものとおある支配からようやく解放され、全く新しい世界へと歩み始める

と、思われていた

.....

.....

◆  
?  
◇  
◆  
?  
◇  
◆  
?  
◇  
◆  
?  
◇

.....  
.....  
.....  
何か.....いる？

.....  
.....  
.....  
いや.....違う





自己犠牲、か……そんな綺麗なもんじゃ無い、  
と言うかだな……一体ここは何処だ、天国だとしたらあんたは神様かお偉いさんか？

……随分と回りくどいが、要するに……ああ何だ……神様じゃ無いのか？



……まあ連中が俺を良いように使っていたからか。

適当な伝記で俺を祭り上げてたが……確かにあいつらがわざわざ俺の伝記について  
までは消さないな。

しかし、そのお陰でこんなへんぴな場所にご招待された訳だ……面倒だな。

世界の守護、英霊か……随分と立派なシステムが有ったもんだ

そいつはお門違いだ。

聞く限りその英霊様は地球の危機に現れるんだろが、俺が関わっていたのはあくまで個人の危機だ。

それで核が発射されようとも所詮国や人類の自業自得って所だろう、俺が言うのも何  
だがな。

ああ、だから恨んじやない。

むしろその提案を受け入れよう……まあどうせ暇だ、それに俺を従える……マスター

だったか？

それも自分で選べるって言うなら文句は無い、どの道文句は言えそうに無いしな。

.....

良いだろう別に、それが俺に害ある物ならさつさと逃げるが少なくとも面倒そうなだけみたいだ。

それにさつきも言ったがここから逃げるのも疲れそうだしな、良い鍛錬にはなるだろうが。

.....

.....

ああそうだが……考えてみればあんたにまず迷惑がかかるか、そいつは悪かった。  
だがここでは何をやっても良いんだろ？なら勝手に鍛錬でもしていよう、他の英霊つ  
て言うのも気になる。

……  
……  
……  
ああ了承した、別にここでの記憶が消えるだけで生きてた時の記憶までは消えないん  
だろ？

それなら別に文句は無い……まあ記憶までは消されれば文句も言えないんだろうが。

◆? ◆ ◆? ◆ ◆? ◆ ◆? ◆ ◆? ◆ ◆?

2014年、世界は呪いにも等しい管理下から解放された。

解放された対象は全ての兵士たち

戦場に関わる人間であり人々

あまりにも多い管理対象、情報管制においては全人類が無意識のうちに管理下に置かれていた

その管理下から世界はあまり人々が認知していない間に解放された

それを管理していた人間はもはや人間では無かったのだろう

実際、管理していたのはある人物に魅せられ、その人の意思を、理想を叶えようとした人物を模倣したAI

だがそのAIが破壊される前



その情報管制によつてある逸話が陽の目を見る事となつた。

それはナスターシャ・ロマネンコの著書『シャドーモセス島の真実』を塗り潰す勢いで世間に広く知られ、崇拜された

簡単に誰もが逸話を体験し体現出来る時代に

誰もが諦め絶望する状況下での任務を果たした男として

核戦争の危機から幾度も世界を救つた男として

そこまではシャドーモセス島を生還した男と共通している

だが彼は

特殊部隊の存在を確立し

接近戦における技法を構築し

ある種の国の長となった男

そして何より、自らが撒いた種とはいえ悪しき一つの時代に蹴りを付けた男

彼の歴史は誰もが共感し感銘する様に湾曲され、隠された部分も多い

だが誰もがその存在を知った時、崇拜にも近い形で彼を、その英雄を讃えた  
彼が活動していた時、彼は伝説の傭兵として名を馳せていた

そして尾びれがついていたはずの噂を上回る実力とカリスマをも備えていた  
しかし、彼は決して自分が英雄だとは思わないだろう

何せ生前から彼は「英雄は大したものじゃない、周りが勝手に騒いでるだけだ」と言  
い切っている

だが彼の知るよしもない場所では

もはや人では認知することの出来ないその場所では

彼を「英霊」と

“英霊”の座に座す者と認めていた

彼の真名を知るものは極々僅か

情報化され情報解禁がなされても人々が彼の真名を知ることには無かった

だが人々はその男を

一人の英雄として、

伝説の人物として呼んだ

## 『BIG BOSS』と

◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆

「……はい?先輩?」

「はい」

「……俺が?」

「はい」

「……えつと、とりあえずそれは置いて……君の名は?」

「フオウ!」

「違うそうじゃない」

場所は変わり、

ここは人理継続保証機関カルデア。

場所は秘匿……とはなっているが、標高7000mだか8000mだかの高所にあり常に吹雪いている様な場所にあると言うのだけは断言できる場所。

そして、魔術と言う世間からすれば夢かフィクションの様なものを大真面目に利用している機関でもある。

## 魔術

それはまさに魔法……とは厳密には違う。

いや、実際は全く違う別のものだ。既に定義されている、ただ単に存在が秘匿されていて世間には知られていないだけで実在し実現できる物なのだ。

魔術を扱う者達、魔術師は全ては根源へ至るために魔術を扱い、鍛錬し、探求する。そもそも根源とは何か？

……はつきり言つてよく分からない、ただあらゆる者や物の全ての源・理を成すなにか。

文字に起こせばそんな物だろうか。

さて、そんなよく分からない物が人の一生のうちに見つかるだろうか？

答えは単純、否である。

だがそんな事で彼らは探求を止めない、その熱心さは狂気に等しい。

まず魔術師は根源へ至るための方法やアプローチを探す。

一生をかけて実行する。

そして子孫に根源へ至るために一生をかけてその探求を実行出来るよう教え、伝承し、探求させる。

……これを魔術師というのはひたすら繰り返している。

1000年2000年などまだまだ魔術師としての歴史は浅く、1000年以上も探求を続けている（させられている）一族も多い。

「えつと……まあ倒れてた所を助けてくれてありがとう」

「いえ、私はただ単に倒れてた先輩を介抱しただけですし、何より倒れている人がいて放っておくのはどうかと思ったので」

「あははは……聞いていて自分が情けない」

「フオウー！」

「……何、慰めてくれてるの?」

「フオウ」

「おーここが良いのかここが」

「フオウさんがあんなにもあつさり懐いている……!」

多いのだ……が、この2人の少年少女は例外だ。

特にこの少年、白い毛むくじやらのリスのようで、兎に似た長い耳を持ちケープを羽

織っている四足歩行動物フオウを愛でてゐる藤丸 立香（ふじまる りつか）は「この施設の人になんか熱心に誘われた」という随分と心配になる理由でここに連れてこられた“一般人”だ。

世間一般の常識と赤点を取らない程度の知力と運動能力を持つ……と言えばなんかカツコよさそうだが単純にこれと言つて特筆することがまるでない、強いて言うなら秘匿すべき物とされる魔術を扱う機関に採用される理由があるくらいだろうか。

「で、サーヴァントがなんかスゴい事をした人達つて言うのはわかるんだけど……結局何をするの？」

「……待つて下さい先輩、まさか何をするのか本当に知らないんですか？」

「そうだけど」

「先ほど先輩が言ったのはてつきり気の利いたジョークかと」

「……倒れてた俺が言うのも何だけど、まず最初に自分の居場所を聞くことは変かな？」  
訂正する、別に藤丸 立香は世間一般の常識程度は持ち合わせているが若干ズレている。

彼は彼女にこう聞いたのだ

「ハイは……どハイ？」と



「……………そんなことありませんね」

そしてそんな彼を先輩と呼ぶ彼女、マシユ・キリエライトは余りにも世界を知らなすぎた。

「小説にもよく倒れた人を介抱して、目を覚めればまずは『ここはどこ？ 私はだれ？』と聞くものですしね」

「ちよつと待つて、俺は別に記憶喪失とかじゃ無いからっ」

「違うんですか？」

「違う違う、俺はそもそも誘われてここに来ただけで詳しい話は聞いてないんだ」

「そうなんですか……………では私が簡単に説明しますね」

曰く、カルデアは未来における人類社会の存続を任務としている。

そのための観測モジュール：地球環境モデル・カルデアスやシバといったもので人類の未来を占うどころか直接観察していた。

ところが、ある時カルデアスから光が消えた

光とは人類が生み出す文明の産物、つまり人類が消えた事を意味した。

その原因を探るうちに2016年に人類は絶滅するという結果が得られたという。

その人類滅亡の原因を探るとシバは何と、過去である2004年の「日本のある地方

都市」に「特異点」と呼ばれる観測不能領域を観測したという。

「……………ん？それってどういう……………」

「わかりませんが、ただカルデアの皆さんはこれが人類史を狂わせ人類を滅亡に追い込んだ原因だと仮定してようです」

「じゃあどうするのさ？」

「レイシフトです」

「レイシフト？……………ああ、何かの実験にさっきまで参加してた気が」

「霊子ダイブですね、それによって過去に人を派遣することが可能です」

「へえ……………いつの間にかタイムトラベルが出来るようになったんだなあ」

「そうですね」

「ここは普通、人類が滅亡するだつて!？」

などと驚く物だと思う、だが実際に人類が滅亡すると聞かされてもまず誰も驚かない。

大体はへえーと適当に流すか、それで？と何となく聞き返したり等、あまり本気にはない。

「……………でも、過去に遡って解決できる物なの？」

「……………そういえば先輩は一般人でしたね。」

2004年のその地方都市では聖杯戦争は開かれたと言われています」

「そのさつきも出てた聖杯って何なの？」

「……先輩は無神論者ですか？」

「えっ宗教的な物なの？」

「えっと……先輩は聖杯伝説というものを聞いたことは？」

「ああ、何でも夢が叶うっていうやつのこと？」

「ええそれです」

「……待って、聖杯戦争の聖杯ってまさか」

「はい、万物の願いを叶えるという夢のような物、奇跡をまさに表した物です」

「……何かすごいことになって来たなあ」

◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆

西暦2015年

ここカルデアである物語が始まる。

それは誰もが体験し体現できるような代物ではなく

いつの間にか英雄伝や戦争といったものに価値が無くなった時代

だがここでは価値あるものとして、過去の逸話を残した偉人たちに並ぶ  
そして主人公となる物語

人理焼却に抗う余りにも未熟な少年と少女が時代を旅する物語

そして

「……そういえば葉巻は吸えるか？」

英雄の座に着いた一匹の蛇との物語

## 炎上汚染都市冬木：1

「……あ、せん……ば……い？」

『……………』

「……あやだあ……死にたく……ない……！」

『……………！』

「っ!!」

あたりが燃えている

否、あたりが崩れ落ち、破壊され、燃えているといった方が正しい

人類を救うために集められたマスター適正者達は、人類を救うために2004年の地方都市冬木へレイシフトする……ハズだった。

レイシフトのために各人専用の霊子筐体（クラインコフィン）というポッドに入った彼らはレイシフトによる人間シエイクを体験することなく体をシエイクされた。

具体的にはポッドの中が爆発し彼らの中身が混ざった

それと同時にカルデアの命とも言える発電区画、そしてレイシフトに備えていたカルデアのスタツフが一同に集まっていた中央管理室がまとめて吹っ飛んだ。

それによつて何かが倒れてきた。

結果、レイシフトには直接参加する訳ではなかったマシユは爆発によつて体も意識も飛ばされた後に潰された

奇跡的にも、その綺麗な顔と上半身だけは圧迫を免れたがそれは余りにも無価値で、命が尽きるののは誰の目にも明らかだった。

彼女が目を開けると、今回のレイシフトには参加しないハズの少年の姿があった。恐らく自室から急いでかけて来たのだろう、大量の汗をかいていた。

いや、彼はとつくに力尽きていた

あたり一帯は炎に包まれている、すでに生存者など無く救助する対象など居ない。

……いや、彼女がいた

だが彼女の下半身は人が動かすには大きすぎる瓦礫によつて挟まれ、マツシユさされていた。

それでも彼女はまだ生きていた。

必死になって瓦礫を動かそうとした少年の手は傷だらけだった  
だがひ弱な人間、ましてやこれと言って特徴のない一般人  
彼に瓦礫を1人で退ける方法など持ち合わせて居なかった  
かくして

《プログラムスタート、量子変換を開始します》

《レイシフト開始まで、3・2・1……全行程クリア、ファーストオーダー、開始  
します》

彼らはその場から焼却された

◆?◇◆?◇◆?◇◆?◇◆?◇◆?◇◆?◇◆?

.....  
何だ、何かあったか？

.....  
核か？



……そんなこと出来るのか？

出来るのか……ならあんたが止めれば良いんじゃないか？

介入できない？

待って待って、なら実行犯はお前の邪魔が出来るって言うのか？

.....

.....

.....

そうか.....で、俺にどうしろと？

.....

.....

.....

ああわかったわかった、早い話、要するにマスターと共に敵を倒せと。

了解した、なら……って待て、俺はどうやってマスターとか言う奴の所に行けば良い？



向こうから呼びかけてからだ？

……まあ考えてみれば死んだ人間を呼び出すのに儀式のような物をするに決まってるか。

その時、ある程度弱体化するのか。

まあ俺は接近戦さえ出来ればどうにかなるが……アサシン？勘弁してくれ、俺は殺し

屋じゃ無い。

……そうならなかったでどうにかするがな

とりあえずは了承した、それに他の連中も参加するみたいだな。

誰なのかはさっぱりだが……まず俺がマスターの元に行けるかもこれだけいると怪しいがな。

だが準備しない訳にもいかんだろう、まずは戦略だけでも練っておくか。

わかった、黙っていよう。

◆? ◆◆? ◆◆◆? ◆◆◆◆? ◆◆◆◆◆?  
◆

「……………あ……………?!?」

少し寝ていたのだろうか、目を覚ます

同時に意識が覚醒する

意識を失ってはいいたものの、少年……………立香は寝ていたと一瞬勘違いする程度の意識消失。

体に痛みは無く怪我はしている感じはしない。

ただ頭がグラグラする……………だがそれでも動くのに支障が全くない、五体満足の状態だった。

今はカルデア

……しかも爆発騒ぎで中央管理室に駆け込んだハズツ!?  
そしてこの場が火災現場だと思い出しすぐに体を起こす

「……………は……………どっだ……………!？」

だがそこは見た事もない場所

別に彼が記憶を消失している訳ではない

目の間には廃墟と化した都市……………それも日本でよく見る様なビル群が崩れ落ち、燃えている

しかもそれが見渡す限り、全体に広がっていた

本当にここは一体どこだろうか？

どこでも見かける横断歩道に交差点、そして信号機  
だが信号機は一切動くことなく、点灯することなく、黒いまま

そのまま空を見上げるとその空までもが黒かった

いや、どこか赤みがかつていて天候が悪くなりそうで……………見ている自分の気分が悪くなってきた



空を見るのを切り上げて辺りを再び見ていると……骨があった

「ガイコツ……!?!」

当然、道端に骨が落ちていれば驚く

それがほぼ人骨として骨格がほぼ完璧な状態で残っていれば余計に驚く

それが突如としてスツと立ち、ゆっくりと歩いて来たら……大体パニックになる

「……………」

だが立香はどうやらストレス耐性が強いタイプらしい

パニックも一種のストレス回避方法だが、同時にそれは場所によっては生命を危機に落といれる

多くの人は危機的状況のストレスからパニックに陥り死に至るが、彼はストレスのお陰で極めて冷静になれた

「……とりあえず、逃げよう」

そして事前に有能な後輩から聞いた魔術の話

それから察するにあれは何らかの怪異……バケモノ

であれば自分が倒せる様な代物では無い

「……………」

すると先ほどまで見上げていた空から一筋の赤い光が飛び出した

その光の先は特に赤く光っている  
やがてその光はこちらに向かつて来て……………

「おいおい……………冗談だろ……………!?!」

一直線に向かつて来た

どうしようも無いが一般人である彼に回避方法など無い

そのまま光が全身に突き刺さる

「……………?」

かと思われたが

何かが赤い光を防いでいる

……違う、盾を持っている人が自分を守ってくれている

その盾を持つ者は随分な薄着とは裏腹に、その身長より大きい盾を支えていた

その髪は薄いピンクのショートカットで……

「マシユ!？」

「はい、ですが詳しい話は後です、先輩は今は伏せていて下さい」

「う……うん」

突如、薄着でメガネを外しとても大きい盾を支えて現れた後輩に驚きながらも、それ以上に先ほどから天から降り注いで来る赤い光のせいで動くこともままならない。

何よりマシユの盾から離れれば簡単に死んでしまうこと位は想像できた。

女の子の後ろに隠れるという男としては屈辱的な状況だったが、背に腹は変えられず。

この場を凌ぐために後輩の背中を立香は見守っていた。

「とりあえず撤退したみたいですね……」

「マシユ……その格好は一体……」

「あつ……これは……その……っ!？」

きやああああああああああああああああああああああああああああ

「今の声は!？」

「マスター、指示を!」

「うん、わかっ……マスター?」

「ええ、そうです、先輩だけが唯一マスター適正者としてレイシフトしたんです。

ですから私は先輩のサーヴァントとしてここに居ます、私たちでこの状況を、人類の絶滅の原因を解決します」

「……なんかまだよくわかんないけど、とりあえず声が出た方に行こう、とにかく情報収集だ」

「了解ですマスター。

さっきの声から察するにだいぶ危機的状況なはずですが、距離も近そうですから急ぎましょう」

そう言つて盾を担ぎながら走るマシユ。

その後ろを追う立香だが、重い荷物となつて居るであろう盾を持っているマシユの方が

圧倒的に早かった。

「……こりや、鍛えなくちゃいけないなあ……」

人類の危機というピンチにも関わらず、彼は主人公らしく随分と呑気なことを考えていた。

「あああもうっ！何で私ばかりこうなるのよ!!」

そう言いながら射撃のような魔術によって骸骨の敵を倒す女性。

白髪のロングヘアーのカルデアの所長……オルガマリー・アースミレイト・アニムス  
ファイア

彼女は現在、絶対絶命のピンチに陥っている。

何せどこぞの一般人とは違い、敵に対する対抗手段はあるものの数が多すぎる、何せ  
20や30はいる。

射撃は距離を保ちつつ攻撃するには一番効率よく、かつ安全な手段だが、多くの敵を  
相手取るには不向きだ。

それこそフルオート射撃が可能な現代のライフルなら可能かもしれないが、所詮魔術による射撃。

速射はできても連射することは、少なくとも彼女には出来なかった。

そのため、走って逃げつつ近い敵を倒す引き撃ちしか彼女には方法が無い。

……が、彼女の靴はヒールだった

「あああ!!」

ヒールでマラソンなど、いくら魔術師でも、むしろ肉体的鍛錬をしていない魔術師ではキツイ。

走って逃げるまでは良かったが、彼女はあまりにも体が弱かった。

「……もうっ！誰か助けてよ!!」

そしてメンタルも脆かった。

人間、パニックに落ちれば危機的状況に陥る、そしてブレる。

心情も、

表情も、

標準も、

飛びかかって来た骸骨に座りこみながらも射撃する……が全弾が微妙に標的にズレていた

「嘘でしょ!？」

そして骸骨の得物が彼女を切り裂く

……かと思つたが、何かが彼女に振り下ろされた刃物を防いだ

「……マシユ!？」

立香より早く走れるサーヴァントとなつた、マシユだつた。

マシユは自分より大きかもしれない盾を担ぎ、ふりまわしながら周囲にいた敵を言葉通り薙ぎ倒していた。

「大丈夫ですか……つて所長!？」

「あなた一般人枠の……つ何でここに!？」

「詳しくはわかりませんが詳しい話は後ですつ！ここから逃げますよ!!」

「つあなたに言われなくてもわかかつてる!」

「マシユ!一通り片付けたら逃げる!追加で敵が来るかもしれないから早めに!!」

「了解しましたマスター!」

マスターである立香に答え、マシユは盾でありながら骸骨達を粉碎していった。

その間に一般人はさっさとこの場から立ち去る、ヒールを履いていて少し足が痛かつ

たオルガマリーも素直に走って逃げた、それが今は一番だということ位は貴族である彼女も理解していた。

◆? ◆◆? ◆◆◆? ◆◆◆◆? ◆◆◆◆◆?

「……で、あなたはデミサーヴァントになってよりもよって一般人である彼をマスターに仕立てたのね」

「はい、それ以外に私や先輩が生き残る方法はありませんでした」

「それに関しては今は良いわ、戦力は多いほうが良いですもの……それよりロマニ、そっちの状況は?」

《カルデアの施設の8割が消耗、破損、職員も犠牲になりました。》

47人のマスター達は危篤状態、幸い死には至っていませんが全員を回復する術はありません。

先ほど所長の許可を得られたので緊急凍結で保存しました、補給さえ得られれば回復できるかと》



「そう……………これならまだ弁明はできるわね……………レフは？」

《レフ教授は……………爆発の中心に居ましたので……………》

「……………今は私がかしらないといけない訳ね。

気に入くわないけどロマニ・アーキマン、あなたにしばらくカルデアを任せるわ、復旧作業と補給は頼んだわよ」

粗方の敵を倒し、落ちついた所でカルデアからの通信が入った。

「どうやら魔術と科学の融合で、過去に遡っていても現代と通信することは可能らしい。」

だが、事態はそれどころじゃ無かったらしい

通信相手であるロマニ・アーキマンは立香の部屋で仕事をサボる常習犯だが、そんな彼は一介の医師。

カルデア医療部門のトップではあるものの、カルデアは別に白い巨塔では無い。

はつきり言つてマスター適正のある魔術師達の方が偉そうで、実際偉かったりした。

そんな彼が指揮を執る必要に迫られていた。

状況はそれだけ悪かった。

現在わかっていることを簡単にまとめると

- ・マスター適正も無く、レイシフトも出来なかったオルガマリーが何故かレイシフトし冬木にいる事。

- ・副所長にも等しいレフ教授は即死したと思われるが現時点ではまだ行方不明。

- ・他の部門のトップはすでに死亡が確認され、多くの職員も犠牲になっており、動けるのは20名程度

- ・マスター適正者は48名中47名が瀕死・危篤状態（なお、凍結保存により今は命に問題無し）

- ・現段階では施設の通信手段までやられたため救援を得るのはすぐには不可能。あまりにも損害が多すぎた。

しかし、カルデア所長でありアニムスファイア家の当主でもあるオルガマリーからすれば一族の名に泥を塗り、さらにカルデアそのものが奪われる恐れがあった。

それは彼女には屈辱以外の何物でも無く、何らかの成果だけでも挙げなければいけない状況だった。

「……では、これより藤丸 立香とマシユ・キリエライト兩名を探索員として特異点Fの

探索を開始します」

《わかりました、検討を祈ります》

「……どうせSOS送ってもあなたは何も出来ないでしょっ」

《それはそうですけど……》

そう言っても何も出来ないのは事実。

無線を切り盛大にため息を吐くことしかロマニもオルガマリーも出来なかった。

「所長、大丈夫ですか？」

「……これが大丈夫に見える？」

「いえ、ですがこの特異点を調査しなければなりません。」

それが人類継続保証機関カルデアの使命だと私は思います……違いますか？」

「……あなたに言われると随分と突き刺さるわね。」

わかってるわ、とりあえずこの特異点を解決してさっさとカルデアに帰らなきゃいけない訳ね。

何もせずに帰るなんて選択肢は私たちには無いわ、当分救援も来ないでしょうしね」

「救助は来ない……俺たちだけでどうにかしなきゃいけないんですね」

「一般人がなに一人前みたいなこと言ってるのよ!!」

「ええ!!」

「じゃあ聞くけど、あなたはこの特異点の解決法は何かわかるのかしら！」

「えっ?……えつと、確か聖杯戦争とかいう聖杯を巡る儀式がここで行われてて、そんな魔術をよく知らない俺が聞いてもビツクリするような代物が何らかの鍵なんじゃないかと思う……思います!」

「……………よろしい」

全くよろしくなかった。

「どうよ、庶民のあんたより私のほうが（ry」

とここで自信をつけて、所長や魔術師としての威厳を見せつけようとしていた。

ついでに言えば、彼女の無意識下では誰かに何かしらの形で褒めてもらうだとか上に見られたいという欲求が彼女の行動や言動に影響を与える程度にその欲求は強かった。

それがフルスイングで弾かれた

もつともそれは優秀過ぎる後輩サーヴァント（その時はサーヴァントでは無かったが）が彼に懐いていたことと、それを彼女は全く把握していなかった事があるがそれを知らない彼女は勝手に悶えていた。

「ちよつと!?何で一般人で平民のこいつから聖杯なんて言葉が出るのよ!!

まるで私が格好つけようとして「あつそれ知ってます」って素っ気なく返されたみたいじゃない!!

このままじゃダメだわ……アニムスファイア家の当主として面目がつかないわ……!」

実際には家の面目どころか立香からすればオルガマリーの事を単純に偉い人と認識しているため、むしろ彼女の目の前で寝た前科もあり足を引っ張っていないと少し安心していた。

そして、マシユに至っては自分の知識がマスターの役に立ったと喜んでいる。

PRRRRRR!PRRRRRR!PRRRRRR!

そこに再び通信が入る。

恐らくDr. ロマンこと、ロマニからの通信だろうが先の通信から五分も経っていないにも関わらず再び通信が入ったことを不思議にも思わず、勝手に赤っ恥をかいだと思っていたオルガマリーはすぐに応答した。

「何よしついでいわねー!」

《すぐにそこから離れて下さい！早く!!》

「何事よ!？」

「っ敵影反応!……サーヴアントですっ!!」

「マシユ、敵の距離は?」

その情報に青ざめたオルガマリーだったが、それより早く立香が対応に動く。

名前からもわかる通り藤丸 立香は日本人、そしてそれなりにゲームを嗜んでいた。

RPG・アクション・戦略シミュレーション・パズル、あらゆるジャンルのゲームはプレーした。

そして何事にもまずは正確な情報が大事だというのも頭では理解していた。

未だに明確な死を実感していないことも相まって、とりあえず素人にしては及第点は取れる指揮を執った。

「まだ距離はありますが……すでに捕捉されているみたいですが、接敵まで3分ほどかと」

「敵の強さは……わかんないね、とりあえず逃げに徹した方がいい感じかな」

《……何だか所長より頼もしく感じるけど立香くん、逃げるアテはあるのかい?》

「……………どうにかなるんじゃないですかね?」

そして素人らしくどこから来るのかわからない自信もあった。

これには通信先のロマニやオルガマリーは呆れた。

「どうにかなる訳無いでしょ!! あああ……こんな時にレフがいてくれたら良いのに……  
！」

「どうします先輩、時間はありませんよ」

「うーん……せめてマシユ以外にもサーヴァントが居れば……」

「「それだ（です）!!」」

「ええ!?!」

《立香くん、すぐにマシユの盾を地面に置くだ! 幸い霊脈は所長の足元だ!!》

「えっ、ああマシユ!」

「ハイ先輩!」

「それでどうするんです!?!」

《所長確か聖晶石持ってましたよね!?! それを——》

「わかってるわよ!!」

青ざめた顔や見栄や他諸々をどこかに捨てたらしい所長は随分と輝いた石を立香の

手に握らせる

《・・・OK、英霊召喚システムともリンクしてる！

これで英霊召喚が可能になった、あとはマスターが……立香くんがその石をマシユの盾に入れば君に伝えてくれる英霊が君に力を貸してくれるはずだ！》

「先輩、早く召喚を！」

「そうよ！敵が来る前に早く!!」

「待ってマシユ！敵はまだ遠いの？」

「……いえ、もうすぐ側まで来てます」

「ドクターロマン、召喚にはどれ位時間がかかるの？」

《わからない……けど1分もかからない……と思う!》

「時間はギリギリか……マシユ、盾無しでは戦えない……よね？」

「ついで！マスターのためなら——」

「無茶よ！今のあなたはデミサーヴァントになったばかり、聖杯戦争で召喚された英霊と武器なしで戦える訳が無いわ！」

「私は短剣も装備してます！無茶じゃありません！」

「無茶よ!!」

「所長！それにマシユも落ち着いて！マシユは短剣で敵と戦えるの!?戦えないの!?!」



「戦えます!!」

「ちよつと!」

「所長は射撃が出来ましたよね!」

「それが何!」

「ならマシユと一緒に敵を足止めして下さい!!」

「はあ!?! 私に戦えつて言うの!?!」

「それ以外に俺たちが出来る方法は無いでしょう!!」

「それともこのまま召喚する前に敵に殺されるかマシユが倒された後に殺されますか!?!」

「っそれは……………!」

「女性2人を囷に使うのは男として最低だけど今はそれしか無いんです!!」

「…………ああもうわかったわよ!!」

「マシユ! 私支援攻撃と簡単な回復くらいしか出来ないわ! しっかり私を守りなさい!?!」

「わかりました!」

「あくまで時間稼ぎだけで良いです! 2人とも無理しないで!!」

「あああもう!! 何で私だけこんな目に合うのよお!!」

マシユは敵を感知した方へ、時間稼ぎのために走った

その走った方向へやけくそになりながらも必死に付いて走るオルガマリ

一人残り、彼女たちのために、この特異点を解決するために英霊を召喚する立香

とにかく今はこの場を乗り切るために特異点に送られた3人は初めて3人で力を合  
わせていた

だが………1つ目の交差点を右に曲がった瞬間、敵はもう居た

「ああ随分と初々しい、新鮮な獲物がいたわねえ？」

「……………」

「ああ、あなた道具が無いみたいだけど大丈夫かしら？」

私は無抵抗のお人形をなぶり殺す趣味は無いのだけれど……………まあ可愛がれるか  
ら良いかしらね？」

「所長、下がっていでて下さい」

「マシユ、行ける?」

「問題ありません……私はサーヴァントです!先輩や所長を守るためなら戦えます!!」  
「……そう、なら遠慮なく殺らせてもらおうわよ?」

時間稼ぎはそう長くは持たないとオルガマリーは余裕が無いながらも察していた  
何せ彼女……マシユの足は小刻みに震えていた

◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆?

「早くしてくれよ……!」

一方、1人残された立香は焦りながらも英霊の召喚を待っていた。

《システムフェイトが起動した!あとは召喚を待つだけだ!!》

ロマニからの通信が入る

だがその直後、近くから派手な音と射撃音が聞こえた

どうやら思っていた以上に接近されていたらしい

時間稼ぎが無かったら対抗手段の無いこちらはまとめて倒されていただろう

英霊召喚が始まった

聖晶石を吸収した盾を媒介にカルデアにある英霊召喚システム・フェイトが動き出す

聖晶石が光り出しマスターである立香ごと周辺を照らす

やがて光は1つに収束し天に突き刺さるように伸びていった

そこから光は再び強くなり、光の帯となっていく

「早く……早く来いよ……！」

目を閉じ手を合わせ、すぐに終わるよう願う立香

そのせいでサーヴァントのクラスを見る事が出来なかった

そして光によって目が潰されることも無かった

神々しい光は集束し……いつの間にか消えていた

「……終わったのか？」

通信に反応は無い

英霊召喚の影響で通信が上手く出来ないのかもしれない

「……ほう、どうやら俺が一番乗りみたいだな」

そして耳にした

「……体に異常は無いな、これならまあ、どうにかなるだろう」

声は渋い

高い声でも無い

美しい訳でも無い

いたって普通の男の声

「……おい坊主」

それなのに

聞き入ってしまう様な声

「おい坊主」

全く知らないのに……信頼出来る頼もしさを感じた

「……念のために聞くが……お前が俺のマスターか？」

その問いに目を開けて

初めて少年はその男を……英雄をみた

◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆?

「あらあらあ、宝具も無しで勝てるんじゃないの? 彼女を守るのでしょうか?」  
なら私の槍くらい捌ききれないでどうするのかしらっ!」

「ツ!!」

「マシユ下がつて!」

オルガマリーの攻撃は決してサーヴァントを仕留める事は無い。

それでも注意をマシユから逸らし、マシユが切り込む空きくらいは与えていた。

だが相手はサーヴァント、しかも聖杯戦争で戦い慣れた敵



マシユはデミサーヴァント、ましてや戦いの経験など今まで一度も無く今は扱う盾も無い。

さらに支援しているのはマスターですら無い魔術師、同じ様に戦闘経験などほとんど無い。

その状況で連携などまともにも出来るわけも無く、どちらかが相手の気を逸らすのが精一杯。

マシユが必死になって敵を引きつけ、オルガマリーは牽制する。// 以外に // 2人で出来る事など無かった。

その程度戦い慣れている人間なら誰でもわかる、ましてやサーヴァントなら一度の立ち回りで大方予想つく。

実際、2人が相手しているサーヴァントも1度目の攻撃で2人が即席のコンビだと見抜いた。

だが一度だけ、たった一度魔術師の攻撃が大した物では無いとわかり攻撃を受けたところ、一瞬だけ怯んだ。

その隙に短剣持ちのサーヴァントに吹っ飛ばされた。

咄嗟に短剣だけは防いだがそれ以降は手加減するのを辞め、徹底的にサーヴァントの

方を狙った。

魔術師の攻撃も一瞬怯むだけで大したダメージは無い、怯んだところにサーヴァントが突っ込んで来てもカウンターで返せる様に槍を構えた。

その結果、マシユとオルガマリーは防戦一方の戦いから完全な逃走に移行していた。

「マシユ、怪我は無い？」

「はい、ですが長続きするとは……せめて盾があればっ！」

「喋っている暇はあるのかしらっ！」

そう言っつて一直線に槍をマシユに突き刺す

対してその槍先からひたすら距離をとるマシユ

「なかなかの動きだけど……」

ひたすら回避に回っていたマシユ

その選択肢は間違っていないかった

「残念ね、あなた弱いわ」

回避方法がランダムだと思っただけでも無意識にパターン化していなければ

「……………え？」

決着は突然訪れる

槍を避けたと思った瞬間、すでに目の前に槍が当てがわれていた

「マッシュ!!」

オルガマリーが術式を展開し構える……があまりにも遅かった

今から撃つても確実にマッシュの頭を槍が貫いている

この光弾が敵に当たっても一瞬だけ怯むだけで今度は自分が貫かれる

だが撃たないという選択肢は無かった

発砲

だがそれよりも早く

マシユの頭は

槍によって……貫かれず、相手はマシユから退いた

「ツ一体なに者!？」

「なっ何？」

「わかりません……いきなり敵サーヴァントがこちらを見ますが……」

「マシユ!？」

「マスター!？」

息を切らしながらもマシユの盾を担いで来た立香がその視線の先からやって来た。

「……そう、どうやらあなた、中々腕の良いマスターの様ねえ？」

「ツマスターはやらせません!？」

敵サーヴァントの狙いが自分たちから交差点から現れたマスターに変わったのを受け、マシユがサーヴァントとして立香のカバーに入る、もちろんオルガマリーも共に。

「ちよつと!? あんた——」

「黙って下さい所長、すでに事態は動いてますから」

「つあんたね——」

「マシユ、悪いけどあの槍の攻撃を弾くだけに専念して」

「わかりましたマスター」

「お喋りは……終わったかしらね!」

10 m以上はあった距離が一気に縮まり目の前に槍が再びマシユの前に構えられる

だが今はサーヴァントとしての武器がマシユにはあった

その突きを盾をもって弾く

この盾は単なる攻撃程度で壊れるほど柔な物では無いとマシユは直感的に感じてい

た

二撃・三撃と繰り返し、向こうが大振りの横薙ぎを繰り出す

その大振りをあえて盾を直接動かし側面で槍を止める

「しまっ……!?!」

そして見事に空いた敵の真正面に盾ごと突っ込むマッシュ  
サーヴァント化した彼女の筋力と盾の質量から産み出される純粋な物理エネルギー  
それは敵サーヴァントを吹っ飛ばすには十分だった

「私だって……サーヴァントです！」

必死に逃げている間、観察していたのは彼女も同じだ

そして付け足すなら彼女が時間稼ぎのために短剣だけで挑んだ行為が敵の油断を誘  
引していた

所詮、盾が加わった所で……という思考が強固な盾持ちに対して大振りを振るうとい  
う悪手をやらかした

「……初々しすぎるのも癪に触るわね」

だが所詮、先ほどまで少女だった体での攻撃

ましてやデミサーヴァントになったばかりの彼女のスマッシュは完璧ではなかった

あくまで相手を弾き飛ばしただけ

相手に致命的なダメージを与える訳でも、相手の体勢を崩した訳でも無かった  
敵サーヴァントは飛ばされながらも体勢を立て直し大したダメージを受けることな  
く着地した

「それなら……まとめて相手にしてあげる！」

「つ下がってください！」

「何だこれ!？」

「触っちゃダメよ！」

敵サーヴァントが髪をかき上げた瞬間、その髪が鎖となつて空中を飛ぶ  
その鎖はまるで“蛇”の様に動き3人の周りを取り囲んだ

「さあ、狩場は整いました……これであなたたちは私のもの……！」



逃げ場は無し

四方は相手の思い通りに動く鎖

盾は一方向からの攻撃しか防げない

「まとめて私の髪で絡め取って上げましょう……！」

こうなればもう向こうの思うがまま

鎖の上で余裕で笑みを浮かべられても3人にはもう有効な攻撃手段も脱出手段もな  
かった

「狩りは隠れながら行うものだ、素人が」

## 瞬間

敵の心臓……霊核……を貫く様に1発の弾丸が貫通した

「ガアツ……!？」

サーヴァントとはいえ首と心臓が急所であることに変わりはない

1発の弾丸でも頭や心臓部にある霊核を貫けばほぼ無力化されてしまう

だが地面に崩れ落ちたサーヴァントの霊核の大半が傷つけられただけで消滅には  
至っていない

「さっさと仕留めなかったお前が悪かったな」

## 1 発の発砲

今度こそ弾丸は僅かに残された心臓部を完全に破壊した

「出直してこい、それと2度と戻ってくるな」

そのまま敵サーヴァントは何も話すことなく光の粒子となって消えていった

◆?  
◆?  
◆?  
◆?  
◆?  
◆?  
◆?

「……どうやら倒したみたいです」

「つて今のは狙撃でしょ!？」

「あついえ今のは——」

「とりあえずは乗り切ったみたいだな、坊主」

『!?!』

突然背後から渋い声。

振り返ってみると立香より背が大きい髭を生やし、片方に眼帯を掛けた男が立っていた。  
た。

「……あの、助けて貰ったのは凄く助かりましたけど……さすがに背後から来られるとビビります」

「そうか?……まあそこのお二人さんはそうか」

「ちよつふあつああ!?!」

「……さすがにこれは無いと思うが」

一難去つてまた一難、再び敵襲かと勘違いした彼女は

「ちよつと誰!」と「ふあああ!」と「ああああああ!!」が同時に出了た。

……3つのうち後者2つは特に意味は無い。

「えつと……先輩の召喚した英霊でしようか?」

「ああそうだ……そう言えば名乗ってなかつたな」

そして何だかんだ優秀なマシユは冷静にその男に尋ねた。

「今回の召喚に応じてやって来たスネークだ、色々と新参者でな、よろしく頼むぞ、嬢さん達」

## 炎上汚染都市冬木：2

「……スネークさん、ですか……？」

「ん、どうした？」

名乗り上げたその名前を妙に不思議がつて……いや、どこか冗談めいて呟くマシユ。その反応に不自然さを感じたスネークが聞き返す。

その問いに随分と言いくそような顔をした後、彼女は顔をこちらへわざわざ向けて話してきた。

「……あの、失礼を承知でお聞きしますがそれが真名……ですか？」

「……名前なんてどうでも良いだろう、それに俺は生前本来の名前で呼ばれた事なんざほとんど無かった。

それに俺自身もスネークと名乗っていた、まあ捨てた名でもあるが俺はスネークだ……ダメか？」

「あついえ、ただその……まさか蛇と名乗られるとは思わなかったの」

「……今までそんな風に言われたことは一度も無かったな、それが普通の反応か」

「とりあえず、先ほどは助けて頂きありがとうございます」

「気にするな、敵を倒すのは当然だ、そうだろう?」

「そうですね」

「……………ついでにお前も出てこい、出なければ敵と見なすぞ」

「えっ?」

「何の事です?」

「気づいて無かったのか?……………俺がここに召喚された時から俺たちを見ていた奴が居る」

「おっバレてたか?」

「……………もともと他所からの視線には敏感でな、もっとも関心は俺よりこの娘のように感じたが」

「わかったわかった、正直に出てくるから勘弁してくれ」

そんな声が聞こえると4人の背後から両手を広げて現れた1人の男。

身長はスネークより高め、髪が青く、手にはその身長よりも長い杖、そして裝飾品が多い。

話しやすい雰囲気はある……………がまどついている雰囲気からは強さも感じた。

「まず先に言っておくが俺はあんたらとやり合う積もりは俺には無い。

それにいくらその嬢ちゃんが弱くても流星に2対1は今の俺にはキツイしな」



「それならまずは落ち着いた場所が欲しいな、流石に立ち話は俺は良くてもこいつらが可哀想だ」

「それもそうか、なら俺に着いてきてくれ、少し隠れるにはちようどいい場所を知っている」

「だそうだが、マスター」

「えっあ……はいお願いします」

「……こんなマスターで大丈夫かよ、おい」

「まあ……どうにかなるだろう」

「へっどうせ俺には関係ねえしな、なら付いて来な」

流れに沿う形であっさりと返答したマスターに2人は若干呆れたが、お互いすでに敵では無いと直感していたために大して問題にはしなかった。

もつともスネークの方はどうやら楽は出来そうに無いとも直感的に思っていた。

「……先輩？」

「ちよつと！待ちなさいよ!!」

ちなみに女性陣2人は若干蚊帳の外に放って置かれていた

◆? ◆ ◆? ◆ ◆? ◆ ◆? ◆ ◆? ◆ ◆

場所は変わり、10数分ほど歩くと青髪の男が言う隠れるのにちよつどいい場所……  
学校に着いた。

オルガマリーは最初の方は何やら騒いでいたがその道中、陥没した道があり青髪の男  
が

「ほら手を貸してやるよ」

「良いわよ別にっ」

「頑固なだけじゃモテないぜ、お嬢さんよっ」と

「きやつ！」

「……………なあ」

「なっ何よ……………／／／」

「……………お前さん、思ってたより重いな」

「……………はあああああああああああああああああああ!!?」

『……………』

という一幕があり、オルガマリーは口をそれ以来閉じた。

ついでにそんな女性の敵とも言える発言を行ったサーヴァントは3対1の状況に

「フオウ！」

……………3人と1匹 対1に追い込まれた。

そんな一幕がありながらも一行はとりあえずの休息を得る運びとなった。

「……………なあ、彼女は本当に重かったのか？」

「ああ？そうだが……」

「そうか……」

「？」

その後立香やマシユがオルガマリーのフォローに走る中、スネークはキャスターにそんな事を聞いていたが

「えっと……まずは改めて、先ほどは助けて頂きありがとうございます」と

「気にするな、さつきそこの嬢さんにお礼を言われて十分だ、それに坊主はマスターだろう？」

それならお前は頭をわざわざ下げる必要も無いだろうに」

「いや、助けてもらって何も言わないのはどうかと……」

「……確かにな」

とりあえず一息つける場所についた一行は、まずマスターである立香のお礼参りで始

まった。

もちろん物騒な物ではなく、普通に感謝の言葉を言うものだった……がサーヴァントからしてみればマスターを守るのは当然であり、マスターからしてみれば守られるのも当たり前前のハズだ。

だがこの一般採用枠のマスターはいたって普通の家庭環境で育ち幸運にも常識という物を心得ている人間であるため、命を助けられたというのに何も言わないなどありえないことだった。

「マスターは人間らしい人間ですから」

「みてえだな」

「それと……そう言えばそちらのお名前は？」

「すごいや名乗って無かったな……だが坊主覚えとけ、真名つてのはサーヴァントにとってテメエが思っている以上に重要なもんだ、気安く聞くもんじゃねえ」

「つすいません！」

「……………本当に素直な奴だな、本当にこいつマスターか？」

そしてキャスターからしてみればマスターがここまで素直なのはありえないことだった。

「少なくとも俺がここに召喚されて、ここに居られるのはこいつのお陰みたいだがな」  
「いやっそうじゃねえ。」

大体マスターっていうのはな、捻くれてたり随分と無茶振りかましてくるような奴だぜ？

少なくともサーヴァントに鎌かけられて自分の非を認めるような奴じゃねえよ……」  
「……何だお前随分と……いや、聞かないでおこう」

「ああ助かるぜ……でだ、まあ俺のことはキャスターと呼んでくれ、大体聖杯戦争じゃサーヴァントのクラスで呼び合うのが通例だしな」

「勉強になります」

「……本当にマスターか？」

「お前、何回そのセリフを言うつもりだ？」

《会話の途中失礼するけど、そろそろこちらとしては本題が聞きたいのですが》

「ああ？なんだそつちの魔術による連絡手段か」

「いや、単なる無線だと思いが」

「そんなマスターと聖杯戦争に慣れてるらしいサーヴァントとの物の見方に若干どころかだいぶ差があったがとりあえず情報のやり取りをし始める。」

「・・・やっぱりおかしいわよ!!」

「・・・かと思われたが、唐突にスネークに向かって指を指して向かって来た女性によって止められた。

先ほどまで口を閉ざしていた女性とは思えない声の大きさだった……原因はスネークにもあつたりするが。

「所長!？」

「マシユ、ここは止めないで、これは大事なことよ!」

「えっと……所長」

「何よ!」

「大事なことだとはわかりました、けど唐突に大声を出して人に指を指すのはどうかと俺は思います」

「……………」

《正論だ……正論すぎて所長が黙った……!》

「……わかったわ、では改めてお聞きします」

「言い直しても手遅れだと思いがな、聴こう」

「つ余計なことを……!!」

「所長、落ち着きましよう、気にしていたら何も進みません」

「んっんん……では改めて、ですがまず最初にキャスターの方に聞きます」

「ああん?……アレか、俺がお嬢さんの——」

「おい、とりあえず最後まで聞いてやれ」

「……わかったよ」

「……あなたはここで行われてた聖杯戦争の参加者ですね?」

「まあな、もつとも他の連中はありや脱落というか何というか……」

「どういう意味?」

「まあ途中までは聖杯戦争をしていた……だが、いつの間にか聖杯戦争からすり替わってた」

「すり替わってた? 妨害が有ったとかじゃ無いのか?」

「ああ違う、突然この街からまず人が消えた、俺たちのマスターを含めてだ。」

残ったのは何故か……まあサーヴァントだったからだったんだろうが聖杯戦争で召喚された7人だけだった。

そこから真つ先に戦いを再開したのはセイバーだったんだが……さっきのサーヴァントは見ただろ?」



「まあ俺は一瞬だったがな」

「私や所長は時間稼ぎのために戦ってましたからそれなりには見てましたけど……」

「私も見たわ、けどそれが？」

「あいつらはあんな見た目じゃ無かった、少なくともあんな黒いサーヴァントじゃ無かった」

「……じゃあサーヴァントが変質したとでも言うの？」

「恐らくな、最もセイバーに倒されたサーヴァントが、だが」

「そんな……そんなこと出来るわけが」

「いや、聖杯そのものが汚染されてんだ」

「……それじゃ聖杯そのものが変質してるって言うの？」

「そのものが変質してるかはわからねえ、ただそのお陰で聖杯戦争は黒くならなかった俺 対他のサーヴァントになってやがる」

「そいつは……面倒だな」

「だがあんたらが来る前に黒いライダーとアサシンは倒した、残る敵はセイバーとアーチャーの2人だけだ」

「待って、バーサーカーのサーヴァントは？」

「アレは放っておけば害は無いぜ、ただ……相手にしたくねえつてのもあるがな」

《今回の特異点は聖杯そのものが原因で、ことで間違いない無さそうだね》

「ああ、このわけがわからねえ状況は間違いない、聖杯そのものが原因だろうよ。」

その聖杯をセイバーはわざわざ守ってやがる」

「場所はわかるのか？」

「ああわかるぜ、ただアーチャーの奴がその外周で守ってやがる。」

そいつをどうにかしてからだ、俺もあいつとの決着は付けたいからな」

「場所がわかっているなら話は早い、それなら休憩が終わり次第さっさと仕留めに行く  
と——」

敵の居場所がわかったならすぐに攻め入るべきと言うのは古今東西あらゆる戦況で  
共通する定石だ。

キャスターが話した間に全員休憩はできた、自分とキャスター、後はマシユがそれな  
りに動けば十分に勝機はあるだろうと判断したスネークは動き出すが……

「待ちなさい、まだ話は終わってないわ」

所長であり、この場では一応ここでは一番偉いオルガマリーはそれを止めた。

《所長、これ以上話すことは——》

「……ロマニ、あなたおかしいと思わないの？」

《所長が珍しくリーダーっぽい雰囲気纏っていることですか？》

「違うわよ！」

「……今までそう言う雰囲気作りだと思ってたが、彼女はそういう扱いなのか？」

「えっと……俺はまだ所長のことをよく知りませんけど……多分」

「所長は頑張り屋さんですからね」

「違うわよっ!!」

「……お前ら、俺が言うのもなんだけどよお……話を最後まで聞いてやれよ」

《それもそうですね》

「それもそうだな」

「その通りですね……」

「所長、お話をどうぞ」

「揃いも揃って……!!」

「まあからかった俺が悪かったが……俺の何がおかしいって言うんだ？」

「……そもそも貴方はどこの英雄なの？」

先ほどまでからかわれていた雰囲気とは打って変わり、オルガマリーは真剣にスネークに聞いたのだした。

その態度は一介の魔術師として纏う一種の気味悪いもので、彼女の真横にいる立香やマシユが驚いていることからいつもの彼女とは違うのだろう、それだけ雰囲気を変える

必要が俺自身にあるらしいとスネークは察するが思い当たる節は無かった。

「どこの英雄といわれてもなあ……俺は国を捨てて活動していたからな、説明するのが難しい」

「……じゃあ聞くけど、あなた近代の英雄？」

「そうだがそれがどうした」

「……待て、あんた近代の英雄なのか？」

「ああそうだ、そう言えばマスター達は2015年から来たんだよな？」

「なっあんた——」

「別に俺も大体予想してたぜ、別に未来から来たってこと位で俺はお前達を邪魔する気ほどの道ねえよ、自分の時代以外に俺は深く立ち入らねえ。

あくまで俺はサーヴァント、兵器として俺はあんたらに力を貸すさ」

「……そう、それなら問題無いけど」

「しかし、私たちが2015年から来たことに一体なんの意味が？」

「本当に2015年から来たのか、なら俺が死んだのは去年だ」

『……………はあああああああああああああああああああああ  
!!!!?』

「え……えっ?」

突然発生する大絶叫

耳を塞ぐのはたった2人、スネークと立香。

つまりこの場にいるそれ以外の人間とサーヴァント全員が絶叫し、明らさまに驚いていた。

「……おい坊主、これはどういう事だ。」

所長はともかく、あの盾持ちの嬢さんに無線越しにいる男にキャスターまで叫んだぞ?」

「いや……うん、俺にもよくわからない」

「ちよつと待て! オメエ……ハア!」

「やっぱりおかしいわよっ!!」

「今回は所長の言う通りです……」

《これは……いやあり得るのか?》

「……おい誰か俺らに説明してくれ、全くお前達が驚いている理由がわからん」

「この場にいる誰もが勝手に騒いでいた。」

別に騒ぐこと自体は構わないのだが、それが自分が原因で騒がれているとなれば話は別になる。

何せ誰も説明しようとしてくれないのだ、それがマスターも知らないとなればそれに問題だ。

お陰でこの場にはいない、オペレーターであるロマニがそんな2人のために解説をし始めた。

《えつとですね……スネークさん、すいませんがもう少し質問しても?》  
「構わんが」

《あなたは今回、ライダーのクラスで召喚されていますが何か逸話が?》

「ライダー?……まあ良く馬には乗ってたが」

「そんなの私も良く乗るわよ!」

《……次に、あなたは国を捨てて活動してたと言いますが具体的にどこの国を捨てて何をしてたのですか?》

「国か?俺はアメリカで生まれたがその国から離れた、その後は世界各地で傭兵をしてた」

『傭兵!!?』

「……まあ褒められる職業じゃ無いのはわかるが、そんなに驚くもんじゃ無いだろう」

《……所長、彼は平行世界から来たんでしようか？》

「……………いえ、それにしたっておかしいわよ。」

無線通信、ましてや映像を通しての通信を普通だと思えるほどに科学技術が発達して  
る世界よ、傭兵ごときが英霊の座に就く訳がないわ」

「……………俺は馬鹿にされてるのか？」

「ち、違います！所長が言ってるのはそういう意味ではありません！

英霊を降ろす、つまり召喚される英雄は英霊の座から召喚されます、ですが近代以降  
では英雄は存在しないんです！」

「……………ここに居るけど」

「だ・か・ら！おかしいうって言ってるのよ!!」

「……………おかしいのか？」

「……………むしろ有りえねえ事なんだよ、近代じゃ」

「どう有りえないんだ？」

「えつとだな……………ついで俺が説明してんだ……………！」

頭を抱えるキャスター、原因は魔術を知らないがために自身が特異であると自覚が無  
い英霊。

……………これはきつと誰も悪い訳では無い、ただ巡り合わせが悪かっただけなのだろう。

そんな彼の複雑な心情を知らずとも、純粋な彼女はフォローに走った。

「簡単に言うとうと文明の発達で人類が人類を簡単に滅せる時代になったので、逆に世界を救う人間がとでも多くなつたので近代では英雄と呼ばれるのが極めて難しいからです！」

「え？……どういう事？」

「これだから一般人は……!!」

「ええ!?!何で俺が怒られてるの!?!」

「私の説明が下手だったんでしようか……」

「いやっ!今のマシユの説明が簡単そうなのはわかるけど!今のだけじゃ俺もスネークさんも——」

「いや俺は理解したぞ」

「ファッ!?!」

「……それとお前達が驚く理由も大体理解した、確かに一介の傭兵が英雄と呼ばれるのは筋違いだな」

「ええそうよ」

「けどよ、こいつが英雄の座から招かれたのもどうやら事実らしいしな」

《そこなんだよねえ……去年死んだ英霊の座にも登りつめた人物なら僕が知っててもお



かしく無いし……」

「……待て、もしかしたらお前が知ってるかもしれないな」

《えっ……しかし、スネークなんて英雄僕はもちろんここに残ってる職員も知りませんよ？》

「それもそうか……すまん、忘れてくれ」

「そう言えばあなた宝具は使えるの？」

「宝具か？……まあ馬が一匹出せるくらいだな」

「……それだけ？」

「ああ宝具に関しては今のところそれだけだ、もう少し生身に近い力さえ得られれば他にも色々出せそうだがとりあえずはそれだけだ」

「……まあ現代の英雄なんてそんなものね」

「待つて下さい所長、スネークさんは私が探知する前に私たちの真後ろに立ってました。

それに私が探知できなかったキャスターさんを見つけ出す程の実力者ですよ？」

「……確かにそうね」

「俺もまさかバレルとは思わなかったぜ、しかも気配じゃ無く視線でだ」

「……普通だと思うんだが」

「……普通かねえ」

「ああ」

気配でお互い感知することのできるサーヴァントが、その気配を消すには幾つか方法がある。

一つはアサシンや一部のサーヴァントが持つ気配遮断のスキル、ランクによるが気配を悟らせない事が可能。

あとは魔術による簡単な結界によつて自身の気配そのものを外に漏らさない形で悟らせない方法。

キヤスターの場合はルーン魔術を空間に書き込み、それを自身を囲む形で気配を漏らさない様にしてランサーとの戦いを見ていた……が、視線まではさすがに遮断するのは出来ない。

出来なくはないがそれは単に殻に籠っているのと何ら変わらないため意味がない。

《ちなみにあなたの礼装は何です？ 見るとハンドガンにライフル、あとナイフに見えるすが……》

「いや、それはあくまで俺が標準装備してる武器だ、あと持ってるのは無限バンダナと……迷彩服だな」

「迷彩服はいわゆる野戦服でしょうけど……無限バンダナとは？」

「これか？ これは弾薬供給が∞になるだけだが？」

「・・・はい？」

「いや、だから弾薬を補給するバンダナだが」

「・・・スネークさんが何を言ってるかわかりません」

「いやっだから∞に弾薬がだな——」

「それって魔法じゃないの!？」

「……………試しに何か出せるか？」

「構わんで、確かスモークグレネードは……ああ、有った、これがただ出てくるだけだが

……………」

そう言つて彼の腰にぶら下がっているバックパックからスプレー缶のような物を取り出した。

「……………数えるか？」

「ああ、頼む」

「……………1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・13・14・15・1

6・17・18・19・20・21・22・23

24・25・26・27・28・29・30・31・32・33・34・35・36・

37・38・39・40・41・42・43」

「待て待て待て!! いったい幾つ取り出すつもりだ!？」

「いや、気がすむまでだが……」

「わかった、わかったからもう良いしまつてくれ」

「お前馬鹿か？これだけの大きさでこれだけの量の物がこのバックパックに入ると思うか？」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

《……………》

「どうした、全員して」

周りと無線越しにいる人間とサーヴァントが何やら物を言いたそうにこちらを見ていた。

……何人かからはむしろ軽蔑の眼差しも込められているが、別に悪いことを言った事も変な事を言ったつもりも無い、軽蔑の眼差しを向けられる理由なんぞ心当たりにも無かった。

《……とりあえず所長、力になってくれるみたいですし力不足という訳でも無さそうですから良いのでは》

「……先輩はどう思います?」

「俺?俺は別に何とも思っていないよ、少なくとも悪い人じゃないと思うけど。」

悪い人が英霊の座にも居るのかは知らないけど、召喚した直後に俺がお願いしただけでマシユと所長を助けてくれたし」

「……良い悪いについては何とも言えねえけど、少なくともこの男の实力は俺も認める。何せあの黒いランサーが油断してたとはいえ俺がこいつの存在に気付く前にあいつの急所を射抜いてた。」

正面からの戦闘は……まあ後で確かめるとして、少なくともハズレじゃねえと思うぜ」

「……まっ害が無いなら別に良いけど」

他からそう言われてしまえば、疑っていた彼女も、所長としても彼を歓迎……とまではいかないものの認める他なかった。

例えば彼女が認めなくともマスターとして契約しているのは立香であるためどうしようも無いのだが。

「何かすいません……俺もよくわかりませんが、気分を害したなら謝ります」

「大丈夫だ、昔から怪しまれることには慣れている」

「……………」

「それに警戒するのは指揮官として当然だ、彼女もまた優秀なんだろうな」

「っそんなに褒めても何も変わらないわよ！」

「問題ない、まああんたからの警戒心がこの探索中に解消できるかはわからんが全力は  
尽くそう」

「……そう……ならそろそろ出発しましょうか」

スネークの言葉に嘘は無い。

彼女は些細なことで気分が落ち込んだり不機嫌になったりと、人としてどうかと思う  
点はある、確かにある。

だが同時に彼女が備えている能力は評価している。

よく知らない魔術に関する知識は魔術師としてはもちろん、責任者として異常なもの  
を異常だと見抜く力。

その異常さは自身もよく理解していなかったが、その本人すら認知していなかった異  
質さを公の場で指摘した行動は高く評価すべきだとスネークは見ていた。

彼女魔術師という部類においてどれだけの物かは知らないが少なくともそれなりに  
優秀、

命を預けるにはいささかメンタル面での頼りなさを強く感じるが、責任者としての自  
覚は文句無い。

むしろマスターである坊主……藤原 立香の方がお人好しすぎてこちらが心配する、その点彼女はある意味では話しやすい人間、そう彼女への印象を結論付けていた。

「ちつと待つてくれ、行く前に少し確かめたいことがある」

《？何でしょう？》

「ああ、さつき言っていた俺の戦闘能力か？」

「まあそれも有るが……」

「……なるほど、嬢さんの実力か」

「ああ、あんたは特に問題無さそうな気がするが……お嬢ちゃん、お前宝具が使えないだろう？」

「えっ？けどここに……」

「……すいません先輩、これはあくまで私にとつての武器です。」

私は消えかけていたとあるサーヴァントと取引を交わしてデミサーヴァントになりました。

お陰で私は死ぬことを免れ、先輩と無理やり契約して先輩を助けることができました。

……ただそのサーヴァントからは真名を教えてもらえず、この武器がどんな武器なのかも私は知らないんです」

「それじゃあマシユは本来の力を出せないってこと？」

「……はい」

「本来ならマスターが召喚時にある程度わかるものだけど……そもそも魔術師じゃないならわかるはずも無いわね」

「えっ……じゃあ」

「そうよ、あなたが未熟だからというのもあるわけ」

「……だが宝具つてのは英霊を英霊たらしめるそのものだ。」

嬢ちゃんがサーヴァントとしての力が有るなら必然的に宝具は扱えるはずだ、決して切り離すことが出来る様なもんじゃ無いからな」

「それでお前が手合わせしてやるのか？」

「ああ、本能在が刺激されれば宝具は発動すると思うぜ」

「けどキャスターさん、危なく無いですかそれ」

「んな手加減くらいわかってる、俺もそんな馬鹿じゃねえよ」

「そうじゃ無くて……最初この街に来た時、赤い矢の雨を散々降らされたんですけど、そんな手合わせなんてしていたら狙われませんか？」

「……そういやアーチャーの野郎が動いてたな……だが問題ねえ、どうせ今頃セイバーの所に籠ってるハズだ、向こうはもう2人しかいねえからな」



「問題無いマスター、仮に向こうが撃ってきたら俺が対処する」

「出来るんですか？」

「スナイパーの相手は散々してきた、一度向こうの奇襲が失敗すれば俺はそこから追跡できる。」

それにカウンタースナイプも今の俺でも出来るから……アサルトライフルは今のところ無いがな」

「……あんた本当にライダーか？」

「らしいぞ、俺もよくわからんが」

「そうかい……じゃあとりあえず外に移動だ、ちようどいい広場もあるしな」

《周辺に敵サーヴァントの反応も無い、訓練にはちようど良いだろうね》

「マシユは大丈夫？」

「ええ、私も先輩の盾として強くならないといけません、それにこのままでは敵のセイバーを相手にするのは厳しいでしょうし」

「そうね……宝具無しで相手するのはマシユじゃ厳しいわ、せめて敵の真名さえわかればある程度はどうかなるかもしれないけど……」

「キャスターさんはそのセイバーの名前は知らないんですか？」

「知ってるぜ、それに教えても良いが……」

「俺たちの実力次第か？」

「……わかってるじゃねえか」

「どういうことですかスネークさん？」

「さん付けはやめる坊主……早い話、荷物が居ても足手まといならその荷物を捨てるか壊すかって事だ」

「それって……!？」

「まあ下手すれば消されるな」

『っ!？』

「おいおい、やる前からビビらせてどうすんだよ……つうか手加減するって言つたらろ！」

「だがこのまま行ってもバテるのは目に見えてるだろうに」

「……まあな、特に嬢ちゃんは連戦したら心が潰れるだろ」

「ああ、嬢さんの動きを見る限り素人だ、何せあのランサーから逃げることにすら難しそうだったしな、だからこそ使えない奴は置いていくしか無いだろう」

「……お前さん、随分と薄情だな」

「だが幸い彼女は盾持ちだ、お前の攻撃くらい捌けそうだがな」

「おいおい、俺にケンカ売ってんのかあ？」

「まずお前はキャスターに向いてない、確実に前衛で殴り合うタイプのハズだ。」

でなければ杖を槍術みたく両手で添えたりはしないだろう、まあ魔術使いつてのがそういうしなとは俺には断言できないが少なくとも貴重な道具だ、武器でない物をわざわざ槍みたく扱いはしないと思うが？」

「……………俺の本職はランサーだつうのに、つうか師匠から教わっただけでキャスターとかねえだろ…………」

「愚痴はそれまでにしておけ、とりあえず彼女を追い込んでやれ」

「……………おうよ」

スネークの言葉に肩を落としながらも、このままではどうにもならない、特にマシユはまずサーヴァントの肉体を使いこなせていない、それには実践あるのみだと2人の戦士は体で知っていた。

さらにキャスターには、マスターの方にも戦闘経験をさせるといふ思惑もあったが当のマスターはそんなことに気付いているわけも無く、校庭に5人は移動した。

◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆?

「・・・さて嬢ちゃん、こいつはあくまで嬢ちゃんに戦闘って行為に「慣れてもらう」だけだ。

マスターとサーヴァントはどんなに憎たらしくても関係は切れねえ、マスターがやられちまえばサーヴァントは現界する事が出来ねえ、嬢ちゃんがやられちまえばマスターはその後やられる・・・意味はわかるな？」

「はい、全力で行きます！」

「良い返事だ・・・おい坊主！」

「はっはい！」

「お前さんはどうやら魔術師じゃねえ見たいだが嬢ちゃんのマスターだ、しつかり指示出せよ」

「が、頑張りますっ！」

「……………ここまで教えがいのあるマスターってのも珍しいけどな・・・じゃあ行くぜっ!!」  
その合図と共にキャスターは野生の獣の様な気迫を纏、バックステップを踏む。

ただそれだけしかしていないが、マスターである立香はそのプレッシャーに煽られたらしい。

それではこの先何も出来ずに死ぬ。

だがマシユが盾を構えたことで彼も心構えが固まったのか、ほんの少し煽られただけ

ですぐに立ち直った。

だがそんな少しの間はサーヴァントを相手にするには致命的だ。

「そんな呑気に突っ立ってて良いのかよ！」

瞬間、キャスターの振るった杖の軌道上に火の玉が出現し2人に襲いかかって行った。

まだまだ本気を出していないのか、火球は一般人でも捉えられる速さだった……避けられるかは知らないが。

「マッシュー！」

「はいー！」

その攻撃をサーヴァントであるマッシュが立香の前に立ち、火球を盾によって防ぐ。

どうやら融合したサーヴァントの戦闘経験がある程度肉体に反映されているらしい。

だがそれだけでは不十分だ

「そりゃあ止められるか！ならドンドン行くぜえっ!!」

キャスターが次の攻撃を始める。

その攻撃を必死に盾で食い止めながらマスターを守るマシユ……そして守られるだけのマスター。

そんな校庭で繰り広げられる3人の攻防を屋上から2人……スネークとオルガマリーはその戦闘を観察していた

「……ふむ、第一段階はどうかクリアだな」

「何が第一段階よ……あれじゃ一方的に攻撃されてるだけじゃない」

「まあ今のところはな……だがまずは彼女の、マシユの役割を彼女自身の体で覚えさせる必要がある」

「……どういう事？」

「あんだ、戦術的な知識はあるか？」

「……少しなら」

「ならマシユだけを運用するとしたらどうする？」

「そうねえ……前線で敵の攻撃を受け止めて貰うかしら？」

「そいつはダメだ」

「はあ!？」

「考えてみる、雑魚ならまだ良いがマシユだけでキャスターを倒せるか？」

「仮に彼女が宝具を使えたとして、その一撃でキャスターを屠るほどの火力はあるのか？」

「……………無理ね、マシユは完全にディフェンスタイプのサーヴァントよ、いくら脆いキャスターだからってマシユが殴ったところで倒せないわ」

「そうだ、だから彼女はカウンター以外での攻撃手段はほぼ無い。」

「おそらくあのキャスターが距離を開けて遠距離攻撃に徹してるのはそれを彼女自身に気付かせるためだ」

「盾持ちと呼ばれる者の立ち回りとは確かにオルガマリーが言った通り、前線で敵の攻撃を受け止め敵のヘイトを集める事が基本的な運用法だ、後方に下げれば強固な守りも可能になる。」

「だが同時に盾では敵を倒す事が出来ない」

「雑魚敵程度なら余裕だろうが、強者を相手にするにはあまりにも火力不足だ。」

攻撃は最大の防御、防御は最大の攻撃とはよく言うがそれが出来るのはある程度実力差がある場合の限る。

特にジャイアントキリングでは、格下が格上を倒すためにひたすら最大火力で相手に攻撃し相手から攻撃させない事で倒すことも出来る……もつとも最大火力が維持できなくなれば確実に負けるのだが。

だが防御からの攻撃はカウンター以外では、自身ではなく他からの攻撃が要になる。彼女が持っている脇差のような短剣もカウンターのための装備ではあるが、英霊と呼ばれる者たちは基本的にその全員が戦闘に慣れている。

特に三騎士と呼ばれるセイバー・ランサー・アーチャークラスで現界したサーヴァントは戦場での英雄である事が多い。

たかが盾を持つてくるくらいでカウンターを許す程度の実力は持ち合わせていない。

そのため、今のマシユに求められているのは確実に敵の攻撃を防ぎ敵の注意を自身に向ける事にある。

「……けど、マスターがあんなんじゃないやマシユはカウンターどころか攻撃に移れないわ。

距離があり過ぎて攻撃の間に接近しても、マスターを狙われて終わりよ」

「ああ、すでにマシユは自分の役割に気付いている、次はあの坊主の番だ……どう動く

？」



マシユは賢い。

すでにスネークが言った通り、敵の攻撃を防ぐ事に特化しマスターを守りつつも何とかキャスターに近付こうとする……がキャスターは攻撃しながらも後退しているため攻撃のしようが無い。

「どうした！そのまま火を浴びるだけかあ!?!いつまで耐えられると思つてやがる!!」  
「つつー！」

すでに攻撃手段は「2人」を狙う火球では無く、「マスター」を狙う火球へと変化していた。

マスターを狙っているため込められている魔力は人が気絶する程度の物だが、代わりに弾速が速い、そのためマスターを守るために盾を振るうマシユはその火球の軌道を見定めなければならず余計に疲労していく。

「……………」

だがマスターは、藤丸 立香は何も出来ない……………と諦めるほど柔な男では無かった

自身に迫り来る火の玉、当たればほぼ確実に自分は死ぬだろう（威力はキャスターが加減しているが）

それを必死に防いでくれるマシユ

そんな彼女を……自分より身長が低い少女をただ放って置くほど少年は甲斐性なしでは無かった

「マシユ！合図したらキャスターの方に突撃して！」

「な、本気ですかつ!？」

「大丈夫！俺も付いていくから!!」

「つわかりました！」

再び火球が襲いかかる

今までと同じ通りその火球はマスターを狙った的確なもの

その軌道を読み取り手に持つ盾でその火球を打ち消す

そろそろ辞めどきか……とキャスターが思った時

「マシユー！」

「ハイッ!!」

その場から一気にマシユが走り出してきた

ようやく動いた状況

だが防御捨てたという事はマスターの守りが無いという事

今の間合いならマシユはキャスターに攻撃できるが同時にマスターもやられる

「だああああああああああああああああああああ!!!」

そのマスターがシールドと共に移動していなければ、だが

「……へっ! そう言うの俺は好きだぜえ!!」

一瞬、あまりにも予想外に……予想外に出来るマスターに驚いたもののすぐにルーン

を描く

今までは杖から火の玉が飛んでくる攻撃だったが今はそれでは足留めにならない  
キャスターは後退しつつも彼らが踏むであろう場所に魔術を仕掛けていく

「……ほおお、あのマスターは以外とやるな、中々の度胸が有るじゃないか」

「……………」

それはマシユも、キャスターも、スネークも、オルガマリーも予想していなかった。

一般人の、素人の、魔術師でも戦士でもないただの少年が自身の置かれている状況を  
見極め行動に移したのだ

実際にはマシユが動き辛そうにしているのに気付き、それならばマシユについて行け  
ばいいという発想だったがそれでも自身のサーヴァントも動きに合わせるとい  
うのはたとえ魔術師でも難しい。

なにせ魔術師なら敵の脅威が及ばない場所で観戦した方が良いと判断・断定するから  
だ

「あの様子ならもう少しすればあのキャスターにもある程度攻撃できる様にはなるだろう。」

それでも彼奴らが半人前なものには変わらんが……足手まといじゃ無いな」

「……一つ良いかしら？」

「言っておくがお前が実力不足だとは思わんぞ、俺は」

「……え？」

「俺は色んな奴を見てきた。」

戦場で死にかけてた所で巡り合った奴、世界平和を願っていた奴、純粹に力を求めて俺の下に来た奴、

研究者として助けを求めた奴、戦いにだけ身を投じた……まあ色々な奴が居たが……才能が無い奴も居た」

「……私の才能が無いとでも言いたいの？」

「俺は魔術って存在を死んでから知った、未だによくわかってはいないと言った方が正しい。」

だが魔術師だろうが兵士だろうが人間という括りに変わりはない。

俺の経験からお前は、お前に無いものを求めてる、お前が求めてるものをあの坊主が持つてる」

「……ついさつき現界しただけのあなたに何がわかるのかしら？」

「お前がわざとらしく無いキャラを作ってるくらいは知っている」

「つあなたに何が——」

「わかる訳が無いだろう、そんなもの」

「はあ!？」

「それはお前自身とづくに気付いてるはずだ、俺から言わせればお前のあの坊主に対する態度は上司や上官として坊主の実力不足に対する物じゃない、単なる憂さ晴らしだろう?」

「……………」

「だが勘違いするな、お前の言ってる事に間違いは無い」

「……言ってる意味がわからないけどっ」

「あの坊主が実力不足なのも、使えない人間なのも事実だろう。」

だがそんなあいつを、あいつら2人を支えてやるのは誰だ？

聞くとあの坊主以外にマスターとしての適性がある奴はいないそうじゃないか。

そんな未熟者を教えてやれるのは誰だ？」

「……別に、また他のマスター適性をもつ魔術師を集めれば良いわ」

「それが難しいことくらい、組織の長であるあなたが一番分かってるんじゃないのか？」

「……………」

「……まあ良い、だが一つだけ言わせてもらおう。

お前が今出来ることは何だ？

お前が為すべきことは何だ？

自分の立場を守ることか？ 組織を守ることか？ この特異点の解決か？

……もう一度言うぞ、お前が、いま、ここで、出来ることは何だ？」

「……………」

その言葉にただ黙るオルガマリー。

彼女の心境は……探るのは無粋だと判断し話を切り上げる。

ちようどマシユとマスターが一息つき、地べたに座っていた。

「……………」どうやらひと段落ついたみたいだな。

なら俺も合流するでしょう、お前さんも適当なタイミングで降りてこい、俺もキャスターもやりたい事が終われば移動するつもりだ、何なら迎えに来るが？」

「……………」勝手に降りるわよ」

「そうか、ならそうしてくれ」

そう言って霊体化し屋上から去ったスネーク。

その場に立った一人残されたオルガマリーは空虚で一面灰色で黒い空を、街を見つめ

た。

「……………そんなこと、私だつて……………！」

ただ自身の事を忌々しく思いながら

◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆?

「おお、いやあくここまで滾らせるマスターつても珍しいな！」

「はあああああ……」

「…どうやら一皮剥けたみたいだが……そのおかげで放心させてどうする」

「いやあ、ちつと本気が出したくなつてな、つい」

「……まあ構わんが、とりあえずお前らは休んでろ、誰も文句は言わん」

「いやつ……はあ……キャスターさんを……はあ……倒せなきや……敵のセイバーなんてっ」

「おい、最初の目的をマスターが見失つてどうする」



「私も……まだ行けますっ！」

「そのガッツは後にとっておけ、それにこいつは俺らの味方でお前らが動ける様にわざわざ相手したんだ。」

「そもそも、今の坊主と嬢さんの動きなら時間稼ぎで良いところだろう」

「……………」

「だが十分合格だぜ、少なくとも嬢ちゃんもその坊主も俺の足を引つ張る様なお荷物じゃ無えよ」

「だそうだ、良かったな」

「あ……ありがとうございます……！」

「まっ、これからお前ら2人にもセイバー討伐を手伝ってもらうが……その前にお前ら2人に一つ見てもらうとしようかっ！」

「……何だ、俺ともやるのか？」

「当然だ！どっちかと言えばあんたの方に俺には興味がある……現代の英雄つてのがどんなもんだかな？」

「……言っておくが俺は俺が英雄だとは思ったことは無い、弱いとも思わないが……お前さんの御目にかかるような実力を持ち合わせてるかは保証できんぞ？」

「まあそう言うなよ………テメエ、まだ本気なんざ出してないだろ？」

## 瞬間

先ほどよりも大きくバックステップを取ったキャスター

だが先ほどまで纏っていた野性味あふれる獣の様な雰囲気から

寧猛な野獣がキャスターからは剥き出しだった

それはつまり、いままで本気を出してなかったのはキャスターの方であると素人の立香でもわかる

マシユも休憩のために息を抜いていたがそのプレッシャーから反射的に盾を構えた

先ほどまでキャスターと相手をした彼女が、マスターを守るといふ条件反射から取った行動だ

それほどまでにキャスターから醸し出される雰囲気は異質だった

だがそれ以上に異様だったのは

そんなマシユの本能が呼び起こされる様なプレッシャーを受けても

普通に葉巻を吸い始めた男だった

「……確かにキャスタークラスの英雄ではないな、後方支援の人間にそんな気迫は必要無い」

「俺には拳で殴るのが性にあってらあ、杖なんかより槍寄越してくれってなっ!!」

その言葉通り、杖を槍の様に構えそのままスネークの方へ突っ込んで来た

俊敏Cとはいえ、英雄と呼ばれえ英霊の座に招かれた存在

その鍛えられた肉体がキャスターのそれでは無いのも有り、距離はあつという間に詰まった

デミサーヴァントであるマシユはどうかキャスターの姿を捉えられたが、一般人のマスターには瞬間移動にも等しく彼からすればいつの間にかスネークの目の前に立っていたと言う印象だった。

構えられた杖はそのまま武器として、キャスターの得物として、そのままスネークへ襲いかかり

一瞬で勝負はついた

「・・・・・・・・・・・・・・・・」  
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

端から見ていた2人は言葉も出なかつた

キャスターの杖さばきは見事の一言に尽きた

その先端は心臓を指し

光一線と突き刺さる

それはキャスターのもう一つの側面を持つ宝具の因果  
一種の呪いの如く、見事に対象の心臓を刺し穿つ

・・・・・・・・・・様に思えた

否、実際に穿っていたはずだった

寸止めとはいえキャスターの得物は的確に相手の心臓を指していた

そう、指して“いた”

的確に、相手の服に、体にぴったりと突いて“いた”

だがいつの間にか隙間が“あった”、拳一つはある空間が先端と対象の体には“あった”

「見事な槍捌きだ」

その空間を杖が突き進む

だが対象の体に突くまでに軌道が修正される

杖は対象の右に逸れる

対象は左にズレる

それを確認し一旦退くことを選ぶ

地面から足が離れ

杖が手元に戻り

対象が目の前にいた

「……だが俺に接近戦は分が悪いみたいだな」

そしてそのまま彼の世界は

目の前の世界は回った

体は宙を舞い

背中から着地した

背中に走る衝撃

その衝撃自体は大したものでも無く、ダメージも無い受け身も取った

だがそんな少しの間はサーヴァント相手には致命的だ

「勝負ありで良いか？」

「……………ああ、俺の負けだ」

キャスターの胸にはナイフが着けられている

あとはナイフを持つ対象次第で心臓が突かれるだろう

自身の杖は手元にはない

ルーン魔術で抵抗は出来るが…………それはキャスター自身が望むものでは無かった

結果、相手……………スネークの勝ちで手合わせは決着がついた

◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆?

「……マシユ、今何が起こったの?」

「……私が見た限りだと、キャスターさんが接近してスネークさんの心臓を刺したかと思っただけの間に、キャスターさんの杖がズレてキャスターさん自身が投げ飛ばされてたのよ……」

「いやっそれは……うん……そうだけど」

「先輩が言いたいこともわかります……何でキャスターの体が宙に浮いていたのか……」

「うん……」

端から見えていた2人には出す言葉が無かった。

何せ見た事実が事実として理解することが不可能だったから。

まず瞬間移動の如く一瞬で近付いたキャスター、そして自身の杖のリーチを生かせる間合いから仕掛けた。

スネークの拳が届く事はなく、一方的にキャスターが攻撃できる間合い。



そして何よりの確にスネークの心臓を突いたことから、決着は着いた……様に見えた。

だが実際には

- ・杖が心臓を突く直前に、杖自体の軌道がスネークのナイフによってズレていた
- ・いつの間にかスネークはキャスターの目の前にいた
- ・キャスターの間合いでは無く、眼前で拳が届く間合いにお互いがいた
- ・スネークは体術でキャスターの体を投げ、地面に落とした
- ・そのまま回避する隙を与えず、流れる様にキャスターの胸にナイフを構えていた
- ……以上がキャスターがスネークに仕掛けてから決着が着くまでの全て。

ちなみにマシユと立香が言葉に表せることが出来ないのは、あまりにも情報量が多い出来事が一瞬で行われたため、上記に書いた事は全て10秒足らずに起きていた。

もつとも2人は理解に追いついていないどころか、視認して理解すら出来てないこともあるのだが。

「……あんた本当に現代の英雄かあ？」

ましてやライダーなら なおさら接近戦じゃ無く突進とかそんなじゃねえの？」

それはキャスターも同じらしく、結果に不満は無いもののスネークに疑問を呈していた。

「お前がどう思うかは知らんが、俺は現代に生きた一介の傭兵だ、ライダーだろうが俺が得意なのは接近戦だ」

お前がわざわざ接近してきたおかげで、むしろ俺としてはやりやすかったがな」

「……お前、どうやって俺の杖の軌道を変えた」

「見えてただろう？ まっすぐ俺の胸の向かって来てたからナイフで左にずらしたただけだ」

「違えねえ………だが俺の杖は確かにあんたの体を突いたハズだった、手応えもあった、だが実際にはまだ突き刺してる途中だった……テメエ、一体どんなカラクリを俺に仕掛けた？」

「そう言われてもな……俺は普通にCCCを仕掛けただけだが」

「CCC？ 何だそれ？」

英単語3文字を言われたキャスターは当然それに興味を持つ。

だがそんな魔術など記憶にも心当たりも無く、なおさら疑問に持った……が意外な所から答えが出てきた。

「えつと……確かClose Quarters Combatの頭文字をとったもので、日本語に訳すなら近接戦闘術と言った所でしようか」

「よく知ってるね、マシユ」

「はい、本だけはよく読んでますから」

「ならあれか、柔道とかそういう感じのやつか」

「キヤスターさんの認識で間違いは無いかと……ただ」

「ああ……そんな体術だけで説明できるもんじゃ無えと思うんだが？」

「……そう言われてもなあ」

そうあり得ないのだ。

仮に、仮に百歩譲ってキヤスターの手応えは勘違いだとしても、だ。

一瞬で間合いを崩すのはわかる、だが素人とはいえマシユの攻撃を捌き切ったキヤスターがこうもあつさりと技を掛けられるとは思えなかった。

キヤスター本人も正面戦闘が不向きなクラスで現界したとはいえ、今現在の状態でもあつさりと投げ飛ばされるほど下手では無いと自負していた。

であれば考えられる可能性は2つ、

1つはキヤスターが接近戦ではとても弱く、それを誰も自覚していなかったために負けた

もう1つは……

《……あああああああ!!?》

マシユの解説から突然無線が入って来たかと思えば、ずっと見えていたらしいロマニが突然叫んだ。

……わざわざ画面まで出して驚いたため、4人から睨まれるドクター。

《いやつそんなに睨まないでくれっ！僕が悪かったけど!!》

「……それでドクター、何かわかったのですか？わざわざ声まで出して」

《マシユのその言い方が一番きつい！

……いや、マシユが言ったおかげで一つ思い出したことがあってね》

「なにがですか、Dr. ロマン？」

「何がわかったんだよ軟弱男」

「……………」

《軟弱って……いやその通りだけどっ……ウツウン……彼の、スネークが一体誰なのかわかった》

「っ本当ですか！」

「……やはりバレるか、まあ隠す意味もここでは無いか」

「何だよ、あんた隠したかったのか？」

「……まあ事情があつてな」

その気持ちはキャスター自身もわからない訳ではなかった。

どの英霊も、英雄として名を馳せているだけあり一般的にも英霊の間でも有名な者が多い。

だがどの英霊にもある程度、どころか大体が美談や誉れある話とともに、汚らわしく醜い伝承も多い。

この英霊も何かしら触れられたく無い物があるのだと予想するのには、キャスターも苦勞しなかった。

《それなら……僕が言うのは差し控えますが》

「いや、構わん、どうせわかるのはあんたとこの嬢さんくらいだと思っしな」

「それでドクター、スネークさんは一体誰なんですか？」

気になるマシユはロマニに躊躇なく聞く。

スネークの言葉にはロマニも思うところがあるようだが、本人が話して構わないと言ったのだ。

それこそ、じゃあ喋らない、と言うのも英霊に対しても人としても失礼だろう。

《……まあ彼自身が良いというなら僕から言わせてもらおう。

彼はCCCの創始者であり、冷戦の最中で世界を核戦争の危機から救い、その後傭兵

として世界中に名を馳せた伝説の傭兵……現代としては十分な英雄だと言える、彼の名は称号として世界的にあまりにも有名だ》

「……ええ!？」

「マシユ、わかつたの？」

「ハイッ!というか先輩はご存知無いですか!？」

「えっ……何を？」

「つい最近情報が解禁されて話題になったじゃ無いですか!」

CCCを産み出し、世界を何度も核戦争の危機から救い、その後傭兵として世界を渡り歩き、最後は兵士のために蜂起をしたあの伝説の人物ですよ!」

「……ある意味では間違いでは無いがなあ……」

「ん？」

ボソツとつぶやくスネークの言葉に反応したキャスターだったが、あえて何も言わなかった。

《まあマシユの言う通りだけど彼が成し遂げた事は本を読んだり、軍事や医療に興味がある人間じゃないと詳しくは無いだろうからね……けどこの称号は知ってるんじゃないかな?》

【BIG BOSS】って《

「あつ聞いたことあります、確か誰も傷付けずに任務を……エエエエエエエエエエエエエエエエ!」

「……あんた、有名みたいだな」

「まあ……な」

《まさか英霊の座に就いているとは……》

ロマニの嘆きはもつともだ。

何せ近代どころか本当に現代の英雄、それこそマシユが言ったようについ最近、と言つても1・2年位前の事だが、それでも本当に最近知つた英雄だった。

それも【BIG BOSS】の事は知つていて当然の様に思つていて、そもそも現代に英雄など存在するわけが無いという先入観の両方が強かつたため気付くハズが無かつた。

「俺は所詮一介の傭兵だ、まず魔術なんて存在も死んでから知つた。

それに俺は生前の癖でな、英霊の座でも好き勝手やらせてもらつてる、おかげで良い訓練になるんだが他の英霊にもあまり名は知られてなくてな、実際このキャスターもあまりピンと来てないしな」

「……BIG BOSSなんて名は聞いたこともねえな、とりあえずわかる位だ」

《あくまでそこは2004年の冬木、まだ彼の情報は解禁されて無いからでしょう。

ですが現代の一般常識として彼の名は知られてます、一般人である立香君ですら知ってるほどですから》

「……俺はここじゃあんまり有名じゃねえからなあ……だが——」

「お前がどこかの英雄なのはわかるが、そう言うな。」

だが俺は英霊・英雄なんて器じゃ無い、単なる一介の傭兵、1人の戦士でしか無い。

……それでだ、坊主とあとそこにいる男にも言っておく」

「何ですか?」

《何でしょう?》

「……俺は確かにあんたらの言う「BIG BOSS」だ。」

だがその名前は好きじゃ無い、それに俺が英霊の座に招かれサーヴァントとして現界できたのは世界を救ったからじゃない、現代に英雄がいらない、世界を救うことはあまりに簡単だからだからな」

「……俺が聖杯から得た知識の限りじゃ、一度でも核戦争の危機から救うつてのは随分と大変なことだと俺は思うがな」

「正しくは3回だがな」

『3回!?!』



「……お前らは知らないだけで核戦争の危機つてのは俺が知ってるだけでも10は超える。」

俺が知らないのも含めれば100は超えるかもしれない、だから俺はあの嬢さんの説明で納得できた。

たかが世界を救うってだけじゃ誰もが知る物語の英雄なんかと並べる訳がないとな」

『……………』

確かにオルガマリーは現代に英雄は存在しないと云った。

だがそれは文明の進歩によって神秘という「奇跡」が、人間によって介入し理解できない「現象」という代物へと落とし込められ、何より文明の進歩で誰もが世界を簡単に救う事が簡単になったから、と言う意味だ。

例えるなら、ある企業の会長が財力を使ってアマゾンの森林の伐採量を増やし狩り尽くす。

それだけで地球は滅亡する、そのようにいつどこでも人類／地球がピンチに陥いる可能性が現代にはある。

だが同時に、そんな森林伐採は許さない！という人や団体もいつでもどこでもいる。

結果として「世界を救う、なんて程度の事じゃあ現代では英雄とは呼ばれない」という状態となっており、誰も知らない内に世界を救っている（滅ぼさないように行動する）

者は非常に大量に居ると言うわけだ。

この例えは良く使われる例えではある。

一般人である立香もマシユからこの話はサーヴァントを従わせるマスターとして聞いていた。

だが、一体誰が「核戦争なんざよくある事だ」と言わんばかりの事実があると受け入れられるだろうか？

森林伐採ならまだ例えでわかる。

だが、空想の話だと、自分には関係無い話だと単なる知識としてだけ知っていた核戦争。

そんな理不尽な出来事が一回どころか何十回、何百回と起きかけていたという事実。突如舞い込んできたスネークの言葉に全員が言葉通り絶句した。

それがスネークの作り話の可能性も無いわけではないが、彼がわざわざ嘘を言う意味は無い。

……それなら聖杯戦争どころでは無い気もするが、これはもうどうしようも無い。

だが同時にそれでは彼が「英霊である理由」になっていない

「……だがお前」

「お前が言いたい理由はわかるがその理由をここで説明する気はない。

今はそれよりこの事態の解決の方が先だ、俺の身の上話なんかより人類の未来の方が優先度は高いだろう」

《……彼の言う通りだ、確かに彼が……スネークが何故英霊の座に至れたのかは気になるけど今はそれよりこの特異点の解決が先だ》

「……まあ俺の身の上話はこれが終わってからでもしてやる、どうやら俺はこの問題が解決してもこの場から消える訳じゃ無さそうだしな」

「そのとおりよ」

その声が見る方を見ると、カルデアの所長であるオルガマリーがいた。

「どうやら自分が為すべき事はわかったらしい。」

「私たちは人理継続保証機関カルデアの一員、であればこの特異点を解決し人類の未来を保証する事が第一。」

改めて聞きます……藤丸立香、マシユ・キリエライト、私に力を貸して下さい」

「所長、俺はそもそも——」

「坊主、ここは普通に答えてやれ」

「でも……」

「おそらく私も先輩と同じ考えです、元から私は所長の部下です。」

今は先輩のサーヴァントですが……それでも所長は所長です、それこそいまさらの事だと思えますが……」

「……うん、俺はそもそもよくわかって無いけど……人類のためについて言うより所長さんの力になりたいって言うのが今の心境です、最初から力を貸していたつもりでしたけど……力不足ですいません」

「……………」

「まあそういう訳だ、俺ももちろん手を貸す」

「俺はそもそもこの狂った聖杯戦争を片付けたいだけだな」

「……そうね、そんな事最初から決まってたわね」

「そういう事だ」

「……まっ、あんたらが少なくとも戦えるつてのはよくわかった、これならあのセイバーとも戦えるだろうよ」

「そういえばお前は敵の名前を知ってるらしいな、相手の名はなんて言うんだ？」

「……あれは英霊の座に招かれた奴なら、奴の宝具を見ただけですぐわかる、あれはそう

「いう物だからな」

「それで」

「……現代産まれのあんたらでも知ってるだろう。」

ブリテンの王にして誉れ高き騎士の王、

王を選定する岩の剣の二振り目【約束された勝利の剣】という名の聖剣を持つ王」

「……それって」

「アーサー王だ」

その名は誰もが、世界中の誰もが知る聖剣の持ち主であり騎士王の名にふさわしい逸話を持つ伝説の王。

その名にマシユや立香、オルガマリーが戦慄する。

何せ伝説の王が敵として、それも三騎士の一角であり最強とも言えるセイバーのクラスで居座っているのだ。

セイバーの名に、かの王ほどふさわしい存在も居ない

そんな相手に自分たちは勝てるだろうか？

そう思わずにはいられなかった

「なんだ、それなら十分に勝てるな」

一匹の蛇を除いて

## 炎上汚染都市冬木：3

「……ここに大聖杯がある、アーサー王もこの奥にいる」

「天然の洞窟に見えますが……」

「違うな、このクレーターは天然のものだろうがこの洞窟は人の手が加わってる。

天然の洞窟っていうのはここまで綺麗じゃない、人が歩くには随分と楽に歩けそう  
だ、それに中にはコンクリートらしき物も見えるしな」

「半分天然、半分人工の魔術師の工房ってところね……」

一行は決戦のため、キャスターの案内で聖杯があるという場所に来ていた。

そこは洞窟……それも相当な広さがあると見える洞窟だった。

「ピイツ!?!」

「ん」

「フオウさ……!?!」

「……敵だな」

「おお、言ってる側から信奉者の登場だ」

反射的にマスターである立香の前に立つマシユの視線の先には先ほど戦ったラン

サーの様に黒いサーヴァントがそこにはいた、どうやら残るキャスターが言っていたアーチャーのサーヴァントらしい。

そんな状況でキャスターは随分と挑発的にマシユの前に立った、……格好をつけたい訳ではないらしい。

「……私は彼女の信奉者になった覚えはないが」

「よく言うぜ、一体何からセイバーを護つてんだが」

「勝手に言え……だが相応の、具体的にはつまらん来訪者を追い返す程度の働きはさせてもらうがな」

「それは門番とそう変わらんとと思うが」

「お前はっ……!?!」

「……ん?」

「……まあいい、勝手に言つてろキャスター、私は私がすべきことをするまでだ」

一瞬、スネークを見ていたがそれも一瞬、すぐに視線をキャスターに戻し……その後ろにいる盾持ちを見た。

そして自身の得物である弓を持ち、どこからか取り出した剣を番えた。

「……おい、まさかとは思うがあいつ……剣を矢の代わりにしてるのか?」

「えっ!?!」



スネークの言葉に驚く立香

その瞬間、アーチャーからその剣が射出された

それは一直線に・・・マシユの顔面に向かっていた

すぐにマシユは盾を構えその矢を受けようとする

「エイワズ！」

だがその剣はキャスターの魔術によつて消え去つた

「……………おいおい、何も俺を無視しなくても良いだろうよお？……………良い加減俺らも決着を付けようぜっ！」

そう言つてルーン魔術を展開

そのまま火球がアーチャーの方へ飛んで行く

「ツチイ！」

とても迎撃が間に合わないため跳躍しそれらを回避するアーチャー

土煙と火煙がアーチャーの立っていた場所で舞い上がり姿が見えなくなる

その煙幕が晴れキャスターの姿を見る・・・前に1人の男が現れた

「……その程度、予想が付かないとでも？」

だがそれは戦闘での定石

煙幕で相手の目を眩ましその隙に接近する

それが遠距離からの支援攻撃を主にするアーチャーが相手ならなおさらだ

だが、このアーチャーは“剣を作る”という起源をもつサーヴァント  
むしろ接近戦を得意とするアーチャーだった

手元に夫婦剣を携えその男に切り込む

その剣筋は本物であり奇襲をかけてきた相手を返り討ちにする

「その言葉、そのままお前に返す」

だが接近戦においてはその男の方が上手だった

顔前に切りかかったその右手は逸らされ刃が宙を斬る

相手を突き刺すその左手は完璧に受け止められ剣を取り上げられた

すぐに右で相手の首を狙いつつ左に新たな得物を携える

だがその右手も完璧に受け止められそのまま肩を外された

「ガアツ……!!」

痛みでつい声が出るアーチャー

だがすでに左手には新たな剣を携えていた

肩を外されたその痛みに関係なく左手の得物を相手に突き刺した

初見では幾つも宝具を手元に呼び出すとは誰も思わない

隙をついたその攻撃にアーチャーは手応えがあつた

「その程度、誰でも思いつく」

だがそんなことはなかった

相手は剣で突き刺される前にアーチャーの体を突き放していた

あの手応えは幻想だったらしく、相手は全くの無傷だった

突き放された体はそのまま地面を滑る

そして3発の銃弾がアーチャーの顔面に着弾した

「すまんが容赦する余裕はこっちには無くてな、消えてもらう」

さらにナイフによって心臓を一突きされ、アーチャーは完全に仕留められた

大した抵抗も許されず、一本の剣を矢として放っただけで彼は消える

「……………あんた……………まさか……………!」

「ほお……………お前は俺のことを知ってるのか?」

「……………俺は……………あん……………た……………に……………あ…………………………」

「…………………………」

その言葉を最後にアーチャーは光の粒子となつて消えていった、おそらく英霊の座へと還つたのだろう。

彼が自分を知っていたのに驚きつつも、スネークはキャスターの方へ歩いて行つたがその顔はあまり優れて無かつた。

「すまんな、お前の決闘を邪魔して」

「構わねえよ、あいつよりあんたは強え、俺も接近戦じゃああんたには勝てねえ。

それに嬢ちゃんたちを消耗させるわけにも行かねえし、確実にセイバーの野郎を倒すためにはあいつに手間をかける暇は無かつたからな」

「……お体の方は大丈夫ですか？」

「そう心配するな嬢さん、あのくらいなら問題無く仕掛けられる……問題はこの後の相手だ」

その言葉にマシユと藤丸立香は背筋を伸ばした。

何せ、この先には物語の主人公であり伝承の人物であるアーサー王が待ち構えているのだ。

何も思わない方がおかしいのだ。

「そういうあんたは大丈夫なのか？これから相手するのは正真正銘の化け物だぜ？」

「……なら聞くが、相手は所詮〃人の形〃をしているんだろ？」

「ああ？……ああ」

「ならそいつは〃化け物じみて強い〃だけだ、本物の〃モンスター〃っていうのは人が相手取るには随分と手間取るものを指すんだ、人の形をしているならそいつの体を投げ飛ばせなくは無い、ナイフで仕留められないわけじゃ無い……例外はあるが」

「……………そうだなあ」

「ちよつと!?!何で2人して不安にさせるようなこと言うのよ!?!」

「居るものはいるからなあ……俺の師匠とか」

「まあわからんでも無い」

「ちよつと!!」

「……だが、セイバーの野郎は確かにそういう類のもんじゃあねえな」

「なら問題無いだろう、十分勝機はある」

世の中、確かに例外はある。

だが例外は英霊の中であつてもごく稀だ、今回相手をするアーサー王はそういった意味では「王道」の類だ。

強いは強いが絶望的な相手ではない。

「……私がどれだけお二人の御力になれるかわかりませんが……精一杯マスターのサーヴァントとして努めさせて頂きます!」

「俺も……何をやるかはわからないけど、精一杯頑張りますっ!」

そして未熟な二人にはその言葉だけで十分にやる気を満ちさせた。

その顔は覚悟を決めている顔だった。

心でどう思おうがそれだけの覚悟があれば大抵のことはどうにかなると、2人の英雄は知っていた。

だが、同時にその覚悟は少々間違えていることにも気付いた

「そんだけの覚悟があれば十分だ……が、坊主も嬢ちゃんも一つ間違えてんなあ」

「……えっ?」

「俺達から言わせれば、アーサー王との戦い、重要なのはお前らの方だ」

そう言つてスネークとキャスターはその場の全員に簡単な流れを説明した

◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆

一行は洞窟の中を進む……進むにつれて何か巨大な力を感じる事もできた  
そしてソレはあつた

「つこれは……!?!」

「これつて超抜級の魔術炉心じゃない!?!何でこんな島国にこんな代物があるのよ!?!」

「これが……大聖杯、なのでしょうか?」



「……来るぜ、王様がな」

「……ほお、どうやら面白いサーヴァントが居るみたいだな」

凜とした声、それが洞窟全体に響き渡る。

威厳があるその声は確かに王と呼ばれる存在の物に違いは無いだろう。

声が出た方を見上げると、堤防の様にせり上がった魔術炉心に剣を携えた者が一人いた。

だが

「……女の人？」

「女性……ですわね」

「待って、あれがアーサー王だと言うの？」

「そうだけ、あれがブリテンの王であり誉れ高い騎士王と呼ばれるセイバー……アー

サー王だ」

「……女の人だったんだ」

「まっ坊主が言いたい事も良くわかるが……覚悟決めろ」

「なんて魔力量なの……」

まず、アーサー王が女性であったという事実。

だがこれには、一般人である立香はいつかテレビで見た織田信長が女性だったというドラマを思い出し、敵ではあるものの大変だったんだろうなと勝手に思っていた。

それよりも、重要なのは……これだけの魔力を持つ敵を自分たちは倒せるのかどうかだ

そう思うマスターを守るために、マシユは盾を構えた

「……盾か……良いだろう、その守りが真実かどうか私が確かめてやろう！」

その宣言にも近い言葉と共に

騎士王は「飛んで来た」

「ツ後ろに下がってろっ!!」

そう言うが早くキャスターが火球を飛ばしセイバー自体を迎撃する

火球は全弾命中した……が、全くの無傷だった

「どうして!？」

「良いから下がるわよっ!」

勢い収まることなく

セイバーは弾丸の如く盾に向かって斬りかかった

「ウツ!」

その威力は凄まじく、マシユの体は盾ごと空中を滑空した

体勢を崩すことは無かったがその衝撃は自分に直撃すれば即死するものだというのはマシユにもわかった

立香は、それに対して対抗手段の無い一般人は立ち竦むほか無かった。

だが事前になすべきことがわかっていた魔術師は、一般人を後ろに引つ張り事前を用意していた魔術で飛んで来る粉塵や岩石から身を守っていた。

「……これから起こることに、あんたは『マスター』として覚悟を決めて見てなさい」

「……ハイッ」

彼女もまた自分に、彼に、何が出来るのかを理解し、何をするべきなのかを理解させた。

そして邪魔のならない場所で、マスターの役目を果たせる様セッティングした。

その間にも数撃マシユに打ち込む騎士王

その一発一発が重く、必死に盾に張り付いていなければ盾ごと吹っ飛ばされるとわかっていた

「いい加減俺のことも無視すんじゃないやねえよっ!!」

だがその間にルーン魔術を展開し通常攻撃としては最大火力の火球を打ち出す

さすがにそれは自身にもダメージがあるとわかったのか、セイバーはマシユへの攻撃を止め一旦後退した

「良いか嬢ちゃん、あいつは魔力放出で体ごとぶっ飛んで来る、その威力は体験した通り

だ。

それに加えて対魔力のスキルも高えから俺の攻撃もそう簡単に通らねえ……となればだ」

「私が盾でセイバーさんの攻撃を受けている間にキャスターさんが攻撃ですね」

「そう言うこつた……だがあの騎士王様はどうやら嬢ちゃんを崩しにくいと判断したみてえだな」

「えっ?」

後退したアーサー王を見ると、とてつも無い魔力が集まっているのがわかった

どうやら一気にカタをつける気らしい

「応えようその瞳に……主を守らんとするその胸懐に……!」

騎士王の持つ剣が膨大な魔力を纏い、禍々しく圧倒的な黒い力を持つ剣と成った

規模は確実に対城兵器

どうやら宝具を解放してマスターごとまとめて始末するつもりらしい

「耐えてマシユ！」

あまりにも圧倒的なその迫力

それに耐えられずオルガマリーは盾を持った少女に叫んだ

……だが「マスター」である立香は隣で叫ぶ彼女と打って変わり、冷静に状況を捉えていた

（俺が出来ることは……マシユのマスターとして出来ること……）

「嬢ちゃん！この攻撃を耐えれば俺たちは反撃に移れる！必死になって耐えろよっ!!」

残念ながらキャスターにはマスターがない

同じ様に騎士王の宝具を防ぐことも出来ない

だが隣にいる少女は違う

英雄でもなく、力があっても圧倒的に経験や鍛錬が足りていない

だが騎士王の聖剣を防ぎマスター達を守る力と覚悟はあった

・ ・ ・ あとはこの少女が本気を出すだけだ  
そうキャスターとなった御子は悟っていた

「エクスカリバー・モルガン約束された勝利の剣！」

膨大な魔力を纏った黒い聖剣から圧倒的な質量がマシユに襲いかかった

だが彼女には十分な覚悟があつた

自身の後ろで立っている二人を守るため

控えている仲間を守るため

自身が持つ盾が、自身が絶対の守り手と信じて彼女はその聖剣を真正面から捉える

そして何よりも彼女には

ここにいる自分よりも強い騎士王にも、キャスターにも無いものを持つていた

「令呪を持つて命ずる！」

それは

「マッシュ！宝具を展開！！」

人間らしいマスターが

信頼出来る自分の先輩がいるということ

そしてそんな彼が持つ絶対の命令権

「……見ていて下さいマスター！」



何よりそんな彼に、先輩に、マスターに、応える心があつた

「宝具擬似登録………ロ…ド…カ…ル…テ…ア…ス…  
仮想宝具 擬似展開／人理の礎！」

そして応えられる力があつた

盾から、彼女が待つ宝具から、仮想の壁そのものが展開された

「……こりゃスゲエな」

「あの盾は……!?!」

その宝具にそれぞれが思うところはありながら

その宝具は完全に騎士王の攻撃を無力化した

聖剣の光は完全に消失し、騎士王とシルダーの間には洞窟の岩石が挟れているだけ  
だった

だが同時に

「ツウ……」

「マシユ!」

「……流石にキツイか」

彼女には限界が来ていた。

後ろで控えていた二人は気付いて居なかったが、マシユはすでに心身ともに限界が来ていた。

特にランサーに対して時間稼ぎをした時点で彼女にかかっていたストレスは無垢な彼女には支えきれない代物だった、それこそ一般人なら発狂する程度には。

それでも彼女が壊れなかったのは、無垢だからこそ産まれた、ストレスに反発する守りたいという強い信念と彼女に憑依したサーヴァントの宝具があったからだ。

だがそれでも死という物が迫ってくる恐怖から耐えるにはあまりにも消耗していた。

キヤスターとの模擬戦でその恐怖心をごまかしてはいたが、それでも応急処置でしか無かった。

水が溢れそうなコップの中身を移したところに蛇口から水をダブダブと注げばコップの中身は当然溢れる。

それこそ無尽蔵に注がれば単なるコップで単なる水でもいつか流れてくる圧力からコップは壊れる。

それが魔力なら人の体など簡単に壊れる

「……………」

騎士王は再び聖剣を構え、膨大な魔力を纏わせる

「そんな!? 宝具を連発するなんて不可能のハズよ!」

「向こうは聖杯持つてんだ、魔力の無限供給くらい簡単だろうな」

「じゃあ何回でもあのビームが出せるってこと!」

「だろうな」

立香もこれには流石に驚いた。

それこそ必殺技をインターバル無しで撃てるなどチート以外でも何物でも無い。

だがそんなチート相手に対してキャスターは冷静だった、そして立香も相手がチートじゃないかと指摘できる程度には余裕だった。

「……………さて、ここからは俺たちの出番って訳だ」

「ほお、貴様が私の聖剣を止められるとは思えないが……………その心意気だけは評価しよう」

「……………元はといえばその剣も……………まあ良いか、どうせ倒せば良いだけだ」

「だろうな、だがキャスターであるお前に私の心臓を貫けるとはとても思えないが」

「全くだ、今の俺とあんたじゃ相性が悪すぎる」

杖を構えるキャスター

腰を落とし両足を僅かにズラす

完全に槍を扱う構え、敵を貫くための構え

「//俺じゃあ//、な」

「・・・なに?」

ニヤリと笑うキャスター

「その顔に不吉な何かを持ち前の直感で感じ取った騎士王はすぐに聖剣を放つ

「<sup>エクスカリバー</sup>約束された——」

「なあお姫様、すまんが俺と踊らないか?」

「!?」

だがその直前に右から声がかかる  
急いで右を方を向く

・・・・・・・・・・・・・・・・誰もない

「こつちだ、こつち」

真後ろを振り返る

今度は高速で剣を振るいながら

そこには・・・・・・・・誰もいなかった

「そんな物騒なものを振り回して踊られても困る」

今度は……………捕まった

「なに!？」

「すまんが時間をもつたい無いんでな、こちらからリードさせてもらう」

騎士王……………いや彼女の手からは武器が取られ、既に集束していた魔力も霧散し、甲冑を着ているにも関わらず彼女は拘束されていた、後ろを見ようにも身動きが一切取れない。

「動くな、でなければお前の顔に傷が付く」

筋力Aであり、しかも魔力放出のスキルを持つ彼女なら拘束を解くくらい容易

……………のハズだがどう抗つても拘束から逃れられない。

「キャスター! 貴様私に何をした!？」

「ああ? 俺は何もしてねえよ……………まあそいつはあの盾持ちの嬢ちゃんと坊主の協力者だ」

「……………アサシンのサーヴァントか」

「生憎、俺は暗殺者じゃないがな……………吐け」

セイバーを拘束してる男はそのままの状態でナイフをセイバーの首に刺し向け尋問

を始めた。

サーヴァント相手に尋問などほぼ無意味、情報は持つてるだろうが殺された所で聖杯を得る機会を逃すだけで死というものはあまり脅迫対象にならない。

「……一体私に何を話せと？」

「惚けるな。」

そもそもここは聖杯戦争が行なわれていたはずだ、であればすでに聖杯を手にしたお前は願いの一つ叶えられるはずだ、わざわざこの場で安住している意味は無い、そこそ俺たちを待ち構えていたなら話は別だが」

「ふっ……所詮どう運命が変わろうと私一人ではどうにもならないというだけだ」

「わかるように言っただけが？」

「……なら一つ言っておこう……Grand Order」

「!？」

「……何が言いたい？」

「まだ聖杯を巡る戦いは、始まったばかりだということだっ！」

「ッ！」

おそらく自身が持つ魔力を全て開放した魔力放出。

このままでは流石に耐えられないと判断した拘束者は、セイバーを自分の背後に投げ

た。

それと同時に彼女は魔力放出を止めたが、同時に火球がセイバーを襲った。

「そんなだけ魔力を放出した直後なら、俺の攻撃もよく通るだろうよ！」

「……話は終わりだな、さっさと寝ろ」

ダメ押しに、一匹の蛇はハンドガンでセイバーの顔に3発、さらにグレネードを一個放り投げた。

直後、爆発が起こりセイバーの辺り一体の土煙が立ち込めた。

その煙が消えた時……すでにセイバーの体は消えていった。

「……終わったか」

こうして騎士王は倒された。

最後に見えた騎士王の顔は……なぜかすごく、もの凄く不満そうな顔をしていた。

しかもその顔はスネークに向けられていた。

だがその顔が見えたのはキャスターだけで、当のスネークはさっさと後ろに控えているマスターとマシユの方に駆け寄っていた。

少なくとも、この後どうなるかを想像したキャスターは考えるのを止め、最後に彼らに声をかける事にした。

「……おっ、どうやら俺もお役御免らしい」



「キャスターさん！」

同じくキャスターの体も倒してきたサーヴァントのように、光の粒子となって消えていく。

そんなキャスターを心配したのか、マッシュが声をかけるが……当のキャスターは嬉しそうだった。

「おう！最後に嬢ちゃんに呼ばれただけ良いご褒美だ……坊主にスネーク！あとは頼んだぜ！」

「そうか……まあやることはやろう」

「ケツ、最後に格好つけやがって………次に俺を呼ぶ機会があれば、ランサーとして呼んでくれ！」

そう言つてキャスターは満足そうに消えていった。

そしてセイバーが倒れていたであろう場所に、黄金に輝く物体が落ちていた。

◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆

「……キャスターとセイバーの消滅を確認しました、私たちの……勝利でしょうか？」

「まあ随分と呆気ない勝利だがな、これでこの特異点の問題は解決したのかは知らんが」  
《マッシュ！藤丸君！どうやら君たちは聖杯を手にしたようだね。

「こちらでも空間の歪みの解消を確認した、本当に良くやってくれた、そこにいるス  
ネークも》

「そうか……だそうだが所長さん、このあとはどうする？」

「……………」

「所長？」

「っそうね……ここに長居する気は無いわ、さっさとカルデアに帰るわよ！」

ロマニ、すぐにレイシフトの準備よ、マッシュはあそこにある聖杯を——」

パチツ、パチツ、パチツ、パチツ、

「……………どうやら、まだ終わらんみたいだな」

「フオー！」

「いや、まさか君たちがここまでやるとは……計画の想定外にして……私の寛容さの許  
容外だよ」

どこからか拍手と声が聞こえる。

見ると、最初にセイバーが立っていた場所と似たような場所に男がいた。

……その存在を訝しみながらも、スネークは銃をしまった。

「アレは……レフ教授！」

《レフ教授だつて!?!》

「……おい坊主、あの男を知ってるのか？」

「あつはい、レフ教授です、カルデアの技師ですが——」

「レフ……レフ！レフ！レフウ!!」

「……所長に次ぐカルデアの重鎮です」

マッシュが立香に変わり説明する中、思わない再開にオルガマリーは駆け出した。

それこそ久しぶりに再会した父親に駆けていく少女の様に。

「おい、だがあいつは……」

「レフ！良かった！あなたは生きていたのね！」

「やあオルガ……君も大変だったみたいだね？」

「そうなの！もう訳がわからない事ばかりで……頭がどうにかなりそうだった

……

けどー！あなたがいればどうにかなるわ!!さあ一緒にカルデアへ——」

「……全く、予想外すぎて頭にくる……ロマニ、君にはすぐ管制室に来るよう言っただろ？」

《……レフ？》

「戻ってこい！……チツ！」

何か察したらしいスネークはオルガマリーに叫ぶが……当の少女はひたすらレフ教授へ走っている。

アレはもはや子犬と大差なく、周りの声など聞こえてないだろう。

「……君もだよオルガ」

「え？」

そこでようやく走るのをやめた少女、だがそこはあまりにも近過ぎで無防備であり、スネークも近付けない

「爆弾は君の足元に設置したのに……つまさか生きてるなんてねえ」

「……レフ？」

そこでようやく違和感に気がついたのか、少女はレフがいる方を見上げる。

マシユや立香も違和感に気がつき、レフの方を見る。

「いや……生きているとは違うな……君はとつくに死んでいる、肉体はとつくにね！」

そこには……温厚な顔を持つ男ではなく、悪魔のような表情をして笑みを浮かべる男がいた。

「きみは生前、レイシフトの適性が無かっただろう？」

「……まさかポッドの外にいたからレイシフト出来たなんて馬鹿なことは言わないよね？」

「ちがう……の……？」

「言っただろう？君の肉体はとつくに死んだ！」

肉体があつたままじや転移できない、君は死んで初めてあれ程切望していた適性を手に入れたのだよ。

……そこにいる一般人の彼のようにね」

「そんなあ……ウソ……」

「だから、君がカルデアに戻った時点で君は消滅する」

「!?消滅って……私が……!?」

そこできちやく少女はオルガマリーに戻った、だが目の前にいる男を未だにレフと見なしている。

「……坊主、奴が言ってることが事実なら彼女が死ぬってというのは事実か？」

「えっ? えつと……」

《……本当です、おそらく所長は……魂だけがレイシフトしてそこにいるんだと思います》

「そうか……なら確認するが、彼女は“死んでいる”な?」

《……ええ》

「……坊主、頼みがある」

「何ですか？」

「恐らくだが——」

その間にスネークはこの場にいる二人や通信先の男から情報を引き出した。

それらから総合して一つの可能性を見つけた……が、まだ実行する時ではないと判断した。

だがその間にもレフと名乗る男は話を続けた。

「だがそれではあまりにも哀れだ………そこで、生涯をカルデアに捧げた君に、最後の手向けとして今のカルデアはどうなっているかは見せてあげよう」

するとセイバーがいた場所にあつた黄金の物体がレフの手元に突如飛んでいき、そのまま消えた。

そして彼の背後に太陽の様に赤い、地球儀の様なものが現れた

周辺には瓦礫も見える

それに見覚えがあるらしいオルガマリーは……ただ怯えていた

「うそ・・・よね・・・？アレはタダの虚像でしょ!? そうでしょレフ!?」

「ヒドイなオルガ……私がわざわざ君のために、時空を繋げてあげたんだ。

聖杯があればこの程度のことは簡単に出来るからね」

《……こちらでも確認した、確かに今カルデアとこの空間は繋がってる》

「……………」

「さあよく見たまえアニムスファイアの末裔、これが貴様らの愚行の末路だ！」

「っ!？」

すると突如、オルガマリーの体が宙に浮いた

それこそ超能力の様に、何かに引っ張られるように

そのまま彼女の体は……あの太陽の様なものに吸い込まれるように向かっていく

「つちよつと!? 一体何をやる気!？」

「だから言っただろう、君への最後の手向けだよ……君の宝物とやらに触れるという、  
ね」

「・・・何を言ってるの!? だってカルデアスよ!？」

「ああそうだね、ブラックホールと何も変わらない、まあ太陽かもしれないが」



そのまま彼女の体はレフを通り過ぎカルデアスに向かった  
その先は……文字通り暗黒なのだろう

「そのまま、生きたまま無限の死を味わいたまえ」

「イヤア！イヤア！！助けてよお！！」

《マズい！このままじゃ所長が……！！》

「っ所長！！」

「ダメです先輩！近付いたら先輩も……！！」

「坊主！」

立香がオルガマリーの元へ駆け出そうとするがマッシュが手を取り止める

スネークも彼の前に立ち、行く手を阻む

いまさら人である彼が行っても

サーヴァントであるスネークが行っても



令呪をもって命じる！

スネーク！

彼女の“幽霊”を捕まえろ!!

「・・・全ての哀れみ、俺に憑く力を少し貸してくれ」



哀  
し  
い

悲  
し  
い

ああ

この世は哀しい



・  
・  
・  
・  
・  
されど彼女には戻る場所がある、  
か

「……………何？」

立香は令呪を使ってスネークに命じた。

令呪とはサーヴァントがマスターに従う絶対的な命令権。

それがたとえ物理的に不可能だとしても

サーヴァントに出来ることならその能力を飛躍的に高める

サーヴァントに出来ないものでも瞬間移動程度なら奇跡として可能にする

スネークはマスターの命に応えるため「彼」と「彼ら」の力を借りた

「……………なにが起きている？何故動かない？」

……………まあ良い、オルガ！君はとつくに死んでいる！さあ君の願いを叶えよう！さあ力

ルデアスに——」

「黙ってる、彼女は助けろと言っている、女性が助けを求めて無視とは最低だな？」

突然彼女が空中で止まったことに驚きながらも、レフがオルガマリーに話しかける

だがスネークが堂々とそんな彼に向かって喋り出す

「……ほぎけ使い魔が、貴様にはなにも出来まい、近付いただけで貴様らもカルデアスに飛ばしてやろう」

「おお怖いな……だが彼女は『魂』そのものだ、肉体を持たない『幽霊』に等しい」

「……それが何だと言うのだね？」

「それなら『奴』の領分だ、奇跡も使い物にならん」

「なにが言いたい」

「単純だ、『あいつら』は彼女を捕まえた、それだけだ」

「……なに？」

「わからないなら黙っててくれ、俺は少し彼女に用がある」

それだけ言ってスネークはオルガマリーに尋ねる

「オルガマリー、お前は どうする」

「どうって!？」

「いま、お前はそいつに殺されかけてるが、どうする」

「助けてよっ!! 私はまだ死にたくない!!」

「自分ではどうにも出来ないか？」

「だから助けてよっ！」

「・・・ふざけるな」

『!?!』

「お前に意思はないのか、助けて欲しいのはわかる、だが自分でどうにか解決しようとしたか？」

「どうしようも出来ないじゃない!!」

「お前の近くに敵が居るのか？」

「ふざけないで!! 早く私を——」

「・・・ふざけてるのはどっちだ!!」

「…………おやおや、仲間割れかい？君も大変だねオルガ」

「……………」

「ふざけてるのは誰だ、お前を殺そうとしてるのは誰だ？」

「君はもう何もなくなっていいんだ、オルガ」

「……………」

「お前がいま為すべきことは！出来ることは！一体何だ!？」

「君はもう役目を果たしたんだ、もう君がすることは無いんだよ」

「……………」

「お前が！この坊主を守ったのは何故だ!？」

「オルガ、あの男が言っていることはデタラメだ、君はもう、大丈夫だ」

「……………」

突然始めた問答

その意図にレフも、立香も、マシユも、ロマニも、誰もわからなかった

ただ、空中で静止しながら問答を受けていたオルガマリーはただ疲れたのか黙り込んでいた

「……残念だったな使い魔、彼女はもう私の暗示にかかっている、もう何も喋ることは出来んよ」

「そんなつ……所長!!」

「ダメです先輩っ!」

「……………」

「そうだ、所詮貴様らには何も出来ないのだよ、ただ貴様らはこの私に、2015年担当者の方に——」

「……………」

「……………オルガ?」



空中で浮きながらも彼女は

オルガマリー・アースミレイト・アニムスファイアは

決して的外そうとせず

決して相手に屈しようとはせず

ただ単純に

ここで死にたくなど無かった

発砲

その魔力でできた塊は

寸分の狂いもなく

対象の頭に向かっていた

「……残念だが、私にそんな物は効かないよ」

だが対象は……レフは何も意味が無いかのごとく。



実際、彼にとっては何の意味も成さない彼女の魔術を消しとばしたらしい  
だが彼女にとつてそれは大いに意味にある行動だった。

「……良いだろう、連れて来い！」

スネークのその言葉通り

オルガマリーの体はゆっくりとスネークの方へ移動していった

それこそどこか天空の城のようにゆっくりと

「……貴様、一体何をした？」

「俺は何もしていない、ただ『奴』と『彼ら』が手伝っているだけだ」

「……まあいい、彼女は私を殺そうとした、なら殺せば良いだけだ」

そう言ってレフは手をかざし、何らかの攻撃魔術を放った。

それは素人が見ても恐ろしいもので魔術師である彼女にはそれが呪詛の類のものを  
集めたものと判った

そして触れれば即死だと言うのも優秀である彼女は察した

だが

『……哀しい』

「……何!？」

何らかのモノがその呪詛を拒むかのように

その魔術は「完全に打ち消された」

「無駄だ、彼女が『魂』である以上一切の攻撃は『奴』によって無効化される」

「……貴様！まさか超能力者か!？」

「そんな訳が無いだろう……」

「奴」はスネークの言葉通りで魂を集めることに長けた者

だからと言ってスネークを率先して助けることは無い

ただ常に側について向こう側にいる

そうして死者の魂をいつも集めていた……こうして今も

「それとだな、お前は戦闘に慣れて無いようだから言わせてもらうが、そこにはセイバー

が居た」

「ああ？ああ、知っているとも、あのセイバーは余計な手間を取らせた。

……そうだDr. ロマン、最後に忠告をしないとやろう、未来は消失したのでは無い、

未来は焼却されたのだよ」

《……外部の連絡が取れないのはそもそも外部はもうすでに消え去って何もに無いから

か》

「そんな……!」

「そういうことだ、お前らは進化の行き止まりで衰退するのでも、一族との交戦の末に滅びるのでも無い!

自らの無意味さに!自らの無能さに!

我らが王の寵愛を失ったが上に、何の価値も無いゴミくずのように跡形も無く燃え尽きるのだ!!」

随分と声高々に宣言したレフ、その内容はカルデアにいるスタッフも驚く内容だった。

その言葉には当然マシユや立香も驚き、絶望するような内容だった

……のだがそれ以上に

「……はあ」

呑気に葉巻を吸い出した男がいて絶望などしなかった



声高々に笑うレフ、それは完全に勝ったも同然の物だった。

だが考えても見て欲しい

見張りやすい場所というのはつまりアーチャーの様な狙撃屋が攻撃しやすい場所だ。そしてスネークはセイバーとの交戦中、最初は全く関わってなかった。それは一体何故か？

「ならお前から燃え尽きろ」

横にオルガマリーが付いたのを確認し

葉巻を投げ捨て

胸から何かを取り出した

それは真ん中が赤いボタンだった  
そして何の躊躇いもなくそのボタンを押しした

瞬間、レフが立っていた場所ごと“崩壊した”

その威力は凄まじく、堤防の様に築かれていた土の山が“爆ぜていた”  
騎士王の放つ聖剣の様な暴風がその場にいる全員を襲った

とてもその暴風には敵わず、マシユの後ろに立香とオルガマリーは隠れた

……が、スネークは飛んできた葉巻を取り、律儀に葉巻入れに燃えカスをしまった  
同時に立香が持つ無線に叫んだ

「ドクター！レイシフトを実行しろ！恐らく洞窟が保たん!!」

《わっわかった！けど所長は……!?!?》

「安心しろ、彼女はとつくに固定化されている！」

《……んああわかった！けどその空間自体が間に合わないかも知れない!!》

「だったらさっさとやれ！」

坊主「さっさとこの場から撤退するぞ！マシユは走れるか!?!」

「ハッハイ!!」

「ならマシユは坊主を担いで走れ！俺はその所長を背負う！とつとと走れえ!!」

そのままスネークは言うが早く、所長を担ぎ洞窟の出口へ走った。

それに釣られてマシユも立香を背負い走り出した、だがそんな中でオルガマリーは暴れだした。

「ちよつと!?!レフは——」

「あれは多分生きてるだろうな！空間を繋げることが出来るならどうかして逃げたぞろろ！」

だがおかげで俺らは洞窟が崩れる前に逃げれば問題無い!!」

「何で洞窟が崩れるのよ!?!」

「崩れているのはこの空間では!?!」

「俺が事前に仕掛けた爆薬だあ！あのセイバーの仲間が他にいるとも限らんからな！事前に罠を張っていた！」

洞窟ごと破壊する必要は無いと思っていたが嫌な予感がしてな！仕掛けておいて良かった!!」

「・・・じゃあスネークさんの所為なんですか？」

「……………そこは……………ほら、あれだ……………あのレフとかいう奴が現れなければ良かったんだが」

「それってつまりスネークさんの所為じゃないですか!!」

「つほらさつさと走れ!崩壊するぞ!!」

マシユの指摘から逃げるかのようにスネークはスピードを上げた。

その速さは少なくとも40代男性が出すような速さではなく

いくら俊敏Dとはいえマシユが置いていかれるのはいささか異常だった

「よし出口だ!踏ん張れよ!!」

目の間に出口が見えた

外は暗く、夜ではあったがとても輝いているように見えた

そして・・・・・・・・・・彼らは・・・・・・・・



T  
O  
  
B  
E  
  
C  
O  
N  
T  
I  
N  
U  
E

## 炎上汚染都市冬木：エピソード

暗闇の世界が目を開ける事で明るい世界へと変わる。

体に痛みはなく手のひらを、指を、両手を見る限り怪我はなく欠損も無い。

「……どうやらまだ生きてるみたいだな」

「その通りだよ」

「！」

その瞬間、意識を戦闘の物へとすり替え寝ていた状態から一気に飛び上がり声が出た方から距離を取る。

周りは……病院だろうか、白を基調とした部屋でベッドが一つある程度の質素な部屋だ

そして寝ていたであろうベッドの横には2人いた

1人は男……だがそっちは見たことがある、その顔はあのキャスターに軟弱男と呼ばれていたそいつだ

もう1人は見た記憶は無い美人

だがどこかで、どこかで見たことがあるような気がしなくても無い

……とりあえずその2人が敵では無いのは確かなので両手を上げて首を振った。

「すまん、つい癖でな……悪かった」

「いやいや、むしろその反応の速さに私は感心するよ。むしろ興味があると云つてもいい！」

……この声にも聞き覚えは無い。

だがこの声の調子にスネークは覚えがあつた……そう、自分の所にいた研究開発班のメンバーだ。

どうやら彼女は結構な腕利きではある様だが……しばらく観察に徹した方が良さそうだと判断し話を続ける。

「ああ、むしろ突然声をかけた僕たちの方に非はあるからね。」

さて……早速だけど色々話したいことはお互いたくさんあるだろう、ここでは何だから管制室に移動しながらでも構わないかな？」

「ああ構わない、それより確認したいが……あのマスターと彼女たち2人は無事か？」

「……まだ意識は戻ってないが、1日休めばマシユも立香くんも目は覚めるだろう、ただ所長は……」

「ああ、そつちは問題無い、恐らく『奴』がどうにかしてくれる……その点も含めて話すとするか」

「そうだね……ならついて来てくれ」

そう言つて、2人は部屋から出てスネークを案内し始めた。

廊下に出ると随分と広い施設だとわかる……なおさら病院に思えてきた。

「改めて、人理継続保障機関・カルデアにようこそ、我々はあなたを歓迎します……もつとも今は復旧作業中ですが」

「問題無い、俺はここから去る気も無い……流石に人理焼却なんて代物をどうにかする事は俺だけでは無理だ」

「ほうほう、そこら辺は賢いみたいだね？」

「……とところで彼女は誰だ？」

「ああ、彼女は——」

「私かい？ 私は万能の天才と呼ばれるダ・ヴィンチちゃんさ！」

「レオナルド・ダ・ヴィンチか」

「……あれ？ 以外と驚かないんだね？」

「かのアーサー王が女性だったんだ、今さら不思議でも無いだろう……天才とか呼ばれる奴は大体こんな感じだしな、大方……モナ・リザに成りたかったからそんな姿をして

ると言ったところか？」

「ほお、私のような天才を何人も見たことがあるみたいだねえ？」

「……あんたがどれだけ天才かは今はまだわからんが、優秀なクリエーターだと言うのはわかる。」

実際、俺の仲間にはそういう奴が多かったからな」

そう、驚異的というか狂為的と言った方が正しそうな研究員は何人もいた。

中には女性の方が美しいからなんなら女に成りたかった、と語る部下もいたりした。

そんな縁で、『モナ・リザ』がレオナルド・ダ・ヴィンチの女体化という説を知っていたというのもあり大方そんな感じなのだろうと予想していた。

……出来ればあまり信じたいとは思いたくない予想だったが、その答えは今日の前で歩いている

「……その点を一つ、確認したい。」

あなたは……あなたはCQCの祖であり、アウターヘブン蜂起をした張本人、BIG BOSSですか？」

唐突にそう聞いてきた軟弱男には脆さはあつたが、弱さはなかつた。

……まあ確かにその点はこの組織にとっては重要な事なのだろう、スネークは真面目に対応する事にした。

「まあな」

「ですがあなたは近代……どこるか現代の人間です。

あなたがどんなに実力者であろうとも、現代の人間が英霊召喚で召喚される事はほぼ不可能なはず。

……あなたは一体どうやって召喚に応じたのですか？」

「……どうやら思った以上に俺は例外的らしいな、だがそれを知ってどうする？」

「……え？」

「ふむ……あまり知られたく無い事なのかな？」

レオナルド・ダ・ヴィンチ　こと、ダ・ヴィンチちゃんが探りを入れるように質問する。

だがスネークとしては別に知られたくないのではなく、喋りたくないだけだ。

「いや……まあ気分の問題だ、教えても構わないが……今は教えたく無いな。

だが俺はあの坊主に召喚された以上、あの坊主に従う、そしてあの坊主はこのこの所属するものだろう。

ならある程度俺もこの組織に従う必要があるだろう、俺はそれに抗うつもりは無いか

「そこは安心してくれ」

「……ロマン、どうやら彼は好意的な英雄みたいだ、別にその点は心配いらなだろう。」

「万能の天才である私が保証しよう」

「……それは保証になるのか？」

「なる！」

「そうか……で、実際どうなんだ？」

「……まあダ・ヴィンチちゃんと言うからには確かなんだろうね」

「ならよろしく頼む」

「ああ、こちらこそ」

「………ねえ、何で私の言葉は信じないで彼の言葉はすぐ信じたんだい？」

「万能な技術者ほど人間関係で信頼できないものは無い」

「確かにねえ……」

「ヒドいなあ、私がそんな詐欺みたいな事をすると思うのかい？」

「………それは知らないが」

「今の妙な間は何だい!？」

「全く疑う余地が無いわけでは無いが、彼……彼女が信頼出来るかどうかはロマンからの反応を見るに、それなりの前科があると見た方が良さだろう。」

それでも技術の腕は確かなのは間違いないのも確かだろう。

「……でもひとつ、これからの為にも確認しないといけない事があるんだ」  
「ん？何だそれは」

「君のスキルとパラメータだ」

そう言われて案内された場所は随分と現代的な場所。

見る限り通信設備と幾つものタッチパネル式の液晶にキーボード、職員は18人で今も彼ら3人が入ってきていても誰として作業の手を止めていない。

そして正面のガラスがあつたであろう吹き抜けの先には……太陽のような物体が浮いていた。

「あれは確か……カルデアス、とか言つたか？」

「ええ、惑星には魂があるとの定義に基き、その魂を複写する事により作り出された小型の擬似天体です」

星の状態を過去や未来に設定する事ができ、現実の地球の様々な時代を正確に再現可能です」

「言ってみれば地球のコピーか」



「……驚かないんだねえ、本当に」

「これ位なら幾らでも見てきた、人工知能とかな」

「なるほどねえ……」

「……さて、まずは我々の話からしましょうか、こちらへ」

そう言われ、また歩くと今度は一つの研究室に案内された。

中は様々な物質に化学薬品、見たこともない何かがそこにはあった。

「……随分と薄いのが、あの洞窟で感じた似たような雰囲気か漂ってるな？」

「たぶん魔力の事だろうね、まあここは私の工房さ」

「なるほど、ある種の研究室と工場を兼ね備えてるのか」

「……本当に良くわかるね」

「でだ、とりあえずは俺に関した事から片付けたい……俺のスキルとパラメータってのは何だ」

「……それはサーヴァントなら、わかってるだろう？」

「いやわかるが、何で俺のスキルとパラメータってのが気になるんだ？」

まずはそこだ。

スキルと言うのは各サーヴァントが持つ特技みたいなもの、パラメータはそれぞれのスペックだ。

スキル自体、スネークも自身が組織した軍隊で似たようなものを知っている。

「……まあ言っちゃ何だけど君がレイシフトでここに来て検査をしたんだ、身体的な意味でも魔術的な意味でもね」

「それでスキルっていうのはわかるもんなのか？」

「身体検査だからね、普通はわかるはずなんだけど……ねえ」

「ん？わからなかったのか？」

「まあそういう訳だ、多分君のスキルの中に何かしら自分の情報を隠すスキルがあるんだと思う。」

それが検査というものを一種の外敵からのアプローチとして発動したんだと思う」

「……じゃああれか、俺が自分で情報を言う必要があるのか？」

だが俺は接近戦に強いつてのと宝具ぐらいしかわからないぞ、それこそマスター権限つてのでマスターが自分のサーヴァントを解析する位しか方法はないだろう」

「そこでダ・ヴィンチちゃんの出番って訳さ！」

「………どうする気だ？」

「まあまあそう警戒しなくていいよ、多分君の体を『勝手に』解析したのがマズかったんだ。」

少なくとも今は意識がある状態で、私たちのことを敵だとは認識していないだろうか？

それならその妨害してると思われるスキルも発動しない、その状態で検査をするだけだよ」

「……俺はあまり検査は好きじゃないんだが」

「そうは言っても……一体何が出来て何が出来ないのか、どの位の戦力なのかを知るのがどれだけ重要かは

あなたならわかるはずです」

「……わかったわかった、それなら一つ注文だ」

「そう怖がらなくて良いさ！一瞬で終わるしね！」

「そうじゃない、その男に注文だ」

「……僕に？」

だが一つだけ、まずは解決したい問題がスネークにはあった。

自分には思い当たりのないらしいロマニはスネークの指摘に疑問で返したが、その注文内容は至ってシンプルだった。

「お前、言い方が嘘くさい、と言うより不自然だ。

聞いている方が違和感しか感じないから話し方を普通にしてくれないか、居心地が悪い」

「言われようがヒドイぞ?!」

「そうだ、そんな感じで構わない。」

俺は単なる傭兵、実際サーヴァントだしな、気に食わなかったら文句を言うがへり下られてもやりにくい。

俺のことはスネークと呼んでくれれば問題ない、俺もその方がやりやすいしな」

「ほらあ、やつぱり言ったじゃないか、君は話し方をわざわざ意識なんてしなくて良いんだよ」

「そうは言ったって相手は伝説の傭兵だよ!？」

確かに王様とかとてつもなく偉い身分の人じゃないとはいえ年長者だよ!？」

「……お前の隣にいる奴も年長者だと思いが」

「彼は……ほら、ダ・ヴィンチちゃんだし」

「なるほどな」

「何がだい？私が何かした事が今までであったかい?」

何かが抗議している気がするが恐らく機能性だろう。

「ここは機能的なものが多い、きつと何かが作動してる音に違いない。」

「じゃあ改めてスネーク、とりあえず君の検査を始めよう、そこに立ってくれ」

「わかった」

「……ねえ君たち？ひどくないかなあ、私は万能の天才ダ・ヴィンチちゃんだよ？」

「立ってるだけで良いのか？」

「うん・・・終わったよ、もう座ってくれて良いよ」

「………なあ君たち、ここが私の部屋だって知ってるかい？」

「意外と早く終わったな？」

「いわゆるレントゲン撮影とほとんど変わらないからね。」

実際マスター権限でのサーヴァントの解析もマスターがサーヴァントを観るだけだ、スキルやパラメータを見る程度ならそれなりの機材が必要なだけで大した手間じゃないんだ」

「………ロマン、君が隠している柿ピー食べるよ」

「そうだスネーク、長話もなんだからそこにあるチーズでも食べながら話そう」

「ほお、チーズか」

「悪かったよ！今まで勝手にチーズを注文したり所長のマカロン食べたりロマニの歌舞伎揚げ食べたりマシユのメガネを改造したりしたけど!!」

それでも私はただ単にみんなに楽しんでもらいたかっただけなんだっ!!」

「……ダメ人間だな」

「そうだねえ」

さすがに同情の余地があるかと思っていたが……彼女が自白した内容を聞く限りだめだろう。

むしろ今白状したのがほんの一部でしかないのだろうと簡単に想像がついた。

……だからと言ってチーズで釣ったロマニもロマニでどうかと思うが、それで釣られたのが人類の万能の天才と呼ばれた逸材、英霊なのだが。

「それはそうと、俺のスキルとパラメータってのはどうなんだ？」

「うん、今プリントアウトしている……出てきたね、はいコレ」

「拝借する、と言っても俺に関した事だが」

「まあそうだね」

そう言いながらも渡された一枚の紙に書かれた内容を見る。

対象：スネーク

真名：BIG BOSS

クラス：ライダー

??パラメーター筋力：B＋／耐久：A／俊敏：B／魔力：E／幸運：E／宝具：C

??クラススキル―対魔力：E／騎乗：C／保有スキル―心眼（真）：B／カリスマ：A

／射撃：A／クイツクリロード：B／

／ゴースト：A＋／対巨大：EX／死者の加護：EX／

【CCC（クローズ・クォーターズ・コンバット）

??ランク：C／種別：対人宝具／レンジ：1―2／最大捕捉：1人

（―――）

??ランク：？／種別：??？／レンジ：??？／最大捕捉：不明

-----

「……なんだこれは、健康診断か何かか？」

「いや君のステータス……なんだけど……どういう事だ？」

「どれどれ………ねえ、一つ確認していいかな？」

「なんだ」

「君って本当に現代人？」

「当たり前だろう、俺はつい最近まで生きていた………とは言い難いが、去年死んだ。

9. 11の同時多発テロやその首謀者がアメリカによって殺された事も知っている、あとロシアがオリンピックの裏側で侵攻をした事もマンハッタン沖でのタンカー沈没も知ってるぞ」

「………知ってる内容がアレだけど………うん、まあとりあえず嘘じゃないみたいだ」

基本的に英霊は召喚されると、召喚した聖杯から現代の知識を与えられる。

これは各時代で生きた英霊たちが現代社会で生きていけるように、というある意味オカンの様な配慮と言える

ここで言う知識というのは召喚された現地の言語、そして生活に関わる社会的な一般常識だ。

もつとも

例えば日本で召喚された場合、食文化で言えば米という存在と箸の使い方や食べ方は知識として与えられる。



その一方で生前よく食べていたパンの方が好みだ、という英霊も多い。

そして、それぞれの英霊が現界した時には当然生前の記憶や知識も含まれている。

それらから考えるとスネークが持つ知識はとても聖杯が与える代物ではなく生前知っていた「記憶」と言える。

……彼の場合は生前、記憶や経験を記録されたといった方が正しいが。

「というかロマニやあのマシユとか言った嬢さん、あとマスターの坊主も知ってたみたいだが？」

「そう……なんだけどさ、なんか色々天才である私の予想外なだけ……うーむ……」

「具体的にはなんだ」

「……とりあえず僕の口から説明しよう」

勝手に自分の世界に入ってしまったダ・ヴィンチをしばらく放っておき、代わりにロマニが説明を始めた。

「まず、宝具の説明欄が無い」

「ああこれか、説明文だったのか」

「……」つそり抜けてるなんてこと自体初めてなんだ。

それに加えてもう一つの宝具はそもそも効果が不明、説明文も無し、名前も意味不明」

「おい待て、名前が意味不明は無いだろう、確かに顔みたいになってるが」

「そう言いたくなるくらい おかしいからねえ……その点何か思い当たることはあるかい？」

「思い当たることなんてあるわけ無いだろう」

「いや、あるはずだ。」

宝具つていうのはサーヴァントの最終武装、生前の偉業を形にしたものだ、心あたりはあるはずだよ」

「……………なるほどな、そういう事か」

「どういうことだい？」

「まず、お前たちが知っている俺に関する情報は事実の一部に過ぎない」

「だろうね」

「いや、お前が思っている以上に一部分に過ぎない。」

そして俺は根本の部分、生前の行いで自分に関する情報を秘匿することが体に染み付いている。

……あまり詳しく言いたくないが、とりあえず仮に俺が許可をしても俺の重要な部分を他人は知ることが出来ないだろう……魔術的に合ってるかはわからんが一種の怨念に近いかもな」

「……そんなに知られたくないのか」

「本能的に思ってるんだろうな、それか俺の性かもしれないが。」

実際、CQCに関して教えろと言ったら体で教える以外に方法は無い、口だけで説明できるもんじゃ無い」

「あつそういう意味なんだ」

「あくまで俺の予想だがな」

「……じゃあ宝具の説明部分が抜けてるって言うのは……」

「そもそも説明が出来ないからだろう。」

もう一つの方は……宝具自体が情報を秘匿する効果があるんじゃないのか？」

「じゃあ、その効果に思い当たるところはあるんだね」

「あるな、俺自身の情報は……そういう風に扱われたからな」

「?……それはどういう意味だい?」

「……すまんがそれは言えん、教えてもいいとは思いますが……ダメだな、教える気にならん」

「そうか……まあ君がしたく無いことを僕はどうすることも出来ないからね」

「諦めてくれると助かる」

そもそもスネークはCQCはスキルの一部だと思っていた、だが実際には宝具だった

らしい。

もつともだからと言って何か変わるのかと言えば本人にしてみれば何も変わる事は無い。

そしてもう一つの宝具に関しては……はつきり言ってスネークはその宝具の名前も効果もわかっている。

だがその宝具を完全に扱うことが出来るかと言えば、今は不可能だと言えない。

原因は……不明だが、恐らくそもそもこのサーヴァントという体に慣れてないのだからと当たりをつけていた

「そう言えばサーヴァントになるのは初めてなんだが、随分と体が変な感じだな」

「ああ、それは多分召喚したばかりだからだと思っよ」

「それはこの世界に来たばかりで慣れてないからか？」

「うーん……少し違うね。」

本来の英霊召喚ではその英霊の全盛期の姿が召喚されるんだ、スネークの場合は……40代かな」

「ああ」

「まあ、それはあくまで『本来の英霊召喚では』なんだ」

「……なら、ここでは特殊なのか？」

「最初に紹介したけど、ここは人理継続保障機関：カルデアだ。

そして人理継続の実務を遂行するためにサーヴァントを召喚するんだけど、召喚に依る英霊が友好的で必ず協力してくれるとは限らないんだ、下手をすればこっちが殺られてしまう可能性もある」

「そういう物なのか」

「そこでこの前所長、今の所長の父君は召喚したサーヴァントの霊基をある程度弱体化させて召喚するシステムを採用し製作した」

「なるほどな、一種の安全対策か」

「まあね、もちろん安全対策のためにサーヴァントを弱くしても、いざ戦う時にも弱いままじゃお互い問題が発生するのは目に見えてるからね、その対応策もある」

「ああ、単純に霊基を強くすればいいのか」

「……頭が良いんだね」

「商業柄、少ない情報からわかることを繋ぎ合わせて推測しない奴は死ぬ世界だったかな。」「

「このくらい俺の部下たちもわかると思うが」

「……傭兵って筋肉モリモリで単細胞かと思ってたよ」

「まあそういう奴もいない訳じゃないが、長生きする奴はだいたい頭は回るぞ」

ロマニの指摘はあながち間違えてはいないのだが、それはある意味偏見だ。戦場で生き残れる者は、

だいたいあらゆる情報をかき集めその情報から瞬時に判断出来るか、

あるいはそれが出来なくてもある一点に特化しその一点だけは誰にも負けないプロか、

はたまた引き際を間違えない小心者、別の言い方で勇氣ある行動ができる天才。

だが……ロマニの筋肉モリモリの単細胞と言われてスネークが思い出したのは一人の男だった。

具体的にはパイプ一本で敵兵をぶん殴って殲滅したり、あらゆる銃を二丁持ちでフルオートでぶっ放したり、本人の言葉を信じると岩男（ビル8階建くらい）の相手を一人で倒したご老体。

……今思い出すとある意味で化け物だとわかった

「……………あのご老体も化け物だったか」

「どうしたのいきなり!？」

「ああすまん、お前が筋肉モリモリと言ったからな。」

ふとある奴……と言っても俺より一回り年上だが、ある兵士を思い出してな」

「君が化け物呼ばわりするほどかい？」

「そうだな……フルオートのLMGを両腕に抱えて二丁まとめてぶっ放したり、パイプ一本で敵一個大隊と機械化歩兵を殲滅した位だが」

「……………ごめん、それ冗談でしょ？」

「いいや？ 実際俺は見たしパイプの扱いも一流だった、恐らくあいつなら俺が召喚された街くらいなら余裕で生き抜くだろうな、特異点の解決に繋がるかは知らないが」

「……………そうか……………そうかあ……………」

「大丈夫か？」

「……………彼は本当に現代の英雄なのか？……………実は転生して、天性の肉体を……………けどそれならスキルに……………」

「おい、聞いてるか？」

「……………ていうか人間なのか……………これも遺伝子の……………いやいや……………うーむ……………」

「Dr. ロマン、一体どうした」

「つああ問題ない！ スネークの霊基も後でダ・ヴィンチちゃんが強化してくれるだろうし！」

気にせず次に行こうかっ！……………と言っても次もまた突っ込みどころが満載なんだ

けどねえ……」

「答えてやるからさっさと答え」

「……まあスキルに関してだ。」

対魔力や騎乗スキルはライダーとしてのクラススキルだし、保有スキルの心眼（真）やカリスマもわかる。

射撃やクイックリロードというのも君の銃器に長けた腕前がスキルとして付与されただと思う。

ただ……残りのゴーストとか対巨大とか、何より死者の加護とかっていう名前からして物騒なものが並んでるんだけど………この説明はしてくれるかい？」

次はそれだ。

一体なにをどうしたらゴーストだとか対巨大だとか、何より死者の加護など得られるのだろうか？

湖の精霊のおかげで水面に浮けるのと同じ理屈だったりするのだろうか？

だとするとそれは加護ではなく呪いではないのか？

そういつた考えが浮かぶのはある意味で当然のことだった、ロマニの個人的な興味本位の部分もあるが。



「ああこれか、むしろ俺としてはクラススキルとか他のスキルに関しての情報欲しいかな」

「ああ、なら後でコピーで良ければスキル一覧を渡しておくよ」

「それは助かる、というかそういう一覧があるんだな」

「…… Wiki に載ってるから」

「……………それで俺のスキルに関してか、まあ順番に行こう。」

「まずゴーストだが、恐らく俺が単独潜入を得意としたからだろうな」

「確かに僕たちが知ってる内容でも君が単独で敵地に潜入していたとはあったけど……どうしてゴーストなんだい？」

「……俺の上司だった男が初めてのミツシヨンで言った《お前は正真正銘のゴーストに成れ》ってな」

「それってどういう……?」

「そのままの意味だ。」

その場に存在しているが、誰にも悟らせない、誰にも気付かれない、だからそこに存在していない存在。

単独潜入で求められる兵士はそういった存在だ、たとえ相手に何かしら干渉しても一切バレない存在。

それを表現するのにゴーストって言うのは一番しつくり来る」

例え真後ろを歩いていても気付かれぬ、ドアを通り過ぎても誰も気にしない。

例え人を排除しても誰も気付いていない、少し寝ていただけで誰も気にしない。

それが何者かの仕業など考えない、考えさせる証拠を与えない、痕跡が無い。

それがスネークが最初の潜入任務、Virtuous Mission(バーチャス・

ミッション)で与えられた指標

確かに存在はしている、だが存在は知られない、だから存在していない、つまりゴースト。

「……じゃあ気配遮断みたいなものかな？」

「そんな大層なものじゃないと思うが……気配遮断っていうのは正面に立っていてもバレないんだろ？」

「まあね、言葉通り気配を外部に漏らさないように遮断してるから」

「俺の場合は死角にいると影が薄くなるだけだ、そんな超人的な事はできない」

「……けど、アーサー王の真後ろに立って声を掛けてたよね？」

「あのくらい普通だろう、俺としてはあいつの体に直接C4を仕掛けようと思ったがその鎧がどれだけ丈夫なのか判断できなかったからな、確実性を取っただけだ」

「そうなんだ……そうなのかなぁ……」

考えてみてほしい、相手はかのアーサー王でサーヴァントだとはいえ女性である、人である。

だというのに目の前の男は敵だからという単純な理由で直接爆破しようとしていたと言う。

もはやハーグやジュネーブなど何もない……まあサーヴァントに条約が適用できるかは怪しいのだが。

だとしても人体もろとも発破とは一体誰が思いつくだろうか。

むしろ発破より拘束する方が確実に仕留められるとかいう男はどうなのだろうか

「……まあとりあえず、君は噂どおり潜入も出来るわけだ」

「サーヴァント相手にも通じるかは知らないがな」

「……アーサー王を眩ましたなら問題ないんじゃないかなあ！」

「いや、どんな敵がいるか知れたものじゃない、油断は出来ないだろう」

「……………」

君の方が知れたものじゃ無いよ、と言いたかったがそれを言っても何故か怒られる訳

でもなく、

ただなんとなく「お前は何言ってるんだ？」と返されるような気がしたロマニは何も言わず話を進めた。

隣でブツブツなにか発してるのは機能性だろう、この部屋の仕様だろう。

「じゃあこの対巨大っていうのは？」

「それは多分メタルギアの事だろうな」

「メタルギアってあの核兵器を搭載した機械兵器のこと？」

「別に核兵器を搭載してるとは限らないがあれのほとんどはデカイ、それを何度も相手にしたからスキルにもなったんじゃないか？」

「それなら対メタルギアとかになりそうだけどね」

「それもそうだな……ああ、そういえばモンスターを狩ったこともあったな」

「そんなモンスターって、さっきの兵士みたいな相手を仕留めたからってスキルに關係は無いだろう？」

「いや、普通にドラゴンだが」

「ドラゴン!?!」

突然の幻想種、それもドラゴンと来たら魔術師なら誰でも驚く。

そもそもドラゴンは神秘に満ちた時代でも希少な存在であり、素材としても一級品、

そしてそれだけ強かった

だが神秘が薄まるにつれて、ドラゴンはおろか素材となりうる神秘の濃い魔物と呼ばれるものですらほとんど見つける事はできない、あの冬木でみた骸骨ですら本来は貴重な素材であり、現代で見ることなどに叶わないものなのだ。

せいぜい現代で現れるのは死徒、グルーくらいだが……それはまあいいとしてドラゴンである。

そうドラゴン、そんな単語があるう事か現代の英雄であり傭兵だった男から出てきたのだ。

死んだ後、そして今も現在進行形で魔術の知識を仕入れている彼がドラゴンなんて言葉を自分から発するとは思えない、故に思考に没頭していたダ・ヴィンチですら反応した、それが事実なら放っておけない。

「君いまドラゴンって言ったよね？ 言ったよね!!? 言ったな!!?」

「いやっおい、何をそんなにお前は興奮しているだ？ ロマニ、こいつをどうにか——」  
「いまドラゴンって言ったよね!!? なんて君からドラゴンなんて言葉が出るんだい?!」

本当に君は現代の英雄なのかい!!? 実は古代ローマからテルマエから湧いてきたんじゃない?!?」

「お前が一番錯乱してどうする……」

「ねえ君、そのドラゴンってどれ位の大ききさい!？」

「どれくらいって言われてもな……15 m以上はあったか?」

『……………』

「……今度はどうした」

『そんなのいる訳ないじゃないかあ……』

唐突に残念がる2人。

それはそうだ、全長15 m越えなどそもそもドラゴンとか言う前に生物として陸上で存在できるか怪しい。

世界最大級の生物であるシロナガスクジラは33 m程あるが、それは浮力の効く海上でだからこそその話。

基本的に10 mを超えると生物は自身の体重で潰れるかまともに動くことが出来なくなる。

彼ら彼女らが想像していたのは体長が人と同じくらいか数メートルかのワイバーンに近いものを想像していた

確かに伝承ではそう言った化け物もいただろう……が彼が生きていたのは現代、そんなものが居れば瞬く間にどこかの軍が動く、神秘の濃度や現実的な問題でも小型のワイ

バーンの様な物を予想していた。

当然15mのドラゴンなど存在するわけが無い、と半ば呆れながら解説する運びとなった。

「いやそう言いたいのはわかるがな、実際にいるぞ?」

「いやいや、いくら天才の私でも現代で実現可能な事と不可能なこと位予想つくさ」

「天才なら予想つくだろうな、そりゃ」

「僕もダ・ヴィンチちゃんと同じ意見だ、いくらなんでも世の中実現できる事と出来ない事は分かれてる」

「人理焼却はどうなんだ、そこのところ」

「良いかい?この時代で、陸上で、そんな馬鹿でかい化け物が大暴れしてれば何処かしらの軍が動く。」

「そうなればすぐに世界が大騒ぎさ、そうでなくとも15m越えの生物なんてまともに動けないだろう。」

「そんなことも君はわからない訳じゃ無いだろう?」

「そもそも軍が無いがために俺らが動いたんだがな、それと15m越えのモンスターなんざそれなりにいるらしいぞ」

「らしいぞって……スネークは理屈では知らないと思うけどこの時代は神秘、つまり奇

跡が科学によって証明されているんだ、だから幻獣みたいな怪物なんかも姿を消していった、いま残ってるのはせいぜいグール……ゾンビみたいな物くらいだ、時々小型のモンスターも報告されるけど滅多に発見されやしない」

「確かに小型のモンスターもいたが、馬鹿でかいのもいたぞ。

というかそんなに信じられないなら別に良いじゃないか、居た物は居たんだ」

『良くない!!』

ここでフオローする点は2つ。

1つはロマニやダ・ヴィンチが言う通り、神秘が極めて薄まった現代においては空想の物語に出てくるようなモンスターはほとんど残っていない、存在したことは魔術の世界で確認されてはいるがまず残っていない。

つまりスネークが語っていることは奇想天外なことであり、それ故に探求する価値があるためブレーキ役であるロマニですら興奮している、もつともいえない事を前提に話は進めているが。

そしてもう1つはスネークは実際にドラゴンを見た、と言うより自身の基地に襲撃してきたこともある。

ただ、このモンスターに関してはクリサリスと呼ばれたAI兵器の写真がUFOの存在を示す証拠として流失してしまった一件があったため、彼が指揮していた組織によつ



て完全な隠蔽がなされたため世に残っていない。

襲撃してきたモンスターはコスタリカにも上陸したが、上陸したモンスターを倒す術がコスタリカには無かったためにスネーク達のところへ依頼が来たため情報は今まで漏れてない。

つまり魔術の世界にいるこの2人どころか、普通誰もまず信じられないがドラゴンは現代で生きていた。

「……なら今度写真を見せる」

「写真があるの!？」

「いまは無理だ、だがさつきロマニが言っていた霊基の強化でもしかしたら可能になる

……かもしれん」

「ダ・ヴィンチちゃん!」

「ごめん、今すぐには手を付けられない。

まずは施設の復旧と唯一のマスターである立香さんと所長であるオルガの復帰は最優先だ。

マスターである彼は多分明日には目を覚ますだろうけど……」

「……そう言えばそうだったね」

「冷静になったか……」

突如沸き起こった2人からの熱意と言葉の雨。

それらにスネークは素つ気なく返したが、彼らの一番の上司がまだ寝たきりだったのを思い出した二人は黙り切ってしまった。それを見てスネークは一先ず落ち着いた2人を見て安心した……が、彼女が寝ているのは“奴”のせいであることをまだ説明していないことを思い出し、目の前で黙りこけた2人に声をかけた。

「ところで彼女、お前たちの所長の事なんだが」

「オルガマリーのことかい？」

彼女は君たちと一緒にレイシフトでちゃんと戻って来てたよ……流石の私も一体何処で受肉したんだかさっぱりでね、まるでサーヴァントみたいに魔力で出来た肉体で何かを包んでる。

おかげで命に別条は無いし、どうやらこの世界に留まれているみたいだけどねえ」

「……何故か目を覚まさないんだ、投薬もしてみたが……効果があるかどうか……」

「それなんだがな、恐らく俺が原因だ」

「!? どういうことだい!」

「……そう言えば、君はレフがマリーをカルデアスに放り込もうとしたのを阻止したら

しいじゃないか。

「一体どうやったんだい？」

「……ほぼ確実に『死者の加護』だろうな、もつとも俺もいま名前を知ったが間違いない」

「詳しく聞こうか」

本腰を入れたダ・ヴィンチはそれなりに真剣に話を聞く態勢になった。

命に別条は無いとはいえ所長である彼女の容体は原因不明、それを知っているとすれば真面目にもなるらしい

「まあ理屈自体は簡単だ。」

俺は昔、まあ縁あつて降霊術に長けた『奴』と出会った、それから時折いわゆる幽霊が見えるようになった」

「それがスキルになったのかい？」

「みたいだな、名前には加護とついているが別に俺を直接守ってくれた事はないがな。」

俺の命が関わっている状況下で少し手助けをしてくれたくらいだ」

「……それが所長とどういう関係が？」

「どうやら俺が死んだ後でもこいつらは俺の周りに居るらしくてな、こうして現界してもいた。」

もう少し俺の霊基が強くなればある程度意思疎通も出来るような気もするが、あの時は坊主に令呪を切らせてこのスキルの効果が強くなったんだろう、それで所長を確保するように頼んだら動いてくれた」

「ふむ、つまり君は幽霊を操る超能力者ってことかい？」

「いや違う、どっちかといえぱそういった超能力を扱える知り合いが今も居ると言った方が正しいな」

「そうかい……じゃあ彼女に効果があるかは一種の賭けに近かった訳だ」

「いいや、随分前に彼女が死んだ人間だというのは見当がついていた」

「えっ……ええ？」

「お前はっ……見てたなら覚えてるだろ、キャスターがあのお嬢さんを重いと言ったことと」

「えっあつああ、ああ覚えてる」

「あの時は俺にしか見えてなかったみたいだが、彼女の体には何人か取り付いていた」

「それってつまり、彼女はもう取り憑かれてるってことかい？」

「違う、あくまで『付いて』ただけだ、別に何の意味も無い、言葉通りくっ付いていただけだ」

「その幽霊が付いていた分、重かったと？」

「多分な、別に生きてる奴でも肩が重くなるくらいはあるみたいだがその程度だ。」

あのキャスターは性格は置いておくが人を見る目があった、人の体重を測り損ねることはない無いと思った。

そのときから当たりを付けててな、あのマシユっていう嬢ちゃんとはまた違う感じがしていたのもある」

「君がサーヴァントだからなのか、元からの素質なのか……本当に魔術を知らなかったのかい？」

「ああ」

「……そうかい、それで君はどうやってレフから彼女を助けられたんだい？」

「魔術に詳しくはないが、彼女が何かに引っ張られるように宙を浮いたのはあいつの魔術には違い無かった。」

だがあれは多分物体を引っ張ったり動かしたりする代物だろう、ならそれに干渉する事も不可能じゃ無いだろうと直感的に思った、そこでマスターの令呪を切ってもらって干渉力を強化してもらったと言った所だ」

「まあ理屈は通ってる、実際それが成功したんだろうね

じゃあ彼女がレイシフトしてちゃんと戻って来れたのはどうしてだい？」

「……そう言えば固定化、とかスネークは言ってたよね？」

「正しい言い方は俺にもわからんがな。

「奴」は死にかけてた者の魂、っていうのかわからんがそう言った物を扱う力が強い……俺の感想だがな。

そして、「奴」は死んでからそれなりに時間が経っている人間でも蘇生させる事が出来る」

「……死者蘇生ってことかい？」

「なのかもしれない、俺も詳しくことはわからん。

だが「奴」は彼女を俺の横に連れてきた時、俺を見て頷いた、だから大丈夫だろうと思っただ」

「……じゃあ結局、何もわからないってことか……」

「それで今の所長の容体とどういう関係が？」

「「奴」は今頃、彼女と話でもしてるんだろう、あー……出来るかわからんがやってみるか」

そう言うときスネークは席を立ち、目を瞑っていた。

……側から見るとただ立って目を閉じているだけで何をやってるのかまるでわからない。

かく言う天才は見当が付いたらしいが、至って常識的で少し頭が良いロマンは突飛な

発想には至らなかつた。

「やはりお前らには見えないか……仕様がな、口で説明するか」

「……見えないって……まさか」

「お前らの目の前にいるぞ」

「なにが!？」

「死んだ兵士たちの魂、まあ幽霊と言った方がわかりやすいか？」

「いや! いやいやいや!! カルデアになに持って来てるの!？」

「ていうかそんなあつさり卸せるというか出てきてくれる物なの!？」

「落ち着くんだロマン、とりあえずこいつを飲みたまえ」

「うん……うんそうだね、とりあえずは落ち着こう。」

「そうだよ、別に見える訳じゃないし見えないのと同じだもんね」

「まあゴーストだからな」

「そう言うことだ、さあ飲みたまえ、ちようど喉も渴いただろう?」

「ありがとう、ダ・ヴィンチちゃん」

ダ・ヴィンチから渡されたコーヒーをもらい、一杯飲み目を閉じる。

コーヒーの苦みと酸味は目を覚ますのにも気を落ち着かせるには一番効く。

そしてコーヒーに含まれるカフェインは気管の拡張を促し血管を広げ脳への酸素と







「……おい」

「大丈夫さ、私もいま飲んだから問題ないさ」

「……………そう言う問題じゃないと思うが」

「毒を入れたわけじゃない」、というのではなく、「自分も飲んだから問題ないさ」と言う辺りから問題だ。

まず同僚を実験台の如く……………もはや実験台として薬を仕込むこと自体大問題だろう。恐らく彼女にとって身内に「劇薬」はアウトだが「薬」はセーフなのだろう、一体どこの製薬会社だ。

そも、その「薬」は安全なのだろうか？

「万能の私を作ったんだ、万全だよー」とか言われそうだが全く信用できない。

尊い犠牲を払い、スネークはここにいるレオナルド・ダ・ヴィンチを危険人物と断定した。

そんな危険人物はご機嫌になったのか目を閉じ椅子の上で回転していた。

このことをスネークは永遠にわすれないだろう

「……………眠れロマニ、お前のことを俺は忘れない」



↓ダ・ヴィンチ目を開け状況確認

↓自分の目の前で幽霊(5体)が《U(・↑・)U(・↑・)U》という感じで

EXILEしてた

以上

「良くやった」

「[[[[[[[ (?・^?) ヽ (?・^?) ヽ (?・^?) ヽ (?・^?) ヽ (?・^?) ヽ ]]]]]」

「いやいやいや!?なんでビシツと敬礼してんの?!」

「[[[[[[[ (・―・) (・―・) (・―・) (・―・) (・―・) ]]]]]」

「なんで全員して目を逸らしてるの……?っっていうかチューチュー○レイン出来るんだ!!」

「[[[[[[[ (≡、△、) 人 (△、≡) (≡、△、) 人 (△、≡) (・―・) ]]]]]」



「……死んでもあんなに表情豊かなもんだねえ……」

「そんなにかい？僕は驚きすぎてあんまり良く覚えてないけど……とりあえず幽霊つてのは本当なんだね」

「まあな、もつとも俺は操れない、“奴”が降ろしてくれてるだけだが」

「その“奴”って言うのは？」

「ああ、降霊術を使える俺の………知り合いであり戦友であり、命の恩人かもしれない」

「そうかい……いやあく久しぶりに驚かせてもらったよ」

「……いや、肝心な事忘れてるけど、所長の容体はどうなんだい？」

「たぶん問題ないな、息さえしてれば勝手に起きる。」

別に悪霊でも無いしな、俺では理屈は説明できないが大体俺の側にいるのはあんな感じだ。

早ければ今日、遅くともマスターたちが目を覚ます頃には起きるだろう、体の調子まではどうなってるかわからんが」

「そこら辺は問題無かったよ、ほぼ生身と同じだ」

「そうか、ならお前たちが聞くことは無いか？」

「私には山ほど聞きたいことがあるけどね、流石に復旧作業が先さ。」

もっとも君のお陰でさっさと作業を終わらせる必要が出てきたけどね！」

「……まあ俺としての魔術の知識は仕入れたい、暇になったらここに來るとしよう」

「本当かい!？」

「ああ、ならさっさと終わらせるんだな」

「そうかいそうかい、なら早速仕事をしよう！」

そう言うのとダ・ヴィンチは意気揚々に部屋から出て行った。

その光景を見てスネークは溜息をついたが、一方のロマニは目を丸くした。

「……あのレオナルドが……仕事をするだって……？」

「何だ、あいつはサボリ魔なのか？」

「そうだね、少なくとも進んで仕事をし始めるタイプじゃ無いよ。」

あくまで自分の興味と趣味の範囲内で仕事をしているタイプだ」

「なら腕は確かなわけだ……腕だけは」

「その通りだよ」

あの手のタイプは自他共に認める天才、やる事為すこと全て周りに影響を与える。

それが多くの人に役立てば仕事、迷惑をかければ煙たがられ、多大な迷惑を与えると

事案になる。

……過去にそんなこともあったとスネークは思い出していた。

「さて……そろそろ僕も仕事に戻らなくちゃね」

「何だ、俺の相手は仕事じゃ無かったのか？」

「優先順位では同じくらいさ、ただ君とはこれから長い期間一緒にいることになる。

それならいま急いで聞くより時間をかけてそれとなく聞き出せば良い話だろう？」

「それを本人の前で言っただろう？」

「いや、だつて君相手に腹芸なんて僕には無理だよ」

「……そうか、とりあえず人理の修復とやりに協力しよう、このまま座に戻ってもやる事は無いしな」

「随分な皮肉だねえ」

「単なる事実だ、まあよろしく頼む」

「……肩を外されたりしないよね？」

「おいおい……まあお前とは話しやすくなった、これから頼むぞロマニ」

「こちらこそ、僕の事はロマンとでも呼んでくれ、スネーク」

こうして人理修復の旅は始まろうとしていた。



マスターに降りかかるのは様々な困難と、数多くの名を馳せた英雄

彼一人ではとても敵わない相手、一般人にはどうしようもない相手だ

だが彼には頼りになる後輩が一人

そして………

「そういえばロマン」

「ん、さつそく何だい？」

「ここでは何処で葉巻は吸える？」

人を、世界を、時代を導いた一匹の蛇が仲間だった。

## スネークのステータス

対象：スネーク

真名：BIG BOSS

クラス：ライダー

??パラメーター筋力：B+／耐久：A／俊敏：B／魔力：E／幸運：E／宝具：C

??クラススキル―対魔力：E／騎乗：C／保有スキル―心眼（真）：B／カリスマ：A

／射撃：A／クイックリロード：B／

／ゴースト：A+／対巨大：EX／死者の加護：EX／

【CCC（クローズ・クォーターズ・コンバット）

??ランク：C／種別：対人宝具／レンジ：1―2／最大捕捉：1人

【（―??―??―??―??）】

??ランク：?／種別：???／レンジ：???／最大捕捉：不明

人物：特殊部隊《FOXHOUND》の創設者であり、世界に点在するPMC（民間軍事請負会社）の祖となった組織

《MSF (Military Sans Frontiers)》の創設者で総司令官。  
1964年に核戦争の危機から救ったことから「BIG BOSS」の称号を与えられた。その後、世界各地を傭兵として回り、伝説の傭兵と呼ばれる。

ヒトゲノム計画では彼の遺伝子から「ソルジャー遺伝子」と呼ばれる遺伝子が見つかり医学界にも貢献。

また近接格闘術「CCC」の創始者でもあり、この格闘術は世界中の軍隊で採用されている。

つい最近まで世間では名を知られていなかったが、情報解禁による開示により彼の情報が解禁。

彼の名は陽の目を見ることとなり、彼の功績・並びに格闘術が再評価されることとなった。

死後、英霊の座に着く事となりひたすら修行して居たらしい（本人の証言）が、人理焼却の危機に立ち向かう

カルデアのマスター藤丸立香に召喚された。本人が言うには「暇だったから召喚に応じた」とのこと。

召喚された後、“もう一人のスネーク”についてマシユから質問されるが本人は答えるのを少し渋りながらも

「アレは他人だ、コードネームは同じだがな」と返した。

詳しく聞くと、彼が指揮して居た部隊に一時期居た人物だという。

“もう一人のスネーク”はマシユが偶然見つけたのだが、「シャドーモセス島の真実」という題名で書籍化され一時期有名になっていた、だが後に国際指名手配のテロリストとなり世間ではあまり知られて居ない。

## 幕間：戦力増強（訓練）

気がつくと彼女は目を覚めた

だが居場所がわからなかった

別に彼女は頭を打ったとか、麻酔銃を撃たれたとかそう言うものでは無い

あたり一帯は木が生育し、足元には水が張っていたのだ

明らかにあのあたり一面火の街となっていた冬木でも、病院の様に綺麗なカルデアでも無い

ましてや洞窟の中でも無い

「……………一体ここは何処なの……………」

彼女……………オルガマリー・アースミレイト・アニムスファイアは戸惑った

「死んだ……………の？」

そう思えて仕方なかった

何せ辺りに木があるとは言え全く色味が無かった

言い方を変えれば生気が無かった

さらに言えば水辺で寝ていたのにもかかわらず服が濡れてなかった

だが足には水の感触は確かにある、そのため走るのは難しい

加えて道はただ一直線に続いていた、ただ水が張っている通路とも言えるが。

「死んで……………るの？」

だが感触は随分と生々しいというか、はつきりとしている

少なくとも宙に浮いている様な感じはしない

「そういえばこの木……マングローブ？」

気付いてことと言えば辺りにあった木がマングローブであること

であれば恐らくこの水は海水であろうということ

それ以外は全て不明。

自分自身が生きているのか死んでいるのか、ここは何処なのか、いつの間にここに来たのか

そう云えばレフはなぜあんな事をしたのか、あの後どうなったのか……わからない事が多すぎた。

「はあ……この後どうすれば良いのかしら」

とりあえず彼女は冷静だった。

確かに不安ではあるし、意味不明だし、何よりレフが意味不明だったがとりあえず自分はこのにいる。

彼女はカルデアの所長であり、当然ながらレイシフトの仕組みも知っていた。

自我を消失しなければ意識のサルベージが可能だ、であればいつかカルデアに戻れるだろう。

それを知識として知っていた彼女はそれが楽観視だと気付くこともなく、とりあえず安堵していた。

「通信は……できるわけ無いわよね」

「……………」

「なに!？」

その安堵はあっさり崩れた、何がしかの気配を彼女は察した。

だがあたり一帯を見回しても誰もいない、

誰一人

いない

「……………一体だれ、答えなさいよっ!」

「……………悲しい」

だが確かに存在はしていた

「えっ……………」

「……………哀しい」



「っ誰!？」

「……この世は、悲しい」

そして「奴」は現れた

出てきなさいと言っていた彼女は虚勢を張っていたために驚いたがすぐに持ち直した

もつとも彼女は至って冷静なままだった

「……あなた、敵なの？」

「……この世は悲しい、哀しみで満ちている」

「……あなたは誰なのかしら？」

「……」

「無視しないでくれるかしら？」

「……お前の心には哀しみで満ちている」

「っ……」

「だがお前には声も上げられない者たちの声を聞く必要は無い……お前は何のために生きる」

「……」

「……そうか……あの男の目は確かだな」

「あの男って……?」

「……この先を『いけ』、人の礎を担う少女よ、そこがお前の居場所だ、ここはお前の居場所ではない」

「……この先を行けばいいのね」

「……そして頼れ、私の……」

「頼れって……えっ?」

それだけ言い残して消えた

それもいつ消えていたのかまるでわからなかった

そしていつの間にか一人になっていたオルガマリーは呆然としていた

……が、それもほんの少しの間

「……この先をまっすぐ行けば良いのかしら」

人が目の前から消えたのにもかかわらず、至って冷静に道沿いに歩き始めた

その姿を見ている人間は誰もいなかった……ただ彼女を待つ場所へ戻るためにひた

すら歩いた

この先を“生く”ために

◆?  
◆◆?  
◆◆?  
◆◆?  
◆◆?  
◆◆?  
◆◆?  
◆◆?

「……フンツ！」

一方カルデア内にて、

そろそろ目が覚めるであろうマスターを待つ一人のサーヴァント。

そこは、いわゆる訓練ルームと呼ばれるもので本来はマスター達が基礎鍛錬・サー

ヴァントとの連携を鍛える目的の随分と広いスペースだが、つい24時間ほど前にレフ教授による爆弾によってこの部屋を使う対象であるマスターはたった一人になってしまった。

当然ながら他の職員達は現在復旧作業に追われており、そもカルデア職員は訓練ルームを使う理由がない。

だがそんな場所があると知ったこのサーヴァントは、疲れない体を良いことにひたすら鍛錬に勤しんでいた。

もちろん一人で

「……うーむ、さすがに一人では体の軸のズレと重心移動しか確認できんな」

まず自分一人だけで体幹のズレと重心移動を客観的に確認する術が彼にはあるらしい。

だが付け加えると、サーヴァントは生前の最盛期の状態でこの世界に召喚されるため例えば体を鍛えたとしても身体的なスペックは変化しない、召喚された時点で筋力：Dなら魔術によるバフ等が無ければ変化する事はない。

そのためサーヴァントが例えば体を鍛えたとしてもあまり意味がない。

その時間があればマスターとの関係や連携を築いた方が良いのだ……が、このサーヴァント曰く

「良いか？例え筋力がこれ以上強くならないとしてもだ、体の動き・姿勢・状態をコントロールするためには身体を動かす以外に方法は無い。

今のところマスターや他のサーヴァントもいらないとなれば自分自身を鍛えないでどうする？

例え霊体化だかステータスだか知らんが身体は動かすもんだ」

と語り、訓練ルームに入り浸っている。

……だからと言って1日近くナイフをひたすら振り回し身体を動かすと言うのはどうなのだろうか？

そして誰も止める術、というより暇が無いこのカルデアの状況は危機的な意味でも思考的な意味でも深刻だとここに付け加えておこう。

「おはようございます、スネークさん」

そんな訓練ルームというより鍛錬場となった場所に新たに一人の、しかも少女が入ってきた。

しかし彼女は一般的な少女とは違い、サーヴァントと憑依融合したデミ・サーヴァントと呼ばれる存在であり彼女がカルデア唯一のマスターとなった藤丸 立香の最初のサーヴァントだ。

スネークから見れば彼女はまだ経験則も力も実力も足りて無いが、力はある。

そして彼のもつ知識と記憶ではサーヴァントとしてもカルデアにいる時間からしてもある意味では彼女の方が先輩だが……スネークが下に見られる事はまず無いだろう。

「おお随分と遅い起床だな嬢さ……いやマシユか、思ったより元氣そうで何よりだ」

「はい、先ほどドクターに診てもらいました、目立った怪我も無いですし、何より先輩も無事だそうです。

所長もじきに目覚めると伝えられました……って、スネークさんの方が知ってますよね」

「まあな、だが本人から直接元氣だと言われた方が確実だ、とりあえず安心した」

「はい……ところで、一体何をしてるんですか？」

「……見てわからないか？」

「えつと……鍛錬をしているようには見えますが」

「そうだが」

「本当に鍛錬をしてるんですか!？」

「……何をそんなに驚いてるんだ」

「だってスネークさんは先輩に召喚されたサーヴァントです！鍛錬の意味は——!?!」

「……おいマシユ」

「……………」

「……マシユ・キリエライト」

「……はい」

「お前は……鍛錬をなんだと思ってる?」

この時マシユ・キリエライトは思った

（あつ……わたし、まずいことを言ってしまった）と

純粋な彼女は相手がどう思ってるかはわからなくても、相手がどう感じているかは本能的にわかる。

スネークはこの時怒ってはおらず、彼女があまりにも理解していないことに呆れていたのだ。

……が、その呆れは彼女をビビらせるには十分だった。

何せ純粋無垢な少女にとって、お父さんから呆れられると言うのは見捨てられる……

とまではいかないが、淋しさと不安を感じるものだ。

少年だとしても、だいぶ歳のいつているおじさんやおばさんから呆れられたら

(自分は何かしてしまったんだ)と感じてしまう。

マシユもこの例に漏れず、何か自分がやらかしたと考え次の発言で挽回しようとしていた。

……別に間違えてはいないのだが、発想的な意味で方向を間違えていた、そのため最初に彼女が発した言葉は

「すいませんでしたっ！」

という謝罪だった。

「……いや、俺は謝られる事はしてないぞ？」

そして待ったをかけるスネークだった。

「私はスネークさんに鍛錬の意味は無いなんて言ってしまった、けどそれは人の自



由ですし私が口を出すようなことじゃありませんでした……」

「……何か勘違いしてるぞ、お前」

「いえ、間違えてません、私はまだ先輩のサーヴァントとして未熟なのに——」

「待て待て待て、何か勘違いしてるぞ？」

俺は別にサーヴァント化した今でも鍛えることに意味があると言いたいだけなんだが。

別にお前が未熟だとか、それだから口答えするなとかそういう意味は無い、むしろ意見を出してもらわなければ困る」

「……え？」

「いやまあロマンの奴にも言われたがな、確かに今更鍛えたところでステータスは変わらんだろう。」

だが俺から言わせてもらえば、ステータスはあまり重要じゃない」

「えっ？それは……どういう意味ですか？」

突然、自分が言っていることが違うと言われ、今度はステータスは重要じゃないと言い出した。

……一体この人は何を言い出すのかと彼女は思ったが、その言葉をあしらうことを彼女には出来なかった。

「そりゃあスキルは重要だ、一体何が出来て何が出来ないかを周りが知るのには戦術としても仲間との連携での意味でも重要だ。」

「……だがな、筋力だとか俊敏さだとか耐久っていうのは少なくともあまり意味がない、運と魔力に関しては俺の専門外だからなんとも言えんがな」

「どうしてですか!」

「どうしてだと思っ」

「えっ?……それは………」

「考えてみる、一兵卒だろうと下士官だろうと將軍だろうと頭で考えて動けなければ自分が死んで仲間たちが死んでいくだけだ、頭も使え」

「……………」

マシユは考える。

それこそ彼女はデミ・サーヴァントになる前は運動が苦手だった、代わりに本から大量の知識を仕入れた。

そしてその知識を繋ぎ合わせるくらいは出来る少女だった、だからスネークからの問いも簡単に答えられた。

「……例え力が強くても、早くても、硬くても、最低限の力があれば対処できるから、でしようか?」

「ほう、何故だ」

「『柔よく剛を制す』という言葉があります、これは日本の柔術の根幹となつていゝる理法ですが言葉通りなら柔

つまり柔術というのは勇ましさとこのを制するという意味だと解釈できます。

私は書物からでしか知りませんが、柔術は徒手をもつて相手を制する物です。

しかし日本人は……今はガタイの良い方もいますが昔はそうでもなかったハズです、それでも身長差やパワー差に關係なく相手を制することが出来たのはそういう術があるからじゃ無いでしょうか？」

「まあ概ね間違えてはいない、ただ日本人とかは關係無いな。

例え相手の方が力が強くとも相手のその力を利用して言った方が正しいな、ジユウドーでは重心移動のみで重力を制することが理想形だとも言われてるしな」

「確かにその様な話も聞きます……ですがそれでもサーヴァントにとっては重要なものでは無いでしょうか？」

「そうかもしれない、少なくとも楽に戦うには必要だな」

「はい」

「……だが相手のパワーとスピードが圧倒的ならそれにあつた対応をすれば良い」

「……具体的にはどうするんですか？」

「相手の力が強く、抑えきれぬもので無いなら受け流すなり弾くなりして利用すればいい。」

相手が自分の2倍・3倍早く動くなら、自分は相手の2倍・3倍の間合いとタイミングを計れば良い」

「それは……確かにそうですが……」

「難しい、か？」

「違うんですか？」

「そりゃあ口で言うよりは難しいだろうな、だが実現不可能なことじゃ無い」

「……実現するにはどうしたら良いんですか？」

「おいおい、それだけ頭が回るならすぐに答えは出るだろう」

「……鍛錬、ですか」

「そういうことだ、世の中訳のわからん奴は多い、それこそ剣から魔力を放出する様な奴とかな」

「……そうですね……」

「だが全く手が付けられない訳じゃない。」

相手が撃つてくる前に牽制し邪魔をする、相手の内側に入り決定的な一撃を加える、アウトレンジから一方的に攻撃する、他にも色々と発想だけは出てくる」

「ですが、あの聖剣の射程圏外からの攻撃と言うのは無理では？」

「かもしれない、だが世の中5 kmからスナイピングするスナイパーなんざ五万といるぞ」「50000人もいるんですか!？」

「……物の例えだ」

「あつなるほど……つて5 kmつて大体人が見たときの地平線までの距離じゃないですか!？」

「そうだがいる奴はいるからな、俺の部下に」

「そうなんですね……」

実際、しっかりとした装備と弾薬が用意されればこの男もその位やってのけるのだが。

何よりそんな狙撃を10 kmマラソン（100 mを16秒台）で走ったあとすぐにやってのけるのだが。

「だがあの時そんな芸当ができるやつはその場には居なかった。

それに加えて敵は洞窟の中に籠っていた、アウトレンジからの攻撃は不可能だった……が他は出来た」

「……確かにそうですね」

「俺は発想したことを実現できる様にするために訓練はあっている。

さつきも言ったが鍛錬は重要だ、例えばステータスは変化の仕様が無いとしても経験は

積める、想定外の事態も経験があればそれなりの対応ができる、それなりの対応ができればベストは無理だとしてもベターな結果は残せる、少なくとも一方的な失敗は犯さない」

「なるほど……」

「おそらくマスターが起きれば現状説明のあと、戦力の増強に移るだろう」

「新しい英霊の召喚ですね」

「そして、そいつらのほとんどは俺より強いだろう……が、俺はそいつらに一方的に負ける様な姿は晒したくは無いからな、こうして相手をイメージしながら体を動かしてる」

「そうだったんですね……」

いくら現代の英雄とはいえ、アーサー王と比べればスネークの身体的スペックは劣る。

神秘が濃かった時代の人間は、現代の人間よりも平均的に身体能力は高く、魔術的な意味でも強いらしい。

であれば当然、今後もスネークより強い英霊は当然現れるだろう……だが、蛇は存外しぶとい。

少なくとも一方的に攻撃され、蹂躪されるのを良しとするほどお人好しでは無い

そしてそんな彼の言葉は様々な面で未熟な少女には十分すぎる刺激だった。

「……スネークさん」

「それなら強くなれ」

「えっ？」

「大方、精一杯頑張ると言うんだらう？」

生憎だがただ頑張ったところで報われない奴は報われない、それに結果はすぐには着いてこない」

「………はい」

「だが弱くなることは無い、どんな奴も最初は赤子だ。」

それが運命とやらで選定の剣を抜いたり、マサカリを担いでクマを倒したりはするだろうが最初は弱い。

だが体を鍛え、経験を積み、そうして力を得てまた経験を積むことで強くなっていくもんだ」

「……………」

「幸いお前さんに力は最低限ある、体も経験を積みれば勝手に変わっていくだろう、だがお前には圧倒的に経験が足りていない、多少の経験くらいなら俺でも与えられるが………」

うする？」

「……………はい！よろしく願います!!」

「よし、良いだろう、ならすぐに戦闘服にでも着替えるんだな」

こうしてスネークは格好の訓練相手を確保した。

……付け加えると、スネークとしては自身の訓練相手確保の目的もあつたがそれ以上にこのマシユという少女を直接鍛える意味も十二分にあつた。

スネークがマシユに言ったことはスネークの観察眼から得られた事実だ。

人はまず、戦うための最低限の力を必要とする。

ここでいう力とはいわゆる基礎体力であり、銃を持つて走る・構える、戦闘を行うための強靱な足腰、

集団の場合ではこれに加え団体行動も加わるが、そう言った前提条件が必要になる。

この点に関しては、マシユはデミ・サーヴァント化したことで十分にクリアしていた。だがそれだけでは強くは成れない

今度は経験が必要とする。

そして様々な経験から、どの様に相手を撃つのか・仕留めるのか、どの様に立ち回れば相手より優位に立てるのか、劣勢の状況とは一体どういう時か、その場合どうすればいいのか等々……とにかく知ることはい多い。



こうした経験が「力の糧」となりやがて「強さ」として反映される。だがその経験を強さに反映させるのは一つだけ絶対の条件がある。それをまず彼女は覚えなければいけない。

「……………着替えました」

「一瞬で着替えられるのか！」

「はい、私のこの服装は魔力が固まってできた様な物ですから、自分の意思で簡単に着替えられます。

もちろんこの盾もそうですけど……………スネークさんは出来ないんですか？」

「そうだな……………今は、出来ないな。

ただロマンやダ・ヴィンチが言っていた霊基の強化がある程度の物になれば不可能じゃ無さそうだし

「そうなんですね」

「まあそれは それとしてだ、早速やるが……………準備は良いか？」

「ハイッ！」

「良いだろう、ならまずは準備体操からだ」

「あっはい」

「返事は？」

「ハイッ！」

……その前にマシユが軍隊の基本をしつかりと覚えてしまいそうだが

———体操中……体操中……体操中……完了———

「よし、体操は終わったな」

「はい……なんかもう疲れた気がします」

定番であるラジオ体操第一・第二（ただし1. 5倍速）をし終えて、2人は向かい合っていた。

マシユの服装と装備は冬木で見たように、大きな盾と随分と露出が多い紫色の格好だった。

「まあ最初はそんなもんか」

「頑張ります……それで、まずは何をやるんですか？」

「簡単だ、とりあえず俺と連続で戦えばいい、宝具を使っても構わん」

「はあ……はいい!？」

「良いか？まず強くなるのは死なないことだ。

どんなに力の糧となりうる経験を経ても死んでしまえば何の意味も無い。

故に素人がまず強者となるには早い話、生き残る術を知れば玉石混交であれ強くはなる。

そのため最初の訓練では走って逃げる方法を教えると老兵までになれたりするものだ」

「そんなもの……なのでしょうか？」

「所詮そんなものだ。

強敵、ましてや英雄なんて呼ばれてる奴らはそこに天性の才能だったりそれこそ運命的な何かがあったりするがな、だがそういった才能とか言われるものも膨大な経験があつて活用できる。

……まあ中には僅かな経験だけでものにする奴もいるが、そういう奴は天才とよばれる。

「ここにも1人いるだろ、天才が」

「ダ・ヴィンチですか……確かに。」

言われてみれば人間の寿命の中でも科学、数学、工学、博物学、音楽、建築、彫刻、絵

画、発明、兵器開発、木工、解剖、自然科学、等の多数の分野に功績を残してますよね……」

「……お前の知識の豊富さには俺は賞賛に値すると思うがな。」

だがこれから先、逃げ場など無いに等しいだろう、俺が身を置いていた戦場も、隠れる場所はあるても逃げ場など無かった、そして戦いは早々避けられないだろう、であれば何が必要だ？」

「逃げる訓練……ではなく、生き残る訓練、ですか？」

「そういうことだ、だが俺がお前に求めるのは別に高度なことじゃない。」

とりあえず俺の攻撃を捌ききれ、それこそキヤスターを相手に散々やっただろう？

今回はマスター無しに、お前と俺の1対1でひたすら戦う、どんなにVRが発展しようが体に叩き込むのが一番てっとり早い、俺の訓練にもなるしな」

「縛りは無いんですか？」

「俺の部下に徹底させていたのは《仲間にはナイフと銃口は向けるな》だけだ。」

基本的な攻め手も受け手もない、相手を完全に仕留められる状況に持つて行ったら仕切り直しだ。

手加減の仕方や情けをかけずに徹底的に叩きのめすための訓練もあるが、基本的には自分の実力を全力で出せ

俺も容赦なくお前さんを投げる、お前も遠慮なく盾で殴ってこい、くれぐれも殺すなよっ。」

「こ、殺しませんよっ！」

「まあ殺す気でもかかってこい、そうでなければ訓練ならんからな、何時でも来い」

「……わかりました、マシユ・キリエライト！これより戦闘に移行します!!」

「かかってこい、容赦はしないがな」

双方の掛け声で2人の訓練は始まった。

◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆?

「ハアアアアアアアア!!」

マシユは盾を正面に構え一気にスネークに向かって突っ込む

同時にスネークは後ろに後退しつつ模擬戦用のゴムナイフを取り出す  
そしてマシユは速度そのままに思いつきり盾を正面に突き出した

「確かにそれが基本だな」

「!?」

だが既に正面にスネークは存在せず

自身の真横に普通に立っていた

「っー」

「そうだ、基本的に盾は相手の正面に構えろ」

当然攻撃が躲されたわけだがそれで終わりではない

すぐさま盾を真横に振り、スネークの方に向ける

「だがまだ無駄が多いな」

今度はマシユに向かってスネークが駈け出す

それはマシユの真横を取るものだというのは明らか

であれば

「・・・・・・」

その進路上で盾ごとぶつかれば良い

相手が来るであろう完璧のタイミング

マシユは一瞬でその進路上に立ち今度は軽く盾越しに押し出した

タイミングは完璧で盾越しに押し出した手応えもあつた

だがマシユは状況を確認せず一旦後退した

（キャスターさんも、あのアーサー王も欺いたんです、今の手応えも偽物だと考えれば……）

マシユの予想は正しかった

距離を取り盾越しにスネークが立っているであろう場所を見た

そこには……

「まあまあだな」

「!？」

「動くな、動けば首が飛ぶぞ」

「……いつの間に後ろに立ってたんですか？」

当然、スネークの姿はおらず

彼女の真後ろでナイフを構えていた

「完璧なタイミングでお前が盾で妨害してくるのは予想ついたらからな、突き出してきた所でお前の盾ごと飛び越えた、人間の真上は死角、しかもお前が肩でその盾を押しただけなら、俺の姿は見えんだらう」

「……参りました」

「だが油断せず、すぐに距離をとったのは正しい。

相手に一撃を当てたらお前はすぐに敵から距離を取れ、追撃は周りにいる仲間がやってくれる」

「……真後ろに飛んだのも予想通りだったんですか……」

「いやっあれには驚いた、とっさに俺も後ろに飛んだが危うく下敷きになる所だった、中々やるな」

「全く嬉しくないです……」

「そう言うな、ホレツ、次行くぞ」



一切のインターバルなくスネークは再びマシユの正面に距離を取って立ち構えた  
反省の時間は与えない

なぜなら体に経験を染み込ませるためだ

反省点をあげればスネークにだってある

だがそんな暇があれば体を動かし最適な動きを探しだせば良い

訓練が終わった後でも覚えている反省事項が重要だからだ

覚えていなくとも相手が第三者の目線で指摘してくれるからだ

そして彼女の訓練相手は人材を育てる点においては他の英霊より遥かに優れていた。

「……………行きますー！」

「ああ、かかってこい！」

再び彼女は盾を構えスネークに接近する

すると今度は盾ごと吹っ飛ばされていた

◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆

「よし、一旦休むか」

「はあ……はあ……はあ……はあ……あ……はあ……はあ……はあ……どう……はあ……して  
……はあ……」

「とりあえず休め、ほらマテ茶だ、飲んでおけ」

「はあ……はあ……ありがとう……ごさいます……」

「うーむ……デミ・サーヴァントになっても生身であることには変わらない、か。

サーヴァントだろうが生身だろうがあまり関係ないだろうが……オーバーワークには気を付けた方が良さな」

「グビツグビツグビツ……ぷはあ！ああく生き返りますねえ!!」

「……随分と豪快だな」

豪快ではなく親父くさいとスネークは言いたかったが、珍しく遠慮し言い方を変えた。

彼はまだ知る由もないが、彼女と彼女に憑依したサーヴァントは父親が苦手、というより毛嫌いしている。

「はあく……あつ、お茶ありがとうございます」

「気にするな、俺の装備の一部だ、幾らでも出せるしな」

「そうですか……とところでスネークさんは疲れてないんですか？」

「何を言っている、たかが3時間突き合っただけだろ」

「たかがって、生前もこんな風に訓練をしてたんですか!？」

「そうだな……さすがにそんな盾は使って無かったが組織を作った頃は丸一日相手にしていたこともあった。

だいぶデカくなった後も時折連中の訓練をしていたがな、それでも突き合うだけならまだ軽い方だな」

「……具体的に他に何をしていたか聞いても？」

「基本的にCQCと射撃訓練だ。」

5 km 走つてすぐに突き合い、その後また走つて今度はセーフハウスで突入訓練、また走つて、その繰り返しだ

それ以外にもサバイバル・戦術的な座学と実戦、ヘリや装甲車を用いた物に紅白戦もやったか。

他にも色々だな」

「はあ……すごいですねえ」

「ある程度の練度に全員がなるには必要だからな」

ちなみにスネークは言っていないが走つて突き合い、走つて突入し、の繰り返しは総重量15 kgの「標準装備」を着用し、さらに自分の得物……つまり突撃銃や狙撃銃を携行しながら1日行う。

端から聞けば《マジかよお……》とドン引きするような内容だが、スネーク達からすれば当然のことだ。

何せ戦場ではそれなりの装備を背負い、1日どころか何日も通して活動する、もちろん銃を抱えて。

この訓練はスネークがかつて、組織した所では新米兵士に課せる訓練で、肉体と精神

を鍛え上げる訓練でもあり、戦場での銃の扱いと環境に慣れる為の訓練でもある。

マシユにはこの手の訓練を必要としない……が精神と肉体が疲弊することには慣れる必要があつた

“そういう経験”をする必要があつた

「……さて、ひと休憩としては十分だろう、続きをやるぞ」

「ハイッ！」

「あーいたいた、2人とも管制室に来てくれ！」

「あつドクター、どうしました？」

「立香くんが目覚めた、それに所長もね、これから話があるから——」

「先輩が目覚めたんですね!？」

「……マシユ、お前さんは先に着替えて行っておけ、俺は少ししてから行く」

「ハイッ、今度また訓練をお願いします！」

「俺は基本暇だ、声をかけてくれれば何時でも相手してやる」

「ありがとうございませう！ではまた後で！」

そう言つて丁寧にお辞儀をした後、マシユは一足早く、そして一際早くトレーニングルームから出て行つた。

それを見届けたロマニはその後ろ姿をみて頷いた後、スネークに声をかけた。

「スネークも来てくれよ、全員に重要な話だからね」

「もちろんだ……だがしばらくは若い連中が話していれば良いだろう、そこに首を突っ込む気は俺にはない」

「そうかい」

「それに……」

「それに？」

「……あのお嬢さん……所長に言い……説明する内容を考える必要があるからな」

「あつ……うん、僕はじゃ……先に行つて時間を稼いでおくよ」

「まあすぐに行くが………頼む」

その言葉に対して強く頷くことで返したDr. ロマンは管制室に向かって行つた。

スネークは何もない天井を仰ぎ、ため息を吐き……葉巻に火を付ける。

「……面倒なことは勘弁して欲しいんだが」

書類仕事や報告といったものは口頭で済ませていた

久しぶりに思える面倒な案件にふと金髪サングラスを思い出した

「……さすがに虫が良すぎるな」

そう思いつつスネークはゆっくりと葉巻を吸いながら言い訳を考えていた

## 戦力増強（ガチャ）

人類最後のマスター、藤丸 立香が目を覚ましたのはカルデア爆発から始まり、冬木での騒動が解決してから1日たった正午だった。

幸いにもレイシフトは無事に完了し、五体満足で帰ってこれた。

そして、死んだとレフ教授に宣言されていたオルガマリー所長も、何故か無事に生還し意識を取り戻していた

こうしてカルデアの主要メンバーが無事に復帰したことで、一旦状況確認と今後の方針を決めるために一同はスネークを除いてカルデアの管制室に集まっていた。

「マシユも無事そうで何よりだよ」

「私も先輩が目覚めて良かったと思ってます」

「……………」

「そう言えばマシユは、スネークと訓練してたんだって？」

「はい、私はまだまだ未熟なので色々と教わろうと思います」

「……………」



「……俺もマシユに迷惑かけない程度には鍛えなきゃなあ」

「先輩はマスターなんですから戦う必要はないんですよ？」

「……………」

「あー……2人とも、そろそろスネークも来ると思うから話もほどほどにね」

『わかりました』

「……悲しいわ」

「所長!？」

「……ホオ」

そんな集まったメンバーの中で、2人で話していたマシユと立香は周りのスタッフのある意味癒しにすらなっていた……が、その中でただ浮かない顔を浮かべていたオルガマリーは唐突に発言した内容をロマニを焦らせた、ついでにダ・ヴィンチにネタを提供した。

そして、こんな状況でも手を休めることなく数少ないスタッフ達は作業に徹していた。

そんな雰囲気の中、管制室のドアが開き1人の男が入って来た。

「すまない、だいぶ遅れ——」

「あーなーたーたーねえ!!」

「……どうしたいきなり」

「どうした？じゃあ無いわよ!!」

「……おい、誰か説明してくれ。」

別に俺は彼女を助けたことを誇るつもりは無いが、怒られる理由も無いはずなんだが」

「あー……それはねえ」

「ヒントはマリーは小心者ってことかな」

「っー」

「……ああ、奴に会ったのか」

「っええ会いましたよ！確かに会いましたよ!!」

助けられたことには感謝してますっ！けど！幽霊に会わせるってどういう事よ!?!」

「えっ？幽霊?!」

「…あのなあ、別に悪霊じゃ無かっただろ、それにお前さんの俺はあくまで仲介人に過ぎないぞ。」

俺の力じゃどうしようもなかったからな、マスターの令呪を使って力を貸してもらったに過ぎない。」

文句は受け付けるが……別に助かったなら良いだろう」

「いやっスネーク、所長の命を助けてくれたのは僕たちとしても感謝しか無いけど……紹介相手が幽霊って大分嫌だよ」

俺には力が無いから力を借りた、まあ相手は幽霊だがよろしくな。

……確かに喜べる内容では無い、しかも説明も無しに突然そんな事をされれば……まあ怒りたくもなる。

ただ彼女の言動が、命を助けてくれた恩人に向ける物かはまた別問題だが

「まあまあ、マリィもスネークを責めるのはそこまでにしておきなよ。」

少なくとも今の君は怪我也無い、魔術回路も生きている、それに君は……殺されかけただ、文句は言えないよ」

「……………」

「おいおい、そう気にするな、助けようが見捨てようが文句は言われるもんだ。」

生きてりや大体どうにかなる、それにさっきも言ったが俺は紹介したただ、力を借りただけだ。

それにこれからしばらく俺は世話になる方だ、事態も随分とデカイみたいだしな。

対処するのはマスターやサーヴァントである俺やマシユだが、その対処法を示すのはその嬢さんだろ？

なら上からの文句として受け取っておくだけだ」

「おやつ？怒らないのかい？」

「助けた奴から怒られるのは慣れてるんだな」

「……まあ、助けてくれてありがとうございます、未だに信じられないことが多いですけど……」

「そうだね……それらを含めて、立香くんにも関係あることだ、今の状況を確認しよう。

レオナルド、メインパネルを」

「はいどうぞー」

管制室のデカイメインパネルに拡大されたカルデアスが映し出される。

……それは最早地球模型と言うより太陽だが、それを映し出し、ロマニは状況をこの場の全員に説明した。

「冬木の特異点は立香くんのおかげで消滅した……が、代わりに新たな特異点が7つも発見された」

「7つも!？」

「……あのレフって奴が言ってた焼却、って言うのはあの街みたいに過去で街を破壊する事なのか？」

「いいや、そんな物じゃない。

おそらく人類の歴史そのものを破壊・改変する事で時空の乱れを生じ……やがて歪ま

せ人類史そのものをこの世界から消し去る物だと思っ」

「まるでSFみたいだが……そんな悠長なことを言ってる暇は無いらうか」

「……あれ、じゃあ何でカルデアは無事なんですか？」

「カルデアスのおかげだよ、カルデアスの磁場でカルデアは守られているんだ」

「だが相手は時空を歪ませてるんだろ、いつまでその守りも持つんだ？」

「……7つの特異点の歪みがカルデアそのものを飲み込むまでになるのがいつまでかはわからない。」

ただ、もつても多分……2年かな」

「2年……ですか」

「現在、カルデアのスタツフも8割近くやられた。」

「今も特異点の搜索・特定を行ってるけど、おそらく7つの特異点を特定するのは2年あれば十分だと思う。」

ただ、7つの特異点を解消するのに2年で終わるかはわからない」

「ロマンの説明に付け加えれば、これから君が相手にするのは歴史そのものだ……君に人類の未来を背負う覚悟はあるかい？」

「……何か質問はあるかな、藤丸くん」

「……先輩」

はつきり言ってしまうえば、この特異点を解決できるのはマスター適正があり、レイシフトが可能な藤丸立香

ただ1人。

だがそれは少年1人に背負わせるにはあまりにも大きすぎる案件、仮に大人だとしても、1人で解決できるような代物では無い。

時代を遡り歴史そのものを修復する、出来なければ人類は焼却され滅亡する

……滅亡の前に絶望するだろう

「うーん……けどまあ、俺に出来るならやらなきやダメでしょう」

だが案外

この少年は色々な意味で強かった

「つあなた！これからやる事わかってるの!？」

「詳しくはわかりませんよ、けど細かい指示は所長やここにいるみんなが出してくれるんですよね？」

「だったらあとは俺がそれを実行する、それだけでしょう？」

「それだけって……」

「それに、本当に俺だけだったらどうにもなりませんけど、実際にはマシユやスネークさんもいる。」

「それにここにいる全員がいれば特異点の解決ってどうにかなるんじゃないですかね？」

『……………』

この少年の発言は何の根拠もなく、楽観の一言に尽きる

だが、1つ断言できるのは

今の言葉にここににいる多くの人間の心を救ったことだろう

「ハハハ！ やつぱり君は主人公力があるねえ!!」

「えっ？」

「随分と一人前な事を言うじゃないか坊主……いや、マスターか。

まあ確かに、お前の言う通りここにいる面子がいれば案外どうにかなるかもしれないな  
！」

「はあ」

「先輩……私は先輩がいてくれて良かったと心から思います。

改めてサーヴァントとして、先輩のために全力を尽くす事をここで誓います！」

「うん、俺としては誓われてもアレだけど……よろしくね、マシユ」

「はいー」

「……これは僕の思い過ぎだったかな」

「いやいや、流石の私もこれは予想外き、君が予想できるわけが無い。

……どうやら私たちは幸運にも中々のマスターが生き延びたらしい、これはレフも予想してないだろうね」

「……お気楽過ぎよ本当につ、考える方の身にもなつて欲しいわね！」



◆? ◆ ◆? ◆ ◆? ◆ ◆? ◆ ◆? ◆ ◆

かくして

カルデアは正式に人類史保護のため

所長であるオルガマリー・アースミレイト・アニムスファイアの指揮の下

レイシフトによる人類史の保護及び、奪還

そして各年代の聖杯と聖遺物の回収を実行する

歴史そのもの、幾多の英霊・英雄が相手となる戦い

とても人が扱い、行える業では無い

だが後に、このデタラメで無茶な戦いを実際に担ったマスターは語る

「俺一人だったとしても冬木で死んでましたけど……仲間が居れば何事もどうにかなると思いました」

◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆?

こうして、ダ・ヴィンチ曰く主人公力のあるマスター藤丸立香によつて人類守護のため、

Grand Orderと呼ばれる運命と戦う禁断の儀式が始まった。

だが彼らが相手にするモノの本当の意味と壮大さを知るものはこの時はまだ居な

かつた

……が、戦闘においてプロフェッショナルである英雄が召喚されたカルデア。

その英雄には真の英雄譚など存在せず、騎士の様に戦いに尊大な誇りを持つている訳でも無いが、こと戦闘においては数多の英雄よりも戦術的にも戦力的にも考え・行動することが出来る人材だった。

そのため、自分のマスターによって鼓舞されたカルデアに関しては何も安心してはいた。  
……安心はしていたが、このまま進めてもあまりにも戦力不足であるのは明らかだった。

・基本的に絶対的な奇襲を基本とするスネーク

・火力の代わりに圧倒的な防御力を兼ね備えるマシユ

さらにマシユに関してはスネークによってより強固なものとなる為、現状でも守りにはあまり問題は無い。

だが今の実働部隊にはあまりにも火力が足りない、そもそも相手が聖杯を持っている以上何人でも召喚できると言うのなら人数があまりにも少な過ぎる、何よりサーヴァントを相手にするには今のメンバーでは決定打が欠けていた。

「それで、サーヴァントを召喚する必要があるだろ？」

「それに関しては抜き無いわ、ここにはちゃんとした英霊召喚システムがあるのよ」

「ここで英霊召喚を行うんですね……そう言えばマシユに宿ったサーヴァントやダ・ヴィンチちゃんもここで召喚されたんだよね？」

「そうだよ、もつとも私が召喚された時はまだシステムが安定していなかったけどね」

「安定とかあるのか？」

「まあね、最初はよくわからないゴミなんかが出たしね」

「……英霊を召喚する為の物だよな？」

「だからこそ私は興味を持ったんだけどね！」

「どうしましょう先輩、せっかく集めた聖晶石がゴミと化すのは私は嫌なんです……」  
「いやっそれは……誰でも嫌だと思おうよ」

その為まずは、1つ目の特異点に行く前に戦力増強の為にも何人かの英霊を召喚する運びとなった。

前回、スネークを召喚した時は緊急措置としての召喚だったにも関わらず正常………かはいささか疑問だが、それでも召喚には成功した。

システム・フェイトの仕様上、召喚直後はある程度弱体化はされているがその分、霊基再臨という儀式を行うことで生前の、それこそ生身で全盛期だった実力を発揮するこ  
とが出来る。

その召喚のためにはカルデアの電力と聖晶石と呼ばれる石で魔力を精製するだけで  
良い。

本来の聖杯戦争での召喚は聖杯からの魔力供給があるため、魔法陣を描き令呪が刻まれたマスターと呼ばれる者が決まった詠唱を読むことで召喚される、この時マスターは召喚のための魔力消費はないが、自分のサーヴァントを維持させるための魔力を供給す

るためにパスを作るため、それなりの魔力消費が発生するため、マスターには一応の負担が発生する。

だがここカルデアでは、マスター自身は一切の魔力消費が発生しない。

召喚はもちろん、サーヴァントを現界させるためやサーヴァントの真骨頂とも言える宝具を発動する時に必要とする魔力すらカルデアの電力によって賄うことが出来る。

さすがに聖杯のような無限供給みたく、宝具の連続開放は令呪を切らない限り無理だがそれでもマスター自身の資質に関係なくサーヴァントを運用することを可能にしている。

一般人である立香がカルデアに呼ばれたのも、魔術師でなくともマスターとしてレイシフトが出来れば誰でも良かったと言う召喚システムの優秀さも理由としてはある。

「しかしですよ先輩、こうしてダ・ヴィンチちゃんがここに来ていいると言うことは、そう言う可能性もあるという事では？」

「……マジかあ」

「違うな、この天災は面白そうだから来ただけだろう」

「随分と失礼なことを言うなあ、確かに面白そうな気がしたから来たのは確かだけど万が一の可能性が有るからね、こうして立ち会う必要があるのさ」

「まあレオナルドと同じ理由で僕も立ち会うんだけどね」

「私はここの所長だから当然よ」

「……一箇所にここの重要人物が集まるっていうのはどうなんだ」

「まあ俺は構わないですけど、なんか緊張するなあ」

「まあまあそう固くならなくて良いよ、君は石をここで投げるだけで良いんだから」

その固くさせている原因であるダ・ヴィンチちゃんがニコニコと語りかける。

実際その通りではあるが、お前が言うなとロマニとオルガマリーは心の中で思っていたとか何とか。

「それで、あの綺麗な石はどこに……？」

「私を持つてるわ……もつとも、カルデアの倉庫もある程度やられて残ってる聖晶石はこれだけよ」

「8個かあ……なら2体かな」

「4個で1人のサーヴァントを呼べるんですか？」

「本来なら電力だけで十分なんだけど、今のカルデアは自家発電だけで賄ってる。

さすがに召喚にだけ電力を割くわけにはいかないから、この魔力の籠ってる石で魔力を補う必要があるんだ」

「なるほど……」

「ああ、それ魔力の結晶だったか、ならちようど4つ持っているぞ」

「本当ですかっ!？」

「ああ、あの洞窟で爆薬を仕掛けている時に見つけてな。

ちょうど4つ、それぞれ洞窟を支えていた部分に光っていてな、何かの罠かと警戒したがダイヤモンドにも見えてな、爆薬を設置しながら回収しておいた、これだろ？」

そう言つてスネークの手から出てきたのは確かに魔力が籠った聖晶石だった。

「うん、確かに聖晶石だね、これなら3体のサーヴァントを召喚できる」

「……あなた、幸運はEじゃなかったの？」

「そう言われてもな、有ったものを拾っただけなんだが」

「あつそう、けどこれで最低限の戦力は確保出来るわね」

「じゃあ石も集まったことだし早速始めようか、マシユ、盾をサークルの真ん中に置いて」

「わかりましたドクター」

そう答えてマシユが盾を召喚サークルの真ん中に置く、ちなみに彼女の格好は戦闘姿で露出が高めだが、彼女の盾はれっきとした宝具であり、触媒として様々な英霊の呼び寄せる呼び水としての働きを担う事が出来る。

「……あのスネークさん」

「スネークで構わん、どうした坊主」



「今必要なサーヴァントに攻撃力が必要なのはわかるんだけど……どんなサーヴァントが今は必要なの？」

「そうねえ……遠距離攻撃の出来るアーチャーと前衛でランサーかしら？」

「……確かにそうだな、だがクラスの話を抜けばとりあえず足が速い奴は欲しいな」

「どうしてですか？」

「足が速いだけで偵察・奇襲・陽動、この3つを戦術として選ぶ事ができる。

俺も出来なくは無いが2人いればこの精度も高まる、どっちかが交代で常にマスターの横に居ながら偵察に走ることも出来るしな、まあそれも含めるとランサーが都合が良  
いのは確かだ」

「じゃあまずはランサークラス、ですね」

「おいおい立香君、まるで自分はサーヴァントを選べるみたいな口ぶりだね？」

まさかとは思うけど、サーヴァントの名前を言えばそのサーヴァントが出てくるとでも思ってるのかい？」

「いやあくいくら主人公力が強い君でも……意外と出来るかな？」

「……レオナルド、からかうのもほどほどにね」

「いやっ俺、自分が欲しいものはあんまり当たらないんですけど、人が欲しいものって大体簡単に手に入るんですよ」

『……はっ?』

「いや、俺も不思議だとは思いますが、修学旅行で友達が美ら海のがチャを5回もやったせいで百円玉が切れて、代わりに俺がガチャを引いたら1発でその友達が欲しいのが出ましたし。」

あとは毎年、人が多くて面倒くさいんですけど親と一緒に福引に行つて大体2等か1等の商品が当たります。

他にもゲームセンターで15分くらい暇でメダルゲームしてたらジャックポットを引き当てたんですけど、時間が来たんで隣にいた家族連れで来てた子供にその台を譲つたりとか……ドクター? どうしました?」

「………まあアレダヨオ!! これはそんな安っぽいガチャガチャじゃなくて英霊の召喚ダシイ!」

そんなご都合主義よろしく思い通りサーヴァントが出てくる訳が無い! そうだよねダ・ヴィンチちゃん!」

「そうだ! 世の中そんなに物欲センサーが仕事なんてする訳がナイヨツ!!」

「ド、ドクター!?! 目に光を取り戻して下さい!?! ダ・ヴィンチちゃんもっ?!」

「……俺、なんか変なこと言つたかな?」

「まあ……なんだ、なんか有つたんだろ」

「はあ……これだからダメ人間は……」

片方は《マギ☆マリ》のチケット抽選に敗れ、また片方は某運営を執拗に恨んでたりする。

特に某運営への恨みに関しては多くの同志がいる模様だが、それをスネークやオルガは知らない。

「……とりあえず坊主、これ以上面倒くさくなる前にさっさと終わらせるぞ、マシユを助ける意味でもな」

「そうだね……じゃあとりあえずー回目ー」

そう言つて4つの聖晶石を立香が召喚サークルの真ん中に投げた

するとスネークを召喚した時に光が辺りを照らした

その光のおかげか、ハイライトが消えていた2人の目にも光が戻った

やがて光は収束し人影が見え始めた

前回のよう切羽詰まっていなかったためか召喚が早いように感じる

そしてマスター権限で立香にはそのサーヴァントのクラスを見た

「あつらんサーだ」

『……………え』

そして光が消え、人影が完全に人として姿を見せた

その姿は全身が青装束で手には確かに紅の槍を持った見た目からして戦士

纏う雰囲気は野性味があり、猛獣のような物を感じなくも無い

そしてその雰囲気と青髪には冬木に行つた全員に覚えがあつた

「おっと、今回はしつかりランサーみてえだな……おお！やつぱ坊主か！」

「えつと……やつぱりあの時のキャスターさん、ですよね……？」

「そうだけ、そういや俺はあん時や名乗つて無かつたな、なら改めて名乗らせてもら  
ぜ。」

俺はクー・フリーンだ、この前とは違つて槍兵としてせいぜい務めるさ、いやあくやつ

「ば槍は良いなあー！」

「……本当にランサーを引き当てたわ、しかもアイルランドの大英雄……!?!」

「お前……クー・フリーンだったか」

「ああそうだけ、まあこれからあんたともしばらく長い……まさか怖気付いたか？」

「まさか、アルスター伝説の英雄と肩を並べられるとはな……面白いもんだ！」

「なんだ！あんた話がわかるじゃねえか！」

「どつかの弓兵は未来の英雄らしいが俺を見たって嬉しがらねえわ……そもあいつの考えも氣にくわねえが。」

「だがあんたとは何か上手くやっていけそうだ」

「そうか？まあよろしく頼む、もつとも俺も一介のサーヴァントだがな」

「そうだったな……おいマスター」

「はい、なんですか？」

「……まああれだ、お前がマスターだとは今も信じられねえけど、とりあえずよろしく頼むぜ？」

「こちらこそ、これからよろしく願います、クー・フリーンさん」

「………本当にこいつがマスターなのか？」

「まだ言うか、それを」

「私からもこれからお願いしますね、クー・フリーンさん」

「おお嬢ちゃんじゃねえか！まつ、よろしく頼むわ！」

そう言つて1人目、マスターが他のメンバーから求められた通りのランサーが、それも申し分の無い大英雄が、ここカルデアの戦力として仲間になった。

……仲間になったのは良かったが、

「……何で……なんでランサーが……？」

「……まあ確率的に7分の1だし！クラスを言い当てるくらい！ある事だよねえ！！」

「……所長、なぜかドクターとダ・ヴィンチちゃんが——」

「放つておきなさい」

「えっ、けど——」

「放つておきなさい」

「あつはい、わかりました」

若干2名、詳しく言えばカルデアの医療部門のトップと人類史における万能の天才が、うずくまりながら何かをブツブツ言っていた。

ちなみに言えばサーヴァントのクラスには例外があるために、別に一つのクラスを狙い当てる確率は7分の1では無かったりするが、万能の天才はそれに気付く事はなかった。

「……何であの軟弱男と随分な美女は悶えてんだ？」

「気にするな、俺にもよくわからん」

「えっと、なんか2人が可笑しくなってるけど……次はじゃあどんなサーヴァントが良いの？」

「あん？まだ召喚を続けんのか？」

「さすがに2人や3人だけでこれから先やっていけるとは思えない、最低でも6人は欲しいが今はあと2人だけしか召喚できないらしい」

「そういう話か」

「それで、次はどんな人が良いんですか？」

「ええっと……今ここに居るのは盾持ちの嬢ちゃんに、奇襲で敵なしのあんた、それと俺か。」

「……そういやあんた弓兵みたいな攻撃してたな、ならアーチャーはいらねえ、つうか絶対に勘弁だな！」

「どうしてだ、専門の狙撃手がいるに越した事は無いと思うが？」

「……アーチャーにはロクなやつがいねえ、まだキャスターやライダーの方がマシだ」

「……だそうだ、坊主」

「そっか、まあとりあえずはキャスター、かな？」

「そう祈ってくれ」

「じゃあ……2回目、そーい！」

そうやって再び、4つの聖晶石を立香は召喚サークルの真ん中に投げた

するとスネークを召喚した時のように光が辺りを照らした

その光のおかげか、ハイライトが消えていた2人の目にも光が再び戻った

やがて光は収束し人影が見え……

「つおい坊主！これってキャンセルとか出来ねえか!？」

「はいい!？」

「……どうした急に」

「……あつ今度はアーチャーだ」

「つぎっけんな！」



そして光が消え、人影が完全に人として姿を見せた

その姿は浅黒い肌に赤い外套を着込んだ白髪の男

先ほどのクー・フリーンと同じように戦士である事はその体から察する事ができた  
そのクー・フリーンは頭を抱えていたが。

「……………」

「……あれ？どこかで見た事があるような……？」

「あれだ、冬木で俺が倒したアーチャーだ、坊主はほとんど顔も見えてないだろうがな」  
「……………」

「……あのぉ……初めまして、じゃなくて……僕のこと覚えてますか？」

「先輩、それはその……最初にかける言葉として正しいのでしょうか？」

「けど初めましてじゃないし……」

「……………」

「……おいテメエ、良い加減喋れよ」

「……お前にそんな指図をされる覚えは私には無いんだが？」

「よく言うぜつ、ならさつさとマスターに挨拶しておけよ」

「……すまないマスター、簡単に自己紹介だけさせてもらう。」

私はアーチャーのサーヴアントのエミヤだ、アーチャーともエミヤとも呼んでくれて構わない」

最初はダンマリを決め込み、クー・フリーンとスネークを見比べていたアーチャーのサーヴアントだったが、口を開けると随分と優しい口調でエミヤと名乗り挨拶してきた。

丁寧挨拶をされたなら、こちらも丁寧に挨拶を返すべき、おばあちゃんに習った事を思い出しながら立香は自分も名乗ったり、他のサーヴアントも簡単に紹介する。

「あつえつと、マスターの藤丸立香です、こっちはマシユ、あそこに立ってるのはカルデアの所長さんです。」

あとそこに立っているのは——」

「ああよく知っている、そちらの眼帯を掛けているのがBIG BOSSで、そっちは青タイツだろう？」

「おい待てテメエ、何で俺のことは青タイツで終わらせてんだあ……？」

あからさまな態度の違いにクー・フリーンが槍を構えそれをマスターとマシユで止める。

そんな光景になぜか喜ぶダメ人間2人に制裁を加える所長と周りが騒ぐ中、スネークは冬木で倒したこの弓兵が……エミヤが自分のことを知っていたことに驚きながら

も、それは表情に出さずエミヤに近づき話を聞く。

「……………俺のことを知ってたか」

「まあ私は少し特殊な未来の英霊だね。

……………まだ自分でもガキだった頃、あんたの英雄らしい生き方なんか随分と憧れたものでね」

「おいおい止してくれ、俺は英雄なんて器じゃ無い。

俺は単なる傭兵に過ぎない、お前の知っている俺の“情報”は都合の良い事実と話しか無い」

「それでも私はあんたに憧れていた、まさかここで憧れの傭兵と肩を並べて戦えるとは思わなかった」

「……………まあ別に悪い気はしないから構わんが、俺のことはスネークと呼んでくれ。

俺はその称号はあまり好きじゃなくてな、呼ばれるならスネークの方が好ましい」

「それは失礼した。なら改めて……………スネーク、あんたと戦えることを光栄に思う」

「そいつはありがたい、どうやらお前は色々とサーヴァントとして慣れてるみたいだが俺は新参者でな。

その辺を含めてよろしく頼む」

「ああ、……………こちらこそ頼む」

そう言っただけでしつかりと握手をする二人。

……なぜクー・フリーンがアーチャーを毛嫌いしているかはスネークがわからないが、少なくとも悪い奴では無い、むしろクー・フリーンと同じように上手くやっっているように思えた。

「おい、何でそっちには敬いがあつて俺には遠慮がねえんだよ……？」

「なら聞くんが、私が今からお前に敬いながら喋れども言うのかね？」

「……いやナシだな、気持ち悪くて寒気がする」

「生憎同感だ、スネークは少なくとも俺が生きていた時に憧れてた存在だ。

だからここそ多かれ少なかれ敬う対象だ、お前にもそんな相手が一人や二人は居るだろう？」

「う？」

「……まあな、最もお前にそんな相手がいるとは思ひもしなかつたがな」

「ふっ、それは確かにな」

そして口では何と言おうとも何だかんだ上手くやっている。

冬木でもそうだったが、随分と因縁があるらしいが……それは追々聞けることだろうとスネークも立香も思いつつ、最後の召喚を行うことにする。

「じゃあ次で最後だね」

「何だ、もう一体のサーヴァントを呼ぶつもりなのかマスター？」

「何でも今回は単なる聖杯戦争じゃ無いんだとよ、こりややりがあるつてもんだぜ？」

「その様だな」

「えつと……スネーク、最後の一人だけどんなサーヴァントが良いかな？」

「まあこれだけ運良くバランス良く揃ったからなあ、これと言っては要望は無いぞ」

「ふむ……盾による前衛での陽動とランサーの一撃、スネークの奇襲に私の遠距離攻撃。

私もそのランサー程では無いが接近戦はそれなりにこなせる、となれば回復役か圧倒的な攻撃力の持ち主かだな」

「とりあえずはまあそんな感じだわな」

「……マシユは？」

「えつと、そうですね……エミヤさんが言った通りやはり回復のできるキャスターか、対城宝具を持った英霊の方でしょうか？」

「……えつ」

「……どうした、二人して」

「じゃあとりあえず！最後の召喚ホイッ！」

そう言つて最後の4つの聖晶石を立香は召喚サークルの真ん中に投げた

すると召喚したのために光が辺りを照らした

その光のおかげか、理性や知性や智性なんかが消えていた2人にはオルガマリー鉄拳制裁によって星を見た

やがて光は収束し人影が見え始めた

「・・・なあ、まさかとは思うが」

「ああ……これは確実に“彼女”だろう」

「……おい、2人して何で頭を抱えている」

そして光が消え、人影が完全に人として姿を

【約束された勝利の剣】（手がスベツツタアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!）

見せる前に真っ黒なビームが襲いかかって来た！

「っ先輩!!」

「マジかよ!?!」

「っ!」

「熾天覆う七つの円環」（ロー・アイアス）!

そこからの行動はそれぞれ早かった

マシユは真っ先に立香の前に立ち、真名開放をせずに宝具を展開  
マスターはもちろん全員をその攻撃から護る

クー・フリーンは驚きながらもすぐにマシユの宝具より後ろに下がり槍を構える  
攻撃が終わり次第仕掛けるつもりらしい

スネークはマシユの宝具からはみ出ている所長たち3人の回収に動く

そこにエミヤも念のため宝具を展開しつつ加勢しロマンを回収

スネークが2人分を担ぎさつさとマシユの後方に戻った

ビーム攻撃自体はそれほどどうやら室内である事を配慮しているのかそこまで強力では無い

……洞窟内で全力を奮っていたのかも謎だが、少なくともこの部屋が崩壊するレベルではなかった

そしてマシユの宝具によって完全に相殺しているため被害は一切出ていなかった

やがて攻撃が止まり黒いが静まり代わりに膨大な魔力を漂わせた人影が見えた

……だがすでにこの場にいる全員がそのビーム攻撃を放った人物に心当たりがあり過ぎた

だがその本人は黙ったまま何もして来ない

「……………」

マシユは次の攻撃が来ても良い様に宝具を展開、備えているために何も喋れなかった



「……おい、何か喋りやがれ」

場合によってはその心臓を貫き受ける、とは言わずクー・フリーンが語気を強め尋ねる

「全くだ、登場が随分と派手過ぎると思うのだが？」

そう言いながら両手に干将・莫耶を持ちエミヤが声をかける

「登場以前に仲間に宝具をぶつ放すとはどういう見だ？」

すでに完全な敵対行動と認識したスネークはハンドガンにコンバットナイフを構える

「えつと……アーサー王、ですよね！」

そんな一触即発な雰囲気醸し出している中、必死になって立香は声をかける

さすがにマシユより前に立つ勇氣は無かったがマシユの隣に立ち慌てながらも交渉（？）する

「……ああ、すまない、何かしてしまったか？」



合うが良い！」

「あつ、えっ？」

「……とりあえず仲間になってくれたみたいですよ」

「とりあえずでは無い、正式な契約だマシユマロサーヴァント」

「私はマシユです！デミ・サーヴァントですから!!」

「これ……これあのあーさーおう？」

「所長!」

なんかアーサー王と名乗る女性が出てきた、それはまあ良い。

だが、かの騎士王が傲慢だとか食事第一だとか人に中々にユーモアがある名前を付けると誰が想像できるか？

……いやっ出来そうな引きこもり魔術師はいるが、それでもこの場で彼女をもう一つの側面だと知っている者以外では不可能だろう。

一般人でありマスターでもある立香にとつては、何か色々と凄い人が来た、で済んだ。純粋であり知識で世界を知るマシユは、何か想像と違っただけ……まあとりあえず、と断定した。

だが生粋の魔術師であるオルガマリーは、2人の様に一旦割り切ることが出来なかった。

マシユとは別に純粹、というより単純とも言えるオルガの心。

その心は召喚されたアーサー王……では無くアルトリアの言動と行動を目の当たりにした事によって、まるでサンタさんの正体を知ってしまった瞬間のように、信じる・信じないの前に思考が停止した。

「……おい、クー・フリーン」

「……まあアレだ、俺が良く知ってるあいつ……じゃねえなあ」

「…………おい、エミヤ」

「言うな、私はあれがアルトリアだとは知っているがそれ以外は知らない」

「……おい、マスター」

「まあ良いんじゃないですか？少なくとも敵意は無いみたいですし色々とは話は聞きたいですからね。」

それに俺は別に怪我してないんで謝ってもらおう必要も無いですし」

「そうか……それなら良いんだが……」

「何かマズいですか？」

「いや、坊主は俺らのマスターだ。今のお前の判断にこれといって反論は無いんだが

……」

「？」

マシユは所長の介護のため立香やスネーク達より少し離れたところにいる。

さすがに所長の容体を気にしたロマニもフォローに入り、ダ・ヴィンチちゃんはいつの間にか消えていた。

そしてなぜかアルトリアもそちらへ体を向け、マシユの手伝いをしている……マシユをからかいながら、愉しんでいる様にも見えるが。

だがそんなアルトリアは時折こちらを見ることがあり、その視線の先は……スネークだった。

「……ああ、そういう事か」

「まつ、こうなるとは思ってたがな」

「おいクー・フリーン、お前はわかってたのか？」

「まあなつ、セイバーの野郎がお前のことを最後、随分と熱心に見てたからな」

「そうだったか……」

「あつあの？ 一体何の話ですか？」

「マスターにも関係ある話だからな、まあ言ってしまうば……あの騎士王はどうやらスネークと戦ってみたらしい、私が倒された後に一体何があったかは知らないが何か気に喰わない様子だ」

「えっ、スネークさんとまた戦いたがっているってこと？」

「そういうことだ……それも結構マジで戦いたみたいだぜあのセイバーは」  
「ええ……」

「……マスター、これは俺個人の質問だが、あいつと模擬戦をしても構わないか？」  
「……やらないとダメ？」

「いいや、俺も彼女もあくまでサーヴァントだ。」

彼女もいくら暴君でもさすがにマスターに逆らつてまで戦おうとはしないだろう、第一端から戦う気だつたなら召喚された時点で俺を襲ってくるだろうからな」

「いやおいつ、思いつきり宝具をぶつ放した気がするんだが……？」

「まあ意図した物では無いだろう、殺気が籠っていた訳でもない、本人も自覚が無さそうだしな」

「そうだね……まあドクターや所長に確認とつてからだと思うけど、俺としてはやつても良いよ」

「そうか、ならやる方向で彼女とは話を進めるか……」

「……本気か？」

この時、因縁深いランサーとアーチャーはこの時ばかりは全く同じ信条だった。

まずあの黒いアーサー王が手を滑らせ宝具をぶつ放す訳がない、2人からすれば明らかにアレは意図的な行動だというのは明白で、実際その通りだ。

だが事もあろうに、このマスターとスネークはアレが事故だと言い、あっさり流した  
それどころか、あの黒い騎士王と正面から戦うとも言い出した

しかもあろうことか、その戦闘すらマスターは仮ではあるもののおっさり許可した

2人はスネークという現代の英雄が、一体何をどう考えるかはまだ知らない。

だが2人はマスターらしくない、一般人の立香の思考なら予想できた。

そんなマスターの一般的な思考を基にすれば、自分の仲間であるサーヴァント同士を  
戦わせる事に積極的になる事はまず無い、殺し合いでは無いという前提だとしても少な  
くとも簡単に了承しない。

「何が疑問だ？」

「いやっ私から言わせて貰えば、あのセイバー相手に奇襲ならまだしも正面からの戦闘  
で勝ち目はあるのか？」

「まあ無くはない、ただ俺としては実験的な意味合いもあるな」

「うん、俺もスネークさんに確認したいことがあつて……」

「あん？ マスターも確認したい事があんのか？」

「……坊主が聞きたいことつてのは何だ」

「その、スネークさんの銃つてあの鎧を貫通できるの？」

「……………わからん、だから確認する」

「じゃあやろう、俺もスネークさんがどれくらい戦えるか気になるし」

「……だろうな、俺もどれくらいできるもんかまだ良くわかってないからな、彼女なら申し分無い」

「じゃあそういう趣旨を伝えてドクターや所長に許可を採るね、ついでにセイバーさんにも伝えておくよ」

「……ああ、頼んだ」

そう言うのとマシユが介抱している方へと走って行った、どうやらセイバーにもまとめ伝えるつもりらしい。

だが思ったより所長は重症らしく、だが何故かマスターはセイバーに連れられて、召喚ルームから出て行った

残ったのは過去・現在・未来の英雄だった。

「……あの坊主、マスターとしては置いといても、人としては中々やるな」

「そうか？ありやマスターとしても結構やれると思うぜ？」

「まだ素人に変わりは無いようだが、その分教えがいのありそうなマスターだな」

「ふっ、違うない」

マスターとしては戦術や戦略的な知識は足りない、魔術に関してはド素人。

だが人としての観察眼と判断力は英霊から見ても「素人にしては」結構な代物だっ



た。

これから磨きかかって行けば、様々な英霊と会話する程度ならなんの支障もきたさないだろう。

今の時点ですら、伝説の傭兵・アイルランドの御子・世界の守護者・反転した騎士王と話せて居るのだから

「・・・んでだスネークさんよお〜」

「ん、どうしたクー・フリーン」

「あんたがセイバーの野郎と戦うのは良いんだが……俺とも一戦やらねえか？」

「・・・実は俺からも願っていたんだが、良いのか？」

「当たり前だ！むしろ俺としては願ったりかなったりだ、もともと俺は強い奴と戦えれば満足なんだ。

それに何だ、随分とデカイ問題がくっついて来る位なら必要経費だ」

「まさかお前の口から必要経費という文化的な言葉が出てくるとはな」

「お前は毎回皮肉を言わなきゃ気が済まねえのか……？」

そんな将来が楽しみな……その未来が今は存亡の危機だったりするが……そんなマスターは置いといて、3人は自分たちの興味がある方へと走って行った。

特にクー・フリーンは、キャスターだったとはいえ自分を投げ飛ばしたスネークを実

力のある者として認め、得意の槍を得たいま、改めて戦う気でいた、もちろん本気で。

「……お前ら、あの騎士王も含めて随分と長い付き合いに見えるが、何度か会ってるのか？」

「……まあ何度か聖杯戦争が会ってだな、その都度顔を合わせているのだが……」

「……で、何故かこいつとは毎回毎回戦う羽目になってんだよ」

「それでお前は冬木で決着だとか言ってたのか」

「そう言うこつた、まあこの前はんたのおかげで決着は付かなかつたがな」

「それならお前ら2人で決着を付ける気は無いのか？」

「……私はそれ以上にスネークと戦ってみたいのだが？」

「こいつに同じだつ」

「なるほどな……わかった、なら打って付けのトレーニングルームがある。

さすがに決闘やら死合ならマスターに一言断りを入れなきゃならんだろうが、男同士の語り合いなら問題ないだろうしな」

「そいつは良いねえ、久しぶりに熱くなれそうだぜ」

「あまり暑苦しいのは苦手なのだが……あんたが居るなら話は別だ」

「決まりだな、なら早速やるか？」

「おう」

「ああ」

こうして3人はトレーニングルームへと足を運び、満足するまで叩き合った。

ちなみにこの「語り合い」、スネークとクー・フリーンで1時間、スネークとエミヤで1時間、三つ巴で1時間、計3時間ぶつ通しで行われたのだが、この語り合いは本人たちにとっては素晴らしい物であつたらしく、皮肉屋と槍使いは相変わらずだったが蛇を介するとそれなりに喋るようになり、蛇となら良く話す様になった。



カルデアの管制室にて、現在の全戦力であるサーヴァント4人とデミ・サーヴァントであるマシユ。

そして人類の未来をあつさりと背負いこの場に立つマスターが集まった。

「さて集まったみたいだね、早速ブリーフィングを始めよう……って藤丸君、きみ大丈夫かい？」

顔色、随分悪いけど……眠れなかったのかい？」

「あついえ、むしろよく眠れたんですけど……なんか変な夢を見て」

「体調管理もマスターとしての仕事よ、ましてやあなたが戦闘ができる訳じや無いんだから」

「すいません……」

「本当に大丈夫ですか、先輩……？」

そんな6人を集め、今回のレイシフトを実行するにあたって事前の情報共有がなされる……のだが、肝心の彼らのマスターの顔色が悪かった。

さすがにぶつ倒れるほどの体調の悪さでは無いが、何やら悪夢にうなされた様な顔だった。

「……そうか」

「あーやっぱマスターなら見るかあ」

「その様だな……スネーク、どうした？」

「……その……何だ……まあ極限状態で寝れば変な夢の一つや二つは見るのは当然だ、生前俺も何度か見た」

今までの聖杯戦争の経験が豊富である三騎士3人組は、自分たちのマスターが何らかの「夢」を見たらしいと察しそれぞれそれなりの反応を見せた………が、1名だけトラウマを思い出し何故かマスターに同情した。

これは心理学的推測でしか無いが、極限状態……特に生死の境……では当然ながら通常生活を送ることは出来ない、これは興奮状態による脳内でのパニックだと言うのは誰もそれなりに想像つく。

だがこのパニックは言い換えれば《処理落ち》とも言えるという。

特に柔な新兵は恐怖で寝れず早死するのだが、これは過度なストレスが心を砕きそのまま身体を害した結果だ

一方、古参や生き残れる兵士はどんな状況でもそれなりに動き、それなりに食べ、最低限寝ることが出来る。

だがそれらは表面に顕著に現れていないだけであつて実際には相当なストレスが常に掛かつており、脳内では常に興奮状態であつたりするという。

この興奮は起きている時であればあまり影響は無いのだが、睡眠時の場合は意識の覚醒時よりも余計に影響を受けやすいという。

その影響がパニックのあまりキャパオーバーとなつた脳の《処理落ち》によつて夢を見る……らしい。

もつともこれは、スネークがある任務で医者から聞いた話だ。

スネークの場合は囚われた牢獄でコウモリに関する話が引き金となり、正真正銘の悪夢となつた。

そのため、マスターが見た夢というのは、これからの戦いに対してのストレスによるものだろうとスネークは考えた訳だが

はつきり言つて勘違いである

「……ちなみに藤丸君、具体的な夢の内容は覚えてるかい？」

「いや………なんと言うか………火焙り？」

『火焙り?』

「……なんか女の人が男の人に火をつけた、と言うか火がついたと言うか……周りにも人がいたような?」

「……少なからず私には当てはまらない内容だが?」

「俺もだ、火焙りなんざに縁はねえぜ」

「私も心当たりはない」

「……となると、スネークか?」

「何がだ?」

「ああ、まだ君には言っていなかったね。」

マスターは契約したサーヴァントの過去を夢で見ることがあるんだ。逆にサーヴァントも見ることがあるみたいだけど、藤丸君はこれだけのサーヴァントと契約してるからね」

「ちなみに聞くが、あんたが過去に見たって言う夢は何だ?」

「……わからん、ただ紅い世界でひたすらヒトではないナニカを殺して行く、……そんな感じだった」

「それは……また随分な悪夢だな」

「……坊主、その周りにはどれ位人が居た、何か集会みたく何十人も周りを囲んでい



たか？」

「うーん・・・何十人も居なかったと思うけど・・・せいぜい6人くらい、かなあ」

「なら俺じゃない、仲間の手向けにダイヤモンドにする提案をしたらしいが、もつと大勢の仲間とだ。」

6人程度の人数なら俺ではないな」

「……となると、一体誰の夢なんでしょう？」

「さあな、まあマスターに害が無えなら問題ねえだろ」

「そのマスターの体調が悪そうなのだが？」

「あついえ、問題無いです、動いてればそのうち治る程度です、わざわざ延期させるほど悪くは無いです。」

と云うか、レイシフトに支障きたす程の体調不良なら起きる前にマシユやドクターにストップかけられますし」

「そうだね、数値としては何の問題も無い、多分精神的な面の問題だろうから、藤丸君が気にならないなら問題無いだろうね。……もちろん、こちらでダメだと判断した時は関係なくストップをかける」

「その時は従います、それがマスターとしての務めですよね、所長？」

「そうよ……まあ今回は話してるうちに顔色も良くなってるみたいだし、問題無いわね。」

それならロマニ、予定通りレイシフトの準備に入りましょう」  
「わかりました、じゃあ予定通りブリーフィングに入ろう」

そうやってロマニがパネルを操作し、カルデアの管制室のメインパネルを展開する。

正面には様々な情報が映し出され、全面に地図・地名・何らかの数値にグラフが描かれ、そして画面の一番上には『フランス・オルレアン』と大きく書かれていた。

「さて、今回の特異点だけど……場所はフランス、年は1431年だ」

「また随分な場所だな、もつとも私はフランスには言ったことないが」

「その年代だと……確か百年戦争の最中だな、しかもジャンヌ・ダルクが処刑された年か？」

「そうだね、一応正しければジャンヌ・ダルクの処刑から経った後だけだね。」

「……もつとも、レイシフトしないと本当に処刑された前か後かはわからないんだけど……」

「えつと……そもそも百年戦争とかジャンヌ・ダルクって誰ですか？」

現代生まれ、そしてそれなりの知識を有するスネークやエミヤはその年代を聞いてす

ぐに検討がついたが、それ以前にフランスについて詳しくない他の英霊や立香はその年に何が起こったかは知らなかった。

「マスターにわかりやすく説明すると、まず百年戦争ですが簡単に言ってしまうえばイギリスとフランス間との戦争です。元々は王位継承問題に始まって複雑化し、領土問題にまで発展した戦争です」

「王位継承で百年間もずっと戦争してたの!？」

「いえ、何度か休戦もしてますし今回レイシフトする年もちようど休戦中のハズですけど……どうなのでしょう?」

「元々イギリスとしては領土の足がかりを作りたいってのもあったと思うがな、それに後年は大義名分としてしか使われてない、結果としては双方とも疲弊して君主が力を持つようになっただけでも言えるが」

「これだから蛮族はロクなことをしない」

「お前がいうなっ!」

「……色々あったんだな」

一人スネークから定期的に（毎朝）もらっているドリトスを一瞬で食べ終わったらしい暴食王は答えた。

実際、本来の彼女は大陸から渡ってきた野蛮人（ピクト人）を駆逐する最中の騒乱・荒廃で内政が荒れ、結果滅びた。その滅びを無きものとしようとしたIFの姿の一つとして横暴な暴君として君臨したブリテンの王が彼女だ。

そのため、彼女の発言は地味に重いのだが……暴君というよりジャンクフード好きの暴食者のイメージがあるため大して重篤に受け止められてない、実際彼女もそんな気は微塵もない。

「……なんかアルトリアさんの言葉には引つかかるけど、それでジャンヌ・ダルクって言う人は？」

「ジャンヌ・ダルクはフランス救国の聖女として知られて居ます。」

彼女は単なる村の娘だったそうですが、ある日神様からのお告げを受けてフランスのために救国の旗を掲げ

立ち上がり、当時劣勢だったフランス軍は勢いを取り戻し、遂にはイギリス軍をフランスから追い出し講和にまで漕ぎ着けました。……しかし彼女自身はイギリスに囚われ異端審問にかけられ、様々な尋問を受け、最後には火炙りの刑に処せられたそうです」

「えっ……その人って村の娘って事は女の人でしょ？」

戦争だから処刑はまだわかるけど……わざわざ火炙りにしてまで殺したの？しかも異端審問ってあんまり良いイメージが無いんだけど……」

「それは彼女が『聖女』として当時から見られて居たからだろうな」

「『聖女』として？」

マスターである立香の疑問にエミヤが答える。

「ああ、そうだ。」

私やマスターは現代で生まれたおかげであまり印象が強く無いが、それでも神という存在は絶対的だろう？」

「うん、……まあ神様や仏様には時々祈ったりはするけど」

「ましてや昔は神という存在は民衆にとつても支配者にとつても今とは比べものにならない程神聖な物だ。」

それこそ宗教の扱いを間違えれば国が滅びる程度には、だ」

「うん、けどそれがどうジャンヌ・ダルクと繋がるの？」

「考えても見てくれマスター。」

イギリスとしては普通に戦争をして居たのに、ある日突然一人の女性に戦局を覆された。

しかも彼女は『これは神のお告げです』と言っていたとしたら、イギリスの印象はどうなる？」

「……あつ、イギリスが神様に齒向かってるみたいだね」

「そういう事だ、実際にイギリス軍はジャンヌ・ダルクという『聖女』の存在で休戦とはいえ負けた。」

ましてやそれが神からのお告げをもらった『聖女』が原因だとすれば、当時なら国民には隠し通せても国外や兵士には隠しきれない『イギリスは神に逆らったから負けた』と。

外交的にも内政も荒れるだろう、何せ神に逆らったというレッテルはあまりにも巨大すぎる。

何もかもが神罰だと捉えられる」

「……じゃあ、せめてその印象を払拭するために火炙りにしたっていう事？」

「もっと理由は複雑だ坊主」

ジャンヌ・ダルク

名前くらいは知っている彼女もまた英雄であり、英霊の座に至った存在だ。

だが生前の彼女の最後は利用されるだけ利用され、結果だけ見れば祖国に売られたと見れなくも無い。

それに関してスネークが補足する。

「色々と諸説はあるがな、実際にイギリスは彼女を捕らえて……まあ酷い尋問にかけたかはわかってないらしい」

「そうなんですか?」

「フランスとしてもギリギリだった戦局が覆ったとはいえあまりにも疲弊していた、ジャンヌ・ダルクによって実質的に勝てたとは言え、戦争を続けることは不可能に近かっただろう。」

良く女性としての尊厳を踏み躪る行為をされたと言われてるが、確かフランスから出た文書からは、

《なぜ彼女を蹂躪しなかった》という抗議文書があったという話までであると聞いた事がある。

……それが事実かどうかは判断できんが……少なくともフランスとイギリスの両国は戦争の継続は望んでいなかっただろう。

それに元は領土問題も絡んだ王位継承問題だ、フランスを悪く言うつもりは無いが……それだけの政治的な隙が当時あった訳だ。だがそれもイギリスという敵を倒せば、フランスは国民を統治する力によってその隙を埋める。

……だがジャンヌ・ダルクは兵士にとって神聖視されるほどの英雄だ、支配者としては好ましい相手じゃ無い

何せ神の言葉を聞きフランスを、自分たちを救った彼女の事を大勢の人間が尊んでる。

そしてイギリスはどうかして神に背いた賊軍という印象だけは払拭したかったであろうしな、そこに敵に捕らわれた噂の「聖女」、双方ともに戦う余力は無い。

多額の負債と消したい存在だけが双方に残った、ならば……互いの利益になることを選ぶ」

「捕まつて不憫な目にあつただけじゃ無いってこと？」

いつの時代も力ある者は人によって排除される。

戦士はその命を奪う力が人々の畏怖を誘い、信仰・崇拜に近い信頼を得た聖人は聖職者や貴族の妬みを生み、「危ない」と言う単純かつ最もそうな理由で処刑される。

ジャンヌ・ダルクの場合、一度捕まりはしたものの、直接イギリス軍に捕まった訳では無い

「確かに……フランスは身代金さえ払えば保護できたと思います、けど実際にはイギリスが身代金を払い、彼女の身柄を確保しましたし、その後の異端審問も彼女には当時から認められていた弁護士をつける権利があつたにも関わらず、弁護士抜きで行われましたし……」

「そうなんだ……英雄って大変なんだね」

『……………』

「ついやちよつと……あんた妙な所で勇氣あるわね」



自分たちのマスターは一般人だと頭ではわかっていたが……まさか自分たちが大変だったと言われる日が来るとは思わなかった、何せ否定の仕様が無い、だが領く訳にもいかず。

というか、仮に一般人であっても

・人妻スキーや略奪愛人間によって崩壊していった円卓を抱えたり、

・寵愛を受けたいがためにゲツシュを用いて我が物にしようとした女によって殺され、

・正義の味方になろうと務めた姿を恐れられた為に殺され、抑止と言う名の掃除屋として使い殺されたり

等々の過去を抱えた者に直接「大変だったね」とあつさりと言えるかつ！と言う話である。つい最近カルデアに召喚された3体は特に思い当たることが大きかったのか、何とも言えない表情を浮かべていた。

「……いいか坊主」

「うん？何スネークさん？」

「お前が言ったことに間違いは無い。

もつとも俺は英雄だと思つた事は一度も無いが……ここに召喚された奴らは間違いなく本物の英雄だ。

お前が持つてる以上の逸話に実力、それらと同じくらいに語られたく無い話もある」  
「それは……スネークさんも？」

「当然だ、もつとも語りたくなんぞ無いがな、それに当然ながらここにいる連中も全員そう  
うだ。

ただ、……その醜い部分を隠そうとも消そうとも俺らはしない」

「どう言う意味？」

「お前はジャンヌ・ダルクを含め俺らの事を苦勞した人間だと思ってる。

その心は悪く無い、むしろ俺には出来ない心づかいだ……だとしても同情は決してするな。

こいつらは本物の英雄だ、こいつらが為してきた全てがこいつらの全ての情報だ。

例えばそれが後世まで語り継がれた美談だろうと、人様に胸を張れるもんじゃなくともそれらがこいつらの今を構成してる、もちろん俺もだ。

だがお前の同情はその語り継がれてきた英雄達を殺すことになる」

「……………」

「そのつスネークさん、マスター……先輩の心遣いが間違ってる？」

「いいや、心遣いそのものじゃ無い、その扱い方だ。

坊主含めてそうだが、俺たちは綺麗な物に目を向け醜いものには目を背け瞑る、だが

実際には目を背けようが気付かなかろうが存在している事に変わりはない。

……だからな坊主、例え人様に胸を張れない事とも決して否定するな、それはこいつらを否定する事になる。

自分たちが為してきた事に責任を持たず、逃げるような奴は英雄に成れん。例えそいつが英雄と言われるほど強くともそれは単に独りよがりで強いだけだ。

残した結果を婉曲し否定するのは………そいつの存在を否定し、殺すのと同じだ」

スネーク、真名BIG BOSS。

彼は自分の師を殺し、その師の理想を叶えようと動いた元上司の行為に共感できなかった。

実際には、その上司は「社会そのもの」を作り上げた……いや、作り変え人々の無意識に入り込ませ、国家に溶け込み全人類を基とした強大な社会基盤として君臨した………だが、その社会基盤は「国家」を中心とした世界から、戦争を前提とした「経済」を基にした社会基盤として文字通り暴走した。

彼はその暴走が始まる前に「兵士」を基にした「国家」によって対抗しようとしたが、結局は殺され利用された。

思い返せば、全てが自分が最愛の人を手掛けた事から始まっている

10年近くその師を想い、さまよっていた

その中で見つけた信念と組織は潰された

多くの犠牲者も出た

それでも「自分」は再び甦り、為すべきこと為に動いた

だが時代に殺され・・・利用され

そして再び甦った

その時、時代はもう終わっていた

仲間自分だけを残して既に消えていった

あとは仲間が、蛇を名乗ったもの達が削りに削り、最後に残った1を無に還すだけだった

だからこそ

その行為を消すつもりは無い

なぜなら偽りの息子達は世界を破壊し、世界を救い、そして解放した

自分が半世紀前に作ってしまった世界を覆う檻を彼らは破壊した

それら全ての原因は、どう言い換え伝えられようとも、その元凶は自分だ  
自分の師は自分に殺される前から時代に殺されることが決まっていた

そして

その師は

元凶は

後世に伝えられ無いよう社会基盤によつて良いように・・・作り変えてあつた

「俺はそういう意味で既に殺されている、だがそれは俺が負けたからに過ぎない。

だが少なくとも、ここにいるお前のサーヴァントは殺されることを望んではいないハズだ」

「じゃあ俺は皆んなに失礼なことをしたってこと？」

「あく・・・俺は気にしちゃいねえけど・・・なあお二人さん？」

「……………」

「これからお前が相手にする英霊も同じだ、例えそいつが俺らの敵だとしても同情はしてやるな。」

俺らの敵だからこそ俺らは相手にする、相手取る力もある。だが、そいつの存在を否定する理由までは無い。

「どういう訳で敵対するかはわからんが……自分の責任はそいつら自身でとるだろう」このマスターは歴代の聖杯戦争を見返しても断言できるほど弱い、だが同時に強いと腐れ縁のある3人は直感スキルが無くとも感じていた。

もつともその内の2人は主にスネークの言葉に思うところがあつたどころか耳を貫通して心突き刺ささつたのかクー・フリーンの言葉に頷くことも出来ず、顔を逸らしていたが。

そんなスネークにロマンが神妙な面持ちで尋ねた。

「……君はその……責任を取れたのかい？」

「舞台に立たせてくれた連中のおかげでな、だがそいつらは俺が蹴りをつける前に死んだ」

「……それでも、後悔してないのかい？」

「死にたいと思っていた奴は1人もいない、ただ俺たちが作ったモノを0にする為に動いた。」

何事も無かつたことには出来ない、それをすれば俺に関わつた奴らの全てを亡き者にすると変わらん。

そいつらの記録を記憶にも残さないのはそいつらを殺すことと変わらない、なら俺が生かすしかない。

それが償いになるとも思っていないが……出来る事をしない理由は無い」

「そうか……なら僕から言うことは無いかな」

そう言つて静かに聞いていたロマンも、それだけ言つて下がった。

ダ・ヴィンチもスネークの言葉を否定するつもりは無いらしく、同じように静かに聞いていた。

「……なんかよくわからないけど、悲しいことも嫌な事も忘れちゃいけないって事で良いのかな？」

「あんた、本当に勇氣あるわね……！」

そして何となく理解したらしいマスターと、さつきから危ない発言にツツコミを入れる所長。

なんだかんだ一般人でギリギリ未成年である彼には完璧な理解は難しかった。

それでもその言葉が持つ意味を素直に理解しているだけ、十分だと書いておこう。

何せこの世界ではこんなハズでは無かったと無謀な夢を願つた過去の自分を殺すこと、願ひ、

私が間違っていたと、自分自身の代名詞である剣を抜くことを無かったことにする事

を願った、

そんな英霊が実は居たりする訳だ。

そんな英霊はスネークの言葉に当てはめれば……独りよがりな自殺志願者だと言えるだろう。

もつとも、片方は自分なりの答えを得たらしく、また今回の召喚は世界を救う戦いだと言うことで本人には珍しく乗り気でこの戦いに挑んでいた。

片や本来の側面がどこぞの高校生に惚気たおかげで自分の為すべき型を見つけたらしく、自らを殺す事はこのカルデアでは起こらないだろう……まあどこの誰かまではここで書く事ではないので、詳細は読者に放任する。

「まっそれが俺らのマスターらしいけどなっ、そう気にすんな所長さん、お前も気にしちゃいねえだろ？」

「まあな、素直に話を理解してるなら問題ない、その認識で間違いはないぞ坊主。

……それで、そのエミヤとアーサー王はどうして黙ってるんだ」

「えっ……エミヤ先輩……？何で俯いてるんですか……？」

「……ああ、気にしないでくれ」



「あつ、アルトリアさんもなんかプルプル震えてますけど……?」

「……………」

「……嬢ちゃん、そつとしといてやれ、戦う時になりやあ元に戻るだろうからよ」

「マシユ大丈夫だよ、俺もみんなが強いつて事は知ってるし、わざわざありがとう」

「そうですか……まあマスターが言うのでしたら、私も心配しすぎでしたね」

「そうだよ、だってスネークさんが言つてたじゃないか。」

「英霊は逃げないつて、ちゃんと責任をとれる人たちで独りよがりじゃ無いつて」

「……………」

「と、とりあえずマスターよお！随分と脱線しちまったみてえだし、この軟弱男の話の続

きを聞こうぜー」

「……まあ確かに話がだいぶズレたしな、すまんな口マン」

「ん、けど重要な事だったからね、僕は気にしてないさ。」

それに英霊で無くとも人として大切な所だと思っしね、それに時間はあるから問題無

いよ。

さて、一区切り付いたみたいだし今回の目的を説明したら早速レイシフトに移るよ、

問題無いかな藤丸君?」

「はい、みんなも問題無いかな?」

「鼻からその予定だしな、いつでもイイぜ」

「俺もだ、もつとも俺の場合は坊主をマシユと護衛するくらいだがな」

「ああ、私はいつでも構わないが？」

「付いていこう、マスター」

「……どうやら全員問題無いみたいだね、なら簡単に今回の目的だけ説明してフランスに行ってもらおうよ」

◆? ◆ ◆? ◆ ◆? ◆ ◆? ◆ ◆? ◆ ◆? ◆ ◆

《ブリーフィングから1時間後、管制室にて》

「……うん、レイシフトも上手く行ったみたいだね」

「前回のように爆破されて、コフィンにも入らず、突然のレイシフトでは無いからね。」

これで失敗して意味消失なんてしたら笑いの種にもならないさ」

「……………本当に笑えないし、地味にあり得た事なんだから勘弁してくれ…………」

「まあそう気に病む事じゃ無いさ」

「これだから天才は…………」

ブリーフィングを終え準備も完了した藤丸立香は、デミサーヴァントで霊体化できないマシユと共にフランスヘレイシフトした。

幸い他所からの物理的・魔術的干渉もなく、無事に成功したらしい、数分のうちに連絡が来るだろう。

……………もつとも霊子ダイブによる独特のめまい、もといダイブ酔いは避けられないと思われる。

「それに今の私の興味は彼にだいぶ割かれているしね〜」

「……………彼って、スネークの事かい？」

「君も感じてるだろ、彼が特殊なことくらい」

「……………まあね。わざわざ隠し事が有るって認めてるし、だからと言って誰とも話さないわけじゃ無い。

むしろ反転した騎士王と普通……………かはわからないけど、少なくとも問題はなさそう  
だ。

それに何というか……想像していた以上に人間味があるよね」

「まあ、かのアーサー王が女性だった訳だし、伝承の印象と本物が違うのは良いんだけどね」

「じゃあ君は何が気になってるんだい？」

「そうだなあ、ロマンにもわかるように言えば……彼の在り方さ」

「……何が言いたいのさ」

珍しく、という訳でも無いが、それでも随分と真面目に語ったダ・ヴィンチにロマンも真面目に向き合う事にした。

幸い藤丸達が活動するまでは僅かながらも時間はある、他の職員も気になったのか？人の話に耳を傾け、パネルが発する音が幾分か小さくなって行った。

「まあ近代どころか純粋な現代の英雄なんて私自身びっくりなただけだね。」

エミヤみたく、抑止力との契約者ならまだわかるけど、まさか本当に私達と同じ英霊になれるとは流石の私も予想外だったけれど、彼の存在自体が独特じゃないか」

「……まあ、他の英霊と比べても随分と芯がしっかりしてる気がするけど……」

「何を言ってるんだい？むしろ彼の存在自体は真逆じゃないか」

「真逆？」

そう質問すると

いつもの様に何でも達観してわかってる余裕からか。

はたまたそんな事もわからないのかロマン君、とても煽りたいのか。

カルデアのサーヴァントであるダ・ヴィンチは一杯コーヒーを飲んで満足そうに微笑んでこう言った

「だってそうだろう？彼の発言した内容、在り方はまるで幽霊そのものじゃないか」

## 邪竜百年戦争オルレアン：1—1

「……つああ、……フランス……なのかな？」

「大丈夫ですかマスター？」

「ああうん、……すごい目眩がするけど……」

「おいおい、そんなんで大丈夫かよホントによ」

七つの特異点のうち最初の特異点、フランス。

人理修復のための第一歩として2人の少年少女は歩み始める……まあそのうち片方はレイシフトによる急激な浮遊感と加速感覚によつて酔つた為に足取りはあまりよろしくなかつたりするが、酒による酔いでは無いためすぐに治ると思われる。

「それにしても随分と広い場所に出たな」

「確かにな、こっちは見えんがお前の弓兵の目からしてそつちに敵はいるのか？」

「……少し先に砦らしきものがある、そこから数人の兵士がこちらに向かつてきてるな」

「斥候か、距離は」

「行軍速度からして十分ほどだが？」

「おい坊主……今は無理か、だが今はとにかく情報だ。

俺の独断ですまんがエミヤ、周辺偵察を兼ねて先行してくれ、あいつのの守りはマシユにランサーのクー・フリーンもいる、斥候からは俺が情報を引き出すから手は出さんでくれ」

「……私が言うのもなんだが、相手は人間とはいえ武装した兵士だ、まともに取り合つてくれるとは思えないのだが？」

「心配するな、お前が知らないだけで敵と語り合うのは慣れている、俺の組織のほとんどが敵地にいた連中だ、ナイフを向けられようが話は出来る」

彼が組織していた軍事組織は極めて異様だった。

カリブ海の海上プラントを拠点としたソレは、コスタリカに居座っているアメリカ人を追い出して欲しいと言う依頼から始まり、囚われた現地人はもちろん敵であるアメリカ人を中心とした組織だった。

当然隊員たちは元敵同士、中には実際に敵対した同士がいるのもざらだった……が内乱は一切起こらず、むしろ結束していた。

なぜなら彼ら全員にとってスネークの組織に、仲間、家族に成れたことが誇りでありその誇りを汚す行為を誰もがお互いに許さなかったのだ。

……まあ、実際には他にも隊員たちが作り始めた憲兵隊が強すぎたり、戦闘担当の隊

員たちより研究畑の連中の方がむしろクレイジーで副司令を色々苦しめていたり、それ以上に総司令官が無茶ばかりでそれを全員でバックアップしていたから等々、理由はあつたりする。

「そうか、まああんたがそう言うなら私も異論は無いがね、ならとりあえず周辺の偵察は任せてくれ」

「ああ頼む、何かあつたら……そう言えば無線が無いが、坊主とはパスが繋がってるんだつたか？」

「もつとも今のマスターは魔術師としては毛も生えて無い、彼と直接のやり取りのしようが今の所無い」

「そうか……まあ何かあれば矢文でも飛ばしてくれ」

「ふつ了解した、なんなら風車もつけておこう」

「お前はいつから黄門様の忍びになつたんだ？」

「………何であんたがそのネタを知ってるんだ」

「人生楽ありや何でもあるだろ」

「………行ってくる」

「ああ頼んだ」

この弓兵の涙の後に虹が出るのかはさておき、スネークはだいぶマシになって来たマ



スターの世話をしているマシユとその周りにいる他のサーヴァントに声をかける。

「とりあえず……五体満足でフランスに来れた訳だが坊主、カルデアと通信を取らないか」

「そうですね、では私がマスターの代わりに連絡します、それまで寝てて下さい」

「ごめんねマシユ、もう少しで多分まともになれるから」

「フン、情けないぞマスター、アレくらい耐えられない様ではこれからの旅はやっていけないぞ」

「まあ見た感じ、俺らのマスターは本当に素人みたいだからなあ。

魔術に関してもそうだが、体つきも体さばきも素人だ、全くもって戦いには向いてねえな」

「ハハハ、これでも毎日鍛え始めたんだけどね……」

「まつ、そう一朝一夕に強くなられちゃ俺らの立つ瀬が無えしな、そう焦んな」

「フオウ！」

「フオウも来てたの!?!」

何だかんだで調子が戻って来た藤丸。

ちやつかり来ていたフオウに驚きつつもカルデアに連絡を取っていたマシユが連絡が取れたらしいのでそちらを対応する事にした。

「先輩、ドクターと連絡が取れました」

「うんありがとう……ところでみんなさ、アレって何だろ？」

「アレって……?!？」

と  
突飛押しもなく空を指差した自分たちのマスターに可笑しさを感じつつも空を見る

そこには極大な光輪があった

《やあ藤丸君、どうやら無事フランスに……つてみんなしてどうして空を見上げてるんだい?》

「ドクター、映像を送ります、あれは何ですか？」

「ん?……アレは——何らかの魔術式か?しかも衛星軌道上に……」

「おいおい、あんなの俺の師匠でも無理だぜ……」

「そもそも、宇宙に魔術式が書けるのか？」

「それは……問題無えな、さすがに本職ほどの力は無えけど今の俺も空中にルーンを固定することは出来る。」

別段空に術式を組み込むこと自体は出来るぜ」

「だが上空10、000メートル以上の高高度にどうすれば描けると言うんだ？」

「……そこなんだよなあ」

「マーリンなら……大方女だけを盗撮する様な口クでも無いものに違い無いだろう」

「よりにもよって盗撮ですか!？」

《さすが宮廷魔術師だ、趣味が悪い。》

もつともあれが盗撮目的だとは思えないけど……詳しくはこちらで調べる、間違いない  
 未来消失の一端だろうけど幸い君達に害がある訳では無さそうだ、君たちはまずは霊  
 脈を探してくれ》

「……かの花の魔術師が盗撮魔だとは信じたくありませんが——」

「マーリンはイタズラ好きで女好きのクズだ、はつきり言つて英霊となったこの身でも  
 関わりたく無い」

「……とにかく、ドクターの言う通り私たちがすべき事は多いです。」

周辺の探索、この時代の人間との接触、召喚サークルの設置、……何よりこの時代が  
 特異点となった原因の調査と解決です」

「改めて言われると……結構やる人が多いんだね」

「はい、それでも出来ることから一つずつ片付けていくしかありません」

「まあ千里の道も一歩からだからね、着実にやっていこうか。

……クー・フリーンさんやオルタさんにスネークさん、それにマシユも。

俺に出来る事は少ないけど、人類のために……って言うのと壮大だから、俺たちのために力を貸して欲しい」

「……………先輩」

未来消失、人理焼却、

普通そんなことが起きれば、そもそんな事態に巻き込まれれば何も認識することも無く実質的に死ぬだろう。

だがここにいる少年は運良く生き残り、そして世界と歴史を相手に戦うことになった。

仮にこの戦いに優秀な魔術師や守りの要が加わったとしても、たかが1人や2人では決して戦えない。

「任せろっ！それが本来俺らサーヴァントと役回りだっつーの！

むしろ前線に進んで出て行って俺らと渡り合えるマスターって方が可笑しいんだ。

……それでもお前は俺らのマスターだ、んなら俺らが手を貸すのもお前がやれる事を

やるのも当然だろ？」

「その犬に同じだ、召喚された時から私はお前のサーヴァント、なら私が剣を取るの  
当然だ。」

マスターはマスターらしく後ろでそのマシユマロの後ろに隠れて居ればいい」

「今更何を言う、もつとも俺はせいぜい奇襲をかけるか逃げるかの二択くらいしか選択  
肢は無いがな。」

……それでもここに呼ばれたならやれる事をするしか無い、なら今から始めるしか無  
い、何ならお前の稽古も付けてやろうか「マスター」？」

「・・・みんな」

若干過去の愚痴を混ぜ、皮肉を交え、当然のこの様に、3騎のサーヴァントは答え  
た。

まずマスターとしてこの少年に呼ばれ、応じた時からとつくに決まっていた。

そんなある意味感動的だったりする訳だが。

黒い騎士王は何か思いついたらしく、いつもより幾らか可笑しそうに笑いながらマス  
ターに言ってやった。

「ふつ悪いがマスター、最終回を飾るにはまだ早いぞ？それにアーチャーの事を忘れてはいないか？」

「・・・あ」

「ハッ！あいつにはお似合いだ!!」

「……すつかり私も忘れてました……」

「……すまんエミヤ、俺が独断専行で偵察に行かせた所為だ……」

「だ、大丈夫だよ！エミヤさんも力貸してくれるし！むしろ今も力を貸してくれてるってことでしょっ！」

《藤丸君……それはいくら何でも見苦しい言い訳じゃ無いかなあ……》

「フオー……」

「フオウさんも、何をやってるんだ”っておっしゃってます」

「アハハハ……」

アーチャーエミヤ

思ったよりあっさり自分のマスターに存在を忘れられる、南無。

「ついでにマスター、早速私たちの仕事の様だが切っても良いか」

「・・・えっ？」

「つ周りを囲まれています！数10!!」

《いつの間にツ!? ってか喋りすぎててこっちも周辺を見てなかった!!》

「とりあえずドクター、これって倒しちやっても大丈夫なの?」

《まっまあそこは隔離された世界だから倒しちやってもまずタイムパラドックスは起き

ないから戦っても問題はないと思うけど……って流血沙汰はマズイと思うなあ?!!》

「ですよね……オルタさん、それとクー・フリーンさん、峰打ちで仕留められる?」

「造作もない、ただ少々手間だ」

「まあ心臓貫かなきゃ良いだけだろ?」

《発想が物騒な2人だ!!》

「ま、待つてください! 相手は人間、ヒューマンです! まだ話し合いで解決出来るかと—

—」

「Ennemi attaque!!!」

「……話し合いが何かと言ったか?」

「……何でもありませんアルトリアさん。」

「そうでした、1431年のフランスの地で英語が通じる訳がありませんでした」

「そういう問題じゃないと思うけど……」

《こ、こうなったら僕の小粋なジョークで………が、凱旋門で自害せんもーん!》

「……………」  
「……………」  
「……………」  
《……あつアレ?》

「T o u t m a n q u e r l ' p e ! J e p e n s e q u e m a m r  
e - p a y s a . t . i n s u l t e ! ? V e u i l l e z j o i n d r  
e !」

(総員抜剣!何か我が祖国をバカにした声が聞こえた気がするぞ!!)

ドクターは普通にフランス語なんて喋れない。

当然フランス兵にもロマンが言った言葉を一言一句理解できた者はいない……が、馬鹿にされた気がした。

突然現れたこの集団に対する警戒度はマックスとなり、当然剣を抜いた。

「……ドクター、後で話があります」

《アツハイ》

「……それよりどうすんだマスター、あの軟弱男のせいであんなっちゃまったわけだが」



「流石に現地人を傷つけるのはマズイけど……抑えるためにも一旦戦うしかないかな」

「それが一番早いだろう、もつとも私たちにしてみればいささか手間だが」

「つ来ます、マスター！」

そう言いつつも、黒い聖剣を構え相手にする気の黒い騎士王。

その横に同じく、得物である紅い槍を構え集団を相手取ろうとする青い槍兵。

どちらも一級のサーヴァントであり、集団戦にも慣れている、1分もあればフランス兵らしきこの集団を完全に沈黙させられるだろう。

それでも、向こうはこちらの戦力を正當に認識できていない。

故に2人が構えた時点で向こうも完全な戦闘態勢に入り、彼らに迫ろうとしている。

それを悟ったマシユが盾を構えマスターを守りに入る。

「お前ら、構えを一旦解け」

「何?」

「あん?」

「坊主、30秒くれ」

「えっ、ツスネークさん!」

一言二言、完全にヤル気になっていた2人と自分のマスターに声をかけ、マシユが驚くも気にせず、ツスネークは1人前に立った。

当然警戒していたフランス兵はそちらに最大限の注意を向け、剣を構えつつジリジリと近づいて行く。

だが、

「Je suis d'—sol—. Nous sommes des voyageurs  
r's, il n'y a aucune intention d'accueil  
lir.

Excusez—moi si vous me faites un male  
ntendu, car diverses choses • tranges se  
produisent.

Vous ne connaissez pas non plus?」  
「……え?」

「C'est notre ligne! En premier lieu, d'  
o • vient—tu?」

「: Malheureusement, j'ai abandonné le p  
ays, maintenant, je suis membre d'une pe

tite brigade。」

「……おいセイバー、あいつが何言ってるかわかるか？」

「……お前も召喚されたなら多少はわかるだろう」

「まあなつ、だが訛りが無すぎじゃねえか？俺には早過ぎて聞きとりにくい」

「生憎私もだ、旅人だと言ってるみたいだがな」

「…… OK, nous ne sommes pas tr・s occup・s  
maintenant, mais je ne veux pas me ba  
ttre。」

「J, appr・cie votre compr・hension, heureu  
sement, nous sommes des brigades。」

Nous pouvons galemment fournir des fo  
urnitures。」

「…… OK, guide moi vers notre fort, alo  
rs parlons en detail。」

「Merci」

最後に誰もがわかるフランス語をスネークが言うのと、周りを囲んでいた騎士らしき者たちは多少警戒しながらもその剣を下ろし、砦に向かって歩き始めていった。

サーヴァントや管制室で状況を把握しているロマン、カルデアに来ることが出来る程度には英語が話せる立香

そして勉強熱心なマシユ、その場に遭遇した全員にそれなりの言語能力がある。

だが唐突な流暢なフランス語に対して滑らかに対応できた者はいなかった。

それだけ雰囲気が一触即発で、戦闘体勢だったと言うのもあるが、わかりやすい……英語と似た発音の……単語以外わからなかっただけでもある。それだけスネークのフランス語は現地に馴染んでいた。

「おい坊主、とりあえず交渉で戦闘は回避した。」

俺たちは旅人で旅団ということにしておいた、何だか変な事が起きてるとカマをかけたが思ったよりアツサリ俺の話を受け入れた、どうや……随分と静かだが、俺を見てどうした？」

「いついえ、何というか……素晴らしいフランス語だったなと」

《う、うん。僕がやらかした事だから何とも言えないけど……それにカルデアの自動翻訳を起動する前に話が終わっちゃったから全部は把握して無いけど、それでも随分と流暢なフランス語だった。

あの状況で話しかけるスネークもだけど、よくフランス語が話せたね》

「現地語調達は諜報の基本だ、生前……と言ってもつい最近の話だが、大体の言語は話せ

る。

もちろん日本語もな」

「……傭兵というイメージは筋肉だらけのガタイのいい方達ばかりだと思つてましたが

……」

「まあならず者のイメージが強いのは否定しないが、実際に脳筋のやつはあまり生き残れない。

強いやつは大体自分で考え状況把握ができる奴だ、バカは早く消えるだけだからな」

「その通りだ、考え無しはすぐにやられてしまうぞ、マシユ、マスター」

「あつ、エミヤさん」

「……………」

「……マスター、そしてスネーク、どうして私から顔を背ける？」

「まっ気にすんなアーチャー」

何故か、本当に何故か珍しく、同情的に声をかけ肩を叩いてきたクー・フリーンに妙な感じがしたものの、たいした事では無いと判断し、エミヤが簡単な報告を続ける。

「とりあえず周辺には他に拠点は無さそうだ、もちろん敵らしいものも居ない。

……まさか本当に話し合いで解決させるとは思わなかったが」

「わざわざ戦う理由も無いだろ、それに連中も戦う意思はあまり無いらしいしな」

「? それはどういう事でしょう?」

「あの者らの纏う雰囲気ではわからないかマスター、あれは敗走した兵たちが纏う物だ」  
「えっ?」

「どちらかと言えば疲弊している兵士たち、だがな。」

どちらにしる坊主にはわからないだろうが……連中、未だに「戦ってる」

「それは……まだ百年戦争が続いてるって事?」

《それは無いよ、1421年なら既に休戦協定がイギリスとは結ばれている。

多少の小競り合いならまだしも、兵士たちが疲弊するほどの戦闘が起こるとは思えない》

「前方にある砦は随分とボロボロだったがね。あれでは最低限寝るだけの場所としか言えない」

それはつまり、砦としては全く機能してないという事だ。

それだけの被害を今もなお受けているらしい。

「……とりあえず事情を聞こう。」

今何が起こってるのか、それだけでもわかれば聖杯が関わってるある程度の目処も立つだろうし」

「先輩の意見に賛成です、とりあえず今はフランス軍の兵士さん達について行きましょ

う」

素人であれ戦士であれ英雄であれ、全くの情報も無しに暴れまわろうとするほど愚かでは無い。

まずはスネークが作ってくれた足がかりを頼りに、一行はフランス兵に着いて行き、砦へと向かった。

## 邪竜百年戦争 オルレアン：1―2

「……詰まる所、王は殺されオルレアンでは虐殺、しかもそれらは数日前に処刑されたジャンヌ・ダルクが蘇ってやったと？」

「ああ、俺はオルレアン包囲戦に式典にも参加してあの聖女さまの顔も見た。

……だから間違いない、見た目がとても違っているがあれは聖女さまに違いない」  
道中、骸骨との戦闘も交えながらも、クー・フリーンと

皆へと着いたカルデア一行は、スネークが何処からか出てきたレーションをエサ……もとい交換材料と交流の足がかりとして使い、落ち着いてフランス兵から話を聞くことが出来た。

その結果、ジャンヌ・ダルクが処刑された後蘇り、フランス王シャルル7世を殺害しオルレアンを占拠、さらに虐殺も各地で行なっているらしい。

コレはフランスという国家の崩壊であり、自由と権利を主張し始める国家が消えることを意味する。

つまり過去改変には十分すぎるターニングポイントであるという事だ。



※察してるかもしれないけど、カルデアの自動翻訳を適用してみんな誰でも理解できる言語にしてるよっ！

by ロマン

「あんたからもさつさと逃げたほうがいい、この国はもうそんなに持たないぞ」

「そうだな……だが少しばかり用がある、それが終わり次第さつさとずらかるとしよう。」

それに食料に余裕はあるからな、俺たちの心配より自分たちの身を心配しとけ」

「……………それもそうだ」

「……………他の連中は違うが、俺は国を捨てた。」

産まれた国はあるが故郷はない、だがお前やお前らには守りたいと思える場所がある

んだろ？」

「……………ああ」

「ならその心と場所を大事にしろ、生きていれば大抵どうにかなる。」

壊された街も時間をかければ復興する、そのためには生きている人間の力が必要だ、

そのために……何が大事かは言わなくてもわかるだろ」

「……………命あつての人生だ、何があろうが生き残つてやるさ」

「その意気だ、生きるという意志さえ無くさなければ生き残れるもんだ、生きる意志を無くした奴が生き残れる訳がないからな」

「……………悪いな、あんたらは旅人なのにこつちが元氣付けられちゃった」

「氣にするな、俺として情報が得られただけで釣りが来る、別段大したこともしていないしな」

「いや、あんたに元氣付けられたのは確かだ、その……………ありがとな」

「ふつ……………ならもう少し休ませてくれ」

「ああ、一向に構わない、何かあればすぐに伝える」

そう言つて互いに握手をし、スネークは一室から出る。

砦の廊下は負傷兵に溢れ、脚を引きずりながら歩き、所々に包帯で巻かれた体が道に置かれていた。

その光景自体を見慣れているスネークは歩みを止めず、そのまま仲間達が集まつて居るであろう砦の入り口へと着いた。

そこには周辺警戒の任を直接マスターから与えられたエミヤとアルトリア・オルタが居た。

「どうだ」

「……………わざわざ聞くか騎士王、これで聞いていたんだろ？」

そう言つて指で耳の部分を押さえるスネーク。

立香が事前にダ・ヴィンチちゃんから貰つていた魔術と科学を応用した通信機だ。

時を超え、時空を超え、声を届けることが可能なダ・ヴィンチ工房印の代物だ。

……尚、この存在を知った時、マスターに事前に渡しておくとスネークは文句を言っていた。

今もエミヤは周辺警戒に徹しながら無線に耳を傾けている。

「しかしお前の考えまではわからん」

「それもそうだ、ならマスター達が戻ってきたらだな……それにしてもまだ食料を配つてるのか？」

「いや、マスターとマシユ嬢が負傷兵たちを見かねてな。

ルーン魔術を使えるクー・フリーンを連れて重症兵だけを治しに行った」

「……まあ問題は無いか、流石に医薬品を置いていく訳にはいかん。

だからと言ってあの坊主とマシユに見捨てろという訳にもいかんしな、まあやり過ぎなければ良いだろう」

「甘すぎるマスターだ、あのアイルランドの御子もわかって付き合ってるから問題無いだろうがな」

「そのマスターの判断自体認めたのはお前もじゃないのか？」

「……私には直接関係のない事までわざわざいう必要があるか？」

「それもそうだが……どうやら帰ってきたみたいだな」

すると砦から見慣れた3人が戻ってきた。

その足取りや身なりがしつかりしていることから、大した問題は発生しなかったらしい。

……もつとも、アイルランドの大英雄が付き添っている相手に大立ち回りを演じろというのが難しいが。

《どうやらみんな揃ったようだね、なら一旦情報の整理だ。

まず、今回の特異点の原因はジャンヌ・ダルクによるもの、それで間違いないみたいだね》

「うん、聞いてて気になったのは見た目が変わっていたって兵士の人が言ってたことだけど……」

「だな、治療した兵士も言ってたぜ『ジャンヌ・ダルクが悪魔と契約した』ってな」

「生前は聖女として生き、死に際に魔女だと言われ、死後に悪魔と取引し聖女ではなくなった……とは思えん。

魔術というのをあまり知らんが、その世界でも蘇生魔術つてのは禁忌とかなのか？」

《まあ色々と小説化はされてるからある程度スネークも検討がついてると思うけど、古来から死者の蘇生は試みられてきた。

試みられてきた。

けど、そのどれもが完全な成功には至っていない。わかりやすいのがフランケンシュタインとかかな」

「ならこの時代のジャンヌ・ダルクが蘇った可能性は低い訳か」

「付け加えるなら、そのジャンヌ・ダルクさんは強すぎる人の様なものや、ワイバーンを使役してようです」

「マシユからワイバーンを召喚する魔術があるって聞いたときはびっくりしたけどね……。」

けど、この時代の魔術でもそれって難しいことなんだよね？」

「ああ、マスターの時代に比べりゃここはまだ魔術のレベルは高えけどな。」

それでも竜種を召喚できるレベルの魔術は無理だろ、それに関しては軟弱男の方が専門じゃねえの？」

《僕の名前は軟弱男で決定なんだね……それはそうと、ドラゴンやワイバーンの使役はその時代でも無理だろうね、古代でもドラゴンの使役はそれなりに高位の魔術だったみたいだし。》

けどそれも、ジャンヌ・ダルクの復活も含めて聖杯があれば可能だろう」

「ロマン、それはジャンヌ・ダルクが蘇ったのではなく、サーヴァントとして現界しているという意味か？」

《あつ……ウーン、まだ現段階じゃ断定は出来ないかな。

ただ、スネークや藤丸君が聞いた髪や肌の色が変わつてると言うのが……》

今のところ、この特異点を作った原因は間違いないく蘇った（？）らしいジャンヌ・ダルクだろう。

そして、本来虐殺など絶対にしない、聖女とまで呼ばれた彼女が虐殺を行ったのが事実であれば、それは……

「……どうした、私を見て」

「お前みたくオルタ化してる可能性が高い、と言いたい」

「……なるほど、まあ確かに私の『本物』と呼ばれる方は、性格も良く、崇高で完璧な――」

「いや、それは無い」

「………続けてくれ」

「……私でも、このように圧政を敷く暴君という側面がある、もつとも『if』に過ぎないがな。

それでもこの私になる可能性が『本来の私』にもあつた訳だ」

《言うなればジャンヌ・ダルク・オルタ、か。

確かにそれならありえるね、これがレフの仕業なら随分と性格が悪いな》

「……とりあえず、これからの指針はオルレアンを目指す、で良いのかな？」

「そうですね、そのためにも今はまず霊脈の確保かと思えます」

《じゃあ決まりだ、君たちの南西b——待て！急速に接近してくる反応があるぞ！しかも多い!？》

《噂をすればだな、こちらでも視認した、東から大量のワイバーンだ。

どうやらこの兵士が疲弊しているのはあれを相手取っているからの様だ》

「敵襲！敵襲!!」

ロマンが叫んだ直後、馬に乗った伝令が声を張り上げる……がその声に反応できるほどの余裕はフランス兵には無く、既に士気が擦り切れている。

それでも傷だらけの武器と体を引きずり戦闘態勢に入って行く。

「エミヤ、数はわかるか」

《……おおよそ50だ》

「だそうだが坊主、撤退か、それとも——」

「ここで迎撃！連戦で悪いけどクー・フリーンさんとオルタさん!!」

「全くもって入れ食いだなっ！俺の望み通りで最高だがなっ!!」

「これでも貴様の剣と誓った身だ、それにこの程度、食前酒にもならん」

「エミヤさんは戻ってきて周りの兵士さん達も含めてカバーして下さい！

代わりにスネークさんは周辺警戒をお願いします、マシユは俺の護衛お願い！」  
「叩き込んだ甲斐があつたなロマン、上出来だ！」

《ああ！所長なんかよりよっぽど頼り甲斐がある!! 《!?!》》  
「了解しましたマスター！」

無線から何か聞こえた気がしなくても無いが、今は目の前のワイバーンの群れである。既に誰でも目に見えるくらいにまで接近しており、フランス兵達も隊列を組み応戦する構えだ。

一方で、今まで散々な目にあっているらしいクー・フリーンは、自由に戦闘できることから、言葉通り先鋒で一番槍を担うため、颯爽とその群れに突っ込んで行きその後をアルトリア・オルタが追う。

そんな中、エミヤがいる砦の高所にスネークはいた。

「数が少なければ俺でもこいつでどうにかできるが……こういう時にアサルトライフルが無い」

「確かに、そのボルトアクション式のライフルでは効率的とは言えないな。」

もつとも、遠距離での扱いまで取られると私の役目がなくなってしまうのだがね」

事前にダ・ヴィンチちゃんやロマン、ほかカルデアのスタッフに各英霊達に魔術に戦術・戦略に関して詰めに詰め込まれた立香は、持ち前の妙な度胸と器用さが相まって、



中々の指示を出せている。

エミヤを合流させスネークを見張りに回したのも、スネークの武器が空を飛ぶ集団には向いていないと判断したからだだった。

「そうか？お前は十分接近戦でもいけるだろう」

「流石にランサーとセイバー程ではないさ……だが、アーチャーとしての仕事はしよう」  
「そうしてやれ、あの坊主とマシユの弱点は優しさだが弱くはない。」

そこら辺はむしろあの騎士王の方がわかつてるだろうしな、それにまだ脆い」

「わざわざあんたに言われるまでも無い、精々その目で私の活躍でも視界の端にでも収めてくれ」

「わかった、何かあれば知らせる」

了解だ、と言わんばかりに右手を軽く挙げ答えると、エミヤはそのまま飛び降りた。

既に先鋒2人が突き刺し、切り込み、多くのワイバーンを相手にしている。

おかげで大多数がその2人によって仕留められているが、取りこぼしも少なからずある。

だがそれも、一匹であれば陣形が整っているフランス兵でも相手取ることができ、集団で襲ってきててもエミヤが集団で襲うことを許さず、時にはマシユがシールドバツシユで弾き飛ばしている。

「この分なら……問題ないだろう、現地の兵士も士気は落ちているが技量は本物だな」  
本来15世紀に存在するはずのない、ドラゴンの亜種であるワイバーン。

多少小さいとは言え、それを相手取るのに飛び道具無しで戦う難しさをスネークはよく知っている。

……サーヴァントならかくや、その相手をこの時代の人間である兵士が出来ている事に素直に驚いていた。

《火を吐かないだけこいつらはまだマシンだな》

《そんなのお前のところの赤い竜くらいだろうよっ！》

無線をオンにして話す先鋒のやり取りを聞き、炎を吐く竜など数えればそれなりにいるだろうと思いつつも、周辺を見渡す。

「……………ロマン、いま暇か」

《何だい？まあ藤丸君が思った以上にしつかりしてて、他のサーヴァント達が戦ってるから僕は安心して観ていられるけど……あつアレかな？話し相手かい？》

「違う、俺の周辺……正確には俺の左後方に何か居ないか？視線を感じる」

《視線を？ちよつと待ってくれ……………うん、確かに反応がある、それも2体だね、ただ……………》

「どうした？」

《ああ、一体は反応からして小動物、つぼいんだけど反応がはつきりとしてるんだ。

けどもう一体は恐らくサーヴァントなんだけど……こう、反応が小さいと言うかハッキリしないんだ。

小さい方はハッキリと分かるからなおさら変なんだよね》

「霊核が壊されてるのか？」

《ごめん、そこまではわからない、それに敵かどうかも——》

「いや、殺気をまるで感じない。

……むしろ、出て来るタイミングを逃してどうしようか悩んでいる猫の様な健気さを俺は感じる」

《……視線でそこまでわかるものなの？》

「まあ健気さは俺の直感だがな、だが今もこうして隙を与えてはいるが仕掛けてこないあたり、少なくとも話は分かりそうな相手ではある」

《……一応言っておくけど、1人で相手をするのはどうかと思うよ？》

「問題ないだろう、とは言うがまだ情報が出揃ってないからな。

とりあえず向こうが落ち着き、エミヤが暇になったら俺1人で向かう、無論背後に控えてもらうがな」

《それなら問題無いね、幸い既にワイバーンの数は10を満たさない。

「こちらで周辺のモニタリングはしておくから、もうエミヤさんと一緒に行つていいと思ふよ」

「……みたいだな、なら俺が声をかける、すまんが周りの監視は頼んだぞ」

《任せてくれ、それくらいしか僕には出来ないしね》

「そんなことは無いだろう、あの坊主が上手くやれてるのはお前さんの手心もあるだろうに」

《それは……まあ、もつとも僕もあそこまですぐに上手くやれるマスターになるとは思わなかったけど》

「それだけお前も坊主も良く出来てる証拠だ、くれぐれも敵を見逃すことの無いように頼む」

《藤丸くんを褒めつつ僕には遠回しにプレッシャーを……!?!》

「こちらから言わせれば、モニタリング位ちやんとやれと言う話だ。」

「……もつとも、ステルス戦闘機みたく誤魔化のきく自分やアサシンが相手ならあまりあてには出来ないが、監視の目が無いより断然マシである。」

「手慣れた無線機をいじり、無線の周波数をエミヤ個人の周波数に変える。」

「エミヤ、俺の方で未確認の反応が2つ出た、すまんがバックアップを頼めるか?」

《了解した。なに、そこからならマスターもあんたの援護も出来るさ、すぐに移動する》

「……なら側面に回るとするか」

未だ自分の方を確認している2体に不審がられ無い様、一旦砦の奥に引っ込んだ様に見せかけ相手の死角に入り、そのまま相手が潜む南西部の森へスネークは潜んで行った。

◆? ◆◆? ◆◆◆? ◆◆◆◆? ◆◆◆◆◆?

「……戦闘終了です、マスター」

「うん、まあクー・フリーンさんとオルタさんがやってくれただけで俺は何もして無いけどね」

「あ? んな事ねえぞマスター、お前はちゃんと俺とこいつに『戦え』って命令したじゃねえか?」

「えっ? けどそれは当たり前じゃ……」

「んな訳あるか。」

確かにマスターがサーヴァントを戦わせるのは当たり前だけどよお……大抵は自由

にやらせてくれねえ。

思惑やら私情やら何やらが無駄に絡まって、全力出すなとか殺すなとか気分の乗らねえ命令ばっか出しやがる」

「それはお前の運の無さだと思いがな」

「うっせえな、テメエも『戦うな』って言われてたんじゃねえの?」

「……………さて、何の事だか」

「あゝ忘れてたフリですか、まっ俺には関係ねえから構わねえけどよっ」

「……アレツ? エミヤさんは?」

《すまないなマスター、私は一旦後方に下がらせてもらった》

「あん? それはスネークの役目だろ、何でお前がそこに居んだ?」

《そのスネークが僕たちを観ていた存在に気付いてね、少し前からエミヤくんに一応の支援を頼んでその存在とのコンタクトを試みているよ》

《そう言う訳だ、言っておくがスネークの方は無線でも応答しない、ついでに私からも目視出来ない》

「はあ!? それでお前がどうやって支援するんだ!」

《……私も文句の1つくらい言いたい、ハッキリ言ってスネークの方が上手だ。

彼のスキルなのかもしれないが……弱いサヴァントらしい気配はこの場所から

もわかるが、スネークの気配は探ってもまるで掴めん、カルデアの方の反応からもロストしたそうだ」

「……あいつ、本当はアサシンなんじゃねえか……？」

《うん、僕もそう思うよ。》

気配遮断スキルならこちらの魔力反応からも消えるのはわかるんだけど……何で動体検知も出来ないかなあ……》

「……とりあえず、その俺たちを見ていたっていう人たちの場所はわかるんだよね？」

《ああ、それは僕の方でも確認できている、その砦から南西方向にある森の方だ、ちょうど霊脈もそこにある》

「ではマスター、スネークさんがその不明存在とコンタクトした後、合流しますか？」

「そうだね、流石にスネークさんも敵じゃ無いつてわかれば連絡してくるだろうし……けどその前に……」

「？何かすることでもありましたか？」

「何言ってるのマシユ、フランス兵の人達に挨拶くらいした方がいいでしょ？」

「あっそうですね、一言だけ声をかけておきましょう」

そう言つて、先輩とともに砦に向かい別れの挨拶をしに行った2人。

(( ( ( 礼儀正しいなあ…………… ) ) ) )

そんな一般人らしいマスターに対しては時代と性別を超え、その場に居合わせた者たちの心は通じ合っていた。

(……いやあく、あんな良い子にあんな良いマスターに会えたなんて)

(マスター……その道は確かに正しいが、一度間違えば俺の様に……)

(あれがマスターねえ……まっ、過ぎちまったもんは仕方ねえ。……にしても、ありや氣付いてんのか?)

(甘過ぎる奴だ………彼の者)が託しただけはあるわけだ)

……それぞれの心情と事情は全く噛み合っていなかったが。

◆? ◆ ◆? ◆ ◆? ◆ ◆? ◆ ◆? ◆ ◆? ◆ ◆

「……ふう、どうやら無事に終わった様ですね」

「……………」

「あついえ……はあ、しかしこの後はどうしましょう。」



確かにほぼ無傷で彼らが戦いを終えたのは幸いです、喜ばしい事でしょう……ですけど出るタイミングを逃してしまいました……まるで出番を取られてしまった気がしなくも無いのですが……。

そもそもこの事態は一体どうなってるのでしょうか？それにこの子は一体……？」

「……ここで止まっても仕方ありませんね、とりあえずここから移動しましょう。幸い野宿するには適した場所です、翌日からはオルレアンに関しての情報を——」

「その前にまず周辺の状況確認じゃ無いか、お嬢さん？」

「ヒヤアアア!？」

「ニヤアアア!？」

「……そこまで驚く必要は無いだらう」

一方その頃、スネークはまさにその不明存在とコンタクトしていた。

……まあそのやり方が突然背後に現れると言う心臓に悪い以外の何者でも無い代物だが。

「あつえつその、決して怪しい者ではありませんっ!!」

「俺やフランス兵のことを見守っていたにも関わらず変な事を言う奴だな」

「……………あなた、サーヴァントですか？」

瞬間、立ち上がりスネークから距離を取る不明存在1。

具体的には金髪と旗を持つ白い鎧を纏った……少女と言うには色々と言っている美人だ。

だが少なくともやはり召喚された英霊らしい、スネークが自分の事に気付いていたと知った途端戦闘態勢に入った。

もつとも、その間合いは確かに槍の様に扱うであろう旗の間合いではあるが、本職のランサーとして現界したアイルランドの大英雄をも相手取れるスネークにはなんの戦術的優位性も無い。

だがその手の技術は本物ではあるらしい。

「ああ、まあな。

少なくとも俺たちは嬢さんに敵対する意思は無い、ついでに先ほどここに来たばかりでな、色々と情報を知りたい……話を聞く限りお前もこの事態の解決に動きたい様だったが、どうだ？」

「……失礼しました、これでも私もサーヴァントですので普通の人にはバレませんので」「それは悪いな、隠れんぼに関して俺の方が上手だ」

「隠れんぼですか……なかなか面白い事を言いますね？」

「そうか？」

実際、この伝説の傭兵以上に「隠れる」事に関して右に出るものはいない。であれば逆に、隠れている相手を見つucker事も大抵の相手なら容易い事だ。

「ええ、だつて子供つぼくありませんか？」

「……こつちは本気なんだがな。」

まあファーストコンタクトとしては上出来か、それなら先に名前を名乗るか。

俺の名前はスネークだ、クラスはライダーとしてこの場にいる……まあほとんどの英雄には知られて無いがな」

「えつ、そんな真名を……」

「そんな大した事じゃない、むしろ俺が隠れんぼ好きのおじさんだと美人に思われ続ける方が大事だ」

「……ふふ、それもそうですね。」

それでは私も……我が名はジャンヌ・ダルク、クラスはルーラー、貴方にお会い出来て嬉しいです」

「……ほお、まさかこんな所で聖女様に会えるとはな」

これには素直はスネークは驚いた。

何せ年頃であろうお嬢さんがまさか英霊であり、あのジャンヌ・ダルクだとは信じて

はいなかった。

……もつとも、勘と見当は付いてはいたのだが。

「意外ですか、ならこれも神のご配慮なのかもしれませんね」

「……さあな、生憎俺は神様は声は届けても手は貸さん存在だと思ってるからな、居るのかもしれないが」

「そうですね、私の口からは我が主は確かに居ると思います、としか言えませんから」

「……驚いた、説教でも食らうかと思っただがな」

「では逆に聞きますけど、一人の田舎娘が突然神の声を聞いた！と言われて貴方は信じますか？」

私なら言っている本人を少し心配しますよ」

「……そいつは随分な皮肉に聞こえるんだが」

「ええ、そうかもしれないね。ですが一般的にはそう思われる事くらい私も理解して  
ます。」

なら神の声以前に存在自体を他人にとやかく言う資格は誰にも無いでしょう？」

「……なるほど、かの聖女様から俺はありがたい言葉を得た訳か、サーヴァントになるのも悪く無いな」

「ふふふ、貴方は本当に面白いですね」

「そいつは光栄な事だ。」

「……さて、こうして話せる相手だとは十分にわかった訳だ、俺のマスターや仲間と合流するでしょう。」

嬢さん……いや、ジャンヌ・ダルク、あんたも一緒に来てくれるとありがたい」

「ええもちろんです、それと私の事はジャンヌで構いません……それと」

「なんだ？」

「この子」も一緒に連れて行って構いませんか？

「どうやら一緒に召喚された様なのですが、私には心当たりもなくて……」

「この子？どこにいる」

「恐らく先ほど驚いてしまったので地面に……あつ出て来ましたー！」

「こうしてスネークはまず、不明存在1：フランスの救国の聖女、ジャンヌ・ダルクとのコンタクトに成功した。」

「……おい」

「はい、どうかしましたか？」

「あれは……本当にお前と同時に召喚されたのか？」

「ええ、多分ですけど私がここに召喚された時に隣にいたので……どうかしました」

「……俺はあいつを知っている」

「そうなんですネ……えっ!」

そして2人の目線の先には不明存在2がいた。

その体と同じくらいのバックパックを背負い

しっかりと背筋を伸ばし

耳と尻尾を生やし

体には毛で特徴的な模様が描かれている

首回りは白く、胴には茶色いジャケットを羽織りベルトで胸元を締めている

そして黒いゴーグルを掛け

白いひげを生やし

黄色いヘルメットを被っている

一体お前はどうかやって耳を生やしているんだと言いたくなる存在

お前はどうかやって素材を集めてきているんだと言いたくなる存在

そしてなんだかんだ可愛らしい存在

されどその生存能力と探検家としての技術は本物

伝説のジイに仕込まれたネコ……いや違う

「トレニヤー！トレニヤーじゃ無いか!!」

「……………ンニヤー！」

トレジャーハンター、トレニヤーである。

## 邪竜百年戦争オルレアン：2—1

「……では、ジャンヌさんは噂の『竜の魔女』とは違う側面のジャンヌさんなのですね？」

「ええ、私も先ほど現界したばかりで詳細は分かりませんが、ここには私とは別のもう一人のジャンヌ・ダルクがいる様です」

カルデア一行は、ジャンヌ・ダルクと接触したスネークからの無線で森の中の霊脈でキャンプを張ることにした。

そして現在、カルデアのマスターである藤丸立香とそのサーヴァントであるマッシュ・キリエライトの2人が

ジャンヌと情報を交換した。

「そして俺たちはこの歪んだ歴史を修正しに来たんだ」

「……なるほど、ではあなた方は聖杯戦争とは無関係なのですね」

「一応は、もつとも歴史の歪みの原因であろう聖杯の回収が目的なのでそう言う意味では全くの無関係では無いのですが……」

「お気になさらないで下さい、私はルーラー、聖杯に願いはありません。」



それに聖杯戦争そのものを否定しませんが、今回の聖杯戦争は正常では無い様です、それに世界そのものが焼却されているとなれば余程のこと。

であれば、その事態に対応してゐるあなた方にも聖杯を得る権利も有るのでしよう」

「ご理解感謝します、マドモアゼル・ジャンヌ」

その結果わかつたのが、まずジャンヌ・ダルクが2人召喚されているらしいと言うこと。

次にこちらのジャンヌ・ダルクは歴史通り、今のフランスを救いたいと言うこと、主にこの2つだ。

一見少ない様に見えるが、現地の協力者がいると居ないとでは勝手と苦勞が違ふ。

それが今回の特異点の当事者との関係者でもあればなおさらである。

カルデアとジャンヌ・ダルクの最終的な目的は違ふが、フランスを救う点では共通点がある。

故にカルデアは聖女：ジャンヌ・ダルクに協力を要請、彼女もこれを快く許諾し、立香との仮契約も結んだ。

こうして初日は、ワイバーンという予想外の敵は出現したものの、順当に特異点解決の足がかりを掴むことができた。

いま現在は、夜になったこともあり、適当な場所を見繕い無事にキャンプを張つてい

る。

《………とところで、みんなが突っ込もうとしないから僕が言うけどさ………あの“ネコ”は何なの?》

いや、一つ問題があった。

「それが私にもわからなくて……」

いや、一匹いた。

「ドクター、ネコは直立二足歩行をするものですか? 私が本で見た限りではフォウさんと同じ様に四足歩行だったと記憶してますが……」

「いや……まあ二足歩行はしないよね普通」

「私も……こんな動物は見たことがないな」

「その弓兵に同じだ、俺も見たことがねえ……つてどうした騎士王様よ?」

「………」

全員がキャンプファイヤーを囲む中、視線の先にはその円の中に平然と紛れているヘルメットとピッケルにスコップを装備しているネコらしき動物がチョココンと立っている

る。

「……若干名はなぜかジツとそのネコらしき動物を見ているが、その視線の隣にはなぜか蛇がいた。」

「スネークさんはお知り合いらしいのですが……」

《えっ、スネークはその猫の正体を知ってるの?》

「何だ知らないのか? トレニャーだ」

《……ウン、ごめん、僕は知らないや》

「と言うかトレニャーって名前でしょ? その……ネコみただけで、どう言う存在なの?」

「何だ、坊主はアイルーも知らないのか?」

「いやつまスターどころか俺らの誰も知らねえよ!」

「そうか、まあ俺も最初は知らなかったからな、もつともチコの奴は知っていたが。」

とりあえずトレニャー、自己紹介してやれ」

「ンニャー! ニャニャ、ンゴくウーニャ、ニャーニャ、ニャニャニャツニャ!」

「だそうだ」

《『イヤツわかんねえよっ?! (わかりませんよ!?)』》

「フオオオオウウウ!!!」

フオウさんは激怒した、かの謎生物からセリフを奪わねばならぬと決意した。そもそもネコの気持ちなどフオウさんにはわからぬ。フオウさんはカルデアの謎生物である。

マシユの肩に、胸に乗り、時折どこから現れる魔術師（笑）から逃げて暮らして来た。けれども、自分の立場と出番には一匹分くらい敏感だった。

このままでは自分の立ち位置とかキャラとか出番が奪われると直感した。

「……その小動物が、ものすごい剣幕で俺に文句を言つて来てるんだが」

「フオウさん!? 大丈夫ですよ! フオウさんには私がいます!!」

「フオオオオウ! フオオオオオオオオ!!」

「……無駄に賑やかだな」

「……そうだ、クー・フリーン、私たち、2人は、見回りに、出た、方が、良いと、思うのダガ」

「……ソウダナ、すまんマスター、俺ら、2人は、少し周りを、見渡してくる」

「あつうん、じゃあお願い」

「任せろ」

そして若干2名はその場から早々に離脱した。

……2名とも直感スキルなど持ち合わせていないはずだが、この場においてはダメだと何かが言っている気がした

残りの暴食王はジツとトレニヤーを見つめている。

「お二人が言葉通り、目にも見えない速さで周辺を見回りに行きました……」

《うん、2人ともこの場から逃げたかつたんじやないかなあ……》

「何か言ったか？」

《いや何も……それで、本当にその……何だつけ？トレニヤーについて教えてくれ》

「そうは言ってもな……俺も説明したことがないからな、少し待ってくれ」

そう言ってトレニヤーの顔を見るスネーク。

それに釣られて、トレニヤーも見上げる様にスネークの顔を見る。

「……そう言えばスネークさんはトレニヤーさんの言葉を理解している様ですが、スネークさんもトレニヤーさんの言葉を話せるんですか？」

「ん？ああまあな、現地語調達は諜報の基本だからな」

《現地語がネコ語ってどう言うことなの……？》

「えつとじゃあ、試しに喋って頂けませんか！」

「ああ、構わんぞ……ウニヤ、ウニヤンニヤウニヤ、ウニヤー」

「ニヤニヤ、ニヤニヤニヤツニヤニ！ニヤーニヤーニヤーニヤ、ニヤニヤ」

『……………』

「ニヤニヤ、ウニヤーニヤニヤニヤ」

「ニヤニヤ」

「ニューウニヤ、……ふむ、ならそう説明しよう……どうしたお前たち、俺を見て」

「いえっそのっ……………何というかつ……………！」

「はいっ……………ジャンヌさんが……………おっしやりたい事は私もっ……………わかりますっ……………」

想像してみよう。

良い歳した40代の髭面のおじさんが真面目な顔で可愛らしいネコっぽい動物にウニヤウニヤ言っている場面を

……………はつきり言っつてシチュールすぎる絵である、人によつては変人だと断じるだろう。

だがお年頃な女性陣2人にとってはこの絵面は笑いのツボだったらしい

「スネークさんっつてやっぱりすごいんだね」

「そうか？」

「うん、だって何を言ってるか全然わかんないし！」

「……………そうか」

《……………僕からは何も言わないよ》

「ニヤァ」

「…………………………フオウさん」

「フオウ？」

「……………頑張れば私もフオウさんの言葉を……………」

「フアア!？」

想像してみよう。

良いお年頃の美少女が微笑み　ハニカミながら可愛らしい生物であるフオウさんに  
フオウフオウ言ってる場面を

……………はつきり言ってるイロイロ来るものがある絵である、人によっては紳士な対応に追  
われるだろう

個人的にはナニかしらコスプレをした状態でやって頂けると更に良いと思うのだが、  
どうだろうか？

「色々脱線しそうだが話を戻すぞ、このトレニヤァ、アイルーについてだったな？」

《う、うん。僕たちの誰もが知らないからね、唯一知っている君から説明してもらいな

きやね。

そのトレニヤールの言葉も当然理解できない訳で》

「それもそうだな……でだ、まず最初に俺も今さつき知った事なんだが」

「?何でしょう?」

「前にあつたときは違かつたんだが……おい、トレニヤール」

「ニヤール!オイラのニヤはトレニヤール、見ての通りトレジャーハンターニヤ!」

トレニヤールはトレニヤールニヤール!ネコでもアイルーでもないニヤール!」

「……という訳で、こいつは普通に人の言葉を話せるぞ、安心してくれ」

『……………』

スネークの言葉で場が静まり帰つた、パチパチと火の音だけが辺りに響く。

だが彼女たちの中では何かバチバチ言っているらしい、ゆつくりと女性陣3人が立ち上がった。

「うん?どうしたお前たち?」

……待てマシユ、なぜ盾を構える?そつちの聖女様はなぜ旗を構えている?



「ついでにその騎士王はどうしてトレニャーを獲物を見る目で見ている？」

《あーこうなることをあの2人は察したんだね、多分色んな経験から》

そしてスネークとトレニャーの周りを囲んだ

「ニャニャ!?!なぜにニャーたちは囲まれてるのニャ!」

「それは——」

「だって——」

「お前の——」

「「最初から喋ってくれば良かったじゃないですかっ!!」」

「その毛並みをモフモフさせろおおおおオオオオオ!!」

「なぜにニャーだけが言われるのニャアー!!?」

「何故ってお前……喋らなかつたからだろう……あの騎士王の方は知らんが」  
「フオツフオツフオツ（ザマア）」

「オイラの悪口が聞こえるニヤア!!」  
「知らん」

こうして突如、1対3のバトルロワイヤル(?)が始まった。

付け加えると、スネークは視線がトレニャーに集中しているのを良いことに早々に離

脱した

とても良くできたマスターはそれを許し、普通に座って食事をしていた

ついでにロマンからは人としてどうなの何とか言われたが、そも相手はアイルーなので多分問題ない

というかスネーク自身が気にしていない

◆? ◆ ◆? ◆ ◆? ◆ ◆? ◆ ◆? ◆ ◆

こうして数十分の格闘の末、3対1の数の暴力によってタコ殴り……は流石にしているが、それなりの仕返しとOHANASHIをトレニヤーに対して行った3人は意気揚々に食事にありついていた

訳がなかった

「ハア〜疲れたのニヤハア〜ン」

「はあ……はあ……はあ……トレニヤ〜さん……速すぎませんか……?」

「地中に……潜る……とか、セコく……ありません……?」

「うむ、この毛並みは素晴らしい、やはり私の目に狂いは無かったな」

「ニヤハア〜」

「そう言えないお前、トレジャーハンターなのにいつも小綺麗だな」

「ニヤハア〜」

「……しばらく自由に弄ってやれ」

「無論そのつもりだ」

《うん、それは良いんだけど……そのネコ本当に何?》

「ネコじゃないニヤ!トレニヤ〜にやあ〜(▽)(▽)」

「……そこら辺は俺が代わりに説明する」

そう言つて、黒い甲冑を着込んだ騎士に　もふもふ　されているナゾ生物の解説を始めた。

「まず最初に言うが、こいつは死なん」

『……えっ?』

「ああ、別に不死身ではないぞ？」

だが銃を撃とうが大剣で切られようが貫通矢を食らおうが死なん、一旦地中に退避して回復して戻ってくる」

《いや待って待って待って、そんな超生物がいるわけ無いだろう!?!》

「何なら今見せてやろうか？」

《もつと嫌だよ!?!》

「……まあ俺もここであまり発砲はしたくない、それに死なただけで痛くない訳じゃ無いしな。」

次にこいつはちよつと特殊でな、トレニャーはさつきも言ったがトレジャーハンターだ、それも別の世界からはるばるやって来てな、俺も一度水先案内を頼んだ、そして宝を見つけるのが得意だ」

《ああもう滅茶苦茶だ……って言うかスネーク自身もその別の世界に行ったのかい!?!》

「いや、俺は怪物の島に案内されただけだ、そこで色々と戦って素材を調達したがな。」

そこはある意味で宝の島だったな、聞く話じゃアンとメアリーの2人も上陸したらしい」

《お宝探しっておとぎ話じゃあるまいし……それで宝って一体どんな?》

「確か……轟竜の重牙や核竜の粘液、あとお前がとってくるのは大竜玉とか言っていた

か？」

「そうニヤ……というかオイラ、ポツケ村から出発したはずニヤのにいつの間にかここに居たのニヤー、隣にはそのお姉さんがいたニヤ」

「そう……ですね、私も召喚された場所がフランスだとわかっておどろきましたが、それ以上にこのネコさんが居たのでびっくりしました……というか！喋れるなら喋れるって言うてくださいい!!」

「……オイラが言うのもあれニヤンだけれど、今まで人の言葉を喋れなかったのに、突然喋れるようにニヤつたら普通ビビると思うのニヤ……知らない事だらけなのに何故か知ってる事にニヤってるし……」

《……とりあえず、順番に。》

まず、トレニヤー自身は聞く限り別の世界から来たみたいだけど、「聖杯」そのものの存在は「もう」知ってる事なんだね？」

「そうニヤー……まあオイラ、戻ってもポツケ村じゃ仕事あんまりないから願いなんでそんないにや……」

《なんてリアル過ぎる話なんだ……!》

「お前、まだ仕事ないのか」

「……ぜんぶオイラの自業自得なのニヤ……モンニヤン隊なんて作らなきゃ良かった

ニヤ……」

「……とりあえず私が慰めてやる」

「シーニヤー」

《……どこの世界でも、世知辛いのは変わらないんだね……》

「その様ですね……」

まずネコもどきが働いてる事に既に驚くことをやめた状況に驚くべきだろうが、そんなツツコミを入れられるのはこの場には居なかった、見回り（本気）の2人も戻ってくる心配がない。

だが、まだ時代を超え無線でやり取りを勝手に聞いて居た天災はトレニヤーとスネークの言葉を聞き逃さなかった。

《ところで、大竜玉って聞こえたんだけど私の気のせいかな！》

《なつレオナルド!? 君部屋に籠ってなんかやってたんじやないの!?!》

《この天才が珍しいものをみすみす見逃すと思うかい?》

「……オイラ、この声の主は知らニヤいけど、関わりたくニヤいニヤー!」

「流石だな、実際あいつに捕まったら解剖されるぞ、お前」

「その時は遠慮なく相手にピツケルを突き刺すニヤ」

《私はそんなにマッドサイエンティストじゃないよ?》



《確かにそんなレベルの研究者じゃないね、それでご用件は？》

《そうそう、まずそのネコ》

「だからオイラはトレニャーニャア!!」

《まあトレニャーが言ってる居たことが本当だとして。

まあ君がトレジャーハンターだから貴重な素材は手に入れられるとしてだ。

その聖女、ジャンヌ・ダルクが唐突に召喚されたことを踏まえると、私としてはこのトレニャーがこの時代に召喚された理由の仮説が立てられるんだ》

唐突にビシツと画面越しに指をトレニャーに向けるダ・ヴィンチちゃん。

それを見て呆れながらロマンが口を出す。

《召喚された理由？それは聖杯によって……あれ？どうして召喚できたんだろ？》

「……確かに、聖杯があつたとしても召喚者、つまりマスター無しでの召喚は本来不可能なはず。」

それなのにジャンヌさんは召喚されましたし、そもこのトレニャーさんは……英霊で

は無いですよね……」

「……冬木の場合は先にマスターが居たんだったか？」

「その通りですスネークさん、その後何らかの原因でああなった様ですが……」

「……生憎、お前たちと戦った記憶はしっかりと残っているが、どうしてああなったかの

理由は私の知った事では無いぞ」

「うん、じゃあ立てられる仮説って何？」

《ようやく全員、私の話を本気で聞く気になったね》

「そも、お前のいつもの振る舞いが原因だが……まあ良い、続けてくれ」

《それでは私から簡単に説明しよう、もつともあくまで仮説であつて断定できる代物じゃ無い。

それを証明する証拠もあまり無いしね》

そう言いながらも全員が自分の話を聞く事おかげで機嫌が良さそうに、万能の天才が解説を始めた。

《まずは通例通りの召喚だ。

マシユが言った通り、マスターがいて初めて英霊召喚が行える、そこに付け加えて英霊召喚のために必要な膨大な魔力を賄うもの、私達ならカルデア、普通は聖杯がこれに該当する》

「さらにそこに聖杯戦争が本来なら加わるんだよね？」

《その通りだ藤丸君。

だが今回発生し、君が巻き込まれたこの人類史修復という作業は聖杯戦争とはかけ離れている。

何せ既に「何者か」によつて聖杯が用意されそれが既に利用されている、その結果私達が動いてる訳だからね」

「人類史の焼却……ですか？」

《もつとも本来の聖杯を降ろすための戦いでは無いだけで、別の意味では聖杯戦争とは言えるだろうけどね。

まっ、それは個人の認識によるだろうから話を戻すよ。

さっきの兵士たちが言つてたことから恐らく、というか間違いなく黒ジャンヌは聖杯を使つてサーヴァントを召喚してるんだろう、使役していたとかいう目撃談を含めてね」

「なるほどな、そのジャンヌ・オルタはどこぞの魔術師に召喚でもされた訳だ」

《もつともレフの言い方からして協力者がいるのも確かだ、レフがやったとは決めつけられないけどまあ、その線で問題は無いだろう。

むしろ問題なのはまず一つ、どうやってそこにいるジャンヌダルクが召喚されたか、だ》

「……………どうして、でしょう？」

「召喚された本人ですら理由がわからない訳だが……ジャンヌ・オルタの逆か？」

「？ 逆とは？」

「単純だ、お前を召喚したのがこの異常事態を解決しようとしてる奴……まあ少なくとも俺たちの敵ではない第三者による召喚の可能性だ……が、ほぼ無いな」

「えっ、だってそれだったらほとんど説明が付くと思うんだけど……」

「……あのなあ坊主、人理焼却でほぼ人類は完全に消えた状況で、一体誰が動けるんだ？」

「……確かに」

「……まあどこぞかにいるのかもしれないん神様ならどうにかしてくれそうな物だと信じた  
いが、それなら焼却される前に動いてくれて話だ」

「それを言われると耳が痛いですね……」

「なに、あんたが気にすることじゃ無い、ただ単にいるかもしれない味方は存在しない、  
それだけだ」

《その通りだ、私もスネークと同じく第三者による実質的な私たちへのフォローによる  
召喚では無いと考える》

「それじゃあ何なの？」

《単純さ、聖杯そのものによる召喚さ》

その言葉に一瞬フリーズする立香の頭、だがすぐに再起動しおかしいと指摘する。

「つけど普通、召喚者が居ないとそもそも召喚できないんじゃないの？」

《そうだよ、 “普通なら”》

「……まあ普通じゃ無いだろうな、この状況は。

何せごく一部の年代以外全てが消失、いや焼却されてるんだからな、それに加えて聖杯戦争と銘打ってにおいて既に聖杯の担い手は決まってる訳だしな」

《ああ、その結果特異点が発生してる訳だ、時代の修復力では敵わないほどの時代の歪み。

だが “敵わない” だけで修復力自体は今も働いている訳だ》

「えつと……結局、ダ・ヴィンチちゃんはなにが言いたいの？」

「………時代の修復力に聖杯そのものが関わることはあるのか？」

《流石だね、もっとも私の答えとしてはアリ、だ。

ロマンが事前に説明してたと思うけど、ぶつちやければ人一人が死んだところで特異点は発生しない。

タイムパラドックスとかは起きるだろうけどそれはあくまで関わった当事者の時間軸においてだけだ。

だって地球からすれば、他の人間からすれば未来永劫関わる事がほとんど無いだろう？ 時間も殺された人物が関わらない様に流れていき、やがて殺された人物が生きて居た場合と同じ運命を辿らせる。

もちろん、百年単位の話にはなるだろうけど」

「しかし、歴史的に重要な人物であればそうとは限らない、という事ですよね？」

《その通りだマッシュ君。》

それも国家滅亡、文明破壊といった物であれば人類の未来自体も消せるだろう、それこそ15世紀のフランスに大量のワイバーンを召喚したりね》

「という事は・・・ごめん、全然ジャンヌさんが召喚された理由に繋がらないや……」

「先輩、恐らくですがその時代の修復力とも言える力が聖杯に働きかけてジャンヌ・ダルクを召喚したんだと思います」

《もつとも、聖杯自体が召喚したと私は思うけどね、その修復力自体が特異点という状況によってあまり上手く働いて居ない可能性が高いから》

「じゃあジャンヌさんが召喚されたのは……ジャンヌさん自身を止めるためってこと？」

「……………そうなる、のでしよう」

「随分な運命だなこれは、まるで聖杯に意思があるみたいだが」

「聖杯自体に意思はあると思います、実際の聖杯戦争でも聖杯自体がマスターを選び令呪を渡しますから」

「自分のツケは自分で払え、という訳か」

だとしたら、だとしても、当事者としてやりにくい。

何せ自分自身、それも自分の醜い部分と戦う必要がある訳だ、それも自分自身にもまた存在する相手と。

その心中を察することが出来るのは……この場では過去を変えようとした暴君位だろう。

「……つまり私が来たのは私自身のカウンター、という事ですか」

《そうだろうね、でなければ聖杯戦争の調停者であるルーラーなのにこの場に召喚された説明が難しい。

もつとも単独顕現のスキルでもあれば別だけど》

「……まさかとは思うが、トレニヤーが来たのは何らかのカウンターか？」

「ニヤ？」

《そういう事だと私は思うよ。

もつとも君の話を聞くと、過去には自分からこの世界にやって来たこともあるみたいだから何とも言えないけれどね》

「おいおい、ここでモンスターハントをする羽目になるのは勘弁だぞ……」

「オイラは素材が取れればいいニヤ……けどウラガンキンはだけは勘弁して欲しいニヤ……」

「安心しろ、現場監督はここには居ない、それに火山がここらには無い、何ならオーヴェルニュにでも行くか？」

「あそこは火山ではありませんよ？それにここからだいぶ南ですし……」

「勘弁ニヤー！」

（（なんで地元の人を知ってる火山の名前を知ってるんだろう））

この手の知識（世界中の地理や言語）に関しては意外と博識なスネークである。

もつとも、組織の中に詳しい奴がごまんと居て、酒をかわしながら散々聞いた話でもあるが。

というか、無駄にトレニヤーとその筋の人間から聞いたおかげでモンスターの知識まで備わってる。

「……それはそれとして、本当にそうなら俺は火力不足だな」

「それは……」

「本当にモンスターが現れるニヤ？」

「モンスターってワイバーンみたいな奴のこと？」

「何を言ってるニヤー！あんなのザコだニヤ、数があると面倒だけど一匹一匹は大したことはないニヤ」

「だな、問題なのは大型が出て来た時だ」



《大型つてスネークが言っていたドラゴンのこと？》

「ああ、正しくは竜種だがな」

「せめてドスランポスニヤらまだオイラでもどうかニヤルけど……」

「まあその時はその時だ……もつともランチャーやロケット系が今の俺には無いが黒い聖剣に紅い呪槍、それに加えて宝具使いまでいる、全体としての火力は申し分ない、そうだろう？」

「……やはりバレてたか」

「まだあんたの方が化け物扱いがな」

「俺は蛇だからな、あながち間違いではないかもしれないが」

そう言いながら自分の背後から現れた男2人に当然のように声をかける。

他のサーヴァント達も気付いていた様だが、気付いていなかった立香とマシユは素直に驚いた。

「……あーマスターあれだが、嬢ちゃんはやっぱまだまだだな」

「仕方あるまい、つい最近まで文学少女だったろうからな、だがマスターの盾としては頂けないな」

「うっ、すいません……」

「そこまでにしておけ脱兎二匹、マシユマロに対するそれ以上の圧力は、このピツケルの

制裁が下ると思え」

「ウサギにするな!!」

「つうかこいつと同じとかありえねえっ!!」

「お前らさつきまで見回りしてだだろうが、2人で」

「一体誰が原因だと思ってる（やがる）……う？」

「……思うけど、エミヤさんとクー・フリーンさんつてそこまで仲悪くないよね」

「そうですね、これが男の友情……という奴でしょうか？」

「フオーン」

「ただ単に反りが合わないだけニヤ、というかオイラのピツケル!!」

人どころかフオウ君とトレニヤーにまで突っ込まれるウサギ二匹。

……片方一名は犬のような気もするが。

「……………ところで、上空から何か降りて来ているのだが大丈夫かね？」

『上空？』

突然、弓を取り出し空を指差すエミヤ。

つられて全員が上を見ると……そこには確かに、僅かに漏れる月明かりの中、何かがゆっくり降りて来ているのが見えた。

「ドクター、周辺の反応は何かある？」

《周辺？……あつ、今反応した！ってこれ上空3000mからだつて!?》

「……あの、気のせいじゃなければここに向かつて来てる気がするんですが」

《えつちよつと待つて……計算完了！あと90秒でちょうどそこに到達する!》

「まさか敵にでもバレちまつたか？」

「それより、あれの中身が爆弾なら面倒だぞマスター」

「そうだよね……仮にそうじゃなくてもこのままこつちに来るのは不気味だし、先に落とした方が——」

「待て待て、今確認した、悪いがあれは恐らく俺の宝具だ」

『……………はあ!?』

「……そう言えばまだ確証が得られず言つてなかつたな、まあ説明が面倒だ、直に見てくれ」

そう言つて何事もない様に座り騎士王の上で再び にやーにやー（▽）（▽）していた

トレニヤーに餌付けするスネーク。

その光景自体は微笑ましいものだ、が周りは何とも思いきれない思いをしていた。

とりあえずアルトリア（黒）がトレニヤーを再びいじって90秒を過ごした

〈90秒後〉

生身のいたって普通の人間でもわかるくらいそれは近付いてきた。

それはパラシユートが付いていた段ボールだった、しかも一人が入れる位の余裕はある。

バサっという音とともに段ボールは投下され、そのまま地面に着くかと思われた。パラシユートは空中で燃えて消えた。

《なっ魔力反応が無いのに消えただっ!?》

「そりゃあこいつは科学的なものだからな、魔術も何も関係ない、というか俺の仲間に魔術関係者はいなかったな」

「魔術師は身分を隠すのでわからなかったのでは?」

「うーん、よく知らないけど知られたく無いならまず傭兵にならないと思うけど……?」

「あっ……／＼／＼」

「……しかし、魔術使いの一人くらいは紛れてそうなものだがね」

「俺のところの諜報班の諜報能力を知らんから言えることだな……はつきり言つて俺自身、俺の部隊は一体どうやってるかの詳細を知らんところの方が多い、あのパラシュートの仕組みも詳しい事は俺も知らない」

《科学は行き過ぎると魔法と変わらないうつて言うけど、本当にそうなのかも……》

「そいつはブーメランだな、俺から言わせてもらえれば英霊だとかレイシフトの方がよっぽど魔法に思えるが俺の思い違いか？」

「あつそれは俺も思う」

《それを言われると僕は何とも言えないけれど……それより、君の宝具の方が気になるかなあ?》

「ああ、そうだな」

そう言つてスネークは落ちてきた段ボールに近寄り

そのまま体ごと入った

『………は?』

一瞬の間

その次には先ほどまでは装備していなかったライフルを背負ったスネークがいた

ついでにダンボールは土となって消えた

「おお、カズのやつわざわざM16のロングバレルにサプレッサーを着脱式にしたか。

出来ればロケット系も欲しかったが……まあ潜入するときの邪魔にもなるか、それにスタンを新調できただけでも十分だろう、これから先必ず必要になる」

そのままライフルを前へ持ち替え、何かをブツブツ言い始めた。

……この場ではスネークがどんな感想を抱いてるのがわかるものは誰一人としていなかった。

「えっと……スネークさん、とりあえずマスターの俺や他の奴にもわかる様にも説明してくれないかな？」

「……そうだったな、つい柄にもなく興奮してしまった」

(柄には合ってると思うがな……)

若干犬猿の仲なはずのウサギ2匹が全く同じ心情を抱いていたが、誰にもわかる事なくスネークの宝具(?) 解説が始まった。

「まあ……いつはさつき言った通りだが俺の宝具の………まあ使用法の一つだ。

この間、解析で不明だった顔の部分の宝具は、俺の組織・部隊の運用を宝具化したものだ」

《君の組織……と言う事はMSFかい?》

「……まあ俺が作った軍隊ではあるがな」

「つまりあなたの私兵ってことか？」

「そうなる……そしてあいつらは随分と優秀みたいだな、こっちの無線で今まで連絡を取れなかったが情報はくれるらしい」

「そう言つて手から白いものを取り出す、それは数枚に分けて書かれている手紙らしい。」

「……らしいが文字が無い。」

「スネークさん、その紙には私がお見受けする限り文字が書かれて無いのですが……」

「そうだな、だが遊び心溢れた連中だ、大方こうするんだろ」

「ヒラヒラとなびく紙をキャンプファイヤーに近付け、そのまま紙が焦げないよう紙を炙る。」

「あつ、炙り出し！」

「そう言うことだ、どうやらそれなりの遊ぶ暇さえあるらしい」

「そう言いながらもどこか嬉しそうに手紙を炙っていくスネーク。」

「同じく昔、お婆ちゃん家でやった懐かしい光景に嬉しそうに観ている立香。」

「ついでにエミヤもどこか懐かしそうである……が他の英霊たちはこう言う炙り出しには縁がなかったのか驚いている、特にマシユとジャンヌは全く同じ顔をしていた。」

具体的には何故文字が浮かび上がって来るのかと、手紙を下から見上げ観察していた。

そんなこんなで。

キャンプファイヤーの周りは一旦顔芸大会にもなっていたが誰にも気付かれることなく終わった

「……よし坊主、読め」

「えっ俺？ スネークさん宛ての手紙じゃないの？」

「わざわざへ拝啓、俺たちのBOSSのマスターとそのサーヴァントへ」と書かれてるなら俺はついでだろう」

「……ホントだ、一番最初にそう書かれてる」

《ハアーわざわざご丁寧にどうも……って何で藤丸君や召喚したサーヴァントのことまで知ってるんだい!?!》

「それも含めて書いてるだろ、良いから読んでくれ坊主」

「うん……じゃあ失礼して」



## 邪竜百年戦争オルレアン：2-2

へ拝啓、俺たちのBOSSのマスターとそのサーヴァントへ。

まずは、唐突なバルーンと段ボール配送に詫びを入れる、人騒がせなのは重々承知だがこちらとしても挨拶をする術とタイミングがなかった、最初に謝罪する。

さて、まずは誤解消も兼ねて俺たちの自己紹介といこう。

この手紙を書いている俺自身の名前はカズヒラ・ミラー、そこにいるスネークの軍隊、MSF《Militaires Sans Frontières》の副司令を務めている、MSFについては……詳細は書くと長いからBOSSに託す。

次に俺たち自身の状況だ。

BOSSにしかわからないだろうがほとんどが1974年のMSFだ、メンツはその時とほとんど変わってない。

ただ科学技術に関しては現代、2015年代までの一般的な物も使用・加工可能だ。

現在、急ピッチで研究開発班が総力を結集してそちらとの情報交換を可能にしようとしているが、現段階では間に合わなかった。そのため、ワームホールを応用してBOSSの武器とともにこの手紙を添えた。さすがに人を遣わせる勇氣は無いからな。

ついでに軟弱男Dr. ロマンが心配するだろうからこつちが先に説明するが、B O S Sの持つてる端末から一部の情報だけはやり取り可能だった、そこから読唇術と映像解析でサーヴァント・聖杯戦争・人理焼却に関する大まかな内容を把握しただけだ、それらのシステムにはまだ入り込んで無い。

それと現状俺たちが出来る支援についてだ。

総合的に判断すると、俺たちはB O S Sの宝具として何処かの人理焼却とは関係ない次元空間に取り込まれてる。

今の所、俺たちが生きていく上では何の問題もないが隊員たちはB O S Sの支援をしたがっている。

現段階では装備や武器の補給と移動手段の提供のみしか確実にそつちの世界へ届けることは出来ない。

メタルギアに関しては研究開発班が改造している、恐らくフランスにいる間には間に合わないだろう。

ただ、諜報班の見立てでは霊基再臨によってB O S Sとの繋がりが強くなれば物資だけでなく人員の派遣や支援砲撃も可能になると推測している、そこら辺はそつちの人間が専門だろう。

それとB O S Sの端末のアップデートを用意した、この手紙を読み終えたらB O S S

に渡してやってくれ。

最後になるが、俺たちはBOSSの軍隊だ。

だがBOSSがマスターであるお前に就くなら俺たちもお前のために動く、遠慮なく使ってくれ、微力ながら俺たちの出来ることをしよう。何か疑問や質問があればBOSSに聞いてくれ……………山猫より

◆? ◆◆? ◆◆◆? ◆◆◆◆? ◆◆◆◆◆

「……………これで終わりみたい」

「Militaires Sans Frontières……………国境なき軍隊、ですか」

「ああ、もつともMSF自体は既に瓦解しているがな」

《いやつ藤丸君!それにみんな!確かに丁寧なお手紙を貰ったけどおかしいよねえ!》

まずスネークが持ってた端末自体しらなかったけど、ワームホールって書かれてるんですけど!》

「何を言ってるんだロマン、ワープくらい普通だろう」

《エ、エミヤくん!?!》

「まあ世の中あらゆる宝具を取り出せる宝物庫が空間から出てくるもんだし気にするこ

とねえって」

《……エエー》

実際、エミヤは宝具で異空間を展開するためそんなにおかしい話では無いと判断した。

他の2人はまずびっくり玉手箱の如く宝具を射出してくる金ピカ野郎を知っているため、不自然だとは思わいらしい……ジャンヌ・ダルクやマシユはあまりピンと来ないらしく、まずそんなに驚いていない。

「……それで、スネークさんの宝具はこの手紙にある通り、物資の支援が受けられるってこと？」

「まあそうなるな、もつとも坊主や他の連中には食料と医療物資以外ではあまり役に立たんがな」

《それでもどこに行っても食料に困らないのは凄いことだと思うよ？

サーヴァントならまだしも、藤丸君やマシユは人間だからね、水と食料が尽きれば死んでしまうんだから》

「それもそうか」

「それならまずは送られてくる食料がマズくないか確認する必要があるな、早速注文するべきだと私は思うのだが」

「……一利はあるが、人の宝具を出前とおなじ感覚で使うのはどうかと思うのだがね？」  
手紙を読み終えて早々、暴食王がアツプを始めました。

それに付き添う赤い弓兵（笑）がアツプを止めました。

「そういえば、先輩が読んでいた手紙では紙をスネークさんに渡して欲しいと書かれて  
ませんでしたか？」

「あつそう言えばそうだったね」

「そうだな……坊主、お前はSFは好きか？」

「えっ、急にどうしたの？」

「良いから答えろ、お前さんは近未来的なものは好きか？」

「好きか嫌いかで言われたら……嫌いな男の子はいないでしょっ」

「そうか？ならその手紙を持ってろ、良いものを見せてやる」

「?！」

そして、良いことを思いついた典型的な含んだ笑みを浮かべながら、スネークは腰のホルスターから何かを取り出した、それはとても四角く、それでいてちょうど手のひらサイズに収まっていた。

その物体が気になるのか、年頃で好奇心旺盛なマシユはもちろん、他のサーヴァントも様子を見守る。

「おい坊主、その手紙を俺に見せるように持ってきてくれ」

「あつこんな感じ?」

「そうだ、そのまま持っておけよ」

そう言うのとスネークはその四角い物体にくっついていて、ボタンを押した。

するとその箱から透明なスクリーンが3Dで飛び出してきた。

「えっ何これ!」

「これは……小型のプロジェクター、ですか?」

「少し違うな、こいつは……iDroid、あらゆる情報のやり取りが可能な携帯情報端

末だ」

「えっじゃあこれスマホなの?」

「そんな安っぽい物じゃないぞ、よく見とけ坊主」

自慢げに語りながら、スネークが端末を立香が持つてる手紙へ向ける。

すると突然、端末からビームらしきものが飛び出し手紙の内容を読み取っている!

しかもその絵がものすごくカッコいい!

小型端末に3D液晶、加えてビームである!!

《All information up dating……up dated……:up  
 learn, this idroid is the latest state.》

「先輩！この機械喋りましたよ！喋りましたよ!!」

「すげえ……まるで映画みたいだ……」

「そうだろう、そうだろう？」

他にも周辺のマップにリアルタイムでのフルスクリーンでのやり取りも出来るぞ！

当然画質は4Kだ!!」

「スゴい!!」

《………イイなあ、スゴくイイなあ………!》

《コラ、私が作った方がより良いものを作れるんだけど?》

《………だってあれ少なくともダ・ヴィンチちゃんの改造したスマホより性能良いよ?》

しかも3Dグラフィックのプロジェクト機能に、多分ネットワークに繋がたらリアルタイムで常に情報更新出来る代物だよ?しかも4Kだからその場で解析も——》

「………とりあえずロマン、無線を一旦切れ。」

私はまだわかるが、他のサーヴァントでは話について行けない、そっちの話はそっちでしてくれ」

《あつうん》

《聞いてるかいロマニ？そもそも私は万能な——》

私には知った事では無いが………これが終わったら、彼は試作機を使わされるのだろうか。

とエミヤは勝手に思っていた。

一方で、一通り語り終わったスネークは満足そうに、立香とマシユは何故か少しトリップしていた。

「先輩……私たち、いま近未来に来ているのかもしれない」

「俺もそう思うよ……マシユ」

「いやつ、ここは思いつきり過去だと思うが……」

「そう野暮なことを言うなスネーク、少年少女には……時にこんな時必要だろうか？」

「……まあわからんでも無いがな、だがそんな少年少女はそろそろ寝る時間じゃ無いかな？」

「確かにな、嬢ちゃんはデミ・サーヴァントだからまだ問題ねえけど……流石にマスターはな。」

いくら俺でも無理強いさせるつもりは今は無えよ」

「私も同じだ、それにマスターが崩れてしまったら私たち全員の戦力ダウンに繋がる」



「……とりあえず、マスターだけ寝かしつけるか、すまんがマシユ、マスターを寝袋まで運んでやってくれ」

「はい、さあ先輩、寝ましよう」

まだ若干トリップしてらしいマシユだが、足取りはしっかりとしている。

もう少しすれば元どおりになるだろう……羞恥心の波に襲われながら。

その足取りをまるで母親の言うに、慈愛に満ちた笑みで見守るエミヤ、その顔を不気味がるクー・フリーンとアルトリア、そして直立二足歩行でその二人を観察するトレニヤの三竦みが出来上がっていた。

「……ところで、私からも一つ質問しても良いですか？」

「ん、俺にか。当然構わんが……どうかしたか？」

「いえ、それほど大した事では無いのですが……何故 *“Military Sانس Frontiers”* と言う名前を？」

“国境なき軍隊”……私の勘違いでなければ、普通の傭兵集団であればこんな名前を付けないと思うのですが……」

「じゃあどんな名前だ？」

「えっ？えっ……血濡れた……いや、オール……うーん……」

「いやつ、そんな本気で考えなくて良いぞ」

「えっ!?! いやつえつと……はいい……」

「……お前さん、本当に町娘みたいだな」

「ははは……お恥ずかしい限りです」

「……マシユ・キリエライト、ただいま、帰って来ました／＼」

「おう、マスターの様子はどうかだった？」

「もうぐつすりです、私が寝かしつけたらすぐに寝てしまいました」

「まあ結構疲れていただろうからな、だが明日も早い。」

それに明日からは各地を移動して情報を収集する、ありがたいことにこの時代をよく知るガイドも居るわけだしな」

「ええ、そうですね、お力になれることは少ないかもしれませんが、案内は任せて下さい」

「はい、お願いします……すいません、私も眠くなつてしまったので寝てもよろしいでしょうか？」

「ああ、お前も慣れない野営にこの旅だ。」

火の番と周りの警戒は俺たちでしておく、安心して寝ておけ」

「ありがとうございます、ではみなさんお先に……」

そう言ってマシユは、そそくさとその場から離れ、自分のキャンプに入ってしまった。

帰って来たと言った時から顔が赤く、オドオドしていたのは火が怖かったのだろうと思っただけのことにした英霊たちだった。

「あの娘、さっきのことを引きずってるようだニヤ、顔が赤かったニヤ」  
「フオウフオウ」

……英霊たちだけだった。

◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆?

「……マシユも寝たか」

「本当は起きていられるのだろうかまあ結構だ、私だけでも十分守れるしな」

「素直に疲れていたんだらうとも言えれば良いものを……」

「何か言ったかコック」

「いいや何も……それで、まだ話はあるんだらう聖女さん？」

「……………」

良い子が寝静まり、五体の英霊が同じ火を囲む。

この場でそれをもうありえない事だと突っ込む野暮な者はいない……少年少女がいては作れない、独特の雰囲気が始めた。

その雰囲気を感じたのか、トレニャーは周りの収集物を集めるニャ、と言つてすぐこの場を離れた。

「……まず、皆さんに告白することがあります」

「ふむ、聞こう」

やがて観念したのか、はたまた元から覚悟が決まっていたか。

ジャンヌ・ダルクが口火を切った。

「…… 私というサーヴァントの召喚がイレギュラーだったか、それとも——わたしが数日前に死んだばかりの地に召喚されたからでしょうか、今の私には『記録』に触れることができませぬ」

「『記録』……それはつまり英霊の座からの情報がお前さんには無い、と？」

「ええそうです」

「仮に情報が無くとも、貴様も戦う事は出来るだろうに、わざわざ告白する必要も無いだろう」

「……その言い方はどうかと思うがね、だが確かに戦場に支障は無いはずだ」

「だな、サーヴァントとして戦えるなら問題ねえだろ」

「まあお前の動きは本物だ、例え情報のバックアップが無くともサーヴァントは戦える様だしな。」

「少なくとも俺への構えは本物だったが？」

「ええ、確かに私は今もジャンヌ・ダルクです、戦った記憶も経験もしつかりと覚えていきます。」

「……ですが、『英霊としての記憶』が私にはありません」

「……何だそれは？」

「深妙な面持ちで告白するジャンヌ・ダルク。」

「だがその内容に全く理解できなかったスネークは普通に聞き返した。」

「その反応に、『無理もないですよね』、と笑いながらもジャンヌ・ダルクは話し続けた。」

「私も上手く説明できないんですけど……その、今の私はサーヴァントの新人の様な感覚なんです」

「……………」

「先に言ったように、今の私には英霊の座からの情報に触れる力すらありません。」

故に「サーヴァント」として振る舞うことが難しい、それこそまるで、生前の初陣の時のような気分なんです。

マシユさんは救国の聖女と私のことを言いましたが、今の私にはその力はありません。

なのでその……あなた方の足手まといになるのでは、と」

本来、聖杯戦争での英霊召喚では聖杯からの様々な情報のほか、時間軸の概念のない英霊の座からサーヴァントとして現界した際の記録を得て召喚される。

確かに生前の記憶はある、だが今のジャンヌ・ダルクには「サーヴァント」としての記憶が一切無かった。

「……私が言うことでは無いが、別に気にすることでは無いはずだ。

少なくとも、足手まといということは無いです、何せここは正しく君の本拠地だろう？」

「俺は何とも言えねえけどな、別に戦えればそれでいいだろう？」

「ハッ、戦闘狂の民族ならそれで構わんのだろうがな」

「ああそうだけ？」

そりゃ周りに迷惑かけてりゃ流石にどうかと思うけどよ、別に人様に迷惑かけてるわけじゃねえんだ。

むしろ新人なら、変に気張ってやらかす心配も無えだろ？」

「ふん、そもそも戦いになればここに在る者共に比べれば素人だろう。」

「足手まとい云々前に、比較すること自体が間違っているだろうに」

「ははは……」

アルトリア・オルタのストレートな言葉に苦笑するジャンヌ。

確かにセイバーである騎士王、ランサーにイルランドの大英雄、アーチャーに抑止力の代行者と、正面戦闘においては主力となる三騎士と聖女様とを同じ土俵に立たせること自体が間違いではある。

例外はあれど、この3人と戦力で比べるのは確かにお門違いではある。

「……もう少し言い方があるだろうがお前ら……ならここに在る全員に質問するぞ」

「えっええ」

「構わないが？」

「おっ何だ？」

「……続ける」

確かにお門違いではあるが、それでは相手が萎縮するか自虐的になるだけである。

ため息を吐きながらスネークは自分を見つめる4人に単純な質問をする。

「聞か、今ここに在る中で一番足を引張っているのは誰だ？」

『……………』  
その言葉に全員一旦唸る。

もつともジャンヌ・ダルクだけは少々深妙な顔を作っていたが。

「あー…………アレか、あのネコか？」

「言っておくがトレニヤーはマシユとジャンヌ・ダルクとその騎士王3人に追いかけてられて平気な顔してたがな」

「…………ありやネコじゃねだろ」

「ではアレかな、私かね？」

「ああ確かに、弓兵のくせに突っ込む貴様かも知れないな」

「馬鹿言うな、後方支援と俺たちの調理は一体誰がするんだ？」

「…………そうだった」

「いやっ忘れてたのかよ…………」

「……………やはり、私…………ですかね？」

「……………はあ」

他三役がどうにかしようとして役を演じてる（上手くは無い）があまり効果はなく、そのままジャンヌが自嘲気味に言葉を発する、その言葉にため息を吐きながらスネークはあつさりと言った。



「単純だろう、一番足を引つ張っている、いや戦力にならないのはマシユだろうが」

「・・・えっ？」

「……………ほお、あの盾使いが一番使えないと言うか……………？」

聖女が驚き、同時に騎士王が顔を上げそれぞれがスネークを見つめる。

片方は意外のあまりに信じられない様に見つめ、片方は睨みを利かせている。

だがスネークは気にもせず淡々と話し続ける

「ああ、はつきり言つてまだ三流もいいところだ。

さつきもその二人の接近にも気が付かなかつたしな、未熟で危なっかしいだけだ」

「ま、待つて下さいっ！」

確かにマシユさんは皆さんと違いデミ・サーヴァントですが——」

「デミ・サーヴァントだろうが無かろうが弱い奴は弱い、単純だろう、一体何が間違つて

いるっ？」

「……………私は弱きものは嫌いだ、だがあの小娘が弱者だと決めつけるのはいささか早慶す

ぎだな」

「俺は今の話をしている、今のマシユは俺に正面切つても勝てん、それが事実だ」

「ですが……ですが……!」

「何だ?何か言いたいことがあるなら言ってみろ」

男2人は察したらしく、スネークには何も言わずただ見るに徹している。

だがその態度は騎士王にはどうでも良いという現れに見え、より一層スネークに睨みを利かせていた。

よく見れば自身の聖剣の柄を握っている。

そんな下手すれば一触即発な雰囲気は漂い始めた中で、かの聖女は言葉を詰まらせながらも答えを言った

「彼女は……一生懸命に頑張っているでしょう!」

「そうだな、ならお前も俺らも同じだろう」

「・・・あ」

「……ここまで誘導すれば流石にわかるか」

今の一言で全てを悟ったらしいフランスの聖女は、それこそ憑き物が落ちた様に表情を豊かにする。

……もつともその表情は、まるで肝心で簡単なことをうっかり忘れて恥ずかし過ぎて

顔を真っ赤にした女学生の様だったが。

そんな触れないで欲しい状態になった聖女様など気にせず、スネークは続ける。

「そうだ、マシユは未熟でこの中にいるメンツでは一番弱い、それは事実だ。

だがそれをわざわざ気にするメンツもここには居ない、ましてや彼女を見下すなんざ論外だ。

仮に今のお前が救国の聖女だろうが無かろうが、この国にいる同胞を救える力はあるだろう。

少なくとも目の前にいる非力な人間の一人くらいは救えるはずだ、ならその時点で人の役に立つてるだろう」

「そう……でしたね、今の私には彼らと……私自身」と戦う術があります」

「……随分とスッキリした顔になったな、もつとも誰も自分自身と戦いたいとは思わないがな」

「……ふふつ、このタイミングでそんなことを言いますかっ？」

「逆にどのタイミングで言えるんだ？」

「いや、何も言わないのが正解だと思うがね……」

「……………」

若干一名、乗って乗せられたのが気に食わなかったのか黙っているがそつとしておこ

う。

「……ついでに言うがな、マシユは正真正銘の初陣だぞ」

「えっ、そうなのですか？」

「ああ、色々とはぼ事故同然でデミ・サーヴァントになったのが彼女だからな。

俺の感じだと本来の力の3割くらいしか発揮して無いな、アレは……違うか？」

「……さあな、生憎私はあまり彼女とは関わってないのでな、詳しくはわからん。

だが本来の力を振るえていないのは確かだろうな」

「そう言うわけだ……戦闘経験はあるがそれも僅かだ、つまりお前の方がよっぽど先輩だ」

「そんなッ！私はまだ19歳ですよっ！」

「マシユ嬢は16歳だがね」

「あっ……ということは私の方がお姉さんということですねえ」

「なんで嬉しそうなんだ、お前」

マシユの年齢を聞いた途端、ジャンヌ・ダルクの顔がニヤア〜とした。

……失礼、まさに慈愛を含んだ微笑みを浮かべた。

想像してみてもほしい。

金髪ロングのお姉さんを、マシユマロなボディの美少女がお姉ちゃんと呼んでいた

り。

それをヨシヨシと前髪をポンポンしてあげているお姉さんの絵を。

大勝利だ！

これには金髪サングラスも大喜び。

ついでにそんな金髪サングラスのマフィアなSPやその愉快的仲間たちも大喜びだろ。

わからないなら知らない方がよろしい。

「……そういえば、サーヴァントってのは一体歳はどうなんだ？」

「……. . . . .」

わからない方がよろしい。

だが若干全員、スネークの言葉に乗っかってしまい自分の年齢を考えてしまった

「……. . . . .」

「……. . . . .数えるのは辞めだ」

『だな（ですな）』

結論。

そもそも女性に年齢を聞くのはタイヘンシツレーなのだ、英国紳士の辞書にもそう書かれてる。

「ちなみにオイラは〇〇歳を超えてから数えるのを辞めたニヤ」

『・・・えっ?』

「……お前のところは随分と長寿だからな」

「ニヤツ!」

確かに、かの世界では300歳を優に超える種族がいたりするわけで、実はトレニヤも……なんて話である。

せつかく真面目に終わるかと思われたジャンヌ・ダルクの告白は、やはり伝説のトレジャーハンターによって全部持って行かれた。

こうしてフランスの1日目は焚き火と土から帰って来たトレニヤーのにやはく(▽)( )と共に終わった。

## 邪竜百年戦争オルレアン：3—1

「もう少しでラ・シヤリテです。」

「ここでオルレアンの情報が得られない場合はもう少しオルレアンへ近付かなければいけません……」

「諜報なら任せろ、その手の情報は兵士と商人に聞くに限る。」

「幸い昨日の段ボール輸送の中に食料がそれなりに入っていた、旅人になりすまして情報交換くらいはしてくる」

《流石は現代で軍隊レベルの傭兵だ……アレ、傭兵つて諜報活動もするの?》

「ドクター、私はスネークさんの話を聞く限りだともはや傭兵家業という枠に収まらない活動をなされている気がします」

「フオーウ……」

「確かにおミヤーさん、普通のハンターさん並みには戦えて賢くてかつこいいニヤツ！」  
「賢いつてより、妙に器用で物を知ってるって感じだがな、こいつ」

「伝説の傭兵だから、というだけでは無いだろうな」

「未だに私はこいつがアサシンだと疑ってるぞ」

「それには同意見だ」

「……おい3人衆、お前ら実は仲良いだろ」

「「そんな訳がないだろ」」

「「つて真似をするなっ!!」」

「すごいです先輩!まるで90年代漫画のような典型的なボケです!!」

「うん、なんでマシユが興奮してるのか俺にはわからないかなあ……」

「フォーウ!? (誰だマシユを毒したのは!?)」

「……今さらですが私、皆さんと共に行動できて何だか安心してます」

「今言うか、それを」

トレニヤールが色々カミングアウトした翌日、一行は情報収集のため昨日世話になった砦から最も近いと言う街ラ・シャリテに向かっていた。

一緒に行動を共にする事となったフランスの聖女：ジャンヌ・ダルクは最初、兵士たちが自分を見て黒い魔女だと判断してしまう可能性が高いため、どうするべきか悩んでいたのだがその問題は藤丸たちと合流したことによって解消された。

何よりカルデアには現代の伝説の傭兵までいるのだ。

確かに魔術では今よりも昔の時代であればあるほど発展しているだろうが、諜報にお



いては古代より現代の方が手数が違う。何より経験が違うのだ。

スネークが得意とする潜入とは少々違うが、それでも地元民から情報を聞き出す程度造作も無い。

《……ん、ちよつと待つてくれ、君たちの向かう先にサーヴァントが検知された。

場所は……ラ・シャリテ、君たちの目的地だね》

「ドクター、そのサーヴァントは動いてますか？」

《うん街の中に——つて早い！どんどん遠ざかつて行く……ダメだロストした！》

「……坊主、行くなら急いだ方が良くもれん」

「えっ？」

「フオウ！フオウ！」

「何ですかフオウさん、空を見ろつて……煙？」

「！ 急ぎましょう……！」

「ジャンヌさん!? つとりあえずクー・フリーンさんジャンヌさんに着いて行つてあげて

!!」

「おうよっ！」

誰よりも早く駆け出したジャンヌ・ダルク。

不完全な召喚だったとはいえ身体能力は高く、俊敏Aも伊達ではなく一団を置いて行

く。

すぐにクー・フリーンを援護に回し、一行は急ぎ目的地であったラ・シャリテに向かう。

「貴様ライダーなのだろう！なら馬の1匹2匹呼べないのか!!」

「呼べるが生憎時間がかかる、この距離なら走り終えた頃に到着するだろうな」

「っ事前に呼んでおけ！」

「今度からそうしよう、すまんがエミヤ！坊主らを頼む！」

「任せろっ！先に行け！」

言うが早くスネークも一団を飛び出しクー・フリーンの後を追い、同じように魔力放出によってアルトリア・オルタもついで行く。

「何だ、お前も付いてくるのか」

「お前に付いてきた訳ではない、邪魔者をマスターのために先に排除しようと思っただけだ」

「……おそらく間に合わんがな」

「だろうな、もつとも私はマスターにその瞬間を見せつける気はないがな」

「……それもそうだ」

敵勢力らしい反応が街から移動した、そしてその街からは煙が出ている。

加えてその敵は虐殺を行って来ているという……であればその街がどうなってるかはある程度想像つく。

その残骸がある程度「マシ」にするくらいの暇はあるだろう。

《チツ……連中、相当 手慣れてやがる》

「どうした」

《……ここは全滅だ、誰一人残っちゃいねえよ》

「……坊主、どうする」

《…………このまま全員ラ・シヤリテで合流、もしかしたら生存者もいるかもしれない。

それに何か出がかりも掴めるかも》

「行っておくがマスター、どこぞの槍兵はお前に遠慮して言わなかったが、あの街は皆殺しだ。」

加えて死んだばかりだ、手がかりもあるだろうがそれ以上に——」

《わかってる、だけど目を背けて何も進展しないんじゃないや意味がないよ。

…………それにジャンヌさんもいるんだ、その街の人たちをそのまま放つては置けな

いよ》

「……そうか、それがお前の意思なら構わん」

「……了解だ。なら俺と騎士王も先に入っている、お前らはゆつくり来い、何かあれば

コールする」

《僕も周辺状況を見てみるよ、生体反応があれば教える》

「了解だロマン」

クー・フリーンからの無線で、街はほぼ全滅したのが確定した。

何より無線機から一度もジャンヌ・ダルクの声が聞こえなかった、恐らく藤丸が考えている様に生存者を搜索しているのだろう……が、かの槍兵が手慣れていると断定したのだ、敵がみすみす見逃す様な甘い相手だとも思えない。

「……相変わらず甘すぎるマスターだ、探しても無駄だろうに」

「だが同時に意思が硬い、わざわざ聖女がいるから街の住人の世話をすると聞いたんだ、むしろそのまま無視した方が誰も文句を言わないのにだ」

「……その甘さがいつか身を危険に晒すかもしれないがな」

「その時はその時だ、そうさせない様にするのが俺らの役回りでもあるがな」

「……さつさと行くぞ蛇め、燃やされた街に長くいる理由はない」

「わかった」

スネークもこの暴君の意見には同意する、マスターの甘さはいつか必ず危険を招く。

だが同時に、自身もまた手の届く範囲で為してきたことだ、その優しさはいかなる危険を鑑みても価値あるものだとも知っている。

確固たる意思がある、それは安っぽく言ってしまうえば頑固だとも言える。

だが意思ある行動にこそ遺した者は、残された者は、

存在を、価値を、それぞれ見いだせるのだから。

◆? ◆◆? ◆◆? ◆◆? ◆◆?

それから十分ほど。

エミヤが無線を聞いて察したらしく、マシユと藤丸を歩かせてやって来た。

「コレは……ヒドい……」

「……………」

「ああ来たか、生きている者は居なかった、この街は全滅だ」

《うん、生体反応は無かった、それに……》

「それにどうしたの?」

「死んだ一部はゾンビ化して襲って来た、加えてワイバーンがそれを餌に戻って来てな。……恐らくそういう焦土作戦なんだろう、街を破壊し死者を蘇らせ味方のエサにする」

「もつとも飛んで来たトカゲはセイバーと俺らで倒した。」

……さすがに俺も死んだ人間とはいえ無視できるほど人が出来てるわけじゃねえからな」

「なんか……すいません」

「マスターが謝る事じゃねえよ、悪りいのはこれをやってのけた奴だ」

なんだかんだ一般人マスターの扱いに慣れて来たクー・フリーン。

彼自身もまた虐殺の現場を見慣れているが、さすがに戦いに慣れて居ない少年少女にこの光景を見せるのは初めてだった。

その行為自体に抵抗を感じない訳ではないが、この光景を見せる必要があるのはわかっていた。

「いまジャンヌ・ダルクが向こうで死者の弔いをしてる、お前もしてやれ」

「うん、わかった……行こうマシユ」

「はい先輩」

そう言って2人がジャンヌ・ダルクがいる方へ歩いて行く。

……その足取が早かったのは気のせいではないだろう。

「何か変わったところはあったか？」

「いいや、今のところは無いな……だが今日の夜頃に戻すかもしれん」

「まあ人の良すぎるマスターだ……ここに残ってた体は丁寧に殺されたわけじゃねえ。

ある程度は集めてあの聖女さんに任せはしたが……体が残ってないのも多い」

ラ・シヤリテと呼ばれて居た街は完全に壊されて居た。

そこに居たであろう人々はモノに還り、人々が暮らし使って居たであろう建物は瓦礫と成り果てた。

中には瓦礫に見えるモノもあつた……それだけ相手は人々に手間をかけたらしい。

「……張本人に虐殺の意味を問うほど、俺は聖人じゃないが、こいつはあまりにも不自然すぎないか？」

「何をいうかと思えば……でも、虐殺に自然も不自然も無いだろう、現代の英雄であればむしろ理解してる者だと思つたが？」

「……私としてはコメントしづらいがね、だがセイバーのいう通りだ、一体何が不自然だど？」

「さすがに坊主の前じゃ刺激が強すぎるから言えなかつたが……どの遺体も何度も刺されている」

「ああ、槍みてえなのでブスツてな、それがどうした」

そんな瓦礫から見えるモノのほとんどが一撃の即死ではなく、四肢のどこかを必ず穿たれ、胴に幾つもの穴を開けられていた。四肢が無事だったモノは生きる屍と化し、他はワイバーンのいいエサになっていた。

「街の発展具合や遺体の数を見る限り、この街の人口はおおよそ10000人程だ……だが10000人もいる。

生憎槍や剣に関しては俺は素人だが、それでもこれだけの人数を短時間で処理するのは手間だろう。

……言い方が悪いが、全員焼死ならまだわかるが、こうまで徹底的に穴を開ける理由がわからん。

サーヴァントとは言えわざわざ時間をかけて虐殺をする理由がわからん」

「……まあ確かに、銃を使うならまだしも短時間でこれだけの人数をこうまでするのはサーヴァントとは言えそれなりの手間がかかるな」

サーヴァントは英霊にまで至った存在である。

その能力はそれぞれ大きく違いがあるものの、基本的に一般人より強いのは確かだ。だがそれも強いだけであり、質が高いだけだ。

「別に短時間でこれだけの人数を始末したとは限るまい、夜中から殺していたのだろう」



「いや死後硬直からして1時間……ネクロマンサーに操られた場合はわからんが、どう見積もっても3時間ほどしか立っていない、今日の日の出は5：47分、少なくともここを襲ったのは夜明け以降だ」

「……なら向こうには多くの敵がいるという訳だ」

「そうなるだろう、冥福を祈り終えたらすぐに移動した方が良いな」

集団戦ならまだしも、作業ならば人数が多く無い限りいくらサーヴァントとは言え一人当たりの作業量が増え、時間が多少短縮されるだけであつて楽ができる訳では無い。

それが何度も何度も体に穴を開けるのであれば尚更だ。

であれば

相手に大量虐殺専用の宝具を持っているサーヴァントがいるか、そもそもサーヴァントの数が多いかの二択。

そして可能性としても、脅威度の高さとしても相手の人数が多いことを前提とした方がいい。

「……ニヤニヤ!!何かこつちに来てるニヤ!!」

《む?》——本当に来てる!? 高速で北西部から接近中! さっきまでいたサーヴァントだ

!!

「数は」

《数は五騎！でも何だつて居場所がバレたんだ!?》

「大方ワイバーンが帰つてこなかったのを不自然に思つたんだろ、それか召喚獣なら殺されたかどうか位はわかるのかもな、とりあえず坊主無線は聞いてたな？」

《うん、ちょうどジャンヌさんのお祈りも終わったよ。

この状況なら・・・撤退かな、迎撃するには相手が未知数過ぎるしここで戦闘はキツイ……と思うかなあ》

「ハツキリしろ！」

《ハイツ！ここで戦うのは厳しいと判断して――》

《……私は問い質したい……！》

《……えっ？》

《ここで逃げてでも何も得られません。

これをやつたのは確かに“私”なのでしよう、ですが何故このような所業を行えたのか……それだけがわかりません。

せめて真意だけでも問い質さなければ……！》

突然とんでも無いことを言い出すジャンヌ・ダルク。

確かにそれは本人からすれば重要なことだろう、何をどう考えても“本人”には何故この様な事をしたのかまるでわからないのだから。

「待て、貴様の我が儘で私たちだけならともかくマスターを巻き込むのは承服できない、残るなら貴様一人で残れ」

だがそれはワガママ以外の何物でもない。

それくらい彼女にも分かっている、故に

《……わかりました》

《ジャンヌさん!?!》

《確かに私の我が儘です、それで皆さんを危険に巻き込むのは私の望むものではありません》

《ちよちよつと!?!もうすぐそこまで来てるよ!?!》

突然起きた意見の齟齬。

どこの現場でも良く起こることだが、戦場においては致命的だ。

短時間で答えを出せなければ集団は全滅する。

「ちよつと黙ってるロマン、それで坊主は結局どうするんだ」

《………ジャンヌさんはどうしても逃げない?》

《ええ》

《……アルトリアさんは俺が危険だから残りたくないんだよね?》

「いいや、単に我が儘に手間をかける理由も付き合う理由も無いからだ」

《じゃあ理由があれば良い?》

「……私としては何故ここの住民が何度も刺されてまで殺されるほど恨みを持たれていいのか見当がつかないがそれだけだ、他に気になることなど——」

《なら相手にそれを直接聞ければ良いよね!?!》

「……まあ上手くやれるなら、だが」

《ジャンヌさん》

《もちろん聞き出してみせます、〃私〃が何故ここまで酷いことをしたのかを〃私〃も知りたいですから》

《なら俺たちはジャンヌさんの援護をするよ、それで良い?》

《いいえ、皆さんを巻き込むことはできません。》

アルトリアさんの言う通り私だけを残して逃げて下さい、私は後から——》

《とりあえず皆集合、マシユは俺と一緒に。》

どうなるかはわからないけど、戦闘は避けられないだろうから臨機応変に対応するか無いけどお願い!》

「決まりだな、早い話がここで情報聞き出して相手の首を刎ねりや良いだけだ」

「お前はマスターの言葉を聞いてなかったのか? 臨機応変に対応するのだろうか?」

「そもそも前は敵将がわざわざ出てくるとでも思ってるのかね?」

「何を言っている、まとまっているなら私の剣で纏めて吹っ飛ばせば良いだけだろう」

「……お前も話を聞いてないな」

「……お前馬鹿じゃねえの？」

「ワイバーンが来たニヤらオイラが仕留めてやるニヤ!……人間は勘弁ニヤ」

《み、皆さん!?!ですから——》

「馬鹿かお前は」

《!?!》

無線機に怒鳴る……こともなく、スネークは淡々と救国の聖女を馬鹿呼ばわりした。

「今から逃げたところで俺らが逃げ切れるわけが無いだろう。」

それに一人残した所で一對五で戻って来られるわけが無いだろうが、どのみち俺らにも情報が必要だ。

その情報を引き出せる奴を見捨てるのは愚策だ」

《……ありがとうございます》

「感謝するならそう判断したそこにいるマスターに言え、マスターに。」

……それに美人をみすみす見殺しにでもすれば夢見が悪い、俺の仲間にも文句を言われるんでな」

「ほお、あんた好みか？」

「いいや？手を貸せる人間に手を貸さないのでどうかと思うだけだ。

……すまんが坊主、俺は奇襲を仕掛けたい、一旦隠れるが構わないか？」

《わかった、けどジャンヌさんが喋り終えるまでは待つて》

「当然だ、向こうが仕掛ける直前に俺も動く、合図は出せんが戦闘が始まればお前の指示にある程度従うから安心しろ」

《じゃあスネークさん以外は全員集合、どう来るかわからないけど相手は五騎、こっちは六騎いる。

油断はできないけど……知恵は事前にもらったし、とにかくよろしくお願い！》

「なら俺は一旦隠れる、お前らのことは見えているから安心しろ、最も俺の出る幕は無いかも知れんがな」

「無論だ、お前は戦闘が始まってもずっと隠れる、五騎の相手は十分だからな」

「願わくはそうありたいな、ならよろしく頼んだ」

騎士王の皮肉を楽させる励ましの言葉と受け取り、スネークはそのまま瓦礫となった街に潜って行った。

「……いや待てよ、何で瓦礫で見えなくなった瞬間からあいつの気配が消えたんだよ!」

「わかったかね、昨日私はこれを援護しろと言われたのだが」

「……やはりアサシンだろう、あいつは」

「うん、こっちでも反応をロストした……死角に入れば影が薄くなるって言ってたけど、そういうレベルの代物じゃ無いよねこれ、影が薄いくらいで動体検知からも消えるわけ無いし」

「だがとりあえずはあのジャンヌ・ダルクの援護だろう、スネークを除いて五対五とは言えマスターが被害を被っては話にならない」

「もつともあの盾の嬢ちゃんがマスターの防衛に専念してくれりゃ俺らでカバー出来るけどな」

「とにかく行くぞ、あの聖女に文句の1つ言いたいが……その暇はなさそうだ」

こうして口論は落ち着き、一行はフランスで最初のサーヴァント戦を迎えることになった。

「……オイラ、どこにもカウントされて無いのニヤ……ニヤ」

「フオウ、フォー」

「……まずお前は戦えないと思うニヤ」

「フオアア!?!」

## 邪竜百年戦争オルレアン：3―2

スネークが瓦礫の街に潜んで1分ほど経った後、再びトレニヤーが反応した時、それらは上空から現れた。

一人は黒い貴族服をまとった男、一人は刺々しいドレスを纏い仮面をつけている淑女、一人は随分と露出度の高い修道服を着た女、一人は羽帽子を被った剣士……だが中性的だった。

そして一人はカルデア一行と共にいるフランスの救国の英雄、ジャンヌ・ダルクにあまりにも似ていた。

だがその表情は、乗って着たワイバーンを飛び降り見上げたジャンヌ・ダルクの無表情とジャンヌ・ダルクはとても似ても似つかないものだったが。

「……っ！」

「……ああ、なんて事かしら。」

まさかこんなことが起こるなんて一体誰が想像したかしら」



「……………」

「ねえお願い、誰か水を、誰か水を私の頭にかけてあげてちょうだい。」

「ヤバいつ、ヤバいの！本気でおかしくなりそうだわ！あまりにも滑稽で笑い死んでしまいたい！」

（そのまま死んでも構わんのだがね）

（やめとけ、後ろの連中も警戒してるぜ、今じゃねえ）

（……………）

「今まで何かと関わりがあったこの三騎士、いつもは互いにいがみ合い皮肉を言い合っているが戦闘となれば話は別だ。」

「それぞれ思うことはありながらも、アイコンタクトで意思疎通を図る程度は造作もなかった。」

「そんなやりとりの中で黒いジャンヌ・ダルクは笑いながら話し続ける。」

「ハハハハハ！……本当に………本当にこんな小娘にしかすがるしかなかった国とか、ネズミの国よりも劣ってたのね。ねえジル、あなたもそう——って、そうだったわ、ジルは連れて着てなかったわ」

「貴方は……貴方は一体誰なんですか!?!」

「……はあ、それはこちらも同じですよ。」

……ですがそうですね、そちらより上に立つものとして答えてあげましょう。

私はジャンヌ・ダルク、この地で処刑され再び蘇った救国の聖女ですよ、もう一人の私。」

「……馬鹿げたことを、私は聖女では無い、故に貴方も聖女であるはずがない。

ですがそれは過ぎたこと……私が知りたいのはただ一つ……なぜこの街を襲ったのです」

「……何故？」

逆に聞きますけど、わざわざ貴女がすでに理解していることを何故私にまで言わせるのです？」

「わかる訳が無いでしょう！」

なぜ何の罪もない、ここに住んでいた人々を襲ったのです!!」

「……白々しい、それとも属性が変転しているとどこまで鈍くなるのでしょうか？」

そんなもの、単にフランスを滅ぼすために決まってるでしょう、私はサーヴァントなのですから物理的に潰して行くだけでこの国を滅ぼせるもの、当然でしょ？」

「バカなことを……!」

「……ジャンヌ・ダルク、お綺麗な心をお持ちの聖女さま？バカなのは 愚かなのは 私たちでしょう？」

何故、こんな国を救おうと思ったのです？何故、こんな愚者たちを救おうと思ったのです？」

「それこそ決まってるでしょう！私は人々のために——」

「人々！それはただ裏切り、唾を吐いたニンゲンと言う名のクズでしょう!」

「っそれは——!」

「私はもう騙されぬ！裏切りを許さない!!……そもそも、もう主の声も聞こえない。

主の声が聞こえない、と言うことは主はこの国に愛想を尽かしたと同じことでしょう？

なら私がこの私が滅ぼします、主の嘆きを私が代行します」

「っそのどどこが代行なのです!」

確かに無茶な道理だ。

神の啓示を得ていたこの国の聖女が神の声を聞かなくなった、つまりこの国に救う価値などない。

だからこの国を滅ぼす代行者となる……まるで筋が通りそうもない。

だが彼女の意思は本物だと言うことはこのやり取りを外から見ていたサーヴァントは、特に一般人である藤丸には理解できた。

「マスター!」

「……うん、ジャンヌさん、これ以上は無駄だよ、あの人は……あのジャンヌ・ダルクは本気だよ」

「つですが——」

「あら、もう一人の私よりそっちの人間のほうがよっぽど理解が早いじゃない。

そうよ、私が、私こそが成長した私なのよ、

そしてこれが死んで新しい私となったジャンヌ・ダルクの救済方法、この主に愛想を尽かされた価値もない国を死者の国として作り変える……まあ貴女には理解できないでしょうね！いつまでも聖人気取りで憎しみも喜びも見ないフリをして人間的成長を全くしなくなつたお綺麗な聖処女さまには!!」

「な……!」

《いやつサーヴァントに人間的成長を求めて良いものなの？せめて英霊的霊格アップとか……あつでもしよj——》

「殺す」

「えっ……ファツ!?ちよつ、コンソールが燃えだしたぞ!」

あのジャンヌ・ダルク睨むだけで相手を呪うのか!」

「いやつ今のはロマンが悪いと思うけど……」

『……………』

何とも言えない空気が流れる。

見ると向こうのサーヴァントも何とも言い難い霧囲気を醸し出している。

本人たちは………顔が赤いのはきつとそれぞれの怒りとかそんな感じのが表情に出てるのだらうきつと。

「………貴方は本当に“私”なのですか？」

「………呆れた、なんて醜い正義心かしら、この憤怒を理解する気が無い。

ですが私は貴女を理解しました、今の貴女の姿で私と言う英霊の全てを知った。

所詮貴女はルーラーでもなければジャンヌ・ダルクですら無い、私が捨てた単なる残り滓よ！」

「………！」

「ええそうよ、貴女は単なる田舎娘。

何の価値もない、ただ過ちを犯すために歴史を再現しようとする亡霊よ！」

・・・バーサーク・ランサー、バーサーク・アサシン、その田舎娘を始末しなさい。

他は残りのサーヴァントを相手しなさい、ああその理解の早い人間は見逃してあげても良いわ、そいつは私のことを理解してるみたいだしそもそもフランス人じゃないも

の」

「マスター！」

「うん……ジャンヌさん構えて、来るよ」

「っはい！」

無論ここで見逃して貰おうなどと他のサーヴァントは当然ながら藤丸も考えていない。

戦わざる得ないなら戦う、当然の理屈だ。

それぞれのサーヴァントが構え、ジャンヌ・ダルクには確かに2体のサーヴァントが付いていた。

「……ふん、舐められたものだ、わざわざその田舎娘に二人も割き、こちらには数的不利で挑むか。」

確かにその田舎娘も馬鹿かもしれんがお前も大概バカだな」

「……ハア？」

黒いジャンヌの顔が赤いのは怒りで間違いないだろう。

「聞こえなかったのか？」

貴様の随分と長い思想や感想などどうでも良いが、指揮官としては二流……いや、つい最近まで素人だった私たちのマスターよりも酷いものだな」

「……バーサーク・ランサー、こちらに加わりなさい、特にあの黒い騎士を八つ裂きにしなさい！」

口角が思いつきり上がってる黒アルトリアをみて若干引くクー・フリーリン。

一体どっちが悪役なのかわからない……確かにラスボスではあったが。

「……よろしい、ではアサシンよ、彼女の全てを食らって構わない、余はこちらを頂こう」  
「まあなんて贅沢かしら。」

かの聖女の美しい血を浴び、その臓を潰し喰らう……一体どれほど私を美しくしてくれるのかしら？」

「おいおい、カニバリズムかよ……」

「そう嘆く暇はないぞランサー、どうやらこちらにもわざわざ差し向けて来るようだ」

「へっ、そいつは良い……こっちから仕掛ける手間が省けるつてもんだぜ」

「マシユはジャンヌさんのカバーもお願ひ」

「了解ですマスター！」

「アラ良いの？今からならその騎士さえ残せば見逃してあげるわよ？」

「……仲間を置いて逃げれ無いし、それに俺たちはこの時代を修復しに来たんだ、逃げに来た訳じゃない！」

「……そう、良いわよ、なら私が相手してあげる」

状況が動く

ジャンヌ・ダルクはアサシンの相手を、

アルトリアはランサーの相手を、

クー・フリーンとエミヤには剣士と修道女が、

そして藤丸とマシユは黒いジャンヌ・ダルクを相手にする。

「マシユ、とにかく耐えて、時間さえ稼げば他の人がカバリーに入ってくれるから」

「了解しましたマスター！マシユ・キリエライト、対サーヴァント戦に移行します！」

「ふーん……貴方のサーヴァントが随分なことを言ってくれたけど、あいにく貴方もバカじゃないの？」

「マスターは馬鹿正直なだけです！」

「!？」

まさかの後輩サーヴァントからの発言に驚く立香。

マシユの発言からして恐らく自分のフォローをしてくれたのだろうが……彼女は素直なだけだ。

深い意味は無いだろう、無いっただけ無い。

「ハハハッ！馬鹿は馬鹿でも馬鹿正直ですって!?!……………なら私とその正直な心を折ってあげるわよ」

すでに他のサーヴァントたちはそれぞれ離れて戦闘を始めている。



バーサーク・アサシンの相手をするジャンヌは相手の攻撃を回避しつつ機会を狙っている、向こうは宝具を使おうとしているのか接近を試みているが、リーチの長いジャンヌの旗によって防がれている様だ。

アルトリアは一番遠くでランサーの相手をしている……が思った以上に相手も上手いらしい。

かの騎士王の剣撃をその手に持つ槍で受け流し、お返しと言わんばかりに薙ぎ払う。もともとその程度で隙を晒すほど反転した常勝の騎士もまた弱く無い、だが膠着状態ではある。

一番激しいのはエミヤとクー・フリーンの2人だ。

エミヤは最初の一撃は弓を使っていたものの、修道女がキャスターの様手に持つ十字架で遠距離攻撃を仕掛けて来ることから、すぐに夫婦剣に切り替え切りかかった。

そこを相手の剣士に邪魔されるも構わず突撃、脇を貫くかと思われた剣士の一突きは紅の槍によって弾かれる

「つてメエそんぐらい自分で避けろっ！」

「お前なら十分間に合う間合いだっただろう！」

「お前なんざを助ける意図はねえつよ!!」

と軽口を叩いてはいるものの、その連携は卓越したもの。

一方が前衛・後衛ではなく、常に相方の攻撃の間を埋める様に相手に仕掛けていく。

その相手もそれなりに連携が取れている様に見えるが、長年(?)の因縁ある2人には及ばない。

「……まあ大口叩くだけはあるみたいね、今の所拮抗してるみたいだし」

「……………」

「けど……それって貴方達を助ける暇も無いってことよ?」

「マシユ」

「ハイッ!」

そしてマスターとマシユも戦闘に入る、相手は黒いジャンヌ・ダルク、竜の魔女となった救国の聖女。

その素肌は病的に白く、反対に着込み装備する装束と旗は黒い。

頭数は二対一だが実質的には一対一。

それでも……………勝機はあった

「覚悟はできたかしら? まあ覚悟が無くてもどのみち容赦しないけれど——」

「・・・全く、結局はあの嬢さんとあんまり変わらんな、まずは周辺警戒から始めろ」

「ツ!?!」

背後から突然かけられる声

だが未だに気配を全く感じない

当然の様にジャンヌ・ダルクは背後を振り返る

「とりあえずまあ……アレだ、頭を冷やせ」

「・・・えっ?」

そしてフリーズした

何せ目の前には見覚えのない眼帯のオッサンが立っているのだ

・・・違うそうじゃない

そのおっさんが手に持つ物がおかしかった



まあお前さん随分とおかしいことを口走つてたからな、ちよつと頭冷やせ、冷静になれば大体の事はわかる」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………うわあ、場が冷え切つたよ本当に」

もはや衝撃映像である。

あまりの衝撃に戦闘中だった全サーヴァントが一旦止まった、いや固まった。

何せ背後から容赦なく消火用バケツいっぱいの水水を本人の要望通り頭へぶっかける人間がどこにしようか？

「…………あの、スネークさん…………一体なにを…………？」

いた

と言うかここにいた、サーヴァントではあるが実行してしまう人間が

「ん、わからないかマシユ?この聖女……いやジャンヌ・ダルクと名乗ってる黒いのが白いのに向かつて言つてだだろへ頭から水をかけてほしい、おかしくなりそう〜ってな」  
「ええ、聞いてました、私もマスターもみなさん全員聞いてました。」

……ですが、私の少ない人生経験を持つてしても、あれは冗談というか皮肉といいま  
すか、そう言った類のものかと思われます」

「いやマシユ……突つ込む所そこ……?」

「……なるほど確かにそうかもしれん」

《いやそうだと思ふよ……》

どうにかこの場にいないおかげで固まっではいけないロマンが辛うじて突つ込む

「だが俺はこの黒いのがおかしいと思つた、だからキンキンに冷やした水をかけてやつ  
た」

「誰が……誰がおかしいですつて!?!」

「お前以外に誰がいるこの馬鹿が!」

「チヨツ——!?!」

バツシャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

再び竜の魔女を襲う水水。

もはや何も言うまい、と言うか言えない。

ポタツポタツと水が滴る音がこのフランスの廃墟で響いた。

おかしい、本来屋外で、ましてや戦闘中なのであれば水の滴る音など聞こえるはずが無いのだが。

「……先輩、これが水の滴るいい女、と言う奴でしようか？」

「絶対違うし、ここで使う言葉じゃないよねマシユ!？」

『……………』

再び膠着する戦場、いや固まる空気。

コレどうしようかと誰もがわからず、とりあえず目の前で相手をしていた自分の敵を見る……が、その相手もどうしようかと敵なのにアイコンタクトで聞いてくる始末である。

とりあえず今は動かない方がいいだろうと敵味方問わず全会一致で決まり、構えてるフリだけして様子を見守ることにした。

「……どうやら冷え切ったみたいだな」

《この場の空気がね……》

おかしい、こんなはずじゃなかった、一体誰が原因だ。

「……………何ボサツとしてるのよ」

「ん？」

一体誰が原因だ？

「……………さつさと！さつさとこのジジイを捕まえなさいよおおおっ!!」

「ジジイ? ……一体誰の事だ」

その叫びが命令だったからだろうか

黒いジャンヌ・ダルクに従う五騎のサーヴァントは一瞬にして



オツサン……スネークの元に、召喚主ごと囲む形で転送された

かくして、オツサンVSサーヴァント5体という構造が出来てしまった。

「ッ!!」

いち早く気付いたジャンヌ・ダルクとクー・フリーンが駆け出す。

だがその俊足を持ってもまず間に合わない間合いだった。

少なくともスネークに一撃を加える猶予はあたえた。

「マシユッ!」

「ハッハイ!」

続けて一番近いマシユが駆け出す……が、気付くタイミングが遅すぎた  
藤丸の令呪発動も間に合わない

「さて……死になさい」

単純で明快な殺害宣告

他のサーヴァントも駆け出すもやはり出遅れた

紳士が

淑女が

修道女が

剣士が

魔女が

容赦なく蛇を仕留めんと中心に向かって一撃を放つ

だが相手は接近戦において最強の傭兵だった

「遅い」

手に持つバケツを前にいる剣士へ

そのまま目の前に迫る旗を右に避ける

「マズッ」

「ツ！」

そのまま旗は背後にいる黒い紳士の眼前で止まる

そのまま槍は黒い魔女の胸で止まる

互いに相手を仕留め損ね固まる

「くっついてろ」

固まった魔女を一瞬拘束

旗を落とし槍をもつ紳士へ投げ飛ばす

「

ナイフを取り出し振り向きざまに十二力を弾く

同時にハンドガンを取り出し撃つ

放たれた弾丸はまっすぐ……：サーベルの持ち主である剣士の顔めがけ飛ぶ

だがそれも一瞬、すぐに回避される

構わず追撃

相手もサーベルで高速で二撃・三撃とカウンターを狙う

だが何処その両手持ちで魔力放出のよりぶっ飛んで来る聖剣と比べれば重くない

突きをナイフで右肩へいなし接近

CCCの間合いに完全にいれた

右足で相手の膝を蹴る

傾いた体はそのまま吸い付く様にスネークの胸へ

右手で相手の肩を押す

サーベルを落とさせ拘束する

「ッ!？」

「どうしたッ」

マジックでも見た様な顔をして、と最後まで言わずその場で拘束をキャンセル地べたに寝かせ十字架を持ったまま突っ込んできた修道女に構える

「セエッ!」

十字架が眼前を通り越す

本来ならありえない光景だが驚く暇はない

そのまま間合いに入った修道女

突っ込んで来た勢いそのまま剣士の腹の上に叩きつける

「ガアアッ!？」

「ツチ!」

これで4人 残るは

「……気配遮断なら上手くやれ」

背後へ振り向きハンドガンの全弾を撃ち込む

当然の様にまつすぐ飛ぶ弾丸

だが何も無いはずの空中で潰れる

見ると人を模した像が現れ、次に淑女がその背後から現れる

それを気にするでもなくスネークは駆けつけてくるマシユの方へ駆ける  
それでスネークの役目は果たした

だがいち早くやられた黒ジャンヌがいち早く復帰しスネークに肉薄する

「さっきのお返しよっ!!」

「さっきと同じ言葉を返す」

「ツー」

背後から迫る気配

すぐに振り返り迷わず旗を振り下ろす

その振り下ろされた穂先が純白の旗と交わり火花を散らす

「大丈夫ですか!」

「今度からはもう少し早くカバーに入ってくれ」

「ええそうですね、おじさん」

「……よしてくれ」

「何を悠長に話してるのかしらっ!」

一旦下段に構え相手の旗をかち上げ、距離を取る黒いジャンヌ・ダルク。

その勢いのまま滑りながらも下がるジャンヌ・ダルク。

その隙を追撃しようとする敵のランサーが動く・・・が

「させねえよツ!!」

「……さすがに甘くは無いか」

同じ様に横合いから紅い槍が突き込まれる、敵ランサーは追撃を断念し紅い槍を払う。

紅い槍の操者……クー・フリーンはそれ以上の追撃をする気は無いらしく、そのままスネークらと合流、マシユが盾を地面に突き立てることで藤丸・スネーク・クー・フリーンと敵の間に壁を作り、そのマシユの隣に旗を掲げ同じ様に境界線をジャンヌが作る。

「すまん坊主、少しアドリブを入れた」

「いや……うん、けどまあ……問題は無い、かなあ……」

「……アレをやって、そりやねえよ」

「そう言うな、それとも少し時間はあるか?」

「うん、それは問題無いよ……けど何をする気?」

「おいおいそう怪しがるな、別に変な事はしない、ただ言いたいことを言っただけだ」

「……まあそれなら、けど煽りは無しだよ」

「了解だ」

再びこちらと構えんとする五騎のサーヴァント。

バーサーク・ランサーと呼ばれていた紳士と修道女は姿が見えない他のサーヴァントを警戒しているらしい。

その他のサーヴァントはまるで仇でも見るかの様に歩み出てきたスネークを睨む。

「……今更敵だとうだと言うつもりはないが……そこまで睨まれる様なことをした覚えはないぞ」

「え」

「なんだ、マシユとお前はわかるのか？」

「……スネークさん、後でお話が」

「了解だ、だが今はあっちのお前の方だ」

「……私に何よ」

何故心当たりがないのか謎だが、とりあえずそれは置いておき。

訝しげながらも黒ジャンヌは聞いてきた……イライラしているのかもしれないが。

「とりあえずもう一度言っておくが……頭を冷やせ、今のお前は何かもかも空っぽだ」

「何を言うかと思えば……私の何が空っぽだと言うの？」

「そんなことを一々敵である俺が言うと思うか？」

まあ誰にでもわかるのはお前の頭が空っぽだと言う事だろうか」

(スネークさん!)

つい先ほどマスターと了承したことをあっさり破る伝説の傭兵。

こちらのジャンヌも驚いているが向こうのジャンヌ・ダルクは……口角が引き攣っているが先ほどもまで一方的にやられた事を学習したのか、その場で事を荒げず、スネークに言い返す。

「ハッ！ そんな売り言葉に私が買い叩くとも思ったの？」

私そもそも文字も読めないのよ、頭が悪いと言われればその通りよ」

なお手とか足とかはプルプル震えている模様、きつと武者震いだろう。

「いや、頭が悪いかどうかは知らん、ただ「空っぽ」だ」

「……どう言う意味よ」

「なら一つだけ聞いておく、お前が街を破壊するのは、フランスを蹂躪する理由はなんだ」

「……ハアア？ そんなのそこに居る私の絞りカスにも言ったでしょう？」

もうすでに私に主の声が聞こえない、これほどの悪業をして居るのに……つまりこの国は主から愛想をつかされた、この国に価値など無い、鼻からこの国に救済される価値など無かった、故に破壊します」

「……お前は気付いていないのか？」



「・・・何を」

「いや、気付いて居ないフリか？」

「だから何よ!？」

「……まあどちらでも構わんが、ただ自分の憎しみだけで中身の無いその振る舞いはお前自身を殺すぞで」

「……一体誰が殺すのかしら」

「さあな、少なくとも俺じゃ無さそうだ。」

「……俺が言えることは言った、あとは自分自身で見つけてみる」

「何を言ってるか私にはさっぱりわからないのだけれど……まあ良いわ、どうせこの国は終わりよ。」

私が全てを蹂躪してこのフランスを沈黙する死者の国に作り変えるだけです」

そして帰りますよ、と自分たちのサーヴァントたちに命令する、どうやら撤退する気らしい。

それでも何をしでかすかわからないジジイが居るため背中を晒したりなどの隙は無  
い。

「なっ逃げるのですか!？」

「逃げる？何を言うのです？」

これから別の街を焼くだけです、ここに長居して居ても無駄ですし居る意味もありません。

私自身の収穫はありましたが、それも絞りカスがいたと言うだけの話。それにここで決着を付けるには少々戦力不足ですから」

「っ!!」

違う、撤退ではなく次の街へ移動するらしい。

確かにここで争つても向こうは戦力が減るだけ、目的が言っている通りフランスの蹂躪ならここで争う意味は一切ない、ここを離脱し別の街を襲った方が良いだろう。

その意味を理解したジャンヌが駆け出そうとするが、その前にスネークが肩に手を掛け留める。

「落ち着け」

「っですが!」

「もう坊主が手を打った、とりあえずマシユと宝具の準備をしておけ」  
「……わかりました」

駆け出しそうなジャンヌにだけ聞こえるように言うと、スネークは踵を返しマスターがいる方へ戻って行く。

そのマスターもゆっくりと頷いていた。

「アラ？見逃してくれるのかしら？」

「追撃したいのは山々だが……あいにくマスターからの命令だ、俺はここから動けん」  
「あつそう……なら失礼させてもらおうわよ」

「ただ伝言だ」

「……何よ」

スネークはマシユから一步程下がった所で振り返り、最後の伝言を伝える。

「まずお前らが乗ってきたワイバーンな、全てこいつが処理した」

「素材が大量ニャ!!」

そう言うなり、スネークの足元からヘルメットがポコつと現れる。

そこからピツケルと大量の鱗やら牙やら爪やらを掲げたネコ……トレニャーが飛び出てきた。

「……だから？私はいくらでもワイバーンを呼べるのよ」

「らしいな」

スネークはそう言つて懐から葉巻を取り出し、ライターに火を点け、おもむろに吸い出した。

その余裕そうに一服している姿にイラつきながらも、なにをされるかわかったものじゃない黒ジャンヌはおとなしく待つて居た。

その姿を見てスネークは、口に啞えた葉巻を指に挟み、煙を吐く。  
……何故かため息も混じった煙を吐いて、一言吐いた

「ならあの闇に飲まれろ」

スネークが指をさす方向……スネークから見ても左の方向に一筋の光が立っていた  
いや違う

アレは一筋の「闇」だった

「っ宝具!?!」

規模からして対城宝具

いま黒ジャンヌらは一纏まりになって居る

このままなら全員まとめて座に帰るだろう

すぐに危機的状況だと判断したジャンヌは宝具を展開し威力を相殺する  
ラ・グロンドメント・デユ  
「吼え立てよ、我が——!?!」

ブローケンファンタズム  
「壊れた幻想」

同時に連続した爆発が黒ジャンヌらの周りで巻き起こる

当然宝具は開帳できず、その代わりに放たれる光を飲む闇の奔流

「卑王鉄槌、極光は反転する……光を呑め！エクスカリバー・モルガン約束された勝利の剣!!」

敵に迫る最強の聖剣が放つ魔力の粒子は正に魔力の塊

カルデアが今放てる最大火力

その一撃が光を呑み、一帯を敵味方関係なく呑み込む

「偽装登録完了……宝具展開します!」

「我が旗よ、我が同胞を守りたまえ!我が神はリユミノジテ・エテルネットルここにありて!!」

その余波をマシユとジャンヌの宝具によって完全に無効化する。

それでも当然ながら直線上に存在した瓦礫は闇に消され、余波で粉碎されていく

「飛ぶ飛ぶ飛ぶニヤ!! 飛んじやうニヤハ!」

「おうつと、捕まえた」

「ニヤー……死ぬかと思つたニヤ」

その余波をモロに受け、吹っ飛んで言つたトレニヤをクー・フリーンが危なげなくキヤツチする。

そんな中で、スネークはマスターの命令通りその場から動かず立っていた。

……やがて暴風は止み始め、膨大な闇はたち消え、粉塵が舞い、あたりは静寂に包まれて行く。

再び懐を探り、携帯タバコ消しを取り出し啜えた葉巻を仕舞う。

「やったの……でしょうか？」

「マシユ、それフラグだからやめようか」

「あれを喰らつて生きてたらどうしようも無いがな」

「スネークさんはわざとやってるよね？」

何故だろうか、藤丸のツツコミスキルがここ数十分で格段に上がった気がするの。

もつとも、その対象のほとんどがスネークだったりする訳だが。

そんな「やったか!」とか「あれを喰らって生きてはいまい……」などと定番を口にした所為だろうか。

粉塵が晴れると、そこにいたであろう五騎のサーヴァントは消えていた。

それこそ微塵の痕跡も無く。

「……おいロマン、これは倒したのか?」

《……いいやこちらで観測した限り、エクスカリバーの光には呑み込まれたけど五騎のサーヴァントは全員無事だった、その後4騎のサーヴァント反応が消えて残った一騎は何かに乗ってその場を離れて行った。

多分なんらかの宝具で短時間だけ攻撃を無効化したんだと思う、その後令呪で他のサーヴァントを転移させたジャンヌ・ダルクがワイバーンを召喚して逃げたんじゃ無いかな》

「……敵に防御様の宝具を持ったサーヴァントなんて居た覚えが無いですけど……」

「可能性があるのは修道女格好のサーヴァントだが……まあ取り逃がしたのはしようがないな」

「どうやら完全に撤退したらしい。」

だがロマン曰く、聖杯があるとはいえルーラーが何体ものサーヴァントを何回も令呪

を使って転移させたなら相当な消耗があつただろうと言う、とりあえず今日は追撃は不可能だろうと推測されるらしい。

その間に締めを飾つた黒い騎士王とナイスアシストをした赤い弓兵が合流した。

「どうだったマスター、最大火力で放つてやったぞ。

……まあ生憎あまり手応えはなかつたがな、せいぜい一人かすつた位か、一体でも仕留めたかつたが」

「けどありがとうアルトリアさん、多分しばらくは派手に向こうも動けないだろうし」

「……貴様の力になれたならそれでいいがな、そう悠長に構えても居られないのは事実だろう」

「だな、向こうは聖杯持ちだ、一時的な休戦状態にはなるんだろうが——」

「休戦は次の戦いの準備期間だ、大方向向こうも戦力増強に走るぞ」

「うーん……やっぱリエミヤさんに追加で宝具を使つてもらつた方が良かったかな……」

「そこまでにしておけ坊主、反省点ならその騎士王にも俺にも沢山ある。

だがここで止まる暇は無い、今は初陣でここまで指揮を取れた事を自身にして前を見ろ、お前は十分指揮官として優秀な部類だ、まだまだ半人前だがな」

「……そうだね、今は特異点の解決だもんね」



「そうだぞマスター。君はまだ未熟だが、少なくとも私が君と同じ年だった時より遥かに優秀だ、もつとも私から言わせてもらえぬなら……少々不気味な位だがね」

「ええ……何でエミヤさんから気味悪がられなきやいけないの……」

「そういじめてやるなエミヤ」

「そうだな、ほどほどにしておこう」

こうして初日の戦闘は敵の撤退という形で終了した。

得られた成果は敵もまたジャンヌ・ダルクであることと、敵の目的、そして藤丸のマスターとしての力量と言ったところだろうか。

「ニャー!? 素材がばら撒かれたニャー!!」

「……そういえば、何だかんだあのネコ、とんでもねえ活躍じゃねえか」

あとトレニャーがいつの間にかやってのけたワイバーン狩り(?) による素材だろうか。

「おいトレニャー、何もそんなに必死にならなくても大丈夫だろう、素材は逃げたりしない」

「オイラ、バックパックにワイバーンの新鮮なお肉を入れたから早く食べたいのニャー

!」

「よし探るか!!」

「私も手伝おう」

あと肉、ついでに食欲。

## 邪竜百年戦争オルレアン 4-1

カルデア一行はラ・シャリテを離脱、その後次の街を目指して南下していた。

ロマンの予想通りなのか黒ジャンヌからの追撃も無く、朝方の遭遇戦以降はワイバーンとの全く戦闘も無く、陽も沈みかけていた。

その間にジャンヌヌから襲って来たサーヴァントについての情報を得ようとしたがあまり多く無かった。

ルーラーとして一応現界している彼女だが、黒いジャンヌが言っていたようにある意味搾りかすである今の彼女は十全の力を発揮できないため、ルーラーの特権である真名看破もまた発揮できなかつた。

ただ、それでも確かに「彼女」は「私」であること、そして他のサーヴァントには全員狂化のスキルが付与されているのはわかつたらしい。

「……………」

「そろそろ夕暮れ時だ、ここらで拠点を張って休んだ方が良いでしょう。」

「ここからなら朝に動けばすぐ次の街に向かえるだろうしな、そうだろうお嬢さん」

「……………」

「……ジャンヌさん？」

「……ハツハイ！何ですか!？」

「大丈夫？さつきからずっと黙ってるけど……」

「あついえ、心配はいりません、ただ先ほどの戦闘で疲れただけですから」

「そっか、じゃあここら辺で今日は休もう、ここからなら次の街も近い？」

「ええ、そうですね」

「なら決まりだな、俺は枝を取ってくる、いくぞトレニヤー」

「ついでにお肉も焼くニヤ」

「待て貴様ら、私も付いて行く」

「待てお前ら」

「このまま放っておけば勝手にパーティーが始まるだろう、焼肉である、当然マスターを放っておいて。」

「そうなれば招集はできても収集が付かなくなるのは（弓兵の目にだけ）明らかだった。」

「どうしたエミヤ、お前も来るか？」

「いや違う……そのワイバーンの肉、私が調理しても構わないだろうか？」

なに、燃料を取りに行っている間に下ごしらえはしておこう」

「……おミヤーさん、ハンターさんじゃニヤいのにワイバーンのお肉調理できるのかニヤ？」

「問題ない喋るネコ、こいつは皮肉屋ではあるが料理の腕だけは一流だ、私が保障しよう」

「料理だけじゃ無いだろう……まあ確かに、こいつの料理はうまいな」

「じゃあ預けるニヤツ！」

そう言うのとトレニヤーはバックパックを下ろし、ガサゴソいじると生肉をポンツと取り出した。

「……まさかとは思うが、生肉をそのまま入れて居たのかね？」

「衛生的だニヤ？」

「待て待て、生肉をそのまま入れて置いてそもそも新鮮な訳が……なん……だと……？」

「とりあえず肉は無事だな、なら俺たちは適当に薪を取って来る、いくぞトレニヤー」

「ハイニヤー！」

エミヤがまるで先ほど捌いたかのように新鮮で身の締まっている良い肉に心の中で震えている中スネークとトレニヤーは森へ入って行く、当然アルトリアは残った、枝な

どわざわざ取りに行く王などいるはずがない。

《うん霊脈も近いね、そこから少し南の方にあるよ》

「じゃあサークルの設置も今のうちにしておこうか」

「あつそれなら私も付き添います」

「それなら私はテントと肉の下ごしらえだな」

「テントの方は俺がやるぜ、こう言う時にルーンは便利だからな」

なんだかんだ自ら動くサーヴァント達。

これでも世界中を旅したり戦士だったりするので野宿には当然なれている、それぞれの得意分野に別れて野宿のための作業を進めて行く。

「ふん、なら私はゆつくりと待つとするか」

「いや働けよ」

だが王様は食べるだけが取り柄である。

……と言うのは本人も流石に無いと思ったのか、周辺の状況を見るのに邪魔な木を切り倒していく。

それならスネークとかは別に取りに行かなくても良かったんじゃないかと思うも、言うのも面倒だと思ったエミヤは投影したフライパンとまな板で肉の調理に取り掛かる。

「じゃあ俺たちも行こっか」

「はい先輩」

「……………ええ」

やることをやるのは自分たちも。

自分だけ楽しようという発想はない藤丸は、マシユとジャンヌを連れて召喚サークルを設置しに行く。

……………それだけなら楽だろ、というのは野暮なツツコミである。

実際の所、カルデアとの強力なラインである召喚サークルは一応必要ではあるが、スネークの宝具の方が便利かつ品揃えが良かったりするのも事実だ、それに物資の不足もスネーク曰くまず心配しなくていいらしい。

だが同時にスネークは

「俺が常にいるとは限らんだろう、ならサバイバル技術は必須だ」

とマスターである藤丸や、デミ・サーヴァントとはいえ生身であるマシユに（食料調達の意味で）生き残る術を教え、自身もまたできる限り現地調達が出来たらそちらを選ぶと公言した。

これには他のサーヴァントも同意した。

……………まあ若干一名、飯はよこせと譲らなかつたのだが

## 〈回想〉

『それほど便利な宝具なのなら定期的に食料を運ばせるくらい造作もないだろう?』

『だがお前さんのためだけに使うのはなあ……』

『良いから発注し r——』

『あつ、あのアルトリアさんつ、スネークさんに迷惑かけるなら調達した食料はアルトリアさんの分だけ抜きと先輩が——』

アルトリア、一瞬のうちに藤丸の元へ馳せ参じる。

『私は貴様の剣だ、それ以上でもそれ以下でもない、ただ貴様のためだけに力を振るう。そんな貴様の剣は定期的なメンテナンスが必要不可欠だ、具体的には燃料が必要だ、それも膨大なな。』

燃料が不足すれば満足に力を発揮できないのは当然だろう、貴様も当然知ってるハズだ、自然の摂理だ。

だから私から食事を奪うということはつまり私に自害しろと言う事と同義だ、それでもマスターであるお前は私がこの傭兵に食事を頼む代償に食事をするなどなのか……!?!』

藤丸、ビビることもなく淡々と答える。



『いや、食べちゃいけないとはさすがに言わないよう？』

ただ人に迷惑かけてまでわざわざ皆んなで採ってきた食料と一緒に食べないで、アルトリアさんがレーションを一人で食べるなら、俺たちもアルトリアさん抜きで——』

『一体いつから私がスネークに頼んでまで食事を提供させると言った、そんなことは言っていない。』

そも私はスネークに頼んですらいらない、迷惑などかけてないぞ！……だからマスター、食事を、だなっ』

『スネークさんに何だつて？』

『つ何を言っている、私はスネークに迷惑など——』

『な・ん・だ・っ・て・？』

『……………』

『……とりあえず、勘弁してやれ坊主』

〈回想終了〉

などというやり取りもあり、これによって暴食王はより一層マスターに忠誠(?)を誓う事となった。

ちなみに黒くなった騎士王をここまで手綱を握ったのは藤丸が初めてだとエミヤは

ニコやかに、かつ爽やかな笑顔でマスターに語った。

ついでにスネークはマスターにドリトスの支給はどうするか聞いた際、鬼のような顔（裁定者の談）でスネークに迫ったが、あくまで両者の間で決めた事なのだからとマスターがあつさりOKを出したことで、その忠誠心はより強固なものになった。

ついでにスネークには若干当たりが優しくなった……かもしれない。

「けど、ワイバーンのお肉って食べれるのかな？」

「どうでしょう、私は食べたことがないので……ただ、ワニの肉は地域によつては食べられていたようですし、ワイバーンも……」

「……………」

「いやどんな地域にワイバーンを食べるほどの環境があるのさっ」

「それもそうなのですが……トレニャーさんの国？とか」

「……ありえるかも」

「……………」

「……先輩」

「うん、なんかジャンヌさん落ち込んで……？」

「どう……しましょう？」

「マシユ、パス」

「ええ!？」

「どっとうしました!？」

「あついえつ!?!えつ……ええつ!あそこに鳥がいたのでびっくりそとんですう!!」

「そ、そとんです?」

「マシユ、囁んでる囁んでる」

「あつ／＼／＼」

別にマシユが謝る必要は何一つ無いのだが、テンパってしまったているマシユがそれに気付くはずもなく。

そもそも人を思いやることはあっても、それをどうにかしようとして行動する経験自体彼女にはあまり無かった。

「……ふふ、やっぱり私、皆さんと一緒に居れて嬉しいです」

「やっぱりつてことは……やっぱり何か悩んでました?」

「……ええ、もう一人の、竜の魔女となった“私”。

確かに彼女はもう一人の私でありジャンヌ・ダルクなのは間違いありません……ただ」

「ただ、信じられない?」

「……例えば私が彼女の絞りカスだったとしても、私があの様な姿になったとしても、この国にあそこまで恨みを持つとは思えないのです」

そう言つて再び暗い表情に戻るジャンヌ。

その表情を見て藤丸は思ったことをそのまま本人に向かつて言うことにした。

「えつと、俺が言つて良いことかはわかんないけど……ジャンヌさんはフランスを恨んでないの？」

「……そう、ですな。」

私は確かに裏切られたでしょう、それに嘲弄もされたでしょう、それだけのことをされたなら恨みを持つのも多くの人からすれば当然でしょう。

……ですが私には、この国が、この国の人々がいた、生き残つた……それだけで満足だったのです。

この国に仲間が居た、だから私がこの国を、祖国を恨むことは絶対にありえない」

「けど……あのジャンヌさんはフランスを恨んでた、よね……？」

「……先輩に同じです、私も黒いジャンヌさんの話を聞く限り、処刑された恨みを元に復活したかの様な印象を受けました。」

実際には気配からしてサーヴァントなのは間違いないですから、正確には復活ではないですが……」

「ええ、間違いなく『彼女』はサーヴァントです。

……………ですが未だにアレが『私』だとは……………到底信じられないのです」

「……………」

一般に、ジャンヌ・ダルクの生涯を聞き、特にその最後を聞けば無念の最後だろうと。裏切りにも等しい事をしたフランスに対して恨みは当然持つだろう、そう思うだろう。

だがその本人はルーラーとして英霊の座に就き、それによつて『自身の周りに起きていた全て』を知つても尚、恨みを持つことはなく主へ祈りを捧げ万人に博愛をもたらし事を選んだ。

それが自分だと……思つていた

だがあの黒いジャンヌ・ダルクは、竜の魔女はこの国を、人々を恨み、そして復讐を果たそうと未来を壊す規模で人々を虐殺し街を蹂躪し国土を荒らしており、この国を死者の国に変えるとまで宣言した。

強大な力を持つとどんな人でも狂うことは彼女も理解している、それは自分自身でも例外では無いとも。

だが果たして、恨みを持つかと聞かれれば……否である。

それなのに『私』は強い怨みを持つて存在していた、それが彼女にとって一番の疑問

であり、

同時に認めたくない事実だった。

「今の私は存分に戦うことは出来ませんが目の前にいる同胞を守る力があります、この国を救い世界を救うために戦うことも厭いません、その意味でも私はあなた達と一緒に入れて嬉しいです。」

「……だが同時に私はこの国を破壊している、それがどうしても私は許せない」  
「……………ねえジャンヌさん。」

確かにジャンヌさんは何も恨んで無かったんだと思うし、今もそう思ってるならそうなんだと思うよ」

「……………先輩?」

「藤丸さん……………?」

「けど……同じくらい恨みに恨んだジャンヌさんもいたんじゃないかな?」

「それは……………ありえませぬ」

「うん、ありえないかもしれない、少なくとも俺の目の前にいるジャンヌさんはそうだと  
思うよ。」

けどジャンヌさんは人間だから、無意識のうちに人を恨んだりしたのかもしれない。  
いま仲間になってるアルトリアさんも、本来はあんなに口は悪く無いんだってエミヤ

さんは言ってた。

アルトリアさん自身も、私は本来の私が選ぶはずのなかった選択をした自分だって言ってた、そういう存在も英霊の座には居るんだって。

ジャンヌさんがジャンヌさん自身を許せないのは当然なんだから、その……………」  
「？」

「…………遠慮しなくて大丈夫です、私は何を言われても怒りません」

「……………こんなことジャンヌさんに言うの色々な人に怒られそうだけど、あの黒いジャンヌさんもやっぱり自分なんだって認めてあげた方が良いと思うんだ」

「……………」

マシユが言った、自分のマスターは正直だと。

実際、藤丸立香という魔術と関わりの無かったこの人間は一般人であり特筆することは特にない。

ただ幸運なことに、彼には常識が備わっていて、加えて素直な少年だった。

「だって今のジャンヌさん……小学生みたいだし」

「……………え？」

ただ世の中、モノは言いようである。

素直な少年も言い方を変えれば馬鹿正直である。

「あつあの先輩っ？いま何とおっしやったのか聞き取れ無かったのですが……」

「だからさ。怒られるかもしれないけど、黒いジャンヌさんもここに居るジャンヌさんもジャンヌさんなんだから悩んでもしょうがないと思うんだ。」

確かに認めたく無いのは分からなくも無いけど……それって怒られる事しちゃったり、やりたいくない事をやらされる小学生がイヤイヤって言ってるのと一緒でしょ？」

「え、えつと……つまり先輩は、ジャンヌさんがまるで嫌なことから逃げてる小学生みたいだ、と……？」

「うん」

「そ、そうですか……」

思い返してみれば……まあ確かにジャンヌ・ダルクの発言は何となく否応にも認めようとしないう駄々っ子にも思えなくも無い。確かに自分とは違う“自分”……それがま



してや愛している国を破壊し人々を虐殺するような“自分”など誰でも認めたくなど無いだろう。

だがそれはダメだと藤丸はすでに教えられていた。

「だって実際には目を背けようが気付かなかろうが存在している事には変わりはない。

たとえ敵でも失礼だし目を背けちゃいけないことなんだって、だから英雄は英雄って呼ばれる。」

嫌なことから目を背けてるだけなら、それは独りよがりなだけでしょ？」

「っ……………」

「だからさジャンヌさん…………小学生みたいって言う言い方が正しいのかあまりわかんないけど、ジャンヌ・ダルクっていう英霊はいま俺たちの目の前にいるジャンヌさんでもあり、いまフランスをメチャクチャにしてるジャンヌさんでもあると思うんだ」

「……………」

この時ジャンヌ・ダルクは、側にいた2人は分からなかったが、先に言った言葉通り怒らなかつた。

何も言わなかつた。

言えなかつた。

何せ自分より歳下である少年に諭されたのだ

しかも自分が考えてもいなかった

……いや、見ようとしなかった事実を知らされたのだ

「……つてスネークさんが言ってたでしょ?」

「あつ……確かにレイシフト前におっしゃってましたね」

「つ今のはあの人の言葉なのですか!?!」

「うん、スネークさんから教えられたんだ。

//俺たちは綺麗な物に目を向け醜いものには目を背け瞑る、だけど実際には目を背けようが気付かなかろうが存在している事に変わりはない// つてね、だから嫌なことでも忘れちゃいけないんだって」

「そう………ですか」

「……マスター霊脈につきました、召喚サークルを設置します」

「あつうん、お願いマシユ」

いつの間にか歩き着いていた場所にマシユが盾を置く。

瞬く間に青い光が瞬き、カルデアとのラインが構築された。

本来ならここでロマンかダ・ヴィンチちゃんが出てくるが……なぜか今は誰も出てこ

なかった。

「……私は、聖女ではありません」

代わりに藤丸の隣にいるジャンヌさんが語り始めた。

マシユが一瞬藤丸を見るも誰も止めるわけもなく、ルーラーであり半端なサーヴァントは口を続けて動かす。

「私はこの国の田舎で育った単なる田舎娘です。」

藤丸さんやマシユさんは私を聖女と思われるかもしれませんが、そうでは無いのです。

私は祖国を救わんと旗を取りました、それは事実です。

ですが……取ったのが旗であっただけで戦わなかった訳では無いのです、この手は血で染まりました」

「……………」

「それでも私は構わなかった。」

祖国を、この国を、この国の人々を救えるのであれば、私は旗を手に取り戦場を駆け、この旗を振りました、そこに後悔はありません……ですが私は構わなかった、考えもしなかった、自分の行いがどれほどの犠牲の上で成り立つものかを」

その言葉に半端なものは無かった。

ただ強く、ハッキリとした意志が言葉の1つ1つに宿っていた。ただそこで、ジャンヌ・ダルクだけが話していた、それだけだ。

「……だから聖女じゃない?」

「ええ、私が聖女と呼ばれるのは結果論に過ぎません。

ただ自分が信じたことのために旗を振り、そのために多くの犠牲を出した、そんな小娘を聖女と呼ぶには少々物騒過ぎますから。

そんな元々は物騒な小娘が私なんです、*“ああいう私”*がいてもおかしくないのかもしれないですねっ」

そう言い、微笑みながら語るジャンヌにはもうすでに、*“自分”*から目を背ける様な少女では無かった。

そこにはサーヴァントが、半端では無い*“確かな”*英雄がいた。

「……やっぱり英霊ってすごい人たちなんだね」

「?それはどういう意味です?」

「だってさ、俺だったら逃げたり見えないフリををすると思うよ。

けどジャンヌさんはあつさり認めた、それってすごく立派で難しい事だと思うんだ」

「……そうかもしれないね」

「それにさ、確かにジャンヌさんは本人が言うなら聖女じゃ無いと思うよ。

けどさ、英霊として、サーヴァントとして呼ばれることは生きていたジャンヌさんを知っている人達が居て、そんな人達が何百年も『こんな事をしたスゴイ人が居たんだ』って語り継いで来たって事でしょ？

アルトリアさんとかクー・フリーンさんは500年以上だけど、ここに居るジャンヌさんもそれだけ多くの人が覚えていたって思ったからここに今ここに居られる人なんだなあ……って」

「そ、そんな風に言われると、私の事を褒めてくれてるのは嬉しいですが恥ずかしいですよっ！」

「……けど先輩の言いたいことはわかります。」

アルトリアさんやクー・フリーンさんは、その武勇がそれこそ千年も語られて私たちでも知っています。

スネークさんは功績とカリスマ性を世界中に知らしめてました。

エミヤ先輩は少々特殊ですが……それでも沢山の人に感謝されたんだと思います。

そしてジャンヌさんは……なんと言うか、そのつ、武勇とは違いますけど、その心……というかが在り方が、英霊としてここに居られる……のだと思いますっ！」

「だから恥ずかしいですってっ！」

英雄になるには「証」が必要だ、と誰かが言った。

サーヴァントとは特殊な使い魔であり、人類史に刻まれた影、死者の記録帯であるという。

英霊とは、神話や物語等の様々な形で伝承された物によって人々からの信仰・想念を生み、それらが一種の精霊として「カタチ」となった存在だ、と面倒な言い回しで説明できる。

簡単に言えるなら、多くの人々が認識し記憶している人物が実際に現れ「カタチ」になったのが英霊だ。

それ故に、英霊はそれ相応の知名度と（善し悪し関係なく）信仰がなければそもそも存在しない。

確かに本人が言うなら、藤丸達の目の前にいるジャンヌ・ダルクという女性は聖女などでは無いのだろう。

だが、数百年の時を経てまなお彼女の存在は世界的に知られており、また「救国の聖女」として存在している。

実際には、アルトリアの例のように伝承と本人とは事実と異なる部分は多々あるだろう。

だが何百年も《聖女・ジャンヌ・ダルク》として伝えられて来た事実は変わらない、それ相応の理由があるのだ

それこそ、例え自分の事を自分だと認められず逃げているのはまるで小学生の様だと言われても、その事実らを真正面から受け取り立ち上がる程度、彼女にしてみれば造作もない事なのだ。

……ただ、真正面から褒めちぎられることには耐えられないらしいが。

「そんな照れることでもないと思うけど……」

「は、恥ずかしいものは恥ずかしいですよ……」

「そんな可愛く言われても……」

「カワツ……／＼」

可愛がられるのもダメらしい。

◆?◆?◆?◆?◆?◆?◆

「・・・!?いま何か壮絶である意味では危険なフラグが立った気がするのだが……!」

「それより早く肉を調理しろ、燃料は十分だろう」

「……今更だが、テメエが木切るならスネーク達は薪を取りに行く意味無くねえか?」

「そうだな」

「……言っておくが、マスターが来てから焼き始めるからな?」

「いい心がけだ料理人、だが私たちのマスターに何かアレば事だろう。」

先にある程度毒味をしておく必要はあるだろう、その役は私が相応しいのではない

か、ん、ん?」

「これだから暴食王は……!」

「犬じゃねえんだから少しくらい待てよ……」

「お前が犬と言うか」

「アア?」



# 邪竜百年戦争オルレアン：4—2

〈前回までのあらすじ〉

ジャンヌさん落ち込む

←

藤丸くん褒めちぎる

←

ジャンヌちゃん照れる

←

紅茶レーダーが反応(?!)

←

暴食王が肉を求める↑いまコッコッ

◆?  
◆?  
◆?  
◆?  
◆?  
◆?  
◆?

「……いま、いい雰囲気です。淡いピンク色になるかと思つたら突然食欲が勝つた気がするニャー」

「何を言つてるんだお前は、さつきと仕掛けろ」

「ニャー？ そう思つたダケにや〜」

「そうか」

時を同じく、スネークとトレニャーは話しながらもセッセと燃料となりそうな物を拾つていた。

片やサーヴァントで傭兵でサバイバルの達人である蛇。

片やこの世界とは比べ物にならない大自然で平然と生きてきた一族のトレジャーハンター。

この2匹にすれば、15世紀初頭のフランスにある森林地帯など単に見通しが悪いだけである。

ここは毒を心配する必要もない、敵が巡回して居るでもない。

突然クルペッコ先生から指導を受けて一乙もしない、

イノシシな感じのファンゴな奴もいない。

ワイバーンはいるもののその気配は今は無くただ自分の足元と周辺を気にするだけで良いのだ。

「……まあこんなもんで十分だろう、そっちはどうだトレニャー」

「問題ないニャー！」

「だな、なら戻るぞ」

すでに収穫は十分だと判断した2匹はやる事を終え、燃料となる枝や薪をこれまたトレニャーがどこからか取り出したロープで括り、それを背負い真つ直ぐ野営地まで戻つて行く、もちろん警戒は欠かさず右側のホルスターからすぐに銃を抜ける様にしながらだが。

ちなみにライフルはキャンプ地に置いて来ている。

……ちなみにトレニャーが曰く、

「トレジイ印のロープニャー！これだけでなんでも釣ることも吊ることも連ることもデキる」

らしい、これにスネークは

「つまりは丈夫なんだな」の一言で済ませた模様。

「……そういえば、お前は帰れるのか？」

「……わかんないニヤ、でもいつもみたいになブン帰れるニヤ。」

おミヤーさんと会った時もそんな感じだったし問題ないと思うニヤ」

「そんなもんか」

「そんなモンニヤ、トレジャーハンターに当てはないんだニヤ……悪い勘は当たるけど

ニヤ」

「ハハッ、奇遇だな俺もだ」

「ニヤハハッ、それでもオイラが手伝える限りでは手を貸すニヤ」

とはいえ、ただ薪を背負い森の中を往復する程度は楽であるのに変わりはなく。

警戒を怠ることは無いものの、気楽な雰囲気を感じさせながら2匹は話を続ける。

「手伝える限りか、まあ確かにお前にサーヴァントの相手は少しな。」

モンスターを相手取っているだけでも十分助かるわけだが」

「どうかオイラから言わせればあれはモンスターとは……ニヤ」

「……どうした」

「……………モンスターでハンターが死ぬのはしょうがないニヤ、古龍で村が壊されるのはどうしようもないニヤ。」

「……………で死んでるのはどうしようもなくていいニヤ。」

オイラには難しいことはわかんないケド、おミヤーさん達が間違つてないのはわかるニヤ。

それだけでオイラがここに居るには十分ニヤ、手伝える事も多いしニヤ」

「……………そうか」

モンスターが闊歩して居る世界。

そこにはハンター・ライダーと呼ばれる職種が存在し、時に英雄として彼らは強大なモンスターと戦う。

だがそれらの強大なモンスターは人々を理不尽に襲う災害に等しく、時に恐怖をもたらし、命を奪い、村々を壊滅させる。

そんな世界に生きるトレニヤーにとって、命は簡単に消えるものだと言うのは知っている事だ。

だがそれはあくまで「どうしようもない」場合に限ると考えている。決して誰かの意思で命が消されることは良いことでは無いと考えている。

だって自然現象と違って命が消されるのを自分たちで止められるのだから

「それに…………でもお宝は満載ニヤ！」

剥ぎ取り放題なら文句ないニヤ、だからオイラは出来る限りおミヤーさん達についてくニヤ」

もつとも、トレニヤー自身はこの様にまとめていない。

うまく表現できず、"どうしようもなくないニヤ"の一言で自分なりにまとめている。だがそんな一言からでもスネークは十分に理解した。

「……そいつはお前らしいな」

「ニヤニヤ、それは褒めに預けるお言葉だニヤ〜?」

「それを言うなら光栄だ、と言うだけで良いと思うがな」

「・・・ニヤ〜?」

「にやー」

「………そうなのかニヤ?」

「ああ」

「………そうなのかニヤ……」

「まあ気のあるな、大した間違いじゃないにや」

「ニヤニヤ、語尾が移ったニヤ〜?」

「ニヤー」

かたや傭兵、かたやトレジャーハンター。

住む世界が職業的にも次元的にも違うが、どちらも命をかけているのに変わりはない。

だからなのか、妙に気が合う2匹だった。

「……うん、すごく良い話をしているし聞いている僕たちも頷くばかりなんだけど、いい加減そろそろ僕達解放されてもいいと思うんだ！ていうかせめて彼女だけでも解放してくれないかな!？」

「ニヤー」(▽▽)

「ニヤじやなくてさあ!!」

「うるさいぞ、捕まっただから大人しくしろ」

「うん、一体何をどうしたら僕達が捕まる理由があるんだかわからないんだけどねえ!」  
「俺たちを森に入る前から尾行して俺たちが2人になった途端後ろから近づき、トレニヤーを攫おうとした奴らが一体何を言っている?」

「あれはマリーの勝手だからでねえ!？」

そんな2人(?)は現在、怪しい2人組みもついでに連れていたりする。

具体的には1人は男、さつきから文句を……と言うよりは事実を述べているだけなのだが、その見てくれと物言いから全く相手にされていない。

そんな彼を容疑者①と呼称し、手首に縄を巻き、自力で歩かせている。

もう1人はなぜ尾行するのにその服装なんだと心の中でスネークが突っ込む程度に派手な紅いドレスを着ている女、と言うよりはレディーと言った方が適切かもしれない。

そんな彼女を容疑者②とし、寝かせたままスネークが薪と一緒に担いでいる。

そんな2人組みがどうして連れられているのかといえばスネークがついさつき言った通りではあるのだが、

順を追って説明すると

(気づいて居た者は) 視線を気にせずそのまま森へ

← 薪を取りに行く……と、視線が近づいてきた

← 猫が女に攫われた



敵対したため無力化、拘束

←

キャンプに薪と共に連行

と言う具合だ。

「違う！ぼくは無実だ!!」

「ニヤア!!だいぶ事実と違うニヤ!!」

「ん？何が違う??」

(気づいて居た者は) 視線を気にせずそのまま森へ

←

“トレニヤー”と薪を取りに行く……と、視線が近づいてきた

←

“トレニヤー”女に攫われた

←

敵対したため無力化、拘束

←

キャンプに薪と共に連行

「オイラは猫じゃ無いニヤあ!!」

「すまん、悪かった」

「そうじゃ無くてねえ!!」

「……うるさいと思つて来てみれば、お前たち一体何をしている?」

とにかく尾行している奴が2人いて、なんか来たから捕らえた、言い忘れていたがもう1人は気絶させている

以上。

そんな2匹と2人組みが騒ぎながら来たお陰で黒い騎士王様が来た、後ろには青い夕イツ兄さんも居る。

「ん、見てわからないか?」

「わからないかニヤ?」

「……髭面の眼帯男が少女を一人攫つて来た様だが」

「人聞きの悪い事を言うな、気絶させて連れて来ただけだ、その連れも一緒にな」

「それは誘拐と何が違う?」

「……身代金を要求する相手がないな」

「そう言う問題じゃねえと思うんだがなあ……そんなべつびんさんなら尚更だがよ」

「……冷静に突っ込んで無いで誰か助けてくれないかなあ」

残念かな、ここにまともな人はそんなに居ない。

ついでに言えば、今気絶しているお連れさんも可愛いからと勝手に飛び出して可愛がる程度にまともじゃ無かったりするが……それが最早デフォルトだとわかってしまっている連れである。

「霊脈を確保してきまし——何事ですか!？」

「マシユ? 一体何を——ヒト!？」

「……………」

ここでマシユと藤丸、ジャンヌらが合流した。

……何故だろうか、ジャンヌが一瞬スネークを何とも言えない目で、若干蔑みながら見ていた気がするが。

そんなスネークは無力化した彼女をお姫様抱っこ……などでは無く、右肩に相手の顔、左肩に足を回し大変持ち運びやすい状態で立っている、何とも言えないのは仕方がない。

しかもちゃんとドレスの中が見えない様に服を押さえているあたりが特に。

しかも気絶している女性、である。

「まあ落ち着け坊主もマシユもな、とりあえずこいつから説明させてやるからエミヤの

所に集まれ」

「えつと、えつええつ、わかりましたっ」

「あとランサー、悪いがこの薪を運んでくれないか？」

「んあ、構わねえぞ」

そう答えてクー・フリーン、もといランサーがスネークの背負っていた薪をルーンで、トレニヤーが持つ薪は背負いササつとキャンプの方へ運んだ。

この時結構な隙がスネーク達に有ったがもう逃げるつもりも無いのか、逃げたら酷い目に遭うのが目に見えたのか、この連れの男は何もしなかった。ついでに答え合わせをするならば、逃げようとした時点でトレニヤーがピッケルを刺しスネークが無力化、それがダメだった場合はランサーが刺殺する、いたってシンプルだ。

「……」一応言っておくが別に俺は攫って来たわけじゃ無い、向こうがトレニヤーを攫おうとしたのを捕らえたただけだ」

「そ、そうなんで——」

「これは冤罪だあ!!」

「先輩、なんだか事件の匂いがします!」

「マシユ、とりあえず良い子なのはわかったから落ち着こう、ね?」

「……………」

何故だろうか、余計に混乱させた気がするが。

具体的にはジャンヌが絶対零度で虚ろな目でスネークを見ているようである。

もっとも原因は純粹で素直な性格の女性だったり、随分と気が滅入って必死に叫んだ（叫んでしまった）男のが原因だったりする訳だが、突っ込んだら負けだろう。

とりあえず叫んだ容疑者（？）はトレニヤーに小突かれ黙らされた。

そして適当な切り株に容疑者②を下ろしたスネークはとりあえずマシユに面倒を見るよう頼み自身は小突かれた男の目の前に腰を下ろした。

ちなみに女性陣は容疑者②の方の介護にあたり、エミヤは全人数分の食事を用意し始めた。

「……さて、色々と雑な扱いをして悪いな、もう少し付き合ってくれ」

「……自覚あったのかい」

「そりやな、幾ら連れとはいえ女の方を先に手を出す結果になったからな、出来れば何もせずに連れて来たかったが……あれが手取り早かったからな」

そう言つて手首に巻きつけた紐を外し座るよう容疑者①に促す。

その間にランサーが様子を見ながらスネークに当然ながら質問する。

「なあ、とりあえず聞くがよ、一体何があった？」

「ほら、説明してやれ」

「……確かにこの時を待っていたけれど、こんな感じで話を振られても——」

「ほらさつさと話せ、でないと言問する羽目になる」

「本っ当におつかないね!!」

吐かぬなら、吐かせてしまえ、ホトトギス

情報は大それたこと昔から相場は決まっているのだ。

「……僕は吟遊詩人じゃないんだけど……説明させて頂きますよ」

「ああ、さつさと話せ」

「……僕たちは君達があああの竜の魔女と戦つて居る所を見てただけど、まあ僕たちが援護する間も無かつたけど、でもまあそれで君たちの後ろを付いて来たんだよ」

「んあ、後ろから付いて来てたのテメエらだったのか?」

「後ろから2人も付いてきてたの!?!」

「後ろから付いてきてたのバレてた!?!」

「……ああ、坊主は気付いて無いだろうな、他の連中は全員——」

「後ろからこの方達が来てたんですか!?!」

「……坊主とマシユ以外は気付いてただろうな」

まあ未熟であるマスターやマシユが気付かなかつたのはしょうがないだろう。

とりあえずマシユに尾行の仕方と気配の扱いについて教えるかと思ひながら容疑者

に話を促す。

「……うん、で続きなんだけど、マリア……あつ彼女マリー・アントワネットなんだけど——」

「この方はマリー・アントワネット王妃なのですか!？」

「うん、ついでに自己紹介するなら僕はヴォルフガング・アマデウス・モーツアルトさ。

……なんでここに居てこうなっているのかは皆目見当が付かないけど」

「あなたがあのアマデウス・モーツアルトなのですか!!？」

「……うん、全然話が進まないなあ」

「とりあえず、だ、話が終わってからまとめて質問してくれな、マシユ」

「あつ……すいません」

「イイねえ、素直な子は嫌いじゃないよ」

「オイ」

「はい続きだね調子に乗りましたっ！」

……でだ、まあ後ろから付いて来たのは良いものの、この森に入ってからその男と

猫が——」

「ト・レ・ニ・ヤ・ー！」

「……トレニヤールが薪集めを始めたら、マリアが……その、ねえ」

「オイラ、あの女の人に攫われたニヤ」

『えっ』

瞬間全員の目が女性陣に介抱されているマリアことマリー・アントワネットへ、そしてアマデウスに向けられその視線に刺される事になった彼は端的に言ってビビった。

ついでにアルトリアはトレニャーを担いだ。

「待って！事実だけど待って!!」

「まあ事実だな、もつともその理由が不明だが」

「ああ……多分僕の予想だと、そのトレニャーが……可愛くて愛でたかったんだと思うよ」

「……それだけか？」

「それだけだと思いますよ！だから殺気を飛ばさないで頂けますか!？」

ランサーが脅しついでに殺気を飛ばすも余計にビビるだけ。

これでは尋問以前に口も聞けなくなるとスネークが止める、ただ脅せば良いという物でも無い。

「止してやれランサー……こいつは戦いの素人みたいだしな」

「へいへい」

「……なんかもう疲れたんだけど」



「ほら、もう少して終わりだろうに」

「・・・はあ、わかったよ。」

それでマリアがモフモフし始めたのは良いんだけど、半ば奇襲でそのトレニヤーが暴れてその男が銃をマリーに突きつけてね、トレニヤーを離すように言っただけ……彼女、頑固だからヤダと宣言したんだよ」

「……なんか俺、聞く限りそちらが悪い気がして来たんだけど」

「うん、僕が言うのも変だけどそれには同意する、本当に悪かった」

もういい加減許してやれば良いじゃないと思ってる読者の方々。

ついでになんでこいつ素直に謝ってんだ、キャラ崩壊じゃね？と思うかもしれない。

だがもう少しだけ付き合っただけ欲しい。

ついでに彼が珍しく素直に謝るのは彼がチキンで自らの命の危機が眼前に広がっているため、実際こちらとか彼女が悪いし願わくは減罪を求め謝罪している、断じて自分が悪いとは考えて無い。

「それで宣言した彼女は撃たれて倒れて……まあこんな状況になりました、ハイ」

「そんな感じだったニヤ」

「全員理解できたか？」

どうやら怪我人……という怪我人も居なかったが女性が1人絶えさせられるという

最早事案だろうと思われた事態だったが、蓋を開けてみればどうやら大した事は無いらしいとこの場にいる全員が理解はした。

理解はしたが当然の疑問をルーラーでもあるジャンヌがスネークに尋ねた。

「……あの質問なのですが、要するに王妃はトレニャーさんを攫おうとしたと言うよりなにかお互いの勘違いの結果な気がしますが……」

「まあ……俺にも落ち度があるのは否定せん」

「俺からも質問があるんだけど……何でマリー・アントワネット王妃が気絶してるの？」

「うん？それは僕が説明したじゃないか」

「いや、だって嫌だって言った後何かあったんでしょ？」

「いや、無かったよ」

「えっ？」

「えっ？」

「……どうした、坊主」

「あの、もしかして、スネークさん……問答無用で撃ちました？」

「ああ」

「えっ、ある意味当然だと思っけど」

『……………』

どうしようか、何か根本的に間違えてた気がする。

具体的にツレはクズでこの傭兵、思ったよりヤバい奴だったのかもしれない。

「おいおい、わかってると思うが俺が撃つたのは麻醉銃だぞ、流石に実弾は撃ってない、それに俺も問答無用で女を撃つ趣味は無い」

「じゃあどうして撃つたのですか？」

「そりゃあこの男が走って逃げたからな、こっちも相応の対応を取った」

「えっ！僕が原因なの!？」

・考えてみよう

敵になるかもしれない2人組みのうち1人が仲間を形だけとはいえ拘束、

そしたらなんか1人が逃げ出した、何を仕出かすかわからない。

手は二つ、見逃すかすぐにさっさと目の前の事態を処理するか、そんなものわかりきった事だ。

付け加えるなら、スネークは生前から出来るだけ殺害という手段は最後に回していたため動きは早かった。

つまり麻酔銃を瞬時に抜きトレニヤーを顔の所まで持ち上げていた彼女に向かって撃ち込み逃げた男を得意のCQCで拘束し紐で縛り上げた。

結論：連れの男がクズだった

「……なるほど、敵対するかもしれない相手が逃亡を計った、それなら話はわかります」  
「・・・アレ、これは僕がピンチなのかな？」

「それはどうだかな、このマスターの采配に寄る」

「……勘弁してくれえ、僕はやりたい事をやるクズな音楽家ただけなんだあ」

「いやそれが問題だと思うがな、で、どうする坊主」

そして一般人であり一般常識持ちのマスターである藤丸の判断、というか判決はシンブル！

怪きは罰せず、ただし調査のため拘留

「……………拘束で」

「了解だ」

「えっちよっ——」

そうなれば話は早い。

腰を上げトレジャー印のロープで容疑者の体を締め上げるスネーク、手慣れているからか10秒で終わった。

「……ねえ、早くない？普通もつと遠慮して少し時間かかるよね？」

「生憎俺は傭兵でな、縛るのも締め上げるのも得意だ、まあこっちの方が手間が掛からないんだがな」

そう言つて腰から取り出したのは、鉄製で出来た輪つかの物、間が鎖で出来た拘束物。扱う専門家はワツパと言つたりする。

そう手錠である。

「スネークさん……何で手錠なんて持つてるの？」

「生前から標準装備だ、何かとこういう事態は起きるんでな」

「な、なるほど」

「……それより坊主、そっちのお姫様はどうだ」

「……君、丁寧なのか雑なのかさっぱりわからないんだけど」

そんな容疑者から被告人になりそうなアマデウスの発言は放つて置かれスネークの質問にアルトリアが答えた。

「どうも何も麻醉が随分効きすぎて起きる気配が無いな、サーヴァントに効く程の薬効があるのも驚きだが」

「お前の鎧も俺の銃は貫通はするからな、別に不思議じゃ無いだろう？」

「ホザけ、初見殺しなだけだろうに」

「それは否定せん、だが目を覚まさせるのは簡単なハズだが……どうやって起こしてる？」

「いえ、どうも何もずっと待つてるだけです……」

「なら声を掛けながら何回か肩を叩いてやれ、すぐ起きる」

「な、なるほど、やってみます」

素直な子の代表者、マシユ・キリエライトは初めて覚醒させる経験をする。

結果は……まあ、まるで教科書に書かれているお手本のように段々と声を大きくしていき、肩をトントンからドンドン、そしてガツンガツンと叩いていき目を覚ましたお姫様と仲良く頭をぶつけたとき。

## 邪竜百年戦争オルレアン 4—3

仲良く頭をゴツツンコさせた少女（？）達。

それは同時に眠りについていたお姫様が無事……では無いが、とりあえず目を覚ましたという事だ。

「す、すいません！アタマ大丈夫ですか!？」

開幕から敢えて言おう、マシユの頭の方が大丈夫なのだろうか。

しかしそんな誤解を招きそうな発言など気にもせず本物のお姫様、マリー・アントワネットは華やかに、

……遠回しな比喻ではなく本当に華のように可憐で自由なんだとアマデウスは後に語る。

「フフフ、私は大丈夫よ、それよりそちらの方こそ大丈夫かしら？」

「ハツハイ！私は問題ありません！」

「それは良かったわ〜……それはそうと……どこか説明して下さいさる？」

そう言うのとゆっくり起き上がり辺りを見渡す彼女。

彼女の視界に広がるのはぶつかった少女に焚き火と奥で何かを調理している男性、あ

と連れである縛られている変態と眼帯をつけている男に紅い槍を持つ戦士、美しくも強い金髪の女性が2人、そして……

「あああ！ネコちゃん!!」

猫じゃなくてトレニャー!と言うまでもなく飛びつこうとするお姫様。

ただ残念ながらそのネコちゃんを抱えていたのは強いと思つた金髪女性であり、実際彼女は同じ王でも騎士王であり、同時にモフモフ好きな暴食王である。

「残念だが貴様がこれをモフすることは許されん、素直に諦めよ」

「いいじゃない良いじゃない!だってその子可愛いじゃない!!」

「それは否定しない……だがまずは自分の立場を理解した方が良いのではないか？」

具体的にはあそこに貴様の連れが縛り上げられている訳だが」

「あつそれは良いのよ、彼はそういう事をしてしまったという事でしょう?」

「マリア!」

これは自分だけ助かろうとしたからだろうか？

それとも彼女が全面的に悪くて自分は無関係なんだとアピールした事が悪かったのか!?

そう思い叫ぶ彼女の連れであり変態であるアマデウス。

……なら自業自得じゃないかと突っ込んではいけない。



彼女の中でそう思わせる程度に彼に前科があるのも事実だが、実際のところ彼女の行動のツケを彼が払わされている状況でもある。

まあ自分一人で逃げ出そうとした彼が結局悪いんじゃない。

「……とりあえず坊主、どうする？」

「……直接話しを聞くしか無いよねえ」

これがアマデウス本人やスネーク達から何も話しを聞いていなかったら別だが、双方の誤解（あと逃走）によってもたらされた事故だろうと結論が見えており、その事故の原因はこのお姫様ではと思われる現状、彼に全てをなすりつける形でカタをつける気にはなれず、藤丸はとりあえずマリー・アントワネットから話を聞く事にした。

◆? ◆◆? ◆◆◆? ◆◆◆◆? ◆◆◆◆◆? ◆

主文：アマデウス・モーツァルト、及びマリー・アントワネット両名ともに無罪。

そんな感じでトレニャー誘拐未遂(?) 事件……というか事故はカタがついた。

王妃からの聴取は彼女自身が故意で連れ去る意思がそもそもあったのか、トレニャーの解放を拒んだ理由の解明に焦点が当てられた。

当初は王家ということもあり、機嫌を損ねたり頑固かもしれないと心してかかった一般常識持ちの藤丸だったが、マシユからこんな風に私たちは理解しているのですがと一通りの概要を説明した所、自分が浮かれ過ぎていたと彼女はスネークとトレニャーに謝罪。

そして自分のせいで捕まっていたアマデウスにも謝り、謝られたアマデウス本人も困惑する羽目に。

まあ怪我人も居ないしこちらとしてもサーヴァントだし、戦力増強に一応繋がるからという判断のもと、2人を仲間にする方向でそんなに時間がかかることも無く決着がついた。

……スネークが麻醉銃を撃つたことを謝ると

「そんな経験滅多にできないから問題ないわ!」とこれまたアツサリ許された。

……けどそういう問題じゃないんじゃない……と思うも口に出さず密かに心にしまった藤丸だった。

そこから更に付け加えるなら、マスターである藤丸やトレニャー自信が許したこともありトレニャーを思う存分モフモフし始めたお姫様、大変ご満悦であられる。

対してすごく、大変、大変すごく不満になった王様であったが、ワイバーンのお肉でトントンになった。

その分体重もトントんに近づいて——（ここから先は文字が存在出来ない）

「それで、とりあえず腹ごしらえを済ませてくれたおかげで私は約半年ぶりに言葉を発することが出来るわけだが……これでとりあえず今日すべきことは終わったかね？」

そう言いながらエミヤは汚れた食器やフライパンを洗う……事も無く彼の魔術で作られたものなので洗う必要は無く、

全員が食べ終わった頃に勝手に消えていった。

実際には腕を組みながらスネークに話しかけているだけだった。

なお、クー・フリーンも交えているが話しかけようとはしない。

「夜襲を仕掛ける相手も居ないしな、仕掛けられる可能性は捨てきれんがそれは常だしな、特別すべきことはもう無いな」

《いつのまにかサーヴァント二体を仲間にしてるあたり、僕としては何とも言えない気持ちなんだけどねえ。

……けど藤丸君が無事で何よりだ》

「なんだロマン、俺たちのことを信用して居なかったのか？」

《そういう意味じゃないけど!》

わかつてる、ただ単に心配だったただけだろう、それでもからかうのが人というものである。

実際のところ、一段落着くまでカルデアと連絡を取るタイミングが無かったとはいえ、その報告がだいぶ遅れていたのも事実だ。いくらサーヴァントが4体いるとはいえそれだから安心できるほどの状況では無い。

……とは言っても陣営としては申し分なく、更には弱体化されているとはいえるルーラーであるジャンヌダルクも居る、周辺環境のモニタリングはカルデアでも当然して居るわけで、奇襲を受ける可能性は油断さえしなければ良い程だ。

それ自体ロマンはわかってるだろうが、心配なものには心配なのだ。

「……まあ心配になるのはわかるがな。」

オイ坊主、とりあえず明日の予定を決めてさっさと寝る準備しておけ」

呼ばれて焚き火の近くでマッシュとジャンヌの2人を交えながら話していた藤丸が男三人衆に顔を向ける。

「そういえばもうそんな時間……って明日の予定?」

「私が言うのも何だがねマスター、私たちは情報を集めるためにあの街に向かった。

それは何のためだ?」

「・・・あつ、黒いジャンヌダルク……」

「ああ、実際やつこさんがここでの犯人で間違いないねえだろうな、どう見ても」  
「つまりこの特異点の原因は明らかになった。」

次に私たちがすべきことは敵であるあのジャンヌ・オルタになる訳だ」  
《聖杯の回収が絶対の目標に変わりはないからね。

もつとも彼女からはまだ聖杯の在りかについての情報は得られていないから、単純に彼女を倒せばいいって訳でも無いけど、ワイバーンやサーヴァントを召喚して使役して  
るなら確実に彼女が持つてると見て間違い無いよ、先の戦闘でも彼女から聖杯の反応は  
有ったし》

「それでだ、話は戻るが明日はどうするか、お前が決める」

そうスネークに言われて深妙な顔を作る藤丸。

だがそれは数秒程で、段々と首が傾き始め、指で軽く頬をかく。

「…………えつと、ごめん、どんな選択肢があるのかな?」

《そりやそうなるよねえ……》

「ハイ、今言われて見て考えてはみましたが……具体的にどうとは……」

「なんだマシユに我がマスターは何をすべきかわからないのか」

「? アルトリアさんはわかるんですか?」

「当然だ」

そう言つて、話し合いを話半分聞きながらトレニヤーをいじり続ける王妃を横目に置きながら自慢げに、かつ王の風格を漂わせながら深く頷く騎士王。  
そして答えは単純だと目の前にいる自身のマスターに口を開けた。

「私の聖剣でオルレアンにある敵の根城ごと吹っ飛ばす」

訂正する、思ったより脳筋のお言葉だった。

「それって……どうなの……?」

「なに心配はいらないぞ、追加でその弓兵で爆破、まばらに残った敵は呪いの朱槍で力タをつけ、後の残りで残敵狩りだ」

更に訂正する、この騎士王思つたよりちゃんとした脳筋だった。

「ま、待つて下さい！それでは——」

「あらかじめ言つておくが私は敵に容赦はしない。

手っ取り早く、かつ簡単で結果が出ることをなになが悪い」

「っ……」

「それに私たちはあくまでも人理修復のために来た、決して復讐の邪魔をしに来た訳では無い」

「っ私はこの国に復讐なんて——！」

「あくまで今のはアルトリアさんの意見であつてそれを実行するとまだ俺は決めてないよっ。」

「……ここでイザゴザでも起きるかと思いきや藤丸が強引に止めに入った。

そのまま騎士王にまず事実だけ確認する。

「最もこれが私はベストだと考えているのも事実だが」

「それとジャンヌさんへの意見も別だよね？」

「……そうだが」

「ならほかの人の意見を聞くよ、それで良いねジャンヌさん？」

「……ええ、構いません」

「なら遠慮なく言わせてもらうけど、その単純な作戦自体は僕自身嫌いじゃないけど、些か早計過ぎないかなあ？」

女性2人が口論になりかけるも、中々の器用さで藤丸が場を収めた後、アマデウスが遠慮なく発言する。

意外とこの男、クズではあるが聖女と騎士王が作った空気を気にせず言葉を発する程

度に度胸が……いや気にしないタチらしい、しかも反対意見である。

「ほお、まさか音楽家に反論されるとは思わなかった」

「物の一つや二つ言えなきや、邪魔してくる貴族や全然聴き入らない聴衆と借金取りを相手に生活できないからね。

まあ僕のこととは良いとして、仕掛けるにしても早過ぎると思うんだけど」

「俺も反対だな。まず聖杯回収が目的だがお前さんの宝具だと回収に手間がかかる。

それに戦果確認も難しくなる。加えてそもそもオルレアンに向こうの戦力が集まってるかも怪しい。それに向こうに一度宝具を喰らわせたからな、居たとしてもワイバーンで逃げられたら意味がない」

「……ああそうだな」

音楽家に傭兵の2人の反論に若干不貞腐れる騎士王、本当に大丈夫なのだろうか

(主に王としての矜持とか)

だが当然反論には反論で返す。

「だが他にどんな選択肢がある、当然貴様は考えがあつての事なんだろうな？」

「選択というより同時並行だな。

一つは相変わらず情報収集、特に相手の活動と被害状況が主だな、明日はまだ休みかも知れんが回復すれば今以上に動くはずだ、ある程度は被害を無視する他ないが放つて



おく理由は無いだろうか？」

「ええ、傷ついている人々を無視する事は出来ません」

「私もジャンヌ・ダルクと同じよ、時代が違うというだけで民を見捨てるなんて出来ないわ」

「それと追加で戦力の増強だな」

《あー……悪いけど聖晶石が無いと追加の召喚は……》

「いやっ、その2人の様に何故か召喚された、まあ野良のサーヴァントでも言えばいいか、そんなのが他にもまだ居るだろう。それなら仲間を引き入れた方が良さだろう、少なくとも向こうに回られるのは困る。普通の人間なら色々と面倒はあるが、サーヴァントなら戦力が増えて困る事はない、いずれ相手にするにしても頭数は有った方が良さだろう」

「確かに私たちと同じような人が居てもおかしく無いわね！それに新しい人が増えるのは良い事だわ!!」

「もつとも彼が言う通り敵に回られたら面倒な事この上ないんだけどねえ」

たとえ速攻による強襲にしても、後で戦うにしても戦力が多いに越した事はない。

必ず居ると決めつけはられないが、まだ仲間になつてくれるサーヴァントが居る可能性はある。

そんなサーヴァントが敵に回られる可能性もあるわけで、おいそれと攻勢に出る訳にも行かない。

ちなみにどこかのジャンクフードファイターは自分よりなんか良い感じの意見を出した傭兵に負けたと勝手に思いふくれています。

そんなファイターを紅いのと青いのが笑みを浮かべて心から祝福しています。

「では明日からはサーヴァントの方を探す、という事ですな先輩？」

「そうだね、もつとも簡単に見つけられる気はしないけどねえ……」

そう言いながらも目標が決まったからか笑みを浮かべる藤丸、それを見てマシユや他のサーヴァントたちもホツと息を吐く。

最年少だとは言え、自分たちのマスターである彼が与える影響は意外と大きいのだ。

一方でスネークはジャンヌに尋ねた。

「ここからだに近いのはそうだな……デイジョンか？」

「そうですね、ラ・シャリテよりは離れて居ますがそれ以上に呆えています。

何かしらの情報は得られるでしょう……もつとも、無事ならの話にはなつてしまいませんが」

「そう心配するな、なんざ俺が言つても意味はないが少なくともデイジョンまで行動範囲にはまだ入って無いだろう」

「……何故そう思うのです?」

「飛んできたワイバーンの移動速度だ。」

直接見た限りだと時速60km、まあもう少し早く飛べそうな気がするがそれでも最高時速で100kmだろう。

オルレアンからラ・シャリテは直線距離で150km、デイジョンの場合は250km、ついでラ・シャリテからデイジョンの距離は150kmだ。

ラ・シャリテを襲ったのが今日だが、その移動時間を考えれば早くても1時間半、巡航速度を考えれば2時間はかかっている、デイジョンはそこから更に倍だ。

街を破壊する時間も考えれば一つの街で活動して帰るだけで1日終わる」

「……ですが更に遠くの街を襲ってから私達を襲った可能性もありますよね?」

「あり得なくは無いがまずこここの軍を攻撃している、実際俺たちが最初に会った砦も襲っているわけだしな。」

「ずいぶんな理由ではあるが執念はあのホンモノだ、それでも街を襲うには相当な時間と労力が必要になる、それに反撃も一応喰らう。」

「単なる田舎娘でもまずは脅威のある方を処理するのが普通だろう、そのついでに民間人も襲うんだろうが、それでも近場から段々と広げていくのが自然だ」

「……なるほど」

《じゃあ決まりだね、明日はここから南にあるディジョンに行こう》  
こうしてカルデア一行はフランス2日目を（やっど）終えた。

## 邪竜百年戦争オルレアン：5

ねえ、どうして……ねえ？

ねえ、どうしてみんなを○・・・○○の？

ねえ、どうしてあなたは・・・

◆？◆？◆？◆？◆？◆？◆

気が付くと街が燃えていた、そこに俺は立っていた。

しかもこの街には見覚えがあった、“あの街”だ、黒いジャンヌと会ったあの。

しかも見た時とは違う、まるで特異点Fの冬木のように建物が燃えていた。

けど徹底的に違うのは



「えっ」

そんな事は無かった。

そんな事は無かった。

ただ一人、いつの間にか目の前に立っていたのか少女がこつちを見ていた。

その間にも時間は流れているし、周りの建物は炎に包まれているから頬が熱い、

当然どんどん人は死んでいく。

「ねええ？どうしてえ？」

「……えっ？」

でもその子と俺は変わらない。

いつの間にか立っていた少女に今度は目を向く。

淡いピンクのワンピースらしき服に赤い靴、ただ片方の靴がどこかにやったらしい。

それにワンピースの袖口も焦げて……

「こわい、こわいのお……」

「そうだった……よ……ね……うっ……」

その少女は泣き出しそうな声で呟いた。

慌ててその子の顔を見て目を合わせようとして・・・その子に目は無かった

「ねえ、どうして」

その少女には目が無かった。

「どうしてみんなしんでるの？」

眼球が無かった。

「ねえ、どうしてあなたは・・・生きてるの？」

ただただ黒かった。

「ねえねえ・・・なんであなたなんかが生きているの？」

自分の体が彼女へ引きずりながら近く。







無  
え  
？

ただゆつくり

何も無い空間に引き込まれていく様だった

◆?  
◇  
◆?  
◇  
◆?  
◇  
◆?  
◇  
◆?  
◇  
◆?

《……うんバイタルも問題ない、脳波も睡眠時のものに戻った、けど一体どうい……》  
 「あれだけの死体を見たんだ、極度のストレスによる夢遊病……だったら良かったが、どうにも干渉を受けていたみたいだな」

《っ?! 観測データからも、そもそも君が彼を見ていても変化は無かっただろう!?!》

「それだけ偽装が上手いらしい、俺も今わかつたくらいだ、もつとも確認って程じゃないが」

《……それで藤丸君は無事なのかい?》

「それはデータ通りだ、もう終わったらしいが」

翌日の行動も決め、話が終わり寝始め数時間後、すでに翌日になった。

その間にマシユも仮眠（藤丸のサーヴァントとして中々寝ようとしなかったが）させ、見回りは相変わらずクー・フリーンにエミヤ。

そして女性陣は思いつきりガールズトークに、スネークは罫設置に走った。

ただアマデウスだけは普通に寝ていた。

だが明日の予定が今日の予定になった頃、藤丸は突然テントから出た

この時マシユもたまたま起き出して来たので、声を掛けたのだが返事がない。

寝ぼけているのかと思ったが、女性陣も無視してゆっくりと歩く様子が不気味に感じた直後、ロマンから通信が入った。

曰く藤丸君の脳波が少し変なんだけど大丈夫かな、と。

ロマンやカルデアからすれば寝ているはずなのに脳波から覚醒状態の兆候があったらしい。

それも何か気になるなあ程度の物で、マシユが起きたからついでに、という程度だった。

……が、嫌な予感がしたマシユは急いで女性陣に助けを求めた。

話を聞いた騎士王はとりあえず声を掛けるがこれも無視。

確かにおかしいとなり、ゆっくりと歩き続ける藤丸を持ち上げ無理やり座らせた。

話をしようとする（マシユが声を掛けた時も開いていた）目を見ても、焦点が合わず黒目がただ広がっているだけだった。

その間にスネークが話を聞きつけ戻ってきた途端、スイッチが切れた様に首をカクンとさせ本当に寝てしまった。

一瞬マスターが死んでしまったかと思つたマシユだが、騎士王から息も脈も有ると言われ、先ほどロマンからも問題ないと言われてホッとしていた。

それはこの場にいる誰もが多かれ少なかれ感じていたことでもあるが、とにかく落ち

着いた所で今度は藤丸を持ちあげ、マシユに託した騎士王がスネークに尋ねた。

「……それで、何故貴様がマスターが干渉を受けていたとわかった？」

「そもそも誰からの干渉だ、魔術的な干渉なら私の対魔力スキルでわかるぞ」

「私もアルトリアさん程じゃありませんけどわかるわよ？」

「私もルーラーとしての力はあまりありませんが、魔術的な干渉ならすぐにスキルでわかります……魔術が行使された感じは有りませんでした」

「一応僕もキャスターだから最低限わかるけど、そんな感じはしなかったけどね」

「あらアマデウス、起きてたの？」

「もちろんさ、もつともこれだけの騒ぎがあれば流石に体を起こすさ」

もつとも寝ながら少女たちの声をタダで、しかも間近で聞けてそれに妄s——（以下略）

な事をしていたが、そんなことを言った瞬間に聖剣のサビになりその頭部に風穴が開く気がしたので一切余計な事は話さないが。

「それで、貴様は何故わかった？」

「俺のスキルで坊主にくっ付いて、いや取り憑いていた奴を引き剥がした。

……まあ正しくは別の所にいかせたのかも知れんが」

《……もしかして、死者の加護かい？》

「まあな、〃奴〃が勝手に現れて坊主に近づいた後に坊主が寝たからな」

「うん、さらつと流したけど君随分と物騒な加護を持つてるんだねえ……」

「名前だけだ、効果は俺の知り合いが死んだ奴を適当にするってだけで俺自身がどうこうする事はできん、令呪を使えばある程度頼めるがな」

「思つた以上に適当だね!？」

「……ではスネークさんは死んだ人々が見え、今回は藤丸さんに〃いた〃のが見えたといふ?」

「まあ俺のスキルで勝手にどうかしてくれただけだ、実際に何をしたのかはわからない  
い

わかるのは坊主に近づいたのがいた事だ、坊主が憑かれやすいかもしれない。

あと今回のやつは随分とうまい奴だったらしいって事くらいだな」

「出来ればその藤丸さんの所に来たオバケさんに会つて見たかつたわね」

「それはやめた方が良いと思うよマリア、勝手に彼を何処かに〃行かせよう〃とした奴  
なんだから。あと君、そもそもゴーストとは相性悪いだろう?」

「……それで、先輩は大丈夫なんでしようか?」

「基本的には問題ないはずだ。」

まず坊主本人がどう思つてるか、何を見たかにもよるが、幸い一人じゃ無いからな。



それでも心配なら、起きたら後ゆっくりお前が聞いて見てやれば良い、それだけで効果的だろう」

「……なるほど、わかりました。

では先輩が起きたら私から先輩に聞いてみます、時間があるときにゆっくりと」  
「そうしておけ」

実際、その坊主も喜ぶだろうしな、とは伝えない。

余計な事は言わないのが吉なのだ、特に女性相手には。

今現在、マシユマシユな太ももの上に頭を乗せられて寝ている少年とその少女。

邪推でもありお節介でもあり下世話でもあるアドバイスだが心の中で思う分には害はない、本音と建て前だ。

そんなやや深刻そうなトラブルも一転して淡い様相を呈してきた。

それを見守るのはフランス王妃に聖女、男装の麗人として認識された騎士王、

おまけで変態クズの音楽家とほぼ40代で眼帯持ちの傭兵とやや偏った面子ではあるが。

ガザガサ

「やっとヒロインと主人公ツポクになったニヤ」

「フォーフォ（早くくっ付けば良いのに）」

……偏った面子だった。

《そんな空気を壊すようで悪いが敵襲だ！しかも数が多いぞ!!》

だが淡い色というのは思いのほか他の色に染まりやすく、そしてすぐに風化してしま  
う

焦った声でロマンが通信機から吠える。

《こちらである程度迎撃する、だがワイバーンがいくつか抜けるのは間違いない》

《大した事はねえが無駄に数が多いなっ!》

すでに外回りのエミヤとクロー・フリーンは対処しているようで、無線機越しで何かが  
空気を切り裂く音が聞こえていた。

「マシユ、坊主には悪いが目を覚ましてやれ、マスターとして仕事だ」

「わっわかりましたセンパイッ！センパイッ!!すみませんが戦闘ですっ!!!センパイ―

「事前に仕掛けたトラップで地上はほぼ問題無いが流石に空中まではな。」

「この中でワイバーンを相手取る自身があるのは……」

「私くらいだろうな」

マシユがバシバシ藤丸を叩く中、騎士王だけ手を挙げる。

「僕等は前線は張れないからね、支援なら任せてくれ」

「そうねー、私も惹きつけるくらいなら出来るわー」

「ではお二人は私がお守りします」

そんなこんなで頭を抱えながらもただならぬ気配を感じて目を覚ます藤丸。

そして、その予感が当たっていると告げるマシユ。

「……うっ……！緊急事態ツ!?!」

「夜ですがおはようございます先輩、そしてその通りですマスター」

「お目覚めだな、とりあえず目の前の事態にまずは対処するぞ坊主」

「すでにエミヤさんやクー・フリーンさんが迎撃してますがワイバーンが何体か逃したと連絡がありました」

「っ………ならアルトリアさんが先鋒で！」

戦う場所は周りが暗いからここからあまり離れ過ぎないように、他の人は基本的にア

ルトリアさんの支援で！」

「おやつ、思った以上に出来るマスターだね、これは僕も負けてられないぞー」

「もう人としてあなたは負けてるわよ、アマデウス」

「うん、知ってた」

《来るよ！ワイバーン、三体だ！》

ロマンが通信機から再び叫ぶと、その通りの数のワイバーンを焚き火の僅かな光のおかげで捉えた。

「援護する、真ん中に突っ込め」

「言われるまでもない」

その瞬間にスネークは背負う銃（M16）の銃口をワイバーンの目に向け2発発泡した。

フルオートモデルのアサルトライフルから放たれた弾丸は焚き火によって僅かに照らされた夜空を飛び出し、その空を飛ぶワイバーンの目を貫いた。

目を潰されたワイバーンが暴れながら墜落する、その仲間がやられたからなのか、は

たまた威嚇のためなのか、残る二体のワイバーンがスネークや藤丸たちがいる焚き火に向かい吠える様に唸る……が、そこに聖剣を握る騎士だけが居なかった。

「失せろ」

かの騎士王はその体を同じ夜空に浮かせ、

しかし弾丸と違いワイバーンに対して致命的な一撃を与えんと右手に夜空よりもはつきりと黒いその聖剣を

未だ飛ぶワイバーンのうちの一体の頭部へ真正面から叩き込む。

さらにそこから振りかぶった勢いに合わせ自身の魔力放出によって加速し、頭部に叩き込んだ剣を軸にワイバーンの頭部に難なく乗り、首から喉へ突き刺した。

唸り声も出せずに2体目のワイバーンも墜落しはじめた。

その間に初手と同じ要領で3体目のワイバーンも片目をやられるも、さすが竜種の亜種と言うべきなのか、

同じ手は喰らわんと弾丸は回避していた……が、焚き火から今度は同じ髪色を持つ確かな英雄が消えていた。

「さすがに仕留めきれませんが……」

そう言いながらもジャンヌは自身の持つ旗で器用に飛び移り、頭を揺らしながら引きはがそうと暴れるワイバーンを無視し、残ったその目を手に持つ旗で潰し飛び降りた。

両目を失ったワイバーンはやはりすぐに墜落し、それでもなお暴れるがやがて夜より黒い剣がその首を断つように地面に振りかざされると、頭部がゴトツと重い音を立てながらも地に落ち、切り離された下部も数秒後には力尽き動くことをやめた。

「お見事です、流石に旗で首を落とすことはできませんから」

「そう言う貴様も田舎娘の割にはずいぶん器用だったな、騎乗スキルがある訳でもあるまい？」

「アハハ、なんと言いますか……馬に乗る感じでいけるかなあ」と

「……馬に乗った経験があるのか？」

「無いですね、元帥がよく乗ってたので見よう見まねです」

「……それ以上にワイバーンの首を切って目を抉るなんて事をアツサリやった彼女たちの方が怖いんだけど」

「ああ、俺らはいらない気がしてきたな」

最初にスネークが落としたワイバーンは地上に残っていたアマデウスやマリー・アントワネット・マシユで文字通り囲んで殴っていた訳だが、その間にジャンヌが目を抉り騎士王であるアルトリアは2匹も切り倒した訳である。

単純な効率を考えれば彼女たち2人に任せていた方が早かったかもしれない。

というか早い。

「そんな事は無いと思います、最初にワイバーンが倒されたお陰で他のワイバーンは動きがわかりやすくなってますし、いくらアルトリアさんでも3匹をまとめて相手にすれば無傷では無かったですし」

「うん、俺もそう思うよ、今いる人たちの中でちゃんとした遠距離攻撃が出来るのはスネークさんだけだし、魔術的な援護はアマデウスさんだけだから」

「そう言われれば俺もやりがいがある、ありがとうなマシユ」

「ついで、あくまで私を感じた事です！」

「・・・あゝ、これ面倒かも」

そんな男衆……といっても2人だけが、そんな2人を励ますマシユと藤丸。

いくら傭兵と作曲家という一癖も二癖もある人間でも素直な言葉は無視できない、それが少年少女の物ならなおさらである、もつとも音楽家の方は照れているように感じるが。

「あらアマデウス、素直じゃないのねえ」

「ああマリア、それより優雅で素晴らしい言葉の続きを聞く暇はなさそうだ」

「ん？それはどういう……っ何か後ろから来るぞ」

何かアマデウスの様子がおかしいとスネークが思った直後 i D r o i d が罫の作動を報告する。

それはエミヤやクー・フリーンらがいる方向とは真逆の方向に設置したものであつた。

《っ大量のモンスターとは真反対から反応が2つ！しかもサーヴァント!?》

「なるほどな、これは確かに面倒だ」

「だろ？」

「わかつたのか？」

「これでも音楽を作つただけで英霊になつたらしい僕だよ？」

数キロ先の音を聞き取る事くらい訳ないさ、それこそ女性の息遣いなら尚更ね」

「……変態だな、情報としては信用できそうな分なおさらだ」

「しようがないわ、彼にとつてその変態な耳と感性が彼そのものだもの」

「あの……敵のサーヴァントがもの凄い勢いで迫っているのですよね？」

ゆつくり話していて大丈夫なんでしょうか……？」

「女で反応2つならまあ相手は絞り込めた、真名はわからんがこれだけ居ればどうにかなるだろうしな。」

油断出来んし見知らないサーヴァントの可能性もあるが……」

《こっちの観測データからだとの場にいたサーヴァントと同じ反応はしているよ。

もつとも確定できないしもう直ぐそばまで来てるんだけどねえ!!》



「だそうだ、そう心配するなマシユ」

「は、はあ……」

スネークが何故か心配そうに聞くマシユに問題ないと答える。

アマデウスの変態性を抜きにして相手が女で反応が2つなら、昼間襲って来たアサシン・ライダーにほぼ間違いはない。

セイバーの可能性も否定出来ないが。

「私の啓示スキルが反応したのですが……」

《つものすごい魔力反応！間違いなく宝具だぞ!?》

「……前言撤回だな」

「あー派手なのがー発来るのかあ……」

「つマシユ!!」

「了解ですつ！宝具展開します!!」

男2人が何故か頭を抱える中、藤丸がマシユの名前を叫びそれに答え彼のサーヴァントとして宝具を発動する。

その姿を後ろからみる王妃様、その顔は好みの花を見つけた時の少女の様に華やかだった。

その隣にいるジャンヌは対照的に、一切油断せず前方から来るであろう敵とその宝具

を警戒する。

「仮想宝具 疑似展開／ロード・カルデアス人理の礎！」

「愛知らぬ哀しき竜よ！」

マシユの宝具展開から一瞬間の間を置いたかと思われた時、

焚き火の光が届かない暗い森の一部から突如巨大な物体がカルデア一行にブツ飛んで来た

そんな物が宝具として飛んで来るとは思いもしなかったのかマシユは一瞬怯むも、

手応えからその物体自体が自身の宝具を貫通するほどではないと判断すると宝具展開を維持する。

その間にアマテウスは最後方へ下がり、スネークが僅かな光の中でその物体が何か観察する。

「こいつは……カメにも見えるが……」

「DDなオンラインで見たことあるニヤ、もう少しデカかった気がするけどニヤ」

「ああ、詳細までは語れそうに無いな」

「ニヤ」

いつのまにかちゃっかりとスネークの足元に現れたトレニヤ。

その右前では結構余裕が無いように……と言うより宝具で防げるとはいえ、飛んで来

た物体にメンタル的に余裕が無いため盾の後ろで顔を地面へ背けているマシユだ。その様子がキツそうに耐えている様に見えるだけだ、まあ耐えているのは確かだが。

だがそのカメの様な何かもトレニヤーが現れてすぐに、英霊が霊体化した時の様に消えてしまった。

「つタラスクがさつきと逃げるなんてどうして……まあ良いわ、こつちももう限界だし」  
そして消えた先から、焚き火の光でギリギリ判別出来る程度の距離に露出の多い修道女が立っていた。

その手には相変わらずデカイ杖が有るが、それと同じくらい籠手も目につく。

《反応が1つになった、どうやらさつきの生き物が彼女の宝具の様だ、それに——》

「タラスクと確かに言ったな、それに修道女……と言うよりキリスト教関連と言えば、マルタ以外に思いつかないが」

「ええそうよ、私はマルタ。こつちとしては余裕が無いのだけれど」

「開幕から宝具を向けて来る時点で余裕があるとも見えなく無いんだがな」

「いいえ、違うのよそこのヒゲの人、私はあととはあなたと……戦うだけ、それだけっ——！」

そう言うが早く、6本の足と硬い甲羅をもつドラゴンを従える修道女……否、聖女マルタが突っ込んで来た。

真つ先にターゲットになったのは先頭にいたマシユ……ではなくそのやや後ろでタラスクを観察していたスネークだった。

宝具を解放した直後だったからか、自身を守るために盾を構えていたマシユは反応が遅れスネークのカバーに入れなかった。

だがそれが致命的な失敗になることはなかった

空中から拳を振り下ろそうとしている聖女を捉えつつ、前方に飛び込みその拳を回避する

それと同時にマスターに向かって叫ぶ

「マスター！セイバー下がらせてアーチャーの奴を呼んでこい!!」

「つわかった！」

振り下ろされた拳は地面を陥没させていたが、そこから今度は杖を掲げ何かを呟いている

それを見てすぐに左腰からハンドガンを取り出し一発撃つ

マズルフラッシュが僅かにマルタの顔を見せるもそれは一瞬であり、彼女は気にもせ

ず杖をスネークにかざす

その姿を見てすぐにまた駆け出す……も、スネーク自身の周辺が爆ぜた  
……が、それは大盾によつて防がれた

「よりもよつて魔術かつ……助かった、マシユ」

「スネークさん、援護しますっ！」

「時間を稼ぐぞ、俺らは下地を作る」

初撃を許したとはいえ、シールドである彼女にすればスネークを守るのは当然だ

幸いマスターである藤丸はいまジャンヌや他のサーヴァントに守られている

その事実について心で引っかかるものが彼女にはあつたが、それについて今彼女は気にしない

2発目の魔術を打とうと杖を構えているマルタに向かい走り出すマシユ

その後ろに隠れ同じように馳けるスネーク

また同じように杖を掲げた途端、今度はマシユ自身が爆ぜた

……その様に見えるも、実際にはマシユの持つ盾の周辺が爆発しただけであまりダメージは無かつた

「随分と頑丈ねっ」

「ハアアアア!!」

その爆ぜた爆風から手に持つ盾を正面に思いっきり押し出すマシユ

その向かいにはマルタが居る

だがそれを見ても特に驚くこともなく当然のように、

杖を地面に突き刺し、それを取っ掛かりにそのシールドバツシユを回避する

その回避先に向かって再びスネークは近距離で発砲する

・・・だがそれも対して気にすることも無く

マシユの左側面に回っているマルタは杖をそのままに思いっきりその側面へ飛び込

む

「セエエイツ!!」

だが、

側面に回り、

飛び込まれる、

それはマシユがすでに何度も訓練した、させられた事だ。

聖女とは思えぬ拳が自身の側面突き出された瞬間

マシユは左に向かつて盾を振りかざしその拳の軌道に合わせる

そのタイミングは完璧であり、盾は人体でも脆い箇所である手首を狙っていた

「ツ！」

僅かに目を見開いたマルタ

だがそれは驚きでは無かった

自身の拳の軌道をズラし、振るわれた盾と自身の籠手を合わせる

「ツ!?!」

「っ！」

普通ならそれでも手首は壊れる

だが英霊が、英霊が身につける籠手が普通では無いのは当然で

止められた時点で引くべきマシユは一瞬ながら固まった

だが一瞬の間があれば英霊にとっては十分

互いに息を飲んだ

一方は驚きで、一方は・・・踏み込むために

ガラ空きになっていたマシユの右側に容赦なく足が食い込む

その見事な足蹴りはモロに彼女の体へ入り、蹴りの勢いそのまま飛ばされた

しかし相手は1人では無い

飛んだマシユを見送る事なく杖のそばに立ち“相手”を確認するマルタ

同様にマシユの状態を気にする事なくただ相手に銃口を向けたままのスネーク

互いに一步踏み込んでも拳は届かない空間が広がっている

「彼女の心配はしないのかしら、味方でしょう」

「だからこそだ、蹴りで沈むほどヤワじゃ無い」

「そう……私もそのオモチャで死ぬことは無いわよ」



「みたいだな」

そう言いながらも銃口は向けたまま

だが事実、これまで2発発砲したものの一切のダメージを与えていない

それどころかマルタ自身何も感じていない

聖女マルタというサーヴァントが持つスキルによるものだろうとあたりを付けるス  
ネーク

たしかにオモチャ呼ばわりも仕方がない

「聖女っていうのは思ったよりヤンチャなんだな」

「そんな事はありません」

「少なくとも彼女を吹っ飛ばしたあの蹴りは見事の一言だ」

「それはどうも」

藤丸たちは飛ばされたマシユの方に集まっている。

一応王妃様と音楽家の2人がこちらを見守ってはいるが、介入する気はなさそうで、マシユの方に意識は向いていた。

もつともスネークにすればその2人に介入されても手間がかかるのみで、マルタからすれば対して手間は変わらないと捉えていた。

「……頃合いだな」

「随分と余裕そうですね、もつともそうでなければ困るのですが」

「そうか……まあそうだろうな、なら出向いてきた相手に答えてやるのが順当だろう」

その言葉に疑問を感じるも気にすることでも無いと油断せず構えるマルタ

だが対するスネークは・・・銃口を自然と下ろした

ごくごく自然な動作で武器を下ろした

その行動に驚く……こともなく、より警戒し構え直すマルタ

だが構え直すあいだに目線を落とすし銃をいじったスネークはやる事を終えた

顔をマルタの方へ上げ右手から何かを放り投げる

焚き火の漏れ火だけが唯一の光源であるこの森の中

マルタは物体を見て、認識して、すぐ右に避けた

投げられた物体は緩い弧を描き彼女の顔があつた所を通過する  
その間も決して油断せず向かいにいる男を見ていた

・・・ハズだった

だが実際には姿そのものを見逃していた

視界の左側から違和感

顔を向けるとそこにいた、立っていた

「ッ」

すぐに牽制のために左ジャブを放つ

その左腕は弾かれ 体も僅かにつられ右に傾く

重心がズレたお陰で体重が乗った右足を軸に左足で蹴り回す

スムーズな流れで力の乗った左足は遠心力も加わる

その足先は寸分の狂いもなく側頭部を直撃する

確かにそう見えた

瞬間

彼女自身の足先と相手の側頭部に僅かな空間が “あつた”

その隙間に相手の右腕が入り込む

そして自身の左足は完全に止まった

視界が回る

背中に衝撃

聞こえる炸裂音と見える火花

「下地は完成だな、悪いがここで一旦区切らせてもらおうぞ」

「つそんなオモチャ……で……？」

「傾合いだな、投げ飛ばされても立とうとする女は初めて見た」

「な………んに………よ………」

視界が狭く、より黒く、暗くなる

頭をやられたのだと思い全身に力をいれる

それすらも出来ない体になっていた

「………すま………な………ら………ろ」

何か言われているようだがそれも聞き取れない

ただ暗い視界の中で

## 火花を見て

・・・。。。。そこまでが、

ただそれだけが、

彼女が、マルタが認識できた事だった。

◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆?  
◆

「……アレツ!? スネークさんもう倒したの!？」

「ん、ああ、こっちの準備は整った。

マシユの方はどうだ、心配するほどヤワじやないのは知ってるが結構な勢いで吹っ飛んだからな」

「私はこうして無事です、問題ありません」

こうして、外野が目を離している隙に敵であつたマルタを倒したスネーク。

マシユの無事も確認し終えると同時にセイバーがお使いから帰ってきた、その騎士王の後ろには確かにアーチャーであるエミヤがおり、共に外周で迎撃していたクー・フリーンの姿もあつた。

「おいマスター、アーチャーを呼んできたぞ」

「うん、ありがとう……って言ってももう終わっちゃったけどね」

「いいや、生憎私の仕事はここからなんだよ、マスター……とは言え、駆け付けたにも関わらず敵が倒れていると言うのは何とも言えない物だがね」

「悪いな、だがこれが一番手っ取り早い、適材適所だ」

「ふっ、その台詞をあなたから頂けるとはね、まあこちらとしても異存はない訳だが」

「……ホント、テメエがその口調になると気味が悪いな」

「だろうな、私はお前にこの言葉は使わないようにしているしな」

「言つてろっ」

何だかんだ言いながら気があう紅茶と青タイツ。

確かにいつもと違う言葉使いの彼に違和感はあるが不自然ではない。

……客観的に見れば青タイツの方はケルト神話における無双の戦士であり、伝承通りの力を発揮すれば掛け値無しで最強と呼べる英雄なのだが……………

「……それで、何で彼女は消えてないのかそろそろ誰か説明してくれない?」

「そうだな、これ以上掘り下げると色々……………まあ何だ、面倒というか、理不尽な気分になりそうだしな。」

とりあえず、お前たち2人には説明する必要があるか」

「……なんだか君とは会話しているように見えて、実は別のことを気にしているような気がするんだけど」

「気にするな。おい坊主、この2人に説明してやれ」

「そうっだね、ぜんぜん話して無かったし……………つて言っても、エミヤさんから話した方がいい気が……………」

「構わない、むしろマスターとしてちゃんと役目を果たした方がいいのでは?」

「……………わかった、じゃあ説明するね」

自身のサーヴァントの手の内を他のサーヴァントに説明するマスターとはこれいかに。



そんな視線をアマデウスがエミヤ当人に向けるも、その本人はフツという顔で頭を横に振るばかり。

その顔は一瞬、かの音楽の天才をも殺意の波動に目覚めさせるものだったが、それも一瞬。

表情から分かる情報としては、こんなマスターだから諦めろ、ということらしい。

「えっと、この森に入ってくる途中でジャンヌさんがわかったことを教えてくれたんだ。その内容が、あの黒いジャンヌに従ってるサーヴァントは全員狂化スキルを付けられる……とか？」

「……なんで君、疑問形なのさ」

「悪いね、生憎私たちのマスターは最近まで魔術も知らなかった素人なんだ、むしろ良く適応できてると思いが」

「そいつに関しては俺も同感だなっ、中々面白いマスターだぜ？」

「ハハハ……力不足で申し訳ない」

「……うん、僕は一応キャスターだけど、生前含めてここまで素直な子も珍しい、ていうか見たことないよ。」

……単純でわかりやすい奴なら知ってるけど」

「あら、それは一体誰のことかしら〜？」

「少なくとも君の事じゃないよマリア、つていうか君は単純だけどアクティブ過ぎて逆にわからないさ」

『・・・ああ〜』

単純なのにわからないとはこれ如何に……と、言いたいが。

見知らぬ相手から可愛い、という理由だけでササツと相手から可愛い奴を盗む位にはアクティブ、しかも理由は単純だ……それを予想できたらむしろ才能である。

「……そろそろ話を戻そうか」

「そうだね。」

えっと、それで狂化スキルが付けられてるから本来なら味方にすることはできないって話だったんだよ」

「まあそうだろうね、出来るなら縛り付けておく方法くらい施すよね、僕でもするくらいだ」

「けど、だった、という事はその対策があるのよね？」

「それが彼つてことかい？」

「ああ、その通りだ」

## 邪竜百年戦争 オルレアン：6

「……っ」

明朝、

鬱蒼とした森の中ではまだ暗い、だが木々の隙間からは確かに朝日が入り始めていた。

あと30分もすれば森の中も薄暗く、やがて明るくなるだろう、そんな時間帯だ。そんな鬱蒼とした森の中に、その場には相応しくない女性が横たわっていた。

「……夜明け？」

しかし案ずることなかれ、彼女は生身の人ではない。

実体も、肉体も、感覚も、感性も、確かに存在する。

だがそれはあくまで仮初めの姿、エーテル……魔力で編み込まれた物質に過ぎないサーヴァントだ。

「………なんで私、フツーに朝を迎えてるの……？」

……などと真面目に文字で表現すると深刻そうな気がしなくもないが、本人は至って冷静………というか呑気にそんな言葉をポツリと呟くことができる程度に平穏な森だ。

もつとも、幻想種であるワイバーンが空を飛んでいたりする事態は起きてたりするのだが。

そんな状況のフランスだが、そんな状況を招いた原因も彼女は知っている、そして覚えていた。

「……つて、寝ている場合じゃ——!?!」

先ほどまでの呑気な気分は吹き飛び、一気に眼が覚める。

同時に体を勢いに任せて飛び起こし、地面に二本足で立つ……が

「おー起きたか」

同時に敵であるはずの眼帯の傭兵が自分の目の前に立っていたではないか、

しかも陽気に片手を上げ彼女の方に会釈までしている。

「……なぜこちらに挨拶を」

「ん?……ああ、目覚めたばかりで感覚がそのままのつもりか」

「……どういう意味?」

「落ち着いてよく俺を見てみる、そうすればわかるはずだ」

「……………」

どうやら本当に挨拶をしただけの様だ

だが今の自分自身の状況はよくわかつている

目の前の敵に対してすぐに怒りや殺意といった感情が勝手に――

「……何も感じない……?」

「そんな事はないと思うが……むしろ狂化付与されていた時より思考しやすいはずなんだが……」

「……なるほど、どうやら何か私の体にしたようね?」

「……聖女つていうのは、頭が回るんだか気が回らんのか……」

「どういう意味よ?」

「いいや、気にするな……まあ概ねお前が予想している通りではある。」

もつとも俺は下地を準備しただけで、実際にやったのは別の奴だがな、それも含めて色々話さないか?」

そういうと、眼帯の男は親指を後ろに軽く差す。

彼の後ろに目をやると、キャンプの火の跡がある、その周りには木々や切り株も点在している、最近木が切り倒されたのかその周辺にはよく朝日が入り明るい。

その光景を見て、その女性は……マルタは昨夜、ここで戦ったのだという事をしつかりと思いついた。

「……どうした、こつちに来い」

「ん、悪いわね少し思いだしていた――」

その時！

マルタが顔を向けるとそこには不思議な光景が広がっていた！！

点在していた切り株はどうやら椅子の様に使っていた様だ。

そしてそこには皿が一つあり料理も置かれている、自分用に用意してくれたらしい。少し距離があるがここからでも美味しそうに見える。

その切り株の横では、切り株と同じくらいの大きさの生物が料理をモグモグと食べていた

「……………ハ？」

「……………おいトレニヤー」

「……………！」

その生き物は眼帯男に声をかけられた途端、これでもかという速さで首を回した

マルタは思った、なにコレかわいい

「……トレニヤー」

「……コレはコレステロールダメージですニヤ、いたしかたないのですニヤ……!!」

「そうか、恐らく事実だろうがお前の体の状態を報告されてもな。

それと迷惑を被っているのは彼女だ、悪い事をしてしている自覚があるなら素直に謝れ」

「ニヤー!!」

そして知ってるものからすれば珍しく、

本当に随分素直に謝る黄色いヘルメットを被ったネコ、その真名 トレニヤーはペ  
コつと頭を下げる

「……愉快な子ね」

「そうか?」

「少なくともタラスクよりは可愛げはあるわよ」

『姐さん!!』

……どうしてだろうか、どこからか悲痛な声が聞こえた気がする。

だがそんなものはないと誰も気にする事なく、とりあえずトレニヤーはマルタにモフ

られる事で許された。

◆? ◆◆? ◆◆◆? ◆◆◆◆? ◆◆◆◆◆?

「それで、結局わたしは今どういう状況なのかしら?」

そう言いながら切り株の上に座りながらトレニャーをモフるマルタ（決して丸太の上では無い）とその反対側で同じように腰掛けるスネーク。

用意されていた食事は

すでに手をつけられてしまったし、一応サーヴァントだから必要って訳でも無いから良いわよ?

と言うので、彼女自身がエサを与えながら弄んでいる。

その絵面は中々絵になる、というか冗談抜きに彼女は聖女なので教会のステンドグラスか宗教壁画にでもなりそうな物である、それほど様になっていた。

……もつとも膝の上に乗っかっているのは幻想種よりも幻想的と言うか何というか、

野生的な世界の一族の



トレジャーハンターなのだが。

そのトレジャーハンターはニヤー（Ⅱ、エ、Ⅱ）とご満悦である……主にエサにだが「手っ取り早く……というか、俺も専門的には説明できないが、俺たちの仲間の1人に魔術的な繋がりは一切断ち切る宝具があつてな」

「あくもう大体把握したわ、その宝具で私とあの女との契約を無効化したわけね、おかげで狂化も外れてるわけね」

なお、現在その宝具を持ったアーチャーやそのマスター達は、無駄に人数がいても邪魔になるだけだからと、森の外れでいつでも出発できるように待機している。

もちろん、スネーク達に何かあればすぐに対処できるよう伏兵はいるが。

「いや、狂化スキル自体はお前自身が解除した」

「……どう言う意味よ」

「そのままの意味だ、そいつの宝具は……まあ劣化版でな、あくまで契約を切るだけだな。」

スキルそのものまでは切れないそうだな」

「けど、元には私はこうしてあなたと話せてるわよ、殴りたいけど」

「それは勘弁願いたい、もつとも機会があれば是非手合わせ願いたいがな」

「……はあく、悪いわね、あいにくこの姿では拳は使わないことにしているの」

「……思いつきり俺たちの仲間を蹴り飛ばしていたはずなんだが」「狂化スキルのせいよ、OK?」

もつとも、拳ではなく足ではある。

だがこれ以上の追求はよろしくない、そう直感的に判断したスネークはスキル解除の話を戻す。

「……そうだな、その狂化スキルだがさつきも言った通りお前自身が解除した。

そも、お前自身自分で意思を制御できる程度には対抗できてただろ、そのおかげでこつちもお前を仲間にできそうだと目処がたった訳だしな」

「よく分かったわね? まあ結構ギリギリだったのだけれど、ていうか最初からわかったの?」

「知っているだろ、こつちにも聖女がいてな、それにわざわざ自分から突っ込んでいながら自分の名前を名乗って、しかも昼間での戦闘が不完全燃焼だったのか俺をわざわざ指名までしてただろう」

「……そう言えばそうだったわね」

「それに数的不利の状況に自ら突っ込んできた時点だな」

「………なんか恥ずかしくなってきたわ」

「何をいまさら」

実際にはジャンヌが狂化スキルのが付与されていると説明した時、エミヤが自分の宝具……ではないが手段の1つに破戒ルすべき全レての符カの話をした。

ただ、あくまであのジャンヌ・オルタと向こうのサーヴァントの繋がりを断ち切る事しかできない事、

それに仮に狂化スキルを解除できても仲間になるかはわからないと、エミヤとクー・フリーンから説明があった。

ただそれを踏まえてジャンヌは、修道女の格好である彼女なら自力で解除出来るかもしれない、彼女の名前はわからないが彼女がこのような行為をする英霊ではないことはわかる、と言った。

その意見に乗ったのがスネークで、あの女と俺が戦えば鬱憤が晴れてついでにスキルも勝手に、それこそ浄化するんじゃないか？と語った。

一行は最初、そんなまさか、と思ったのだがマスターである藤丸が

「けど、ムシヤクシヤしてる時つて大体人か物にぶつかると大人しくなるよねえ……正しいことかは微妙だけど」

と言ったところ、その場にいた全員が否定できなかった、ジャンヌすら苦笑いであった。

結果、その修道女は聖女マルタその人であり、あながち仲間にするの物的外れでない

ため物は試しとスネークが彼女の相手をする事で仲間にするための下地を作った次第であった。

一応、マシユは蹴られたあの時、散々スネークとやっていた事なので防御は間に合ったのだが、蹴られた方が彼女を助けられるのでは？と思つてしまつていたりする。

もちろん、あのタイミングで止められた驚きも大きかつたようだが。

「まあ結果的に一応あのジャンヌ・ダルクからは解放できた、そのままだと座に帰るだけだったから俺たちのマスターと仮契約の状態にもしてあるんだが……この後はどうする？」

「それをわざわざ聞く？」

「俺もそうだが、俺たちのマスターは押し付けるのが嫌いだな？」

「……わかつたわ、こつちも虐殺なんてゴメンよ、そちらが断つても着いて行くつもりだったわ」

「そいつは頼もしいな、ならマスターのところへ案内する、時間も惜しいしな」

「そうね、なら挨拶はその時ね」

「ああ、よし行くぞトレニャー」

そういうと、スネークは腰を上げ他のサーヴァントが待つ森の外れの方に体を向ける。

同様にマルタも腰を上げようとして、それより先にトレニヤーが膝から飛び降りる。同時にマルタの方に体をクルツと向ける。

「?どうしたの?」

「お姉さん!もう話が終わったから出てきてもイイニヤ〜!移動するニヤー!!」

「・・・お姉さん?」

「ンニヤ、おミヤーさんはお姐さんニヤ?」

「……………どうしてかしら、何か決定的に違う気がするのだけれど」

「気にするな、それよりトレニヤーの言う通りだ、出てきても良いんじゃないか?」

スネークは振り返りそう声をかける

それにつられてマルタも後ろを振り返ると・・・先ほどまで自分を使役していたそっくりの聖女がいた

「アハハ……………別に隠れてた訳じゃないんですよ?」

「ンミヤ?お姉さんはこのお姐さんが暴れた時にいたんじゃないかニヤ?」

「つトレニヤーさん!!」

「フフツ、良いのよ、それくらいわかってるわ」

「……………あのなあトレニヤー、世の中言わなくても良いこともあるんだぞ?」

「ケド、オイラ知ってるニヤ、何にも言わなかったせいで死んじゃった英雄さんのお話」

「まあコミュニケーションが重要なのは否定せんがなあ。

……そうだな、ただここは俺たち2匹は邪魔になりそうだ、すまんが先にトレニャーを連れて坊主のところに行ってる」

そう言うのとトレニャーはニャニャーンと走りながらカバンをユツサユツサ揺らしスネークのとなりに落ち着く

そのスネークは2人の聖女を置いてサツサと歩き始めている。

「……えっ?あのちよつと!」

「せっかくの〃先輩〃だろ、30分くらいは待つてるよう伝えておくがあまり遅くなりすぎないようにな」

そう言うって振り返りもせず、片手を上げ手を振ると本当にそのままトレニャーを連れて行ってしまった。

残ったのは聖女に位があるかは知らないが、金髪の〃後輩〃と拳の〃先輩〃である姐さんだった。

「……えつと、あの……そのっ」

「そんなオドオドしなく大丈夫よ、普通のあなたで良いわ、つて言うより自分も聖女であらんとはしていたけれど」

「そうなんですか……?」

「あなたも似たようなものでしょう?」

「……そうですね、もつともマルタ様の様に信仰の人とは私は言えませんが」

「つマルタ様はやめてつ、恥ずかしいわ」

「そつそうですね?」

「……あなた、ジャンヌ様ってあの紫髪の子に言われたい?」

「そつそんなつ／＼／＼」

……それから30分ほど、歴史に残る聖女の2人は話し合ったらしい。

もつともその内容は聖女としてではなく、出身の違う2人の田舎娘によるものだった……かもしれない

◆? ◆ ◆? ◆ ◆? ◆ ◆? ◆ ◆? ◆ ◆? ◆ ◆? ◆ ◆

「これから行くべき目的地はまっすぐリヨンよ」

時刻は日没まであと10時間くらい、といったところ。

カルデア一行は悪竜タラスクを鎮めた水辺の聖女：マルタを仲間として迎えた。

もちろんフランスにいる間だけの仮契約ではあるが、心強いサーヴァントであり味方である。

また、彼女は龍の魔女と化したジャンヌとの契約を切り、付与された狂化を（手助けはしたが）自力で解除したため、記憶も失っていなかった。

その彼女が言うに、現在黒いジャンヌは自身の魔力や体力を回復するためにオルレアンに籠っているという。

……と同時に最強の龍を召喚・使役する準備も進めていると言う。

「リヨン……ディジョンよりさらに南だな、そこにサーヴァントがいるのか？」

「間違いなくいるわね、人々の噂ではひとりその街で守護している剣士が居るってね」

「たかが人々の噂、と言うつもりは無いが……信用できると？」

「実際、リヨンに結構な数のワイバーンを送り込んだけど全滅したのよ。」



それで、本当はあなた達と会った時、本来ならあのまま移動して夜に奇襲をかける予定だったのよ。

……まあ、実際にはその聖剣で危うく全員座に帰るところだったけれど」

「ふっ、もつともそつちが宝具で防がなければとつくに終わっていただろうな？」

「しようがないでしょ！彼女の令呪で強制されたんだから！

……まあそのおかげで、彼女も休むことを強いられて拘束力が薄らいだから、偵察するって体であなた達に追いついてやられるついでに情報をあげようと思ったら、契約が切れて仲間になれたわけなのだけど」

「アルトリアさんっ」

「事実だ、別に非難したわけではない、もつとも防がれるとも思わなかったが」

「令呪でタラスクの強度を上げたもの、……それでも流星に全員を対象に守るにはギリギリだったけれど」

そう言いながら騎士王に笑顔で語るマルタ。

その顔に他意はなく、アルトリアもふつと顔を背けるだけに終わった。

「……それで、行き先はリヨンに変更になったみたいだけど、ここからだとザッと250km近くはあるわけだけど、移動手段はどうするの？」

『……あっ』

じゃあ移動するかあゝとなった矢先、目的らしい目的が出来たのは良いが、肝心の移動手段が無い。

その事を確認するのは音楽家のアマデウス、彼はクスではあるが無能では無い。

別に旅が嫌いなわけでもなく、むしろ好きな方である彼だが、流石にサーヴァントとは言え200km以上も徒歩で移動するのは勘弁だった。

しかも相手は空中を飛べるワイバーンを使役している、いつもでも悠長に歩いていた街が滅ぼされ、目的のサーヴァントも倒されてしまう。

「えっと、マリーさんはライダーでしたよね？」

「そうなのだけど、ごめんなさい……私の宝具は1人乗り用だから……」

「じゃあマルタさんは——」

「タラスクは移動にはあまり向いてないわよ」

「ですよねえ……」

移動手段に秀でていると言えばライダーなのだが、今いる主なライダーは全員を移動させられる手段を持ち合わせていない。

ジャンヌやクー・フリーンは走っても早いがそれではまず意味がない。

けどライダーはまだいる。

「ん、車で良いなら出さず、運転は俺だが」

「クルマ出せるの!？」

「当たり前だ、俺もライダーだぞ?」

《この時代に車を召喚しても良いものなのか……?》

《ウーム……まあ宝具の一種なんだろうしOKなんじゃない?》

《(この天才思考放棄しやがった……!》

一体いつから無線越しでも人の心情を表現できるようになったのだろうか。

そんなメタはさておいて、ロマンのツツコミは敢え無く天才の一言OKで済まされた。

……こんな調子の責任者でカルデアは大丈夫なのだろうか。

「……とりあえずお聞きしますが」

「どうした聖——いやジャンヌ・ダルク?別に気にすることでも無いはずだが」

「あのですね?この時代に車なんてオーパーツを出すのは問題があるのでは……と」

「問題ないだろ。」

一応この世界、というより特異点と言った方が正しいのか、まあとにかく一種のパラレルワールドだろ?

なら正史には残るまい、それに市街地を走らすわけでもないしな、誰にも迷惑はかからんしむしろ使わない方が迷惑をかけることになるだろう」

「それはそうなのですが……」

《えつとねえ……まあダ・ヴィンチが良いって言ったから一応問題ないと思うけど……カルデアから車は技術的にも物理的にも不可能なんだけど、本当に車が……?》

「本当ならヘリが一番なんだが……あいにくパイロットまでは出せなくてな」

『ヘリ!?!』

思ったよりこの傭兵、アクティブだ!

というより15世紀のフランスにあって良いものでは無いだろう、ワイバーン程ではないかもしれないが。

「……まあとにかくアシだ、もうすぐ到着するぞ」

「……えつ!?!もうクルマくるの!?!」

「ああ、とりあえずクー・フリーン」

「あん?なんだよ」

「霊体化でもしておけ、頭に落ちてくるぞ」

「……オイオイ、マジか」

頭上を確認すると、箱型の物体がパラシュートにぶら下がりながらも確かに……というかもうクー・フリーンの30m位先にあった。

実は車に乗るのを心の中で少し楽しみにしていたが、相変わらず運が無え……と、ま

た心で嘆きながら霊体化した、ついでに隣にいたエミヤも実は似たような心境で霊体化していたりする。

「……なんだか、クー・フリーンさんとエミヤさんが残念な表情を浮かべながら消えて言ったのですが……」

「そうだね……乗りたいかつたのかもねえ……」

「……あのなあマシユ、大の大人が、ましてや英雄になった奴が車に乗りたいと思う訳無いだろ。」

子供じゃあるまいし」

(……………)

「……フツ」

そのスネークの発言に何故か笑みを浮かべてアルトリア・オルタも霊体化した。

そんな騎士王の顔を見た王妃様は無邪気にニツコリと笑う。

その隣で密かに、心の中で、2人の男に向かい鎮魂の祈りをとりあえずあげる音楽家。そんな心理的なやりとりが実は展開されていた中でも、車は地上へと降りていた。

やがて車は地面へと接地、サスペンションが車重で少し働くもすぐに元に戻り、吊していたパラシュートは車体が接地した瞬間に燃えて跡形もなく消えた。

車両は緑と黒を主とした迷彩が施された4WDで、外見からしてまさに軍用車と言え

る物。

すぐにスネークは車両を点検する。

……とは言っても外装に異常は無く、内装は5人乗りでビニール製の座席だが普通の仕様ではなく、リクライニングができる様になっていた。恐らく研究開発班が旅慣れしていない人物を想定して改造したことが伺えた。

もちろん、他にも改造&アタッチメントが追加されているが。

「車両自体に問題は無いな、あとは走らせるだけだが……坊主とマシユは乗らざるを得ないわけだが、他は全員霊体化出来るよな？」

「……すいません、私は少し……」

「ジャンヌさん、透明に成れないの？」

「すいません、一応藤丸さんとの仮契約で魔力量は補えていますのですが、霊体化をしようとしてもうまく出来ないと言いますか……」

「ならジャンヌ・ダルクもか……一応あと一人は乗れるが、そっちの三人は大丈夫か？」  
「せっかくだから乗ってみたかったのに……」

「こんな所で文句を言っても意味がないだろうマリア。」

そういう訳だ、僕たちははぐれサーヴァントだけど霊体化出来るから問題ないよ」

そう言っ手振りながら消えるアマデウス、それに付いていくように仕方なく、仕

方なくく霊体化するマリアことマリー・アントワネット。

「ん、それじゃ私もしばらく静かにしているわ」

「そうしてくれ、もつとも周辺の警戒もしといてくれ」

「当然よ」

そう言うのと、満足した顔で聖女：マルタもまた霊体化した。

現在残るは（正しくは実体化しているのは）生身である藤丸とマシユ、そしてスネークと霊体化出来ないというジャンヌの4人となった。

「あの、興味本位でお聞きするのですが……スネークさんは運転できるのですか？」

「心配するな、運転もできるし免許も持っていた、事故起こすへまはしないから安心しろ」

「ハイッ、運転よろしくお願ひしますー！」

「うん、お願ひスネークさん」

「わ、私からもよろしくお願ひします」

マシユ・藤丸・ジャンヌの順でスネークに安全運転を願う3人。

そのスネークは片手を軽く挙げることで答え、車に乗りこむ、もちろん運転席だ。

「……………聞くんだがマスター」

「?どうしたの?」

「……………お前、どこに座る」

「えっ……………あ……………助手席で」

「了解だ」

こうして（なにかから）未然に救われた藤丸はサツサとスネークの隣に乗り込み、

その後ろに女性2人が乗りこむ。

そしてその間には黄色いヘルメットとリュックサックを担ぐネコが座っている。

「オイラも忘れてないかニヤ？」

「忘れてないぞトレニヤ」

「……………一体いつの間に座っていたんですか」

「？オイラふつうに乗り込んだニヤ」

「そ、そうですか……………」

「よし、出すぞ」

こうして15世紀フランスに四輪駆動の軍用車が、傭兵と聖女と少女と一般人を乗せてフランスの大地を約250km南下しはじめた。



## 邪竜百年戦争オルレアン：7

そろそろお昼時だろうと言った所。

そんな時刻になった15世紀フランスには場違いな4WDの装甲板や窓枠といったものを外した軍用車がリヨン近くにたどり着いた。

途中で野盗や脱走兵とぶつかる、と言ったこともなく、大変平和なドライブとなった。スネークの召喚（手配）した車は軍用車にもかかわらず快適な旅を提供し、二時間半ほどの移動ではあったものの、藤丸やマシユの腰が痛くなる、と言ったことも起きなかった。

「よし街道の外れに止めるぞ、これ位の距離ならバレないだろう」

そういうと車を減速させ、街道の外れに車を停めたスネーク。

エンジンを切りドアを開け地面に降りる。

同様に助手席にいた藤丸や、後部座席に座っていたマシユとジャンヌも降りてきた。

それと同時に流石に3時間近くやるのが無かったからか（もちろん警戒はしていたが）、霊体化していたサーヴァントたちもすぐに現れた。

「……今更なんだが、お前たちは霊体化してどこに居たんだけ？」

「それを今さら考慮するのかね？」

「それもそうか、悪いな変なことを聞いて」

「いや、これだけ早く移動できると楽だね、いくらでも楽器も運べそうだし」

「私はもう少しゆつくり景色を楽しみたかったわ」

「……マリア、今はそんな暇ないんだから」

「私は思いつきり飛ばしてみたいわね」

若干一名マイペースなお嬢様と、スケバンな気がしなくも無い聖女の反応が見られるが全員問題はなさそうだ

目的の街、リオンはすでに目の間に見えており、歩いて15分も掛からず到着できるだろう。

「一応確認するが、車内に忘れ物は無いな？」

「……うん、何も残ってないよ」

「わかった坊主、とりあえず下がってくれ」

「あの、スネークさん？」

「ん、なんだ」

「たしかに街道からは外れてるけど、このままにして置いて大丈夫なの？」

一旦戻すとかした方が良くないんじゃないの？」

いくら迷彩が施されているとはいえ、何かの拍子に現地人が見つけてしまう可能性はもちろんある。

それに空を飛ぶワイバーンが飛来すれば興味を持って壊されかねない。

いくら宝具だとはいえもつたいない、と思つた藤丸の感性は相変わらず一般人のそれだ。

「問題ないすでに対策済みだ、少し離れてろ」

が、思うところはスネークも同じであり、そして彼の部下たちも同じである、故に当然対策が施されている。

言われた通り車から離れた藤丸を確認したスネークは、普通の調子でくるまに「命令」した。

「ビークル、ステルス迷彩」

《Roger that.》

そう答えると、車は消えた。

その光景を見た藤丸とマシユは目を丸くする。

「!？」

「車が一瞬で消えました！スネークさん一体何が!？」

「言つただろうステルス迷彩だ、よく見れば車の輪郭はわかるが遠くからならまずバレ

ないだろう、それこそ双眼鏡でもあれば話は別だが——」

「何ですかコレ!? コレさえあれば怖がられずにヒツジをモフモフ! ヤギを〃狩れる〃じゃ無いですか!!」

「……そうだな」

訂正する

目を丸くするどころか頭がアフオーの子になった金髪少女が居た。

あだ名は確か聖処女だったはずだ。

「……にしても、俺が知らない間にだいぶ迷彩効果が高くなったな」

《……ねえ、さつきまで時速100km前後で走ってた車のエンジンって熱いよね? なんて熱源反応が消えるの?》

「ん? 光学迷彩は普通、赤外線や紫外線も同化させるだろ?」

《えっ! 熱光学迷彩!? コレ攻殻〇動隊なの!!?》

残念、コレはFateとMGSのクロスオーバーである。

《……魔力反応がゼロ、動いてるならパッシブリーダーでわかるけど駐車してる時はこつちからは観測不可能って規格外すぎない?》

「いや、規格通りだが……」

むしろ変な改造をしてヒヤッハアー!! してないだけマシンなのだ。

……具体的には、いつの間にフランスが舞台のタクシー映画を見たのか

『そうだ、空を飛ばばいいんだ!』とか言い出して即刻改造を施していない程度にマシである。

「・・・ロマンだな」

「ああ、貴様と同じ感想というのが些か気に食わんが同感だ」

「……なんでオメエら領き合ってたんだ」

そして心はガラス製の少年と、本元の青い方でバイク乗車経験ありの王様は素晴らし  
いものを見た満足し、その隣で青タイツのお兄さんが気味の悪いものを見るかのよう  
にその2人を見る。S A N値チエツクは無い。

「……まあこれで問題ないだろう、サツサとサーヴァントを見つけろぞ」

◆?◇◆?◇◆?◇◆?◇◆?◇◆?◇

「キヤー!! “竜の魔女” よ!?遂にここにも襲いに来たんだわ!!」

街に入った瞬間の第一声はこれだった。

……確かに街に入る前に見かけた人たちも、キョロキョロこちらをまるで不審者の様に見ていたが、どうやら不審者はこちらの方だったらしい。

まあそんなツツコミがフランス市民に受け入れられるほどの余裕も無いのだが。

《しまった！なんかいい感じに聖女マルタが仲間になったり和やかムードが続いてたから忘れてたけど、街にいるフランス市民にしてみればジャンヌは街を襲う存在でしか無いぞ!》

「す、すいません……私自身すっかり忘れてました……」

「いえ、ジャンヌさんは悪くありません、私も忘れてましたから……」

「変装できる服も用意すべきだったか……」

マシユとスネークが結構真剣に反省し始める。

もちろんその間にリヨンにいる「竜の魔女」の区別がつかない市民は我れ先にと逃げ出す。

「つて、これじゃサーヴァント探しが……!」

「いや、むしろ効率的ではあるぞマスター」

当然、当初の予定であるサーヴァント探しなど進むわけが無く、焦る藤丸だったが、そんなマスターにエミヤが何も問題が無いように声をかける。

「それってどういふ……?」

「ああ！騒がしいから向こうから駆けつけてくれるのね！」

「いやっ……まあ君のどこまでもポジティブな考えはいつになっても恐れ入るけど、そんな白馬の王子さまみたいなものじゃ無いと思うぞ？」

むしろ——」

「……なんの騒ぎかと駆けつけて見ればまさかジャンヌ・ダルクがこの街に入って居るとはな」

むしろ問答無用で切りつけられるんじや、

とアマデウスが言おうとしたところで白馬ではなく、むしろ黒く白馬の王子さまでは無く、黒を基調とした鎧を身に纏う男が現れた。

その雰囲気からしてサーヴァントでありセイバーだろう。

「……ついにこの街にも来た様だが、この街の住人に手を出すなら——」

「待ってください！私たちはカルデアの者です！」

竜の魔女と呼ばれてるジャンヌ・ダルクを倒す仲間を集めにここに来ました！」

「……そこに居るのがそうじゃないのか」

「こちらのジャンヌさんは真っ白です！竜の魔女なジャンヌさんは真っ黒です!!」

「マッシュ……そんな説明で信じてくれるわけが——」

「ふむ、確かにな」

「信じた!？」

意外っ！それは理解!!と、藤丸は驚いた

だが向こうの黒い剣士は実際に剣を収めた。

「何もそんなに驚くことでもあるまい、ここに来る途中から少し違和感があった。

この街には既に襲われた街からきた人々もいる。そんな彼らが逃げたのは竜の魔女が来たと騒ぎになった所から離れていたかららしい、ワイバーンも空を飛んでいたが自分が住む街の反対側の入り口に集まっていたそうだ。逆に言えば離れていた人々以外はやられた様だな。

だがお前たちはワイバーンもつき従えていないし、まだ暴れてもいない」

と、中々の推理で藤丸たちが少なくとも竜の魔女の一団では無いと理解してくれたようだ。

念のために構えていたカルデア一行もその警戒を緩める。

「よ、良かった……話がとてもわかる相手で」

「そうよアマデウス、あなたの考えすぎなのよ」

「きみはもう少し考えた方がいい気もするけどねマリア」

「アマデウス……あの音楽家の？ならそちらはマリー・アントワネットか」

「……サーヴァントの真名がこうも簡単にバレるのはどうなんだ？」



「別に困ることは無いから、俺はいいと思うよ？」

「いやっあのなマスター……いやっ、やっぱ良いわ」

昨日の夜ではスネークが連れてきたこの2人に対して真名がバレないようスネークとクー・フリーンはわざわざクラス名で呼び合っていたのにも関わらず、その連れてきた2人の真名はアツサリばれるというこの事態。

しかし別に聖杯戦争って言っても、その聖杯を回収しちゃうから関係ないよね？の精神で行くマスターからすればあまり問題ではないようだ……通常の聖杯戦争なら聖杯を回収しちゃうという発想の時点で問題なのだが。

「……すまない、ここで立ち話していると人々の迷惑になってしまう、場所を変えても良いだろうか？」

「え……あつハイ！すぐに移動します！」

「そ、そう慌てなくても大丈夫だ、そんなに遠くはない」

マッシュがスワツ！と返事をして駆け出そうとするのを防いだ後、怯えている街の人々に大きな声で

『彼らは敵ではない！例の竜の魔女に襲われ逃げてきた者たちだ！』と伝える黒い剣士。

最初はその言葉でざわついていたものの、一行が別段抵抗することもなくこの街を守る剣士に従っている姿を見て、住人たちも『竜の魔女がこんなところにいるなら、もう殺

されている』と、結論づけ、段々と元通りの落ち着きを取り戻していった。

そんな街の様子を見てスネークが尋ねる。

「……なかなか信頼されているみたいだな」

「そういう訳でもない、いつのまにか召喚されどうしようかと悩んでいる時にたまたまこの街が襲われているのを見た、そして助けた、それ以来ここにいただけだ」

「でもあなたのお陰で助かりました、ありがとうございます」

実際助かったのは事実であり、何よりお互い争うことが無かったことに感謝し、ジャンヌは頭を下げた。

その青タイツのお兄さん、なんか残念な顔しない、戦いが全てではありません。

「……………なに、生前から人の願いを叶えることが仕事だった、それだけさ。」

さて、一応ここが私がこの街の長から街の治安維持……と言つても主にワイバーン狩りだが、そのために借りている言うなれば詰め所だ」

黒い騎士のその顔が、過去の自分を思い出したのか僅かに変化したのをその隣にいたスネークは見逃さなかったが、他のメンツはやや後ろにいたからかその変化に気づくこともなく、何よりスネークがそれに触れる理由もないため大人しく案内された詰所に入る。

中は最初にフランスに降り立った際に立ち寄ったポロポロになった砦、その中であつ

た見張り塔の様な石造りで高さのある建物だった。

そして軍事施設……まして詰め所特有の生活感とは違う独特の痕跡がそこら中に散らばっていた。

「小さな椅子に机、そしてベッドは無い、だが随分と貫い物が多い様だな？」

「街の者がくれるのだ、私は……まあお前たちが知つての通りサーヴァントだ、食べなくとも問題ないのだが、街のものにそう言つても理解されない。私は食べなくても大丈夫だからと言つても彼らにとっては貴重な食料をくれるのだ」

「そうなんだ……やさしい人たちなんだね」

藤丸の言葉にマシユも頷く……が、同時に黒い騎士はその言葉を素直に受け取るのが恥ずかしかつたのか、それとも別の理由からか、自らの顔をわずかに2人から背けた。

だがすぐに正面を向き、思い出したかのように話を続けた。

「……そう言えば自己紹介がまだだったな。

私はジークフリート、ニーベルンゲンの歌に出てくる、といえはわかるだろうか」

《聖剣バルムンクを振るい、邪竜ファヴニールを倒した万夫不当の大英雄、聖剣としての知名度はエクスカリバーに劣るかもしれないけど、その実力は竜を倒したことから本物だよ》

「……すまないが、まずそのそちらに居る白いのと黒いのとの違いから説明してくれな

いか、私は全く情報を掴めていないんだ」

そう言われ、一瞬スネークの方を見る藤丸だったが、当のスネークは説明するのは面倒——自分は適任ではないと判断し、他に振った。

「それもそうだな、ならマスターとマシユ、それに本人が説明した方が早いだろう」  
「そうしてくれ、簡単で構わない」

そんなスネークの思わ——配慮に気付くことなく、黒い騎士……ジークフリートは彼らのマスターに話を促す。

そして簡単で構わないという言葉に考え込む藤丸、数瞬考える。

Q. どうすれば簡単に教えられるだろうか？

「……簡単に話す方が難しいので、一から話しても構わないですか？」

A. うん、ちよつと無理

「……すまない私の配慮が足りなかった、1からで構わない、教えてほしい」  
一同は思った

このサーヴァント、藤丸（マスター）と同じくらい素直だ、と

◆? ◆◆? ◆◆◆? ◆◆◆◆? ◆◆◆◆◆? ◆◆◆◆◆◆?

とりあえず話は済んだ。

幸いにも黒い騎士……もとい、セイバーであるジークフリートは、話ができるサーヴァントだった。

そして思考もまともで、目の前にいるジャンヌはまず本物で、いまフランスで暴れているジャンヌはまた違う存在であるという説明にも理解を示した。

そして軟弱男……もとい、カルデアのドクターロマンの存在も知った。

「それで……ここからどうする気だ？」

なんだかんだで話も落ち着いた頃、ジークフリートがカルデア一行に尋ねた。

その質問の意図がわからなかったマッシュが尋ね返す。

「どうするとは……どういう意味でしょう？」

「ジャンヌ・オルタを倒すのは分かる、それに関しては私も出来る限り手を貸そう。

ただ……わたしにはこの街を守らなければいけない、共に移動することはできない」  
「それは……そうですね、いくら相手を倒すためとはいえこの街を守っているのは現状ジークフリートさんただ一人です、ここから去るわけにも行かないでしょうし——」

「だからといって、1人置いて行ったところで勝てる相手でも無いからな。」

こっちはマルタやお前を入れて10体のサーヴァントはいる……が、うち2名は前線で張り合えないが」

そう言うスネークの言葉にマリー・アントワネットはニコニコと、アマデウスは手と首を横に振る。

「あいにく僕は音楽家だし彼女はフランス王妃だ、武勇なんてないさ……ほんとマリアはともかく、なんで僕なんか英霊になれたんだか」

「それに対して向こうはわかっているだけでもジャンヌ・オルタを含めて4人だ」

「ふむ……それならこれからすぐにここを発って一気に攻める——」

「いや、そういう訳にも行かない」

戦力にして約倍の人数がいるのなら、一旦留守にしても一気に攻め込んだ方がこの街を守る点では合理的だと判断したジークフリートの判断は間違えではない、加えて自ら攻めの提案を出したことに關心しながらも、それはできないとスネークは反論した。

「……それはどうしてだ？」

「気持ちにはわかるけれど向こうは聖杯を持ってサーヴァントを召喚してるの、私もそうよ。」

加えて私が死んだ……実際には契約を切ってこっちに移っただけだけど、少なくとも私が倒されたと思ってるなら新しいサーヴァントをすでに召喚してるはずよ」

いくらバカであったとしても、カルデア一行だけでデミサーヴァントを含めて5体いるのだ。

それは向こうも既に知っている、聖杯と時間がある以上戦力の増強は既にされているだろう。

実際にはそこから現地にいるサーヴァントも含めるとさらに倍のサーヴァントがいるとはいえ、向こうは更に倍々にいる可能性だつてある。

「そう言うわけだ、一点突破も選択肢の1つではあるが確実じゃない、それに襲うにしても相手が全員いるとは限らん。それこそジャンヌ・オルタが生き残ればまたサーヴァントを召喚されるだけだ」

「……なるほど、今まで俺一人で仕掛けるわけには行かなかったが、オルレアンを攻めるにしてもこのままでは『足りない』というわけか」

「戦力も情報もな、加えてこの街の安全を確保しながらだとすればなおさらだ」  
実際、このまま攻勢に出ても勝機はある。

それこそアルトリア・オルタが言っていた様に、自身の宝具でオルレアンを吹っ飛ばした後にエミヤが追撃、それでも残る残党はクー・フリーンのゲイボルグや藤丸たちで倒せばいい。

ただ、それを実行するにしても聖杯を持つジャンヌ（マルタの証言で聖杯はジャンヌ

が持っている事はわかった)を倒すことが最低条件だ。逃げられるのもそうだが、攻勢を仕掛ける際にいなければ何の意味も無い。

それに向こうにはルーラーとしてのスキルがあるため、仮にオルレアンにジャンヌ・オルタがいたとしても、奇襲する前に気付かれる、加えて敵も戦力増強が予想される。そうなれば迎撃されるのは間違いない、そんな条件下では戦力はあればあるほど良いわけで、竜殺しの英霊の力を借りないわけにはいかない。

《そうなる……やっぱり情報収集と戦力の追加かなあ》

「そうか、となるといくつかの街に協力を求めることから始めるか、幸い人数は多いしな」

「……ん、ほかの街もまだ残っているのか？」

「ああどうやらその様だ。最も私はここから離れていないから実際の所はわからないのだが、街の人々の中にはここ以外にもいくつか選択肢があったらしい、1つはここから西にあるらしい」

「西の町……どこのことでしょうか？」

「……すまない、俺はこの国には詳しくなくてな……すまない」

「い、いえ！ジークフリートさんが謝ることではっ！」

「ここから一番近い街という……テイエールか」



「そうね……って何であなたが知ってるのよ」

「地理の把握は戦略上重要だ、大体の地名と地形は把握してるからな」

「・・・待って、それってフランスのってことよね？」

「いや全部だが」

「全部!?!」

マルタが唐突に叫ぶので随分と驚くもんだなと思うスネーク。

まあすごい事だろうが、スネークの創設した部隊の性質上、世界中を文字通り股にかけていた。

別にスネーク本人が世界中を回ったわけでは無いが、それでも自分の隊員たちが現地に行くのならば物知りな隊員と適当に話していたらいつのまにか覚えていた。

もつとも、任務のたびに詳細な地形等は確認するため、意味がないといえれば無いし、その時からの癖でフランスに行くことが決まった時点で調べただけ……と当の本人は思っている。

そんなこんなで、一行は二手に分かれてさらなる戦力増強を見込んで各街を訪ねるところにした。

## 邪竜百年戦争オルレアン：8

リヨン出立 5時間30分後、フランス南西部 ボルドー 10:21

「……よし、そろそろ到着だ。何か問題がある奴はいるか？」

リヨンでジークフリートと無事に合流したカルデア一行は翌日、リヨンの街の住人から得た情報を元にリヨンから西にあるティエールとボルドーと呼ばれる街に向くことになった。

だが、ティエールまではリヨンから556km、車を使っても5時間以上はかかるため、捜索隊を2つに分ける事に。

その分け方もどこかのお姫様が「くじ引きが一番よっ！」と言いだし、まあそれで良いかと一同合意。

その結果

・ティエール捜索 藤丸・マシユ・アルトリア・アマデウス・マルタ

・ボルドー捜索 スネーク（運転手）・トレニャー・ジャンヌ・マリー となつ

た。

なお、エミヤとクー・フリーンはジークフリートと共に留守番となった。

またテメエと同じか、お前に言われる筋合いは無い、と互いに言い合うもテイエールじゃないだけマシか、と渋々（本当に渋々）居残る事になった。

そんな訳で、スネークは女性2人と探検家1匹を連れて5時間ほどドライブをしてポルドーに出向いた。

なお、道中でワイバーンが襲ってきたが全てトレニャーによって素材と化しました。

本人（本猫？）はホクホク顔です。やっぱり窓枠がないと狩るのが楽らしい。

「素材がいっぱいニャー！ポツケ村に帰ったらこれで色々作れるのニャー！」

「私たち2人も問題ありません」

「ええ、ご心配下さってありがとうございます！ところでトレニャーさんに質問なのだけれど」

「ハイニャー！」

「トレニャーさんが居るところの世界ってワイバーンがいっぱいいるのかしら？」

「さつきもあっさりワイバーンをピツケルで刺していたけれど」

「ああ、それ私も気になります」

「ニャ？あの飛んで来るやつはランプスより弱いニャ、群れて来ないし」

「ら、らんぼす？」

あと10分もせずに到着するのだが、ここでふとそんな質問をする王妃さま。

それにつられて隣のお友達も、後部座席からズイツと助手席にいるトレニャーに尋ね

た。

だが帰ってきた言葉が分ならず、思わずハモった。

ぜったいかわいい

「あーあれだ、カンガルーみたいな格好ですばしっこい奴だ」

「「かんがるー？」」

「……わからないなら恐竜版のオオカミだと思ってくれ、1匹1匹は弱いが群れで襲つて来る」

「ああ！ 困つて殴るように連携して来るんですね！ たしかにそれは厄介です」

「……まあそうだ」

聖女とは決闘でもしなければいけないのだろうか。

発想が不良のソレとあまり変わらないような気がしなくもないが、一対一なんて知つた事じゃないと言わんばかりの戦い方を始めた張本人でもあることを思い出したスネークは突つ込むことを放棄した。

「というか、こいつがきた世界にはとんでもない竜がそこらじゅうで歩いてる世界だ。

共存している、と言つたほうが正しいがな」

「とんでもない竜と言うと……マルタ様のタラスクさんの様な？」

「アレよりもデカイし凶暴なものれば小さいがすばしっこい奴、邪魔する様に頭突き

をかまして来る奴、色々だ」

フアングマジで・・・マジで・・・!!

カニ風情があ・・・!!

降りてこいよ空の王者(笑)

い。m ( ) m

.....  
といったコメントはお控えください

「じゃあじゃあ!あの黒い騎士様はドラゴンスレイヤーだけれど、そんな人がいっぱいいるのね!」

「ハンターさんのことかニヤ?」

「そうなるな、もつとも俺自身も直に見たことが無いが」

「ハンター、ですか」

「ああ、聞いた話だと色々な武器を使うらしいが俺の様な近代兵器じゃない。

まあボウガンみたいな飛び道具はあるらしいがな?どうやら剣やら槍やら弓で怪物を狩るらしい」

「おミヤーさんもティガレックスならいけるニヤ?」

「武器がこいつだけじゃあなあ、撃退はできるだろうが……」

そう言って、自分の足元のやや右に置かれた小銃を一瞬見下げるスネーク。

空の王者と違い、地上を這うあの竜ならば一応いまの自分が持つ突撃銃でも対応できる……がそれでも狩り切る自信は無い、せいぜい追い返すのが関の山だろうと考える。

せめてRPG、できるならカールグスタフの1つでもあれば話はまた違うが、と思いつながら。

「止まりなさい！ 貴公らが悪しき竜で無ければ！」

すると前方から大きな声が聞こえてきた、よく見ると道の真ん中に鎧を纏った人影が見え、道を遮っていた。

その運転手も素直にその言葉に同意しスピードを落とす。

「ん、どうやら探す手間が省けそうだな、とりあえずジャンヌ・ダルク」

「はい」

「お前が返事をしてやれ、それが早い」

「えっあつ……ごめんください！ あなたはサーヴァントでしょうか！」

……まあ間違いではない、別に知らない土地に出向いての開口一番が『ごめんください』は間違いでは無いが、サーヴァントの言うセリフか否かは悩む所だ。これがマシユなら納得できるのだが……いや、初陣の様な感じだと言うから別に問題は無い……ないだろう。ないよ。

「ええ、私の名前はゲオルギウス、ここの街の守護を任されている者です。あなた方が敵

対する意図が無いのはわかりました、良ければその馬から降りて来て頂けますか？」  
「……とのことですが」

「相手は守護聖人だ、招かれたなら断る理由はないだろう」

そう言つて車のエンジンを切り、車を降りるスネーク。

それに合わせてジャンヌやマリーも降車し、道に立つ英霊：ゲオルギウスの方へ歩いて行つた。

◆? ◆ ◆? ◆ ◆? ◆ ◆? ◆ ◆?

「連携、ですか」

「戦力が揃えばこつちも攻勢に出れる、幸いこつちには火力がある……が、一回手の内を見せた。」

向こうはそう簡単に隙を与えてくれないだろう、そのために出来るだけ向こうの戦力を分断する必要がある、そのために頭数が必要でな」

カルデア一行が立てた作戦の大まかな概要はこうだ。

敵本陣に向けて火力を持って薙ぎ払った後、電撃戦を仕掛ける。そう、早い話が脳筋作戦である。

もつともこの手段は一度相手に用いてしまっている。向こうもそれを阻止しようとしてくるはずだ。

そのためには早い話匣を多数用意して宝具を解放する隙を作るしか無い、令呪を使うにしてもだ。

ある程度オルレアンに接近し、敵ジャンヌが逃げる前に仕留める。そのためには戦えることもそうだが、出来るだけ多くの敵を引きつける必要がある。

「なるほど、それならば私も役に立てそうですね」

「ではー」

「ええ、わたしもそちらに合流しましょう。」

幸い、と言つていいのかここは一度襲撃を受けました、その時はどうか退散させましたが2度目は厳しい。

そう判断しすでに市長には住民の避難を始めてもらっています、それも今日中には終わります。

住民たちの避難が終わり次第、貴方達とともに移動しましょう」

「決まりだな、なら俺はマスターたちに連絡する、今日中にリヨンに戻るだろう。こつ



「ちもかの聖ジョージに直接守られるとなれば心強い」

「守ることが英霊としてのわたしに求められていることですからね。」

「この街の人々を守り、そしてこの国の人々を守るためにあなた方を守ります」

「まあ、素晴らしい殿方ね！」

「ははは、かの王妃にその様なお言葉を頂けるとは」

車を光学迷彩で隠した後、こちらにも名乗りとりあえず理解を得た。

ジャンヌ・ダルクが名乗ろうとしたところ、あまり話さない方がよろしいでしょうとゲオルギウス本人の口から話され、それはなぜかと聞いて見ると本人には直感スキルがあるらしく、道の真ん中で立っていたのも、鉄の箱馬でやってきた自分たちのことを敵では無いと瞬時に直感したかららしい。

『敵であればすでに攻撃していました』とは本人談。

何はともあれ、無事に当初の目標通りサーヴァントを味方につけることができた。

あとはリヨンに戻り――

《つ繋がった！》

「ん、ロマンか。いまサーヴァントと合流してな――」

《今すぐそこから退避して！サーヴァントと超極大な生命反応が猛烈なスピードで近づいている!!》

「なに?」

無線から聞こえて来た情報がとんでもないことだと思いつつ、すぐに無線をiDro idのスピーカに繋げる。

「すまんロマン、もう一度言ってくれ」

《とにかくすぐに回避だ! サーヴァントに超巨大なナニカが接近してる!! あと10分もしないでくるぞ!》

「なんと……!?!」

「落ち着けロマン、サーヴァントは何体かわかるか」

《そんなのいいからともかく——》

「いいか、落ち着け、俺らが撤退するにしても敵の情報が必要だ。もう一度聞く、サーヴァントは何体だ」

《……うん、ごめん、取り乱した……》

そう言ううと通信機の方こうで深呼吸をしたロマンは状況を詳しく伝え始めた。

その情報はこの場にいる者にとって大変良くないものだった。

《サーヴァント反応は3体、それに加えてサーヴァントを超える生命反応。

これが全部、今君たちのいるボルドーに向かっている、到着は10分後、オルレアンの方から来ている》

「ゲオルギウス、住人の避難はいつ完了する」

「まだ終わりません、せめて午前中一杯はかかるかと」

「ロマン、マスター達はこっちに向かつてるか？」

《少し前に連絡した、クー・フリーンが走って向かつてる、けどすぐは無理だ》

「令呪による転送はできないのか？」

《無理だ、サーヴァントを呼ぶ寄せることはできるけど、それは令呪で位置座標を固定してるからだ。

見える範囲なら誤差だろうけど、行ったこともない場所にサーヴァントを移動させるのはできない》

「そうか、ゲオルギウス」

「なんでしよう」

「2時間で避難を終わらせてくれ、その間の時間を稼ぐ」

「なんと……!？」

「そんな無茶です！それなら——」

「ジャンヌ・ダルク、お前はゲオルギウスに付け」

「何故ですか!？」

「お前が迎撃にできればヘイトが高まる、それにお前がここにいるのを知れば向こうはな

りふり構わず街を攻撃しないとも限らない」

「ですが——！」

それではあまりに無謀だ。

たった一人でサーヴァント三体に正体もわからない何かを相手にするなど不可能だ……たとえそれが死ぬことが前提だったとしても。

いくらカルデアで召喚されたために倒された後でも再召喚が可能だとはいえ、この場で一人で戦いに挑んだところで意味がない。

故にジャンヌ・ダルクはスネークに抗議し、そのスネークはマリー・アントワネットを見て言った。

「王妃様、すまんが援護頼む」

「あら、わたし？」

「頭数が多い方がいい、だが住人を守る数も必要だ、が出せないならおたくを頼るしかないからな」

「そこは身を呈して守ってくれるのではなくて？」

「使えるものはなんでも使う、余裕があれば話は別だが」

「……良いわ！わたしだったただのおてんば娘じゃないってアマデウスに教えないといけないと思ってた所なの！」

「マリー!？」

だが、無謀だと思っっているのはジャンヌだけではなく、スネーク自身もそう思っ  
た。

故にこの場にいるもう一人のサーヴァントであるマリー・アントワネットに力を借  
ることにした。

この場で戦えるサーヴァントはスネーク以外ではジャンヌとゲオルギウスだろう。

だが、ジャンヌが出れば向こうは何も考えず遠慮なしに街を襲う可能性がある。

なにせもう一人の「自分」である彼女を見下しているフシがある、それこそこの国を  
救おうとしている彼女に見せつけるように街を直接襲うかもしれない。

それに、ゲオルギウスが戦いに出て行ってしまえば避難誘導はスムーズに進まない

それこそ今いるメンツ全員でで向かってきていて敵を倒しきれない保証もない、最善な  
のは追い払うか援軍を待つまで時間稼ぎをすることなのだ。

最低でも街の住人を避難させさえすれば街を破壊されても問題はない。

故に王妃である彼女と共に敵を迎撃し、残りの2人でさつさと住人を避難させてもら  
うのだ。

「いいのジャンヌ、これは戦いよ。確かにこんな戦いは生前のわたしは経験したこと無  
いけれど、ただの女の子じゃなくってよ?」

「それに専門家もいるしな、サーヴァントの相手さえできれば時間は稼げるだろう」  
「それはそうですが……」

前線を張れないだけで、全く戦えないわけではない。

それにフランスの民が目の前で襲われているのに自分は何もしないで放置するほど、この王妃様は冷酷ではない。

むしろ人々のために自分を犠牲にする程度のこととはやるのが彼女である。

その頑固さは田舎娘である聖女でも同じだろう。

「……わかりました、避難誘導が終わり次第わたしもそっちに行きます」

「2時間だ、2時間以内で避難を終わらせてくれ、それ以上持たせる自信は無い」

「なら私たちは住民の避難誘導を始めましょう、行きますよジャンヌ・ダルク」

「頼む、なら俺たちは北部で迎撃する、すぐに移動するぞ」

「ええ！」

《確認するけど君たちだけ避難は……しないんだね?》

「悪いなロマン」

それぞれが移動を始める。

ゲオルギウスとジャンヌはポルドーにいる住人を避難させるため街の中へ、スネークとマリーは出来るだけ街に被害を出さないよう車で街の北部へ。

幸いオルレアンはボルドーから北東の方向にある、方部に広がる畑に誘導は十分出来るだろう。

《けど……その場に留まれば——》

「馬鹿言うな、ここで死ぬか、あの空っぽ女に負ける気はない、それに逃げるのも癪だからな」

そう無線に答えると、止めてある車に走り出すスネークとマリィ。

出来るだけ街から離れ、ボルドーから住人が避難するまでの時間稼ぎをする。

そんな条件の中、若干汗を滲ませながらシートに乗り込みエンジンを付ける。

「念のため確認するがあくまで時間稼ぎだ、倒れさえしなければどうにでもなる、とにかく耐えてくれ」

「ふふ、大丈夫よ。これでも耐久に関しては自信があるのよ」

「そうか、よろしく頼む」

ライダークラスの傭兵とフランス王妃の2騎のサーヴァントが、防衛戦に挑む。

## 邪竜百年戦争オルレアン：9

時代違いではあれど、今この場では場違いではない4WDの軍用車がフランスを疾走する。

それを操るのは傭兵である眼帯の男と、フランス国王ルイ16世の王妃。

双方ともにサーヴァントとして現界した存在だが、同時にボルドーを襲おうとする復活した（とされる）ジャンヌ・ダルクから避難する住民のために時間稼ぎをするために、街から北部にある……有名なブドウ畑の方へ向かっていた。

「つこいつはロマンの言っていた通りだな」

「そうね、私でも感じられるわ」

車を飛ばし、出来るだけ街から離れた……が、それでも5km程度だろう。

そしてカルデアからの連絡から10分が経ち、サーヴァントを超える超極大な生命反応が戦いの素人であるマリー・アントワネットですら感じられていた。そして直接その姿が車の進む先の空に見えていた。

「……見たことないやつだな」

「まあ、随分と大きいわね！」



《この反応からして幻想種だとは思ってたけど……!!》

幻想種：

本来、伝説や神話において登場し文字通り幻想の中にのみ生きるモノ。故に使役はおろか目撃することは不可能に近い。だが人理が焼却されたいま、この世界の裏側にしかないはずの幻想種が出てくるのは難しくもない。そして幻想種を使役することが可能な力を持つものが聖杯を使い、それらを使役するのも不可能ではない

それがたとえ

《だからってドラゴンはないでしょう!?!》

グ ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア  
ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア!!

と、大気を揺るわす怒声とも叫び声とも違う音が響く。

その音を合図にスネークはハンドルを切り、車を止め、その音を発する元凶がいる空を見上げる。

見上げた先にある極大な黒い影の背中には一度見た黒い聖女が居た。

「アラ？こんな所にいたのですか、私たちの邪魔でもするつもりで？」

「邪魔も何もお前が勝手に来ただけだろう、むしろ出迎えだ」

いまだ車に乗りながらジャンヌ・オルタの声に返事をするスネーク。

その後ろでマリー・アントワネットもジャンヌに声をかける。

「あら、彼女がもう一人のジャンヌ？」

「……どなた様かしら」

「ふふ、私はマリー・アントワネット！もう一人のあなたのオトモダチよ、ジャンヌ・ダルク」

「あの汚わらしい私とトモダチ……だから何です、私を止めに来たとでも？」

「……いいえ、あなたを止めることはわたしには出来ないわ」

「ハッ、でしょうね。どうせあの女ともただお互いに慣れあっただけでしょう。」

所詮ただの田舎娘と嫁いだ箱入り娘、そして周りに裏切られて最後には殺された同じ運命、違うかしら」

「そうね……けれど、単なる女じゃなくってよ」

「そう……じゃあ死になさい」

その瞬間、後部座席に乗っていたマリーの後ろから、首筋に向かって大ぶりの剣が振り下ろされる――

「わけないだろう」

「！」

——代わりに後部座席の後ろにある外装が突如開き、一斉に火を吹いた

剣を振り下ろそうとしていた人影は間一髪、車を蹴ることですの場から回避した

同時にスネークは足元に置いたM16の単射で3発避けた人影に撃つ

だが上空から飛んで来た別の影がその弾丸を弾き飛ばした

「大丈夫か」

「問題はないわ……けど」

「けど何だ」

「……ビツクリするから、今度から事前に教えてくれると嬉しいのだけれど」

「それだと敵も欺けないからな、まあ諦めてくれ」

そう言いながら銃を構え車から降り、車両後部から突如展開された対空銃座6丁の様子を見つつ敵を伺う。

敵の数は後方から奇襲して来たのと上からいま落ちて来たので2体、そして上のデカイドラゴンにその背中乗っているジャンヌの計4体。奇襲を仕掛けた方は大きめな剣を持ち、もう一方は黒い騎士という表現そのままの格好をしている、だが一番の脅威はデカイドラゴンで間違い無いだろう。

「さて、早速戦闘だが王妃様、戦いたい相手はいるか？」

「そうね、ならいま襲つて来た彼ね」

「ほう、まさか要望があるとは思わなかったが……知り合いか？」

「あなたの様に博識ならこう言つてもご存知かしら、わたしが靴を踏んでしまった人よ？」

「……何とも縁があるもんだな」

「そうね、それは向こうも同じじゃないかしら」

「なら俺は黒騎士とあのドラゴンの相手をする。生憎余裕も無いからな、出来るだけ援護もするが倒すのは任せるぞ」

「援護していただけるだけ十分よ、むしろ大丈夫なの？」

「あくまで時間稼ぎだからな、むしろあの男の相手を頼んだぞ」

その言葉にニコツと微笑み、それで返事をするマリー・アントワネット。

一方でその顔を一瞥した後、M16を背中に回しハンドガンとナイフを取り出すスネーク。

「ああ、まさかこの様にして君に会えるなんて……！」

「……あいつの相手はお前に任せる、どうもやつてられん」

「ふふ良いのよ、けど加わりたかったら良いのよ？」



その傭兵も返事はわかりきってると言わんばかりにため息を吐きながら首を横に振る

それは諦めのため息

「けどそれじゃダメなのニヤ」

——な訳が無く

空にいるファヴニールの真上

目と鼻の先にある太陽の真上に丸い影がぶら下がっていた

「空中投下ですニヤ！」

丸い影はファヴニールの真上から落下し

炸裂した

「!？」

それは誰の驚きだろうか

独特な高周波が炸裂した場から発せられ

ドラゴンの雄叫びよりもはるかに不快な音が辺りの空間に響き渡る

地上にいるサーヴァントたちは耳を抑え下を向く

最も近くで聞いた巨大なドラゴンはその巨体をくねら急激に地面へ落下していく  
その巨体からゆっくり落ちていくように見えるが、その速度は見た目以上であり  
わずか数秒で地面に激突する

「よくやった」

だが地上にいるサーヴァントの中で唯一こうなることを予想していた傭兵は  
巨体が落ちていく間に黒騎士に音なく接近した

この騎士の真名からして本来は一瞬の隙も見せることは無い  
だがバーサーカーであること、

使われた兵器が屈強なハンターですら耳鳴りを起こすものだったこと、

それが予期せぬタイミングで使われたこと、

これらの条件が合わさり、敵から視線を外すという隙を晒した

そしてそれがこの黒騎士にとって致命となった

音も立てず

見ることもできず

感知することもできなければ

それは存在しないに等しい

黒騎士は背後から拘束され頭頂部を軽く抑えられながらやや上を見上げる

そうして開いた頸部にナイフが刺さる

左から右へ引き裂かれる

そのまま優しく背後へ倒され仰向けになる

もうすでにこの騎士は動くことが出来なかった

「……………r……………t h r……………」

「悪いな」

そう言つてハンドガンを取り出したスネークによつて仰向けになつた黒騎士は

甲冑が空いている部分からハンドガンを3発、霊核がある部分へ向けて放たれた

パンツパンツと乾いた音が続く



そうして黒騎士は淡い光となつて消えつていった

魔術と縁のない傭兵でもサーヴァントとなつたせいとか、直感的に目の前の敵が座に帰つたことがわかつた

そこに巨大な物体が落下したことによつて地面が揺れる

数瞬を置いて風と粉塵が舞い上がり地面を這うようにして一気に広がる

このタイミングで続けてフランス革命を見届けた男へ接近しようと試みる  
だが向こうから先に近づいて来ていた

「流石にバレるか」

「こつちもタダでやられる訳にいかないんだ」

相手が処刑刀を構えスネークに迫る

後ろに退避せず姿勢を低くし懐に潜る

間合いを詰められると悟り歩みを遅める相手

だが、かの騎士王からも初見殺しと言わせたのがスネークだ

剣や槍の間合いを維持することが出来なければCCCの間合いに入られる  
ただ歩みを遅めただけでタイミングをズラせることは無い

「エーイツ！」

「ツ！」

そこに魔力の塊が相手にぶつかつた

大したダメージでは無さそうだが、それでも直撃したようで驚き大きく距離をとつた

「大丈夫、邪魔じゃ無かつたかしら？」

「むしろ助かる、あとの相手は頼んだぞ」

「ええ、貴方はあの大きいドラゴンをお願いします」

「任された」

大きなドラゴン……ファヴニールが墜落したのは今いる場所から200mほど先に落下している

一旦車に寄つた後、その落下地点に向かつた

その時、背後では何やら王妃と処刑人との間でやり取りがあるようだったが、今は気にせず目の前にいるドラゴンの撃退に思考を集中させていた……そのついでにあの空っぽの馬鹿女をどうしたものかと考えながら。

◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆

「・・・ツイッタ!? 一体なにが起きたのよ……」

ザクザクザクザクザク

「? なんの音よ……」

ザクザクザクザクザク

「……待って、なんでファヴニールが落ちてるのよ!」

「ニヤ? 音爆弾はそういうもんだニヤ?」

「爆弾って・・・ハツ?」

「ニヤツ?」

一方、ファヴニール墜落現場ではなんとも奇妙なというか随分とノンキな雰囲気の流れていた。

そも、ファヴニールとそれに乗っていたジャンヌがどのような経緯を経て状況に陥っているかというと、まずスネーク達が停車する前の走行中の車から飛び出したトレニヤーはスネークから「借りた」改造済みの空中機雷をファヴニールの鼻先付近で設置。そのあとテキストなタイミングでブーメランをフルトンに当てて吊り下げてあつた物……音爆弾を落とし炸裂させた。

空中機雷とは対ヘリコプター用の携行兵器で、風船のようなフルトンと呼ばれるもの

に接触することで炸裂する爆弾を吊るしたもの。改造版は吊るす爆弾が外され、換装が可能になっている、それがたとえよくわからない袋で出来たものでも、確実に空中に吊り上げられる。

そして吊り下げた音爆弾はどれほどの代物かというところ、一般人が目覚まし時計代わりに使ったら泡を吹いて半日気絶したとか、その音圧は砂漠の地面に波紋を作り上げるとか、屈強なハンターですら気を抜いていると耳鳴りがするという。逆にハンターは気構えていれば耳鳴りも起こさないし、そもそも鼓膜も破れないという。ハンターズゲー。

そんなびつくりドツキリ兵器の効果は見ての通り、空中に飛んでいたドラゴンを一時的に行動不能にさせることで落とし、その炸裂地点の近くにいたジャンヌを失神させドラゴンから放り出され、地上にいるサーヴァントですら耳を抑えた。ハンターズゲー。

話を戻して現在、トレニャーは落下したファヴニールに乗り『なんか採取できる場所ないかニャー』と考えながらせつせと鱗を採ったり掘ったり設置したりしていた。そこにサーヴァントだからなのか結構早くジャンヌが目覚ましたところである、説明終わり。

「・・・なんだってこんな所に猫が……？」

「オイラはトレニャー！」

「.....」

「……ニヤ？お姉さんどうしたニヤ？」

「な、なっ、」

「？」

「なんでネコが喋るのよ!？」

「ニヤ！オイラはネコじゃあ無いニヤツ!!」

「喋るネコがいる訳無いでしょう!？」

「だからネコじゃ無いんだニヤア!!」

「普通のネコがファヴニールの上に乗っかってる訳がないでしょう!？」

「じゃあオミヤーさんも普通じゃないニヤー!？」

「そ、それは……!？」

「まあそいつは空っぽだからな、あの白い方も結構普通じゃないんだろうが」

その言葉にハツとし、そして別の方向から聞こえて来た声に反応する。

すぐに落とした旗を手に持ち、ネコからも声が聞こえて来た方からも距離を取るため倒れているファヴニールに飛び移る。

「……やっぱりあなたでしたか、ここまで仕出かしてくれたのは」

「半分はな、もう半分はトレニャーだ」

「ニャニャー」

「それで何ですか？私をこの場で殺すと？」

「何事もなかったように、竜の魔女としてこのフランスを蹂躪している者として敵に話しかける——」

「いや、なに平然を装ってるんだ？お前トレニャーの言葉に動揺してただろうに」

「つどうよなんてっ知ってません」

「……………そうか」

なんてことは出来なかった。

心の中ではキョドリながらも、表情には一切出さないように努めるジャンヌ・ダルク。

確かに表情には出さなかった……がアクセントとか文字とかで簡単にバレる、しかも表情は凛として何事も無かった様な普通の顔をしているのだ、大変シユールである。これにはスネークも流石に流した。

「……それで、あの街をそのドラゴンで焼こうっていうのか？」

「ええ、そのつもりでした」

「つもりでした？」

「そうです目的が変わりました、いま、ここで、あなたを殺します。ファヴニール！」  
倒れていたファヴニールが再び起き上がり始めた。

それも、先ほどまでは感じられなかった怒気の様なもの、ファヴニールから感じられた。

「……一応聞くが、こいつはお前が召喚したのか？」

「そうよ、いまさら怖気付いた訳じゃないでしょ？」

「ならお前が『竜の魔女』と呼ばれているとおり、こいつはお前が使役しているデカイ竜なんだな？」

「そうと言ってるじゃない」

完全に立ち上がり復活したファヴニールをその足元で見上げながら頷くスネーク。

その隣にはちやっかりとトレニヤーもいる。

「……なら討伐対象だな」

「・・・ハア？」

「トレニヤー、行ってくる」

「じゃあオイラ逃げるニヤー！」

「ハア!?!」

そんなジャンヌ・オルタの驚く声など無視してトレニヤーは地面に潜ってどこかに





当然のように直撃した

それによって先ほど空から落下したほどではないが砂埃が舞い上がる

「……ふん、大したことないじゃない」

砂埃によって地面は未だに見えない、だがこれでサーヴァントとはいえタダで済んでいるはずが無い。

自分が仮にファヴニールに踏みつけられたとしたら無事でいる自信はまず無い、それに今は自分とファヴニール自身もがバフを掛け振り下ろしたのだ、即死していてもおかしくない。

それに、真名看破は効かなかつたが彼が持つ武器から20世紀の英霊であることはわかっていた。なぜ20世紀の人間が英霊になっていいるのかと一瞬気にはなったこともあったが、それ以上に今は騎士王やアイルランドの大英雄である光の神子ならまだしも、例のマスター（譯丸立香）とほぼ同じ年代の人間であることに安心していた。絶対に踏み潰され無事で済むようなスキルなど持つてゐるはずがないからだ。

「……さて、バーサーク・アサシンの方は——」

と、竜の魔女は思っていた。

だが自分が召喚したサーヴアンの様子を見よう視線を動かしたとした時、彼女は気付いた。

だんだんと砂埃が晴れてファヴニールの足の根元が見え始めてようやく気づけた。

ファヴニールの足が振り下ろされていない

いや、正しくは振り下ろし「切れてない」のだ

前足の根元の様子からして、地面に足が付いているにしては角度がついているのだ  
同時に彼女へ違和感が流れ込む

「な、なんでファヴニールが困惑してるのよ……?」

竜の魔女である彼女は竜を使役できる

そして竜の感情や状態の変化にも敏感に対応できる

故にファヴニールが何かに困惑していることに気付いた

「なっどうしたのよ、あの男ならあなたが潰した——!?!」

と言いつ切る前に彼女の体が揺れた

いや、ファヴニールの体が動いていた

「ツファヴニールッ!!」



## 邪竜百年戦争オルレアン 10

20世紀、そして21世紀を生きた人間。

文字に起こせばそんな人間はいくらでもいるしこれから増えていくだろう。

だがこの世界において存在する魔術の常識、何より英霊というシステムにおいてこれらの人間の殆どが残念な部類に入る、とされるだろう。

なぜなら現代において、魔術に関わるもの達が大事にする神秘というものは科学という相反するものによって薄れつつあり、それによって魔術は衰退している。それは同時に彼らの価値観においては非常に「残念な」ことだからだ。

だからこそ魔術師は一般人を下に見たり、選民思想的な思考から他の魔術師と比べたがるのが大変多いのだが……その話はここでは重要では無いので、読者個人がもし気になつたら調べて欲しい。

さて、この場で重要なのは『魔術世界において現代人は弱い』という常識があることだ。

その常識はサーヴァントでも当てはまり、古ければ古いほど強いとは言えないが近現代生まれのサーヴァントは神秘が薄れているためにそもそも人数が少なく、何より強力

なサーヴァントでは無いという認識がある。

たとえ神槍とあだ名される八極拳の達人でも、神話の英雄のように地形を変えるような力技を繰り出すわけでは無い……星の開拓者の場合は例外だろうが、そんな人物は人類史の中で極々わずかしいない。

何より彼女には、ルーラーとして召喚されたジャンヌ・ダルクには真名看破というスキルによつてそういった自身の脅威となりうるサーヴァントかどうか詳細に判断することができる。それにもう一人の方は全くなにも知らないが、竜の魔女として振る舞う彼女には聖杯から与えられた知識もある。その知識から、あのバケツの水をぶっかけてきた眼帯男の持つ武器は銃と呼ばれるものであり、それも20世紀後半に作られた銃であることもわかった。

あのマスターに付き従っていた他のサーヴァントならわからないが、たかが武器がなければ一般人と大差ないようなサーヴァントが一人でこの邪竜をどうにか出来るはずが無い、そう彼女は思っていた。

思っていた

だが実際は



やられたからにはやり返す。

先ほどまでは先日ただ一方的にやられたことへの憎しみから殺すと言ったが、今の彼女の心には悔しいという感情で満たされ、目の前にいる男へ反撃に出ることしか頭に無かった。どう在ろうとも彼女は負けず嫌いなのだ。

幸いファヴニールは怯まされたり倒されたりはしているものの、ダメージはさほどなく全力で攻撃できる。そして自分自身も受けたダメージというダメージは無い、ならやることは一つ。

「その口を叩くだけのことはあるようですね、なら私も遠慮しません……これは憎悪によつて磨かれた我が魂の咆哮……！」

「！」

「ラ・グロンドメント・デュ・ヘイン 吼え立てよ、我が憤怒！」

味方であつたバーサーカーが倒され、自分やファヴニールが受けた屈辱を糧としたことで威力を上げた自身の宝具を解放する、同時に令呪を切りファヴニールを強化しサーヴァントの宝具に近い攻撃を繰り出せるようにする。その間に彼女の宝具として空中に具現化した杭が正面に立つ男へと、スネークへと襲いかかる。

「宝具か……問題ない」

空中に現れたその杭の数は100以上

それらを全て視界に入れる

それら全てが一挙に降り注いでくる

まるで雨のように……だが雨はいつか止む

ジャンヌ・ダルクが放った杭が迫る

それら全てが段々と遅く感じる

視界がクリアに

迫る杭の全てが自身への直撃コースでは無い

周辺にばら撒かれるものも多い

それらは省く

スライディングでは確実に当たる

なら……取り除けば良い

久しぶりに感じる反射

リフレックス



リフレックス・モード  
反射状態に入った瞬間に体感時間は急激に遅くなる

そこに自分の武器を使う

迫り来る杭が右腕を穿つ……その直前に杭は自分の間合いに入る

右肩を後ろに捻らせ躲す

頭に落下してくる杭を左手で弾く

そこに10本以上の杭が来る

瞬時に前方へローリング

その先には杭が突き刺さりに迫る

クローズ・クォーターズ・コンバット

「C」 Q 「C」

宝具解放：CCC

その効果は接近戦における圧倒的優位性を確保する・・・そんな物では無い。本来はあらゆる武術を統合し昇華させた結果でしかなかった。だがそこに“とあるモノ”が加わった。

その結果

自分の間合いに入ったものを思い通りに動かせることが可能になった

それが人であろうと高速で近づくと杭であろうと制御下に置く

1000本を超える杭は一拳に地面へと突き刺さり、その全てが一瞬で躲された

「なんで当たらないのよッ……!」

「そらっ、俺からもくれてやる」

するとスネークは自分の持つ突撃銃を背中に回し代わりに別の武器を背中から取った。

それは緑色の筒だったが一瞬でその筒をさらに伸ばし標準器を立てファヴニールの頭に向け撃った。

撃たれたのは銃弾なんかよりもはるかに大きい弾頭だった。

「そう何回もやらせるわけないでしょう!」

ただやられっぱなしなのは気が済まない。

再び具現化させた杭をその弾頭が描く軌道上に飛ばし、ジャンヌ・ダルクは距離をとる。

「やりなさい!!」

再び起き上がり、すでに強化しいつでも攻撃できる状態であったファヴニールが動きだす

胸に刻まれた青い紋章が輝きを増す

青い光は邪竜の口へと上がっていき急激に力が蓄えられている

そして爆発的なドラゴンブレスを――

「それは流石に死ぬからな、もう一発だ」

――吐かれると流石にマズイので事前に頼んでおいた仕込みを使う

使い捨てであるロケットランチャーを捨て素早くリモコン取り出しそのままボタンを押す

遠隔装置は誤作動なく機能しランプが点灯する

直後ファヴニールの背中が爆破された

「つ汝の道はすでに途絶えた！」

また何か仕掛けられたと思いつつもジャンヌ・ダルクは宝具とは別に新たに杭を数本出しスネークにぶつけ

それと同時に駆け出し腰に差した黒い剣を抜く

そんな相手が接近しているのを視界に入れつつ空中から向かって来る杭を処理する

数は6本

スネークを中心に円を描き一気に降り注ぐ

その隙間を縫うように体を捻り、それでも直撃する前方二本をCCで後方へ去なす

「そっ！」

だがスネークは二本の杭を去なしたために二本の手は正面に無い

その隙に剣を突き出した

突き出した剣先は相手の心臓

いくら化物みたいなサーヴァントでも霊核である心臓と頭をやられれば死亡する

それに突き出した剣を去なすことは出来ない

もつとも

「両手が使えなかつたら躲せないとも思つたか？」

確かに手を使わなければ去なせないが躲せないわけではない

脇の間では突きも意味が無い

スネークがやった事は極めて単純だ。

ただ両手を挙げたままの状態で剣幅分だけ腰を横に動かす事で上体を横にズラし、突き出した剣を脇に挟んだだけだ……と書くのは本当に単純だが、この動作を迫り来る杭を処理した瞬間の無防備な状態から一瞬で突き刺して来たのに対して、その一瞬より早くやったのだ。もちろんジャンヌの持つ剣の刃はスネークの左の二の腕と肋骨部分に当たっているが野戦服が出血を防いでいる。

「あんたバケモノなのっ……!?!」

距離は50cmほど

すでに剣の間合いでは無くその剣が封じられたいま有効なのはナイフか体術の類だ焦ったジャンヌは空いている左手でスネークの顔を殴ろうと拳を突き出すだがこの間合いにおいてスネークは遙か上を行く

スネークは脇を挟んでいない右腕で突き出された左手を内側へ弾く

すると弾かれた左手は身長差からやや斜めになっていた右腕の方へとスライドされるその左肘が剣を持つ右手首の部分に当たる

同時に内側に動かした右腕で未だ剣を持つジャンヌの右手をはたき同時に剣を挟んでいた左腕を解放する

黒い鎧をまとい籠手もあるとはいえ十分な衝撃は生じれば手に持つものを落としてしまう

それがナイフだろうが剣だろうが神造宝具だろうがスネークには関係ない

ジャンヌの持つ剣を落とした事で彼女の姿勢は左腕がやや前にある状態で右腕に乗っかり、右に捻った前傾姿勢となった、その状態はとも不安定であり、言い換えれば大変投げやすい状態だと言える。こうなってしまうれば彼女に支配権は無い。

そんな姿勢になった彼女を正面に捉えているスネークは広げた左腕で合わかさっている彼女の両腕を、右腕を彼女の首に押し付け同時に押し出し自分の右側へと倒した。

ジャンヌは両腕が重なったままそれなりのスピードと自分の体重が乗ったまま倒され左肩から地面へと激突した、当然受け身も取れないまま。

「ッ!!」

「お前がそれを言うか」

結果彼女は左肩を脱臼、鎖骨を骨折した、そう言う投げ方をしたのだから当然なのが。

それでもフランスを恨み滅亡させんと実行している彼女の意思だけはとても固く、倒され激痛が走ろうとまだ動く右腕を動かし起き上がってやり返そうとする。

だがそうしようと右腕を動かした瞬間、彼女の体をなにかが持ち上げそのまま連れ去る。

「えっ、なに!?!」

「嫌な予感がすると来てみれば……ジャンヌ、危ないところでしたね」

「ジル!?!」

「聖処女よ……迎えに上がりました、此度は引きましよう」

それは突如現れた一体のサーヴァントが召喚した海魔だった。

その海魔は凄まじい勢いでスネークの後ろからジャンヌを回収した1体と、そのスネークへ奇襲をかけた1体の計2体がいたが、奇襲をかけた方はスネークがナイフを振

り抜きハンドガンを撃つことで倒されていたがジャンヌの体は支障なく回収された。

「ツいいえ、あなたが援護してくれば勝てるわっ!!」

相手は2体のサーヴァントのみ、こちらはバーサーク・アサシンにファヴニールと——

「残念ですがジャンヌ、アサシンはやられてしまいました」

「そんなんっ——!?!」

「どうにか仮初めの肉体だけ回収しましたが……とにかく、ここは引くしかありません、態勢を立て直すためオルレアンへと戻りましょう」

「つけどあいつだけでも——!」

「……ジャンヌよ、ルーラーであるあなたならカルデアの援軍が来ていることがわかるはずですよ」

「つつっ!」

「あなたはあなたを裏切ったこのフランスという国を壊すことが目的のハズ、決してあのサーヴァントを倒すことではありません……竜の魔女よ、判断を」

「……どうやら冷静さを欠いていたようです、ありがとうジル、あなたにはいつも助けられてばかりね」

「いえいえ、不肖ジル・ド・レエ、あなたの手助けをすることしか出来ませぬ故」



「そう……………ではファヴニールはここで暴れさせて置いていきます、それとあなたの海魔を大量に置き土産としておいていきなさい、ワイバーンで逃げますよ」

「ええ、ではっ!」

突如あらわれたサーヴァントはその声に大きく領き、手に持つ本を広げ先ほど召喚した海魔を数百体スネークの周りに召喚した。

「っ逃すかあ!」

「悪いわね、アンタだけは殺したかったけどそれはまた今度よ」

ワイバーンを呼び出し逃げようとするジャンヌ達に向けて再びロケットランチャーを撃とうとするが召喚された海魔が肉壁となつて標準の邪魔をし、さらにおまけとしてワイバーンがスネークの頭上から急降下して来た。

頭上の脅威に気付いたスネークはあえなくジャンヌの追撃を断念、目標を急降下中のワイバーンに変え撃った。その弾頭は見事命中しワイバーンは力なく落下する、そして生じた爆風は肉壁となつていた海魔を吹き飛ばしたため再びワイバーンにのるジャンヌ達の姿を見つける、だがすでに飛び立つ寸前だった。

「……………ああ、それとずつつつと隠れていた聖女さまに言っておきなさい、あなたは所詮見て見ぬフリをしているだけってね」

「……………」

こちらに向けて発するその声は確かに聞こえていたが、返事をする気にはスネークはなれなかった。

その代わりとして背中から銃を取り飛び立つ寸前のジャンヌ達に向けて発砲する。

だがその弾丸はさらに召喚された海魔によって遮られてしまった。

「邪魔くさいー！」

「どうぞ遠慮なさらず！数だけは無限にありますので！！」

その間にジャンヌの乗ったワイバーンは飛び立ち、一気に急上昇していく。

それを視界に入れながらもさらに増えた海魔を目の当たりにし、額に汗を流すスネーク。いくらファヴニールを持ち上げることができても、素手ではこの海魔を倒すことはできない。

それにCQCも触手を掴むこと自体難しく、そもそも対象が人型でもないため有効的ではない。

そう考える間にも残されたファヴニールは爆破からも復帰し、活動を再開してボルドーの街へと歩みはじめた。どうやらジャンヌは助けに来たサーヴァントに言われた通り、スネークを倒すことではなくフランスを壊すこと目的を達成するために、街で暴れるようファヴニールに命令したようだった。

「ッ流石に囲まれるか………ん」

「百合の王冠に栄光あれ！」

海魔の包围網がスネークを包もうとしていた中、ガラスの馬が海魔の中心に突進して来た。

その馬にのる馬主はスネークにまたがるようにジェスチャーで促すと、素早くスネークがその馬の後ろにまたがり、直後ガラスの馬は海魔の包围網から飛び出した。

「おつと……助かった、どうやらそっちは思った以上に上手くいったようだ」

「ふふつ、だから言ったでしょう？ 私、耐久力には自信があるの……ところで」

「ああそうだな、こいつをどうしたもんだか」

空中をかけるガラスの馬の眼下には海と見間違える量の海魔が広がっており、さらにその海の横には巨大な竜がゆっくりと歩きながらボルドーへと向かっていた。

「トレニヤーさんがどうにかできないかしら？」

「無理だ、ファヴニールだけならどうとでもなるが大群を相手にするには向いてない、一応海魔もモンスターだろうが……キツイのには変わらない」

そう話しながらその大群より一足早く2人はボルドーの街の入り口へとたどり着く。すると避難誘導をしていたゲオルギウスとジャンヌがその場にいた。

「避難誘導は終わったのか？」

「あれだけの騒ぎを起こしてくれましたからね、そのおかげで皆さん急いで逃げてくれ

ました。

数名ほど転んでしまいましたが、全員軽症でジャンヌさんが手当てをしてくださりますで全員避難しました」

「それで状況は……」

「まあ見ての通りだ、あと少しで仕留められたがジル・ド・レエが現れてジャンヌ・オルタを回収して逃げていった」

「なっ、ジルが!？」

「詳しい話はあとだ、そいつは置き土産に大量の海魔、ジャンヌ・オルタはファヴニールを置いていった。」

「幸い避難が終わってるからこのまま街で暴れられてもいいが……」

「このまま放つていくわけにはいきませぬ」

避難誘導が開始されて約1時間半、ファヴニールが派手に暴れたおかげか住人達はすぐに避難を開始し、ジャンヌがパニックを起こさないよう誘導した結果、スムーズな避難となり、住人達の避難は予想よりやや早く完了した。

だが、召喚されている海魔を放置すればその避難している住人に追いつく可能性もあり、何よりファヴニールという巨大な邪竜を放っておいていいことがあるはずがなく、ここで仕留める必要があった。時間や被害といった制約がなくなつたとはいえ、両方を

「仕留めるには今いる面子では火力不足だった。」

《そんな君たちに朗報だ！援軍が到着したよっ》

《おうっ到着したぜえ！》

そう無線機から聞こえると、また空中から何か落ちてくる。

よく見る前に落下して来そうだったので、スネークはスペースを空けた、その場所にクー・フリーンは着地した……が、その左腕にはマスターである藤丸が抱えられていた。

「ホイ到着つ……と、おいマスター？大丈夫か？」

「……うつぶ」

《うん、僕無茶だつて言っただよ？自動車どころか英霊のなかでも早いってされてるクー・フリーンに抱えてもらって移動だなんて無茶だつて……》

「いや……まあ普通酔うだろうな」

「鍛えてない割によく耐えたと思うぜ？」

「……とりあえず坊主、少し休め」

「……（コクコク）……」

「……それでクー・フリーン、お前あの海魔の大群をどうにか出来るか？」

「出来るぜ、手取り早く済ませたいなら俺の宝具を使えばいい」

「ならそれで行こう、ファヴニールの方は……本職は間に合うか？」

「おう、流石にいますぐ令呪を使うといくら何でも魔力の変化があるからな。それでも少し休めばすぐに来れるだろうよ」

「ならもう少し時間稼ぎか、なら海魔は頼む」

「ああ、任せろや」

「では私も海魔相手の手助けをしましょう」

「おお？けど俺の宝具を何回か撃てば終わるぜ？」

「それでもある程度的是まとまっていた方が良いでしょう、わたしには敵の意識を私に集中させるスキルがありますので」

「そうか、なら頼むわ、自前の魔力でも十分だが乱発しちやマスターの負担になっちゃうからな」

クー・フリーンはそう言うと朱槍を抱えながらその場で深く伸脚し、準備を始める。

一方でゲオルギウスは一足先に街から少し離れた場所へ海魔達を誘導するためにファヴニールとは反対側の方へ走り始めた。

「トレニャー！」

「ハイニャー！」

「あのデカいのをもう少し相手にするぞ」

「ニャニャ！狩りかニャ？」

「いや、狩り切るのは別のやつだが、あのデカいのが街に来るのを防ぐぞ」

「ニヤー、ラオシヤンロンと同じニヤ？」

「そう言うことだ」

そしてスネークは地中から掘って出てきたトレニヤーを呼び出し、時間稼ぎをするため、ファヴニール相手と再び戦うため移動を開始する。幸いファヴニールは地上を歩いているため移動は遅く、時間稼ぎなら十分可能だった。それに残るマリーとジャンヌは目を回している藤丸の手当てをしているため、ドラゴンブレスを放たれないようにすれば良いだけだ。

だが、そんな巨大な竜よりも早く海魔の波が街に届こうとしていた。

「では……守護を願う人々を私は守ると誓おう！」

その波をゲオルギウスが自身のスキルである守護騎士によって街やファヴニールがいる場所とは別の方向へと向かせる。

「おうおう、随分とまあ群れてやがる……まあ一匹だろうが外さねえけどなっ……！」

そしてクー・フリーンは跳躍し手に持つ朱槍に全力の力を込め、思いつき振りかぶりその大群へと宝具を放つ

「受けとんなあ！突<sup>ダ</sup>き穿<sup>イ</sup>つ死<sup>ボ</sup>翔<sup>ル</sup>の槍<sup>ヅ</sup>！」

ゲイ・ボルグは本来必殺必中の因果逆転を起こすことができるという物では無い。

真価を發揮する本来の扱い方は特殊な跳躍術である鮭取りによる足からの投擲だと言う、それによりゲイ・ボルグは30の必中の鏃となると言う。

もつともこれは伝説・伝承上の話であり、英霊としてランサークラスで召喚されたクー・フリーンが投擲を行う場合は手から投擲され、30の鏃になることなく、マツハ2で飛翔する1本の槍として炸裂弾のように一撃で大軍を壊滅させる対軍宝具となる。これは本人が言うには

『あーあの投げ方なあ……いや、30どころかもつと分裂させられるぜ？威力も上げてな。けどアレなあ……回収がめんどくせえんだよ、いちいちルーン描くのがなく、俺の師匠みたく冥界に繋げる門があれば楽なだけだよ』

とのこと。

だが対軍宝具に分類されている通り、一気に飛翔した朱槍は対象が誘導されていたこともあり、3つほどの塊となっていた海魔の大群のうちの1つの中心で命中、直後爆発しその塊は蒸発した。

「よっしゃ、あと2回で済むな」

「す、すごい宝具ですね……」

「まあなつ（まあ師匠にバレでもしたら殺されそうだが……）」

「？何か言いました？」



「いやなんでもねえ、それより嬢ちゃん、マスターはもう大丈夫か？」

「あつハイ、もう立てるか」と

「・・・フウー、少し死ぬかとオモツタ」

「悪いなマスター、けどこれが最速だぜ？」

「そうだね、おかげでなんとか付いたしつと」

そう答えるとマスターである藤丸はヨイシヨと立ち上がり、右手をかざした。

「令呪をもつて命ずる！ジークフリートさんつ来て！」

瞬間、藤丸の右手に刻まれていた令呪の一画が消え、その後藤丸の右側の空間が歪み、そこから藤丸に名前を呼ばれたジークフリートが突如現れた。

《よしっ成功した！藤丸くんのバイタルも問題ない！》

「……まさかこのような所でまたこいつと会えるとは思わなかったが……これが私の役割だろう、一度で決める」

「おたくの因縁の相手なんだろ？そんな獲物を横から取ったりは俺はしねえよ、早くあそここの2匹を楽にしてやれ」

「……そうだな」

その竜殺しの視線の先にはファヴニールの足元で懸命に足止めしている2匹が――

「膝だ！とにかく膝を壊せば大体時間は稼げる！」

「ニャア!? そんな部位破壊あったかニャ!」

「とにかく足を狙え! 逃げないようにしろ!」

「けどこいつもう逃げようがないっていうか、逃げる気がニヤい気が……」

「倒しきる直前に逃げられたら素材が剥げないだろっ!!」

「それは困るニャ! もつとヒザを壊すニャ!!」

「そうであっ!!」

——懸命に足を破壊しようとしている2匹がいた、ウン

「……もう、あの2人……2人? に任せれば良いのではないだろうか」

「いやっ……まあ気持ちはわかるがな、あいつらがあのデカブツを仕留めきるには時間がかかっちゃうし——」

「そうか、これ以上描写するのを省くために私が宝具を放つのが一番という訳か」

「そういう意味じゃねえよ!」

「そうか……なら私の存在も意味があると言うものだ……!」

「なんでそうなんだよっ!?! なんでカツコ良くなってるの!?!」

「黄金の夢から覚め、摇篮から解き放たれよ……邪竜、滅ぶべし! 幻想大剣・天魔失墜

!」

「……いやっ、まああいつら欲で動いてるけどよ……」

もうどうでも良いやつどうとでもなれえ、と言わんばかりの投げやりの態度でクー・フリーンは再度、投げ槍の姿勢へと変化させ後ろを見ないことにした。別にダジャレでは無い。

「!!トレニャー退避だ!」

「ハイニャー!!」

そして何故かカッコいい感じになってしまったジークフリートは、富の呪いにかかった邪竜を葬り去るために真名解放し、まだファヴニールの足元に味方がいるけど宝具を放つ。その放たれた方の2匹はすぐに危険を察知、トレニャーは地面に潜りスネークはファヴニールの巨体を盾にするためファヴニールの後方へと走った。

退避を始めて数秒の時が経ったあと、ジークフリートが放った宝具の青い光がファヴニールを襲う

伝説の再現は伝説の通りとなり、覆すことはできない

放たれた竜を殺す黄昏の剣気は邪竜を飲み込み葬り去る

そのことを理解しているのかファヴニールは直撃をくらい叫び続ける

「さくらばだ邪竜よ……また会える気がするがな、それも別の形で」

因縁の竜に向かってそう声をかけると、竜も最後にまた叫び、そして力尽きた。

頭を垂れ、何もできなくなった邪竜はブレスを吐くことなくサラサラと魔力の粒子と

なつた消えていった

こうして15世紀のフランスでドラゴン退治が達成された

「ニヤニヤ!? 素材が! 素材が剥ぎ取れず消えていくニヤア!？」

「まあ諦めろ、あれは魔力で縫われた仮初めの肉体らしいしな」

「けどオイラ、モンスターのお肉は攻撃すればするほどお肉は美味しくなるってどこかの世界で聞いたのニヤ……もつたいたいニ——」

「急げトレニヤー! まだ足の部分なら残ってるぞ!!」

「ニャー!!」

※ダメでした

## 邪竜百年戦争オルレアン：111

邪竜ファヴニールを倒したその夜、一行はボルドーにいたメンバーを車に乗せリオンの街へと戻っていた。昼過ぎにボルドーを発ったため、リヨンに到着した時には夕御飯を食べる時間にとっくになっていた。

「……ニヤア」

「……残念だったな」

「……ニヤア」

「……こいつらいつまでため息吐いてんだよ」

そして行きと同じように5時間ほどのドライブだったわけだが、その5時間をかけて2匹のネコとヘビはひたすらため息をついていた。どうやらトレニヤー曰く、モンスターの肉は攻撃すればするほど美味しくなるらしく、爆破に叩きつけ、拳句にジークフリートの宝具を喰らったファヴニールはさぞ美味しいハズ……と思ったものの、実際にはファヴニールはモンスターではあるが幻想種であり、倒されると血肉は残さず、幻として消え去ってしまうのだ。

この点はサーヴァントでも似ている部分があるが、サーヴァントの場合は魔力によつ

て体が形成されてはいるものの血は出る、ただし体がある程度傷害されたり脳や心臓をやられると霊核が破壊され消えてしまう。

そんなわけで、どっちみち幻想種のお肉を味わうことなんて出来ないわけだが何故かこの2匹は本気で残念がっている、それこそ5時間ほどずっと。

「スネークさん、そんなに食べたかったの？」

「……いや、食べることが出来ないのはわかっている、所詮仮初めの体に過ぎなかっただろうしな」

「それなら——」

「だが食べてみたら！あれだけ攻撃すれば!!とてつもなく美味かったかもしれないだろう!!?」

「……そう、ダネ……」

《どうしよう……藤丸くんの目が……!》

人である藤丸もそうだが、幾多の戦場を駆け抜けた英雄や革命の渦中に放り込まれた王族も思った、

この眼帯の男は一体なにを言ってるのだろうか。

そも、攻撃すればするほど美味しくなるなど誰も聞いたことがなかった。無線を通じて他のサーヴァントにも聞いたが、エミヤやマルタ、カルデアにある本を読み漁ってる

マシユでさえもそんな話を聞いたことが無いという。エミヤに至っては『そんな肉叩きじゃあるまいし……』とのこと。

「そんなに落ち込んでどうすんのよ！明日はあの女の城に攻め込むでしょ！」

「そうですよマスター。この清姫、美味しいお肉が食べれないのは残念ですが……」

「あんたまで何言ってるの!？」

そしてなんか爬虫類がみたいなのが2人街のなかで藤丸に話しかけているが、そのうちの尻尾が出てるチビツコいピンク色の髪をした方が言ったように、明日カルデア一行は現地で仲間になったサーヴァントとともにオルレアンへ進撃することを移動中に決定した。

理由は2つ、1つは極めて巨大な邪竜であるファヴニールが倒されたこと。どうやらワイバーンと同様にジャンヌ・オルタが召喚したようだが、召喚されたワイバーンをある程度使役していたのはファヴニールだったらしく、ボルドーからリヨンに戻るときも混乱しているワイバーンの個体や一匹で孤立しているものが多かった。

(ある意味で)専門家であるトレニヤーが(落ち込みながらも)言うには、大声で指示を出していたのがファヴニールだったらしく、その大声が消えたため個体ごとに好き勝手に動いていると言う。

そしてもう1つはオルレアンに戻ると、ジャンヌ・オルタが言ったこと。



スネークが報告したジルとは、ジャンヌがいうには向こうからすれば軍師のような役割をしているだろうとのこと、そのジルの言葉なら私は聞くだろうとのこと。そのジルからの言葉をうけてオルレアンで態勢を立て直すと言ったなら明日は確実にオルレアンにいるだろうとジャンヌ自身も強く断言したこと、この2つをもつて藤丸は正面突破を選び、ほかのサーヴァントたちも同意した。

つまり明日が決戦である。

「……そんな訳で夕飯な訳だが、その落ち込んでいるペアはワイバーンのお肉は口合わないかね？」

「食べる（ニヤ）!!」

「あいつら、食い意地がはりすぎで単純すぎるだろう」

そう言うのは黒き騎士王である。

「……片手にワイバーンの肉ともう片方にパン抱えて口を膨らませて君に言われてもな」

「(モツキュモツキュ) …………… 一体なんのことだ」

「一口全て食べきった……だと……!?」

訂正する、めちやくちやくよく食べる暴食王である。

彼女にかかれれば両手いっぱい肉とパンなど一口で食べ終わる、それをしないのは何

となくであつて、理由があれば速攻どころか神速に迫る勢いで食べることなど、紅い弓兵の瞬きも許さずに実行可能なのだ（なお盗み食いはバレル模様）。

「アレかな？ 君たちつて大食い選手の団体なのかな？」

「アマデウス、あなたが言うの？」

「え、なんでさ？」

「あなたよく飲むでしように」

「……さて、僕は飲もうかな」

「ダメよ」

そしてそんな英雄達とは本来は縁もゆかりもない音楽家にも、こと酒飲みという点で勝るとも劣らないことを知っている王妃様は事前に手を打つため、やり取りをしていた。そのやり取りには別も思惑もあつたりするが。

「はあ、全くもつて賑やかね、これでも明日攻勢かけるつていうんだからビックリだわ」

「ふふ、けど楽しく賑やかです」

「……そうね」

そして聖女2人組みはそんな一行の騒ぎを聞いているうちに、自分たちも楽しみたくなつたのかゾロゾロと出てきた街の人々を見ながらそんな言葉を投げかける。もつとも、街の人たちは酒と軽食を片手にジークフリートやマシユに話しかけ、同じ街の人た

ちと話しているだけで、ドンチャン騒ぎをしているわけではない。まだ人に迷惑をかけるほど夜も遅くない、幸い月も満月ほどではないが軽くお酒を飲んだ程度でこけるほど暗くもない。

「さて、私も少し参加しようかしら」

「そうですか……」

「あら、あなたは参加しないの？」

「アハハ、何というか……」

「……良い？あなたは彼女とは違うわ、それも根本から」

「・・・エツ？」

「だって彼女……若い頃の私とそっくり過ぎてヤバイ」

「……え」

「なんであんなにそっくりなのよ……だから召喚されちゃったのかしら」

「えっあの……え、マルタ様ってあんなに口が悪かったのですか？」

「そうじゃないわよ!!……っあ、いやっ、そうわけでは、いやそういう面もそうなのだけど……」

「……ふふつ、すいません、ついイジワルを」

「っああもう……その様子なら大丈夫そうね」

「ええ、私はマルタさんと似たような町娘です」  
「……そうね」

それだけ言うとマルタは街の人ごみへと向かっていった、どうやらオロオロしているマシユを助けるようだ。

一方でジャンヌはワイバーンの肉のおかげですっかり元気になった2匹がいるカルデア一行の方へ歩いていった。

◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆?

同時刻：フランス、オルレアン城にて

城の窓辺でただ外を眺める女が一人。

満月では無いものの、足元を照らすには十分な月光がその窓辺を照らす。

彼女が漆黒の鎧を纏っているからなのか、聖女だからなのか、竜の魔女だからなのか、彼女だから”なのか

確かなのはその姿はとても綺麗だった。

だがその姿を正しく見ることでできる者がこの場には誰もいなかった。

「……ジャンヌ、ジャンヌよ」

「ああジルですか……何ですか？」

「恐らく、明日カルデアの者たちは攻めて来るでしょう、ファヴニールが倒されましたからね」

「そうですね……ですが」

「ええ、間に合います。幸い触媒は事前に用意してあります、それに『縁』も。どれもこれも貴女の幸運の賜物です」

「……あなたが幸運と言いますか」

「ええ、ええ！もちろんですとも!!なぜなら神はおらずとも個々にあなたが居る!そしてここに存在している!!……それだけで十分奇跡でございましょう?そしてそんな貴女自らが手繰り寄せたのです、これを幸運と言わずなんと言いましょう」

それが当たり前のことだと、当然であると疑わずジル・ド・レエは竜の魔女にただ事実を伝える。

内容は側から見れば狂信者のそれではしかないが、それこそが彼が考え、感じ、信じている事実だからだ。

「……そうですね、私がバカだったわジル」

「そんなことはございませんジャンヌよ。」

……もし貴女竜の魔女がバカだというのなら、それは貴ジャンヌ・ダルク女聖処女です、救おうと尽力しその身を捧

げ、そして裏切ったこの国を守ろうとする貴女聖処女でしょう」

それが、それだけが彼にとつての事実である。

そう言い切つてジル・ド・レエは、自身が持つ本から一枚の紙切れをジャンヌへと手渡す。

それを受け取り、目を通し……軍師であり、生前から頼れる相方である彼に竜の魔女は言う。

「……わたし、文字読めないんだけど……？」

「ええ、ですから事前にジャンヌには音読で覚えていただきました」

「ならこの紙はいらないのでは……」

「いえ、いえいえ。」

その紙は重要な触媒なのです、そしてその紙には歌詞が書かれている。歌詞の書かれた紙は手に持ち歌うために存在します。たとえ歌詞を覚えていたとしても手に持ち、書かれた歌を歌うことで意味をなすのです」

「そう……では私は召喚を急ぎます。例え竜殺しがいようと、騎士王が居ようと、わけのわからない奴が居ようと……全て無意味よ」

「ええ、そしてそれこそ貴女が目指す境地、ワイバーンや竜種による楽園をこの地に築くこと！」

竜の巣となり不毛の地と化したフランスを破綻させること!!」

「そうね……竜同士が際限なく争い、そして世界を破綻させる。

そのために最適な状況を作った私はたしかに幸運かもしれませんが、やはりあなたに助けられて、ですが」

そう言いながら竜の魔女は唄いはじめ

その歌はジルがかの盟友から受け取った本とは「別に」新たに受け取ったと言うとある歌詞

宝具ではないが召喚に使う祝詞であるという

そんな歌が書かれた紙をもち、竜の魔女は歌詞を読み上げ始めた

「数多の竜を駆逐せし時

伝説はよみがえらん

数多の肉を裂き 骨を砕き 血を啜った時

彼の者はあらわれん

土を焼く者

鉄を溶かす者

風を起こす者

木を薙ぐ者

黒炎を生み出す者

喉あらば叫べ

耳あらば聞け

心あらば祈れ

天と地とを覆い尽くす

彼の者の名を

天と地とを毒で覆い尽くす

彼の者の刀自をも

数多の竜を駆逐せし時——」

◆?  
◇  
◆?  
◇  
◆?  
◇  
◆?  
◇  
◆?  
◇  
◆?



「……ニヤ？」

「ん、どうしたトレニヤー」

「………オイラ、わかったニヤ、ここに来た理由」

「………なんだ、言ってみろ」

「……その肉くれニヤー!!」

「だと思った」

シユバツという音を立て、一瞬でスネークが手に持つ皿のあるお肉へと飛び立つトレニヤー。

だが相手は歴戦の傭兵、団体で食べていけばそんな輩が沸くのは世の常である……もつとも、総司令官であり自分たちのBOSでもあった彼の皿にあるものを取ろうとするのは古参の幹部連中か<sup>研究開発班</sup>いい感じのバカくらいではあるのだが。

そんなわけでトレニヤーの奇襲作戦はあっさり躲され、コロコロと体が転がっていく。

「おいおい、まだ食べるのかね？」

「そうニヤー、明日はオイラも頑張るニヤー！」

「………バカにできない事実だからな、ならこれも付け加えてやろう」

そう言つてエミヤはトレニヤーに追加でソーセージをあげる。じつはリヨンのソー

セージはこの地の郷土料理として有名なのだ。そも、フランスにおいては14世紀に屠殺方法から紹介されたソーセージの作り方が紹介された本が出版されているほどである。当然うまい。

「ソニヤー……それでオミヤーさん、お願いがあるんだにや」

「ん、俺にか？」

「とりあえずコレをあげるニヤ」

「ならそのソーセージもくれ」

「どうぞなのニヤ」

「なん……だと……!?!」

あまりのトレニヤーの行動に驚きを隠せず、

アルトリアは刮目した

まさか野生のネコ（というには色々無理がある）が

他のものに食料を分けるとは思いもしなかったからだ。

だって自分はいないから。

……そんな姿を見つけたエミヤは追い討ちをかける。

必死に心の中の動揺を隠している（氣でいるが何だかんだ縁のある人間にはバレバレな）彼女にスタスタと近づくと、近づいて来る彼に気付いた黒き冷酷な騎士王は顔を地面

に伏せスツと目を閉じる。

反抗の構えである。

「さて、騎士王よ」

「……………」

「そこに子供達がいるわけだが、君のもつソーセージを見ているわけだが？」

「……………」

「ちなみにマスターも君の様子を見ている——」

「!?」

「——かもしれん」

「……………食べたいか？」

コクコクつともものすごい勢いで頷く子供達。

数秒後、彼女の分とは別のソーセージが藤丸やエミヤによって提供された。

◆? ◆ ◆? ◆ ◆? ◆ ◆? ◆ ◆? ◆ ◆

「フウ」

「食い過ぎたか、マシュ」

「あつスネークさん、スネークさんも大丈夫ですか？」

「当然だ、俺がそう落ち込むと思うか？」

「ハハハ……5時間ずつと落ち込んでた気がするのですが」

「気のせいだ、気にするな」

1〜2時間後、そこそこのお祭り騒ぎになつていた街も子供達が眠くなつて来たと家に帰り始めるのを切つ掛けに、お母さんやお姉さんたちが帰り始め、残つていても意味がないと思つたのか男たちも帰り、リヨンは再び静かになつた。いま街で起きて活動しているのはジークフリートと見張っているサーヴァントや、今こうして街中を歩いているマシュと言つた具合だ。

「……しかしお前たちが仲間にしたあの2人、随分と特徴的だったな、まあどつちも竜絡みだったか」

「そうですね……スネークさん、清姫さんが竜だとか存知なのですか？」

「知つてるも何も、清姫つて名乗つた時に清姫伝説の清姫だろうと思つたからだか」

「……なぜ日本の説話を？」

「ん、傭兵つてのは意外とジャンルを問わず情報を仕入れられる所だからな、俺の部隊が特殊だったのもあるだろうが部隊の中に日本人がいたからな」

「では、その日本人の方に聞いたのですね？」

「……まあそうだな」

実際は色々違う。

1つ、スネークの部隊は傭兵部隊ではなく諜報・兵站・武力等が統合され運営されていたため、一国の軍隊レベルだった。そのため様々な情報が入って来るし、そんな部隊の長であるスネークのところには自然と報告や雑談という形で情報が入っていたりする。トレニャーやモンスターに関する話の情報源はコレだ。

……清姫伝説は、とある金髪グラサン野郎があまりにも女関係でひどすぎるので、少し懲らしめるための警告のために嫉妬や色物の怨念伝説的なのを調べた時にたまたま出て来たのだ。なお、その金髪グラサン野郎はそんなささやかな警告を無視し、金髪グラサン野郎自身が隊員のためと言って作ったサウナで隊員の女とおっぱじめたので制裁を受けた。やはり説話を無視してはダメなのだ。

だがそんな話、少女であるマシユに聞かせる気は毛頭なく、一応日本人に教えられたというのも間違いではないのでスルーした。

「そろそろ寝ておけ、明日は早朝から移動、そこからは一気に攻め込む、攻めてる途中で

お前が倒れたら一大事だからな」

「大丈夫です、先輩は守り切ります、それに守るのは私だけじゃなくジャンヌさんやマルタさんもいますから」

「そりゃな、だが体調面だけはどうしようもできんぞ」

「それもそうですね」

そう言うマシユの顔はわずかに下を向いていた。

伊達に部隊メンバーの全員の顔と名前を覚え続けていた男ではない。他人の心の変化には敏感だ。

「……いいかマシユ、怖いのは当然だ」

「……わかりますか？」

「まあな。ほかの連中はどう声をかけたもんだか悩んでたようだが。エミヤはお前にオマケをしてたようだが」

「そういえば……欲しそうだったので少しアルトリアさんにあげましたが」

「そういえばトレニヤーをみて驚いてたが……まあいい、でだマシユ」

「……怖いですが、だってあれだけの人があつさり死んで、しかもあんなに大きいドラゴンも出てきました」

ロマンが無茶だと言ったのはクー・フリーンに担いでもらい移動することもそうだ

が、マスターである藤丸自身が戦場のど真ん中に突っ込むという行為そのものを危惧したからだ。もっともそんな親心的心配はアイルランドの大英雄が一蹴した『俺らのマスターの願いにケチつけんな』と。

「幸い相手がファヴニールだった、ジークフリートを仲間にできてなかったら正直危なかった。」

それに大急ぎで来てくれたお前の先輩のお陰でな」

結果として令呪を使うことで自分のサーヴァントを退避させるのではなく、増援の、しかもドラゴンスレイヤーという最適な剣士を呼び出すことで、相手の最大戦力である巨大な邪竜を倒すことができた。コレに関しては誰も避難することもない、あの状況で考えられる最大の成果であり最適解であろう。

「俺があの方ファヴニールを倒した後にトレニャーにC4を仕掛けさせたお陰で竜の息吹ドラゴンブレスを吐かせることはなかったが……一度でも吐かれていたらマズかった。あそこまで妨害がうまくいくとも思ってたからな」

あの時、ボルドーの街には邪竜のブレスを完全に防ぐ術をもつサーヴァントはいなかった。ジャンヌの宝具で減衰はできただろうが、それでも被害は確実に出ていただろう。マッシュがいれば話は別だっただろうがそのマッシュは別行動の藤丸と共にしていた。それに時間稼ぎも当初は2時間だったが結局1時間で相手の援軍が来てしまった。

同時にこちらでも大軍宝具持ちの援軍が来たとはいえ、あのままクー・フリーンの援軍も来なかった場合、召喚された海魔によってそれこそ押し切られていたかもしれない。

「だが藤丸は、俺たちのマスターは来た、早まったタイムリミットに間に合つてな。それにフアヴニールをあの場で倒せた」

だがそれを藤丸は変えた。

猛スピードで駆けつけたクー・フリーンの存在を感知した相手は海魔とフアヴニールを囷として逃げ、その囷に苦戦を強いられるところを一方的に倒せたのだ、その功績は勲章ものである。

実際に勲章をあげる者はいないが、少なくともマスターの勇氣ある行動として彼の後輩もカルデアに召喚されたサーヴァントも認めている。

「……ですが私は戦っていません」

だが当の本人は認めていない。

「そうだな」

自分を英雄だとは考えない

「……………あの時、私は……………先輩についていけませんでした」

「移動手段がなかったからな」

「……………違うんです……………あの瞬間……………怖くなってしまったんです」



「……………」

「……………先輩が行くとおっしゃった時、私は……………どうしたらいいかわからなくなりました」

マスターの盾になるという役目を一度果たせなかった、それはマシユにとって大きな壁となっていた。

「先輩を守るのが私の役目だと言うのは分かっていますっ！けど……………それでも……………」

恐怖のあまり体が、声が出せなかった『私もついて来ます』と

「……………こんな、こんな怖いという感情だけで何もできないサーヴァントを——」

マスターは必要としない

「それは違うニャ？」

それは違う

「・・・え？」

「おミヤーさんは頑張ってるニヤー」

「と、トレニヤーさん……？」

「おミヤーさんはここに居るニヤ」

「……………はい」

「おミヤーさんは逃げて無いニヤ、あの男の子もそうニヤ。怖くてもここに居るニヤ」

「……………」

「それ以上にすごいことがあるかニヤ？」

通りすがりのアイルーは知っている、力ないモノは逃げると。

そして同時にトレニヤーは知っている、逃げてない彼女は英雄の証をもう持っていることを

「……………」

「……………いいかマシユ、怖いと思っていない奴はここに一人もいない」

「それは……………スネークさん、も、ですか？」

顔を下に向けているが、それは声音が震えていることからなんとなく悟ったスネークはやや顔をそらし、月明かりが出ている方へと向けた。誰にでも、見られたくない顔く

らいある。そしてスネークは質問に答えた。

「俺だけじゃない、この場にいる誰もが感じていることだ」

「で、ですが——」

「人が心に思っていることが全部お前にわかるのか？」

「そ、それは……」

「わかる訳がない、わかりようが無いからな、だが全部じゃなくとも理解することはできる」

そう言って葉巻を取りだ——そうと思ったが、彼女に葉巻の煙を吸わせるわけにもいかないと思い、ヒゲを触るだけにとどめた。

「理解……ですか？」

「ああ、言葉や表情を通してな。」

俺やほかの連中も、お前も含めて、全員恐怖は感じていたし感じている。だがもしお前がそう見えないなら見えないだけだ」

「それは……皆さんは見せないように努力しているということなのでしょいか」

「……俺たちは英霊だ、そしてお前もそんな英霊の一人の魂を宿している。」

たとえ怖いと感じようとやれることを、やるべきことをやってるだけだ。乱暴な言い方をすればやせ我慢してるだけだ」

「そ、そんな風にはとても……」

「見えないだけだ、それにトレニヤーも言っていた通りこの場に居るだけで十分だ。」

……それでも足りないと思うならやれる事を増やせばいい、そのくらいの手伝いを惜しむ奴はカルデアにはいない」

「……私は、皆さんや先輩の迷惑をかけてまで、旅をしていいのか不安です。先輩のサーヴァントとして頑張ろうという一心でこのフランスに来ました。けど実際にはアルトリアさんやスネークさんを始め、ほかのサーヴァントの方々に頼ってばかりで……」

「それは、そう思えるならお前にとってはそうなんだろうな」

「……………」

「だが実際にお前の行為を評価するのはお前自身じゃない、他のやつだ。」

「仮に……そうだな……ジャンヌのお前に対する評価を上げれば『一生懸命頑張っている』だったか」

「……………」

「彼女が合流した日の夜の話だ、確かに彼女はそう言った。」

仮にお前がサーヴァントとして三流で、この場に居る誰よりも弱かったとしても、だ。お前が頑張っていることは少なくともフランスの救国の聖女は知っている、もちろんほかの連中もだ。だれもお前を未熟だと知っている、誰もがお前が頑張っていることも

知っている。知らないなりに、怖がっているなりに、慣れてないなりに」

「……………」

「お前はまだ世界を知らないし慣れてないだけだ、そう焦るな」

「……私は先輩のサーヴァントになれるでしょうか……？」

「……ハア」

そんなマシユの出した声にため息を吐くと、スネークはマシユの方へと振り返りパチンと彼女の頭を叩いた。

「アタツ!？」

「バカ言うな、お前は最初の、藤丸のサーヴァントだろ。冬木で俺が召喚される前からあいつを守っていただろ」

「そ、それは……」

「明日は決戦だ、こっちも全力で攻めるが向こうも抵抗するだろう。」

俺たちが攻撃している間はどうしてもマスターへの意識は薄まる、その間お前がいるだけで俺たちは遠慮なく戦えるんだ、そうは今のお前には思えないだろうがな」

「……………」

「意味ない事はこの世に一つもない、お前がここに居る意味も、俺がここにいる意味も、だ」

「そしてオイラがここに居る意味もあるニヤ！」

スネークの言葉にトレニヤーはスワツと立ち上がり片手を空へと突き上げた。

結構カワイイ。

「そうだな」

「……………ふふ」

そして結構シユールである、だつて格好がヘルメツトとピツケルにリュツクサツクを背負つた猫なのだから。

「お前がここに居る意味を見出すには時間がかかるだろう、だがそれでも充分時間はある。

ここで旅を終わらせる気もない、とにかく明日は決戦だ、緊張も怖いと言う感情もあるだろうがあんまり気負い過ぎるなよ、今日はそろそろ寝ておけ」

「……………ありがとうございますスネークさん、なんだか気持ちが悪くなりました」

「それなら上々だ。もう一度言うがお前が感じている事は何の不思議でも異常でもない、普通のことだ。

怖いと感じているなら、それを自覚し、その上で自分がどうしたいかを考えればいい。怖いと感じてる事を俺に打ち明けた時点で、お前はその恐怖という感情に飲み込まれる事は無い。気張っていけ」

「……ハイッ！マシユ・キリエライト、頑張ります!!」

「いやっそう気負わなくて良いんだが……まあいい」

「じゃあオイラ、音楽の人のところに行くニヤ!」

「?アマデウスさんのところにですか?でしたら私も一緒にします、ついでに案内も」

「ニヤ!お願いするニヤ!」

「ならトレニヤは頼む、ならまた明日な」

「はい、お任せください、行きましようトレニヤさん」

「ハイニヤ!」

こうしてスネークは町の外へと、その反対方向へとマシユとトレニヤは歩いて行つた。

明日はこのフランスでの最後の日、決戦である。

そうしてトレニヤとマシユが歩き去って行く背中を見て、やっと葉巻を吸えると思つたスネークは胸ポケットから葉巻を取り出し、ライターに火をつける——前に立

ち止まり、通り過ぎた脇道へ振り返らずに声をかける。

「……ところで、いい加減葉巻を吸いたいんだが、いつまで俺を見ている気だお前は」

「フン、別ににもない、ただあの小娘に貴様が何かしないか気になっただけだ」

「……随分とわかりやすい、不器用な王様だ」

「おい待て、私は完璧な王様ぞ、一体どこの誰の意見だ」

「評価をするのは自分自身じゃなく自分以外の誰かであり時代だ、自分の身内を心配するが声を掛けるのを戸惑う上司は十分不器用だろうと俺が思ったままだ。わかりやすい、というか単純ってのはエミヤの話だが」

「よし貴様には情報提供の見返りにこの聖剣のサビになるか私の拳のサンドバックになるかを選ばせてやろう」

「お前に俺は殴れん」

「ならミンチにしてやろう、この聖剣でな」

「そう簡単に宝具を抜くな、それと街中では勘弁してくれ、それかやるならエミヤな」  
「……それもそうだな」

◆? ◆◆? ◆◆◆? ◆◆◆◆? ◆◆◆◆◆?



同時刻：リヨン郊外にて

「!?いまとてつも無く理不尽な目にあわされた気がするのだが……?」

「そんなもんいつもの事だろうが?俺らは大体不幸な目に合うだろうに……まあ俺は何か起きたら逃げるがな」

「……その矢避けの加護はいつまで持つかな?」

「待て、あの女ルールブレイカーの宝具を構えるな、そいつは俺に効く」

## 邪竜百年戦争オルレアン：12—1

レイシフト5日目、現地時刻09：21

オルレアンから南約15km地点

《もう車で20分もかからない、ルーラーの探知範囲まではもう少しあるけど……》

「向こうの警戒網にいつ引っかかってもおかしくないな」

《安心しろ、斥候してるが敵の反応はねえよ、ワイバーンの1匹も見当たらねえ》

《それがむしろ怪しい気がするがね、まあこちらは引き続き先行し警戒する》

戦力はマシユを含めてサーヴァントが13人、それとトレニャーである。

このメンバーで一気にオルレアンを攻め、戦いを終わらせる。目標は敵ジャンヌ・ダルクの撃破と彼女が持っている聖杯の回収、歪みの根幹である聖杯の回収を忘れてはいけないことと無線を通じて早朝ロマンやダヴィンチから伝えられた。

現在カルデア一行は藤丸・マシユの2人を始め、スネーク・ジャンヌ・トレニャー・清姫が車に乗り、アルトリア・アマデウス・マリー・マルタ・ジークフリート・ゲオルギウス・エリザベート・バートリーの7人は霊体化し、エミヤとクー・フリーンは毎度おなじみになってきた斥候を担っている。

「ここまで仕掛けてきて来ないという事は、このまま……」

「そう上手くはいかないと思うぞ坊主、向こうはこっちが今日攻めて来るくらいは想定しているはずだ」

「そうなの？」

「俺ならそうするからな」

「先輩、相手はファヴニールという最大戦力を倒され、そのためにワイバーンという向こうの歩兵とも言える戦力を統率する力が小さくなってしまいました。おそらく相手のジャンヌさん自身もある程度統率できるはずですが、それでも戦力が低下してしまい、それを私たちが知ってしまったことも把握してらっしゃるでしょうから……」

「そっか、自分たちで言えばエミヤさんやクー・フリーンが倒されたみたいなものだもんね」

……

「……先輩、間違いではないですが……」

かわいそうだからやめてあげて。

《……ッ！》

《ツ宝具!? そっちに向かっているぞ!!》

そんなやり取りをしている矢先、無線の向こう側にいる2人から空気を変える無線

が。

宝具の言葉を聞いた瞬間にスネークはアクセルを吹かしハンドルを切り、クー・フリーンらがいる方を見る。

その視線の先からは豪雨のような光の矢が向かって来ていた

光の矢が降り注ぐであろう範囲も広い、だが標的は先ほどまでの車の進行方向であるようだ

それでもその効果範囲から逃れるにはギリギリだった

「マスター伏せろッ！他も対シヨック!!」

スネークが言った直後、車の後方に大量の光の矢が降り注いで来る

それもサーヴァントによる宝具のため威力も高く、藤丸たちが乗る車にその振動が伝わる

しかもその振動が近づいて来る

《このままじゃ追いつかれる!!》

「敵の宝具を止められるか!」

《こっちの邪魔すんじゃねえよ!》

ロマンが叫ぶ、スネークが無線に尋ね、クー・フリーンが吼える。

その声にロマンは自分が怒られたと一瞬勘違いしたかもしれないが、そんな事はこの

場の誰も気にする事なかった、どうやら宝具を放った相手を捉えたいらしい。

《こちらで相手する！そっちは先に行ってくれ！》

「わかった、さっさと合流してくれ！」

《了承した！》

「坊主このまま突っ切るぞ、ここからは連戦だ」

「うん！マシユも頼んだよ」

「ハイッ、先輩を守り切ります！」

「つこの清姫のことも忘れないでくださいまし？」

「うん、お願いね！」

相手を捉えたクー・フリーリンに代わり、スネークに対してエミヤが無線で指示を出す。先ほどまで迫っていた光の矢も止み、向こうで戦闘を始めたらしい。だが一瞬でケリがつくわけではない、故にマスターである藤丸を連れているスネークたちを先に行かせることにしたようだ。その考えを汲み取り、スネークはスピードを緩めることなく車をさらにオルレアンへと走らせる。

《襲つて来たサーヴァントの反応は君たちの北東3km位にいるけど、どんどん離れて行ってる、どうやら先行してた2人が引き離してくれてるみたいだ》

「その間にさっさと近づくと、途中から車を捨てる必要があるかもしれないが」

「襲つて来るとしたら、前に見たサーヴァント?」

「分からん、さつき襲つて来た奴のクラスはアーチャーだろうが、そんなサーヴァントはいなかったからな、おそろく追加で召喚したんだろうな」

「じゃあ……向こうも備えてる?」

「まあな、それに襲つて来るのが一体な訳がないだろうしな」

そう言いながら車を疾走させ、オルレアンを目指す。

未だ城は見えないが目標には一気に近づいている、だがここから先は10km圏内に入る。ルーラーはそのクラス特性上、自身の10km四方にいるサーヴァントの位置を正確に探知できる。気配遮断を持つアサシンの場合は具体的な位置はわからないがそれでも存在する事を感じできる。当然、車で移動している藤丸の周りにいるサーヴァントもバレている。

「つあと何分くらいで着くの!?!」

「あんまり喋るな坊主、舌噛むぞ、まあ車だけなら10分だ」

(コクコクツ)

《つ森林地帯を抜けるよ!そこからは街だ!》

「包囲戦で壊れてるがな」

オルレアンの南部に位置するオリヴェは森林地帯や湖などの自然を有するが、オルレ

アンにほど近いこの地区はオルレアン包囲戦において大きく破壊された。現在では口ワール渓谷の一部として世界遺産に登録されもいるが、まだ戦果が過ぎて程なく、しかもワイバーンやサーヴァントを従えた竜の魔女がフランスで暴れているこの特異点では廃墟と化している。

「……マズイな」

《どうしたの!?!》

「いや、ここから先オルレアンに行くには川を2つ渡る必要がある、そのために橋を渡る必要があるが……」

「おそらく確実に待ち構えてますね、向こうはこちらの位置を常に捕捉できますから、待ち伏せを外すことはまず無いですし」

まだ川そのものは見えていないが、南部からオルレアンに行くには最低でも1つ川を越える必要がある、最短ルートの場合は2つ超えなければ行けない。実際、オルレアン包囲戦初期……イングラントが優勢だった時、敗走したフランス軍はイングラント軍の追撃を避けるためアーチを爆破した記録が残っている。スネークが危惧しているのはその再現である。

「それならまだ良いが、橋を渡っている時に爆破されたらたまったもんじゃ無い」

「それは……どうでしょう、爆薬は軍が持つてる物ですから向こうの私が持っているか

は……」

「大丈夫よ、向こうは爆発物を持ってないわ」

その心配をジャンヌは疑問視し、突如現界したマルタが完全否定した。

「どうして言い切れる？」

「彼女、サーヴァントとワイバーンを召喚して戦力は十分だと判断していたもの。それに爆弾を調達する手段も理由も向こうには無いもの」

「だがサーヴァントが橋を壊す可能性もあるだろう」

「そうね、けど私が知っている限りではそんな橋を破壊するほど派手なことができるサーヴァントは居ないわ。それは話したわよね」

「シユヴァリエ・デオン、ヴラド三世、カーミラの三人だったか」

「ええ、追加のサーヴァントがいれば話は別だけれど。それに向こうの雰囲気からして橋を壊すって考えはそもそも無いと思うわよ、彼女の目的はこの国を破壊しきること。」

……召喚されてすぐ、この国の兵士を襲いに行ったもの」

「そうか」

《……うん、予想通り君たちの前方の橋にサーヴァント反応が1つあるよ、反応からしてセイバーだ》

「戦闘だ、スピードを緩めるぞ」



「そのまま無視して行けない？」

「敵が行かしてくれれると思うか坊主」

「……だよね」

そう言つて車のスピードを落としたスネークは橋の手前で車を止め、サイドブレーキをかけ車を降りた。

それ続いて藤丸、それを守るようにマシユ・清姫が並び、ジャンヌも車を降りると霊体化していた7体のサーヴァントも姿を表した。

一方で、一行の向かい側では橋の中央で立っている騎士が立っていた。

「……敵の私が言うのも何だけれど、君たち多過ぎじゃない？」

「戦術の基本だ、そうでなければ俺たちはオルレアンに攻め入らない」

「それもそうだ……これはハズレを引いたなあ、援軍も来なさそうだし……」

そう悲観した言葉を言いながらもサーベルを構えこちら側全員を相手をするかのように睨む

「あの……それこそ敵である自分が言うのもおかしい話ですけど、このまま見過ごしてはもらえませんか？」

「おい坊主——」

だが藤丸は、それでも向こうからすれば圧倒的不利な状況であるからこそ、わざわざ

戦う意味は無いと思ひ交渉を持ちかける。そんな彼の言葉をスネークが止める前にデオンが答えた。

「……残念だけどそれは無理だ。私は君たちの敵で竜の魔女に召喚されたサーヴァント、狂つていようが狂わされていようが私はフランス王家と彼女に忠誠を誓つている。それに……私に騎士だ、戦いから逃げる事は決して無い」

それを最後に本気で殺気を飛ばし、臨戦態勢に入ったデオン。

その殺気は騎士の誇りを侮辱した藤丸への憤りか

今の状況への怒りか

自分自身への不甲斐なさか

竜の魔女への、フランスへの思いか

それは当の本人にもわからない。

だが、ただの事実として、今カルデア一行と橋の上で相対している白百合の騎士の騎士は守るためではなく、カルデア一行と戦うために殺気を放っていた。

「……彼女、本気ね」

「……マリア、確か君——」

「いいの、彼女は今は敵、そして私たちは彼女の敵、それだけよ」

その姿を後ろから密かに見るフランスの王妃と音楽家。

車が止まった時からこの二人は一団の後ろに回った……正しくはマリーが後ろに行き、それにアマデウスが付いていったのだが、それをわざわざ指摘するものはいなかった。

「マスター、ここは私に一人に任せてくれないか」

「アルトリアさん……」

そんな中、黒き騎士王が藤丸に進言した。

「念のために聞くが私が一人であるの“騎士”と戦うことに文句がある者は」

首を縦に振るものはいなかった。

騎士に騎士王が相對することに苦言を呈する者はこの場になかった。

この場にいる全員で襲いかかっても結果は同じだが意味が違うことをほとんどがわかっていった。

「マスター、許可を」

「……うん、けど長引かせないであげて」

「承知した」

そう答えるとかの騎士王は一人で橋の上にいる騎士の元へ向かう。

「いまだその騎士からは殺気が溢れているが、それでも少しは驚きがあった様だった。……なぜ一人で」

「ふん、生憎聖女や聖人はいるが騎士を名乗る者は私しかいないからだ。敵である貴様がこの国の騎士を名乗り以上、私もブリテンの王として貴様を倒すのが王道だと思っただ、それだけだ」

それだけ言ううと騎士王は黒き聖剣の切先を下に向け、柄頭を胸に持ち、堂々と名乗りを上げた

「我が真名はアルトリア・ペンドラゴン、我らの主の道を切り開くため、敵である貴様を倒す！」

「……私の名はシュヴァリエ・デオーン・ド・ボーモン、フランスとフランス王家に誓い、君らを倒す！」

互いの宣誓がおわり、一瞬の静寂が訪れる。

両者ともに思う

勝負は一瞬で終わる、終わらせる

黒き騎士王が飛び、白百合の騎士に斬りかかる。

振り下ろされた聖剣は魔力放出の勢いも合わさり相手の体ごと引き裂く

だがそれは直撃した場合に限る

デオンはサーベルを相手のわずか左斜めにズラす

振り下ろされた聖剣はサーベルの右側を滑り勢いをそのままにいなされる

そのまま騎士王の頭部へと突き出した

突き出されたサーベルはたしかに聖剣使いの頭部へと吸い込まれ

そして聖剣の鏝で弾かれた

「ツッ」

「この私の首はそう安くない」

僅かな厚みしか持たない鏝にサーベルの切先を一切のズレなく真正面から合わせなければ弾かれる事はまずない

僅かでもズレがあればサーベルの切先は鏝によって軌道をずらされるだけで終わる

だが実際には聖剣を逆手に持つ事でサーベルは弾かれ、白百合の騎士の体は後ろへと

押される

その隙を突き、逆手に持たれたまま黒い聖剣は白百合の騎士の胴を薙ぎ払う

薙ぎ払われた聖剣はしかし、宙を切り

当の騎士は後ろに押された反動に抗わず地面へと倒れ薙ぎ払われた聖剣を見逃し後方一回転、起き上がり距離を取る

だがそこから間を置く事なくデオンは間合いをゼロにしサーベルで敵を貫いた

それに対し騎士王は真正面を向き右手で聖剣を掲げ、袈裟斬りの要領で振り下ろした

・・・再び静寂が訪れる

白百合の騎士によるサーベルで確かに貫かれた相手は右脇腹をスカートアーマーごと抉っていた

黒き騎士王によって確かに切られた相手は……左肩から右腰かけてハッキリと切り口が描かれ腹部から血が溢れた

そのまま両者は腹部を抑えたが、橋の上で立つ者と橋上で腹ばいに突つ伏す者との違いが出た。

何よりそこから歩き始めた黒き騎士王と、赤く染まり動けなくなった白百合の騎士で

はあまりにも差があった。

「……………ああ、健勝で何よりだ……………」

「馬鹿を言うな、脇腹に傷ができた、何が健勝だ」

「……………それ……………もそうだ」

黒く重い甲冑を着ている騎士王と、鎧も装甲もない服を着ている白百合の騎士とでは真つ向勝負で不利なのはわかりきっている。確かに素早さでは有利を取れるが、真つ向からの突きと斬りとの勝負ではその有利も働かない。ましてや相手は騎士王とまで呼ばれた彼女である、それがわからなかったハズがない。

「なぜ決着を急いだ」

「……………なんのことかなあ」

アルトリアはデオンの片方の肺を確実に斬った。

すでに呼吸だけでも苦しく困難なハズだが、それでもとぼける余裕をみせた。

「……………ああ、これでようやく呪いも解ける……………負けるのは……………恥だけど……………君たち……………」

倒されてよかったよ」

「……………」

それを最後に、真つ赤に染まった白百合は白い光の粒子となって消えた。

橋の上に残ったのは黒き騎士王だけだった。

「……終わったぞマスター、要望通り短時間で終わらした」

「アルトリアさん、その傷っ」

「大した傷ではない、すぐ治る、それより早くオルレアンに向かうべきだろう」

「で、ですが……」

「本当に大丈夫なんだね？」

「私の回復量は並みじゃないからな、まあ少し休ませろ」

そう言うアルトリアはさっさと霊体化して消えた。

「……さっさと移動するぞ、すでにほかのサーヴェントが先回りしているだろうからな、その2体を倒して本拠地に殴り込みだ、行くぞ」

そう言うスネークは車に飛び乗り、エンジンを吹かす。

その音に慌てて藤丸やマシユも乗り込み、ついでに清姫もちやつかり藤丸の隣に乗ろうとしてマシユにガードされている間に助手席に藤丸が乗り、ならその隣か上に乗らんと清姫が動こうとした瞬間にシユタツとトレニヤーが藤丸の膝上に乗っかかり、清姫がウギヤーとなりつつある中。

ジャンヌは車に乗る前に霊体化しようとしていたマリーに声をかける。

「マリー、先ほどの相手は……」

「ええ、私はよく知っているわ。彼女がどれほどこの国を想っているのかも、だから彼女



が倒されて安心していることもつ。だから後であの騎士さんに感謝しないと、ありがとうってね？」

「そうですか……てつきり落ち込んでるものかと」

「ウーン……残念って気持ちはあるけれど、それでもやっぱり彼女らしく戦って、そして倒されたから良かったって想っているわ。だって大人数で倒してしまつたら、あまりにも悲しいもの」

「そ、そうでしたか……」

「?どうしたのジャンヌ?そんな後ろめたい顔をして?」

「いっついえ!あ、私も早く車に乗らなきゃ……!」

言えない、

実は『どうして一騎打ちなんでしょう?ここにいる全員で倒してしまえばいいのに』と実は思っていたなんて。けどなんか意見する雰囲気じゃなかったから言わなかっただけだなんて。マリーと知り合いつぽいから、慰めようかと思っていたけど、むしろ私が見ていたら彼女が悲しんでいただなんて思っても見なかった彼女は、このことは墓場まで持っていこうと心に決めた。サーヴァントに墓場はあまり無いのだが。

「ロマン、エミヤ達は どうしてる」

《……どうやら敵はあの派手な宝具を何回か撃とうとしたみたいだからだいぶ離れて

る、多分それが目的だと思っし君たちが次の橋に向かうまでにはまず間に合わないと思  
う》

「まあそれをわざわざ無線で言ってこないところから察するにすぐに合流する腹づもり  
みたいだな。よし出すぞ」

## 邪竜百年戦争オルレアン：12—2

デオンとの戦闘から数分後、オルレアンから南西2km ロワール川にて

カルデア一行は敵本拠地であるオルレアンまで文字通りあと一歩までのところまで来ている。一行から見える川はロワール川であり、その川の向かい側には敵の城までも見えていた。だがその手前にある一行が渡らなければいけない橋の上には敵サーヴァントが2体の反応があり事前に離れた場所で車を降り橋へと向かった。

《やっぱりサーヴァント、しかも前に戦った相手だ!》

「……なるほど、あの騎士は先に逝ったか」

「まあそうでしょうね……それで残っているサーヴァントがこれだけいるなんて、彼……いや彼女ではどうしようもなかったのでしょうか……まあ彼女が死なず、敵なのは驚きなのだけれど」

そのため息を吐きながら視線を飛ばすカーミラの先には、死んだと思っていた水辺の聖女が立っていた。

対して視線を受け取った聖女はお返しと言わんばかりにメンチを切る……ことなく、ただ静かに2体のサーヴァントを見つめるだけだった。そんな聖女の視線が気に食わ

なかつたのか、不機嫌そうに顔を背けたが、ヴラド3世がただ言葉を出す。

「そう言うな、所詮我らは化け物であり悪役、相対するのが敵であれば殺すのみ」

それだけ行つて2人……2体の吸血鬼は、片方は血濡れた貴婦人として、片方は黒き王から鬼となつた串刺し公としてそれぞれの獲物を持ち構えた。先ほどまでの戦闘と違い、一切会話の余地は無かつた。

「……やつぱり倒すしか無いんだね」

「さつさと下がつてろ坊主、さつきとは違つて向こうはなりふり構わずくるぞ」

「マスターは私の後ろに、必ず守り切ります」

「ええ、私も護衛に回りますよ」

そう言いながらマシユとゲオルギウスの二人は藤丸を連れ後方に下がる。

先ほどまで戦つたデオンとは違い、殺気はそれほど濃く無い、だがデオンの殺気は己の中にある迷いを断つ意味もあつたかもしれない。だがこちらは作業するかのようにな一切の躊躇なく戦うことを選んだ。向こうが圧倒的な数的不利であることもそうだろうが、逆に言えば向こうはとにかく暴れるだけで良いのだ。

気負う責任も、命も、目の前に立つ2体の化け物には無い。

「つじやあ私は私を相手させてもらうわよ子イヌ!!」

「えっ一人で相手するつもり!？」

「そりやそうよ！色々言いたいことあるけど、とにかくムカつくんだもの!!」

そして、昨日仲間になったばかりのエリザベートは敵アサシンであるカーミラを相手取る、というかそれ以外のことを視界に入れておらず、藤丸の質問にも答えていなかった。そんなアイドルはその勢いのまま、まだ分断もしていない化け物2体相手に突っ込んでいった。

「ツあのうるさいトカゲ女、いきなり突っ込んでいったぞ!」

それに驚いたのは後方支援に回ろうとしていたアマデウス。

音楽家が前線に出張るわけにもなれず、そも前線を張れるサーヴァントがいるこの状況でわざわざ前線に出る理由もないことから自然と後方に回ろうとしていただけだが、それでも彼なりに後方支援要員として、何故かキャスターとして現界したなりに魔術による支援をしようとした矢先の出来事。

当然ながら突っ込んでいったえりちゃんアイドルにもバフをかけようとしていたが、かかっていない。

「っ清姫!」

「はあ……いくらあの駄竜とはいえそのまま死なれても寝覚めが悪いですし。それにま

すたあのお願いですから……すこし頭を冷やしなさい！」

「あつ前衛陣は一時退避！」

突っ込んで行つたエリザベートをとりあえず援護するため、藤丸は（何故か）近くにいた清姫に攻撃指示を出す……と同時に、シャアツ！と舌を出した彼女を見て、彼女自身の宝具を思い出し、自分たちの一番前で立っていたスネークとアルトリアの2人に向けて退避命令を出す。

直後、横にいた清姫は扇子を取り出したかと思うと蒼き竜となり、橋の上に立つ者たちに襲いかかった

「転身火生三昧！」

本人の思い込みという力だけで竜に転身する、という人類史における伝承を見返しても中々出来る者が少ない芸当をやつてのける彼女の宝具はその伝承上にある竜になるという物で、その体で締め付け、広範囲にいる敵を焼き尽くす……まあ逆に言つてしまえば、効果範囲内にいるものであれば味方であろうがなりふり構わず攻撃するという意味で。

「キヤアアアアア!!?熱いわよ!!?味方の見分けもつかないのアンタ!!?’

「……そういえば清姫さんはバーサーカーでしたね」

「そういうことだ」

そんな訳で、突っ込んで行ったアイドルは突っ込んで来た竜に燃やされるといふ、少し事故な気がする場面を見て清姫のクラスを思い出すマシユと、その飛び散る火の粉で葉巻に火をつけようとするスネーク。そんなことをするスネークを見て、アルトリアは呆れ、ジークフリートは変わらず険しそうな顔をしていたが、敵もろとも焼蛇になりそうなアイドルはそれどころじゃなかった。

「ああ私がバカだったわよ！…ってどうか向こうは無傷だけどお?！」

「・・・えっ?！」

アイドルとしてはそれどころじゃ無かったが、サーヴァントとしての仕事は果たすらしい。

そんなエリザベートの言葉を聞いて驚くマスター。一方で葉巻を諦めた傭兵と黒き騎士王は自然と反応する。

「……行くぞ、私に合わせるだけでいい」

「そうしてくれ、俺はお前に合わせるだけだ」

「同じセイバーだが俺はドラゴンスレイヤーだからな、任せる」

「ふん、良くほざく」

直後、清姫の吐いた炎が作った煙が晴れ、代わりに骨肉、砂などありとあらゆる物質で出来た杭が強固な防壁のように橋の上に展開され、炎はその杭を燻らせるだけで橋の

向こう側へ届いておらず、その杭から新たな杭がいくつも飛び出す。  
「フンッ」

だがそれらの杭は全て黒い極光の剣が振り落とす

それでも防壁そのものに変化は無く、吸血鬼に被害は無い

「愛知<sup>タ</sup>らぬ哀<sup>ラ</sup>しき竜<sup>ク</sup>よー」

その杭の壁に向けて巨大な質量を持つ竜種が高速回転しながらアルトリアの頭上を飛んで行き、そのまま壁の中央部を削り喰い破りそのままマルタも突入した。

全員が大きく空いた壁から橋の向こう側が見えるようになる

・・・がそこに敵は見えない

「ズルイと思わないことね、こっちに余裕は無いのよ」

「アリア?」

吸血の貴婦人は一行の一番後ろに現れた。

最後尾には援護、もとい前線で戦えないサーヴァントが集まっている。カメラもその経歴とクラスがアサシンであることから殴り合うタイプのサーヴァントでは無いが、奇襲であれば一番後ろにたむろっているサーヴァントを相手にする程度なら問題ない。突っ立っていたマリーに向かい異様に伸びた爪で切りつける。

「ッー」



何拍か遅れてアマデウスが反応するもとづくに遅く、格好良く割り込むことも出来ず、彼女が割かれる瞬間を見ることくらいしか出来なかった。

ガキンツ、という音が響く

「そう簡単に……やらせはしません!!」

「ジャンヌ……!」

「ツチ」

護国の旗はフランスの王妃を吸血鬼から守り、鋭い爪を弾いた。

流れるはずだった鮮血の代わりにマリーの目に映ったのは、きらびやかに風になびく金髪だった。

そんな金髪の主であるジャンヌは競り合っている穂先から旗の柄でカーミラの顔面を突き狙う。

だが、元から数的不利を承知で突っ込んだカーミラは奇襲が失敗し、しかも自分で相手しなければならぬ相手が増えたことも相まって、ジャンヌが旗を回転させた時点で大きく後ろに跳躍し、回避する。

「マリー大丈夫ですか、ケガは」

「ふふ、まさか私を守ってくれる騎士様がジャンヌなんて」

「つエエ?」

「ふふふ」

マリー・アントワネットがサーヴァントとして召喚されると、彼女のスキルとして自分を守る騎士たる人物を引き寄せる。……そのスキルのお陰で音楽家である彼も召喚されたのかは不明だが、少なくとも今の場面で引き寄せた騎士はジャンヌだったようだ。それが王妃様本人にはおかしかつたらしく、自分で笑っているらしい。

「ああ、彼女はいつも通りだから問題ないと思うよ……まあマリアが言う通り守るために駆けつけたのは君だけだね」

「そ、そうですか……」

「全く、これだから人数が多いのは嫌なのよ……」

その一方で、失敗するかもしれない、程度に考えていた奇襲が敵を増やす形で失敗したことにため息を吐くカミラ。今の彼女の奇襲によって10人近くものサーヴァントが敵である自分のことを見ている、しかも見ている全員を相手にする必要があるというのだからため息も出る。

「……こんな役目、狂っているとか以前の問題よね」

「ですが、それでも貴女は降参することは無いのでしょうか」

「……ふ、そうね。あなたの言う通りよ、そう考えればどうせ私は狂っているのでしょうけど……降参しないわ、私たちはね」

「……………」

ため息を吐きながらも言葉をつぐ吸血鬼に対し、まっすぐな視線をぶつけるジャンヌの言葉に、何かを思い出したのかフツと微笑み言葉を返すカーミラ。その顔に引っかけりを覚えたジャンヌ。

「マッシュ！ マスターを守れ!!」

「ハイッ、何がなんでも——」

「違う!!」

「……………えっ?」

「ッ！ 失礼!!」

直後、後ろから先ほどまで最前線だった一行の最後方からスネークが叫ぶ

続く言葉にフリーズしたマッシュ

防御に関して直感が働くゲオルギウスはすぐにその場から藤丸とマッシュの2人をそれぞれを片手で掴み、スネークやアルトリアがいる方へ無理やり引き摺り走った。

直後、藤丸が立っていた足元が裂けて橋に穴が空き、先ほどタラスクによつて破壊されたものよりも太く丈夫な木材や金属でできた杭が再び壁のように橋の下から突き出る。そしてさらに壁から1本の杭が2人引きずるゲオルギウスを狙い飛び出す。

「っマスターッ!」

だがマシユが復歸するには十分な時間が稼がれた。

あのまま立っていたなら時間以前にそこで終わっていたただけだが、その未熟な部分は一実際にスネークとゲオルギウスによってフォローされた。そして未熟ならば、彼女は、彼女がすべきことをするだけである。

ゲオルギウスはマシユを掴んでいた手を離し、そのマシユは手に持つ盾を自分たちの後方から迫る杭に向け、真つ向から抑えつける。

「クツアアアア!!」

ぶつかっても勢いが収まらない杭だったが、マシユの気合いによって杭の進行方向は右直角に曲げられ橋の縁を破壊して止まった。だがそれでも警戒を怠らず、追撃が無いが確認しながらマシユは盾を構えながら後ろに下がり、ゲオルギウスと藤丸に合流する。

すでにゲオルギウスは藤丸を連れスネーク達と合流しており、遅れて最初に壊された杭から（どうにか）戻ってきたエリザベートや清姫・マルタも合流していた。……が状況は芳しくなかった。

「分断、されましたね」

「向こうは何人だ？」

「マリーさんとアマデウスさん、あとジャンヌさんの3人かな……」

「それだけか」

「すぐに向こうに合流したいですが……」

ゲオルギウスが淡々と事実を確認する。強固な杭によつて橋は半分ほどに分断され、藤丸はじめ多くのサーヴァントがいるこちら側に対し、向こう側には三体のサーヴァントしかおらず、それもほとんど碌に戦えない2人と弱体化されているルーラーであるジャンヌだけである。故にすぐにこの杭を破壊して向こう側に合流するべきだ……が。

「しかもよりによつて私が向こうにいるんですよ!?! だったらさつきみたいに壊しちゃえば——」

「はあ……あなたはそこまでアホなんですかあ?」

「はああア!?! さつさと壊すに越したことないでしょ! 壊さない方がバカよ!!」

「アホは貴様だトカゲ娘」

「と、トカツ——!?!」

「悪いがお前が一方的に悪いな、そのままあの壁を貫通させる攻撃をして、向こうにいる連中が無傷か?」

「……あ」

「そういうことですよ。それにアレ、宝具レベルで生成されてますよね? それなら宝具を使わないとまず壊せないでしょうから」

「それに相手もこつちの自由にはさせてくれる気はさらさら無い、という話だ」

エリザベートがサツサと杭をぶつ壊そうと提案するが、それを全員が否定する。

さらにスネークが橋を分断した杭に視線を向けると、そこには黒い貴族服を着た王が槍を携え待っていた。

「言つたはずだ、余は化物であり敵であれば殺すのみである。それが例え気に食わぬ傀儡の身であろうとな」

そう言つて現れたヴラド3世はゆっくりと一行の方へと歩み始めた。

《ツ!? 急激な魔力上昇! なりふり構わず襲つてくるぞ!!》

「だろうな、立ち止まればあの杭で串刺しだ」

「血塗れ王鬼!」  
カズイクル・ベイ

「ツ動いてとにかく回避!!」

言われるまでもなく、と言つた風ながらも藤丸やサーヴァント達はそこから跳びのき、走る。

直後、それぞれが居た橋下から杭が穿たれる。もちろんそれら全ては回避されるが、それぞれの回避先にさらに杭が飛び出てくる。サーヴァント達はとりあえず回避できてるが、

「ちよつ、これ際限無いわけ!」

「だろいな、そういう伝承があるサーヴァントだしな、それに向こうからすればジャンヌらがやられるまでの時間稼ぎも兼ねてるだろう」

「なんか考えは!？」

そう藤丸が叫ぶ最中も敵の宝具である杭は彼らを襲い続ける。

このままではジリ貧、になる立場は向こうだがあまりにも時間がかかりすぎる。それに加え時間がかかればこちらにも被害が出かねない、隔たれた向こう側へと行く必要もある。

「……黒き騎士王よ頼みがある」

「ほう、どうした竜殺し」

「すまないが俺を、その剣であの杭を超える程度に打ち上げてくれ」

「……正気か?」

「ああ」

「確実にアレの餌食になるぞ」

「俺もサーヴァントだ、策はある」

「……マスター、私がジークフリートを向こうに飛ばすが構わないな?よし飛ばす」

「はえ!?! チョッ——」

この状況を打開するにはこちら側の敵であるヴラド3世を速攻で倒すか、強固な杭

だけ”を破壊して無理やり合流するか、の2択。だが、反対側に残り残されているサーヴァントの援護に即行くことができれば一応の問題はないとも言える。

「誇りに思え、この剣に乗り、ましてや斬り上げられ無傷の人間は貴様が初めてだ」

「……すまない、だが……そうだな、真後ろから斬りつけないでくれ」

「ッ行け」

腹を地面に向け、空にも腹を見せている聖剣に片足を引つ掛ける足場として乗せたジークフリートは、持ち主の言葉にいつも通り一言詫びながらも自身の弱点に関する注文をした。その言葉に対しアルトリアは自身の筋力とさらに魔力放出で高速で剣を振り上げることですっかりと応え、ジークフリートのオーダー通り、背中を斬りつけることなく彼を強固な杭の高さまで打ち上げた。

「それを余が許すとも思ったか」

そして、予想された通りヴラドが飛び越えようとするジークフリートの軌道上に杭を打ち込む。

「それを私たちが邪魔しないでもお思いですか？」

だがジークフリートを狙った杭を清姫が扇子からの炎で薙ぎ払う

「っ悪く思わないでよねっ!!」

その炎に紛れてエリザベートが突入し懐に潜り込み、マイクを兼ねた竜骨槍をヴラド



3世の顔に打ち込む。

それに対し彼は至って冷静に、自身の持つ槍で彼女の槍を側面から弾き、自身に向けられた穂先を脇にすり抜けさせ、その勢いのまま自分の槍を振り下ろす。

しかし、元から筋力がCしかないエリザベートは槍が敵の脇へと外れた時点で背中を向け、自分の尻尾で頭をかち割ろうと振り下ろされた槍を弾いた。

「……………」

だがジークフリートの体はちょうど壁の真上へと到達していた。

それを確認したヴラド三世は直後、彼の体を貫かんと杭でできた壁が急速に進展させ、ジークフリートに直撃する。

「ジークフリートさん!?!」

「心配するな、よく見る坊主、あいつは無事だ」

「えっ?……えっ!?!」

「心配させてすまない、だがこれが一番早い、こちらは俺に任せてくれ」

そう言うのと猛スピードで杭で突かれ先ほどの壁の高さよりはるか高くに打ち上げられたジークフリートは無傷でさらに高くなつた壁の向こう側へと消えていった。

その間にエリザベートはさつさと懐から離脱し一行が集まる橋のたもとへと避難する、だってマジ怖いんだもん（本人談）

《ど、どうやら伝承通り彼の体は攻撃を受け付けないみたいだよ、多分体がそういう宝具  
——》

「解説は後！こっちの被害は!?!」

「今のところゼロだな」

「けどキリがないです、一気に攻めるか意表でも突かないと……」

「奇襲か、だが見通しが良過ぎる、それに裏にも回れん」

どうにか速攻で倒す必要性が無くなったものの、ヴラド3世をこちら側にいるメンツで倒すことに変わりはない。ただ敵は橋の上におり、その後ろには壁があるために後ろに回り込むことが物理的に難しい。さらに正面から攻め込もうにも波状的に杭が橋から飛び出してくる為にまず接近できない。

いまはジークフリートが向こう側へと飛んで行った為に、様子見なのか敵は杭は飛び出して来ず、壁の前に槍を構えて立っているが、橋の向こう側にいる味方が倒されればすぐに後ろから攻められることになる。

「……強硬手段だが考えがある、結構無茶だが」

「なに、タラスクで問答無用に押し通るの」

『姐さん、それはダメって言ってたっス』

「まあ……似たようなもんだ」

『!?!』

タラスクはおどろいた、けど誰もツツコまない、だって姐さん以外には聞こえてないのだから。

「……一体何をやる気?」

「実は仕込みはできている、やるならこのタイミングなんだが」

「仕込みつて、スネークさん本当に何するの?」

「……確実な隙を作る、そこを一気に攻めてくれ」

「短期決戦?」

「ああ、とにかくあいつを仕留められる奴が一気に攻めてくれ、そうでなきや向こうが有利だ。なにせオスマン帝国の進行を数的不利で退けた英雄だ、この状況は向こうからすれば好条件になるだろうしな」

「なら……アルトリアさんとマルタさんかな?」

そう藤丸が確認し2人を見ると、その2人は頷いて答えた。

「なら決まりだな、それと派手に合図するまで橋に近寄るな、特にマスターはな」

「……なんとなく今までの予想できたけど、うん、任せるよスネークさん」

そのやり取りをし、スネークだけが橋のたもとからヴラド3世がいる橋の中央へと近づく。

1人だけ近づいてくることを奇妙に感じながらも、何か考えているのはわかりきった事だったために気にすることはなかった。そも、ヴラド3世やカーミラからすれば自分たちが圧倒的不利な状況下で無理やり戦っていることが前提である。

聖杯からの魔力供給によってどれほど宝具を使っても自然消滅することは無いが、それでも言ってしまうえば制限がないだけである。特にヴラド3世はその伝承上……本人はその一部を忌み嫌っているが……少数で大多数を相手することで真価を発揮するのに対し、カーミラはまず武勇や殲滅するといった話は無く、血の貴婦人という伝承から生まれた吸血鬼という無辜の怪物というだけである。単なる人なら人数が多くとも有利が取れるがサーヴァント相手ではただただ不利なだけである。一応、後方で控えるであろう女サーヴァントを狙ったが、先にジークフリートが加わったために、そう長くは続かないだろう。

だが、それが自分たちに投げつけられた役であるゆえに、化け物として振る舞う。

「ほう、あの中で一番人に近いサーヴァントであるお前が余の前に一人で立つか」

「おかしいか？」

「否、貴様だけで今さら余を相手にするとは思わぬ。あの中で一番奥に立っている者に

近い時代で生きていたであろう人間と相対すると思わなかっただけである」

「ああ……そう言われれば確かに俺とマスターはあまり変わらんからな、それにお前を倒しきる術を俺自身は持ってない」

そう言つてスネークは手に持つM16を一瞬見なおす。

セイバーやランサー・バーサーカーのように、武器は自分も持っているが自分の武器は自分の筋力に依存していない。全く自分の力を使わない訳ではないが、それでも他のサーヴァントと比べれば特殊ではある。それに武器を使わず自分自身でいま目の前に立つ敵を倒せても、倒しきることはスネークにはできない。

「……だがまあ……なんだ、この場に立つサーヴァントは俺だけだ、サーヴァントはな」  
「……なに」

単純に、スネークはほかのサーヴァントと比べて決定打に欠ける。

実際、これまでのフランスや冬木での戦いも敵を倒したのではなく倒すためにアシストをした、と言つた方が正しい。橋の上でも何かをした訳ではない、ただ素晴らしい相方が働いただけである。

「この橋はお前の宝具のおかげで穴だらけになった。向こう側も巻き込むかもしれなかったがその心配も無くなったからな、遠慮なくやらせてもらう」

そういうとスネークはポケットから機械を取り出した。

それは真ん中が赤いボタンだった

「ツ！」

物を取り出すという動作にとつきに反応した敵に流石と思うスネークだったが、こと  
ブツを取り出しボタンを押す・引き金を引くといった動作を確実に素早く行うことに関  
して自信がある。

実際、ヴラド3世はスネークに対して何かをしようとした直後、体制を崩された

それは一瞬で目の間にスネークが接近した、訳ではなくボタンを押したことにより正  
常に橋裏に設置されたC4爆弾が起動した結果である。

「爆発、か」

「ただの爆発じゃない、足元を見ろワラキアの君主」

「ツ！」

彼らが立つ足元は橋である、

それも石でできた橋であり、

ヴラド3世の伝承によって宝具となった杭によって穿たれている、

当然ボロボロであり……建築工学に基づき炸薬量を調節し設置された爆薬を用いれ  
ば

「スライミングの時間だ、少し季節外れだがな」

「ニヤニヤアー！」

橋の真ん中だけを落とす程度造作もない。

加えて強固に作られさらに高くなつた壁も問題ない、橋のたもとやスネークらが立つ方向へも倒れることなく、全ては瓦礫として川上側へと倒壊・落下し、石材とともに灰色の爆煙と大きな水しぶきを作りあげた。

そして当然、スネークやヴラド3世も川へと落下する。

その間に数発スネークは発砲するも、英霊の名は伊達ではなく頭部へと迫る弾丸を槍で弾き飛ばし1発だけ腹部へと命中する。もつとも、吸血鬼と言う名の化け物となつているヴラド3世に弾丸を1発だけ打ち込んだところで大したダメージにはならない。

やがて川へと落下し、わずかに沈むもスネークは瓦礫をかき分け、水面に顔だけを出し敵がいるであろう方向を見ながら後ろ向きで岸边へと泳ぐ。その速度は遅かったが、対して敵の対応はさらに遅く、水中に沈んでいた。

(ツ流水！)

ここで召喚されているヴラド三世は自身がドラキュラであることを認めている状態である。当然ドラキュラの伝承上の特徴である頑丈さや怪力・吸血といったものを併せ持つが、同様に伝承上の弱点も一部、今回の召喚では引き継ぎ、というのは彼からすれば正しくないが持っている。一部、というのは日光下では弱い・燃えるということは無

いし炎に弱いということも無い（実際に活動できており、召喚者が炎を扱うもデメリツトを受けていない）だがサーヴァントとして召喚された英霊は知名度や伝承に能力を引きづられる存在である。

化け物であることを自覚しているカーミラやヴラド3世は日中で活動できることから吸血鬼としての弱点を、本人らはもちろん召喚者であるジャンヌもあまり気にしていなかったが、吸血鬼としての弱点を一切持っていないわけではない。

スネークとはある理由から吸血鬼について研究した。それこそ『吸血鬼はただのよくできた作り話だ』と結論づけるために23枚程度のレポートを自力で書き上げ、反論に對しては、相手がただ聞いた話を口にしているならその相手を（口で）丸め込み、相應の知識と文献を読み込んだ上で信じている相手には（口で）完膚なきまで叩きのめす程には研究した。

故に、吸血鬼は裸と関連する流水に弱いこともスネークは知っており、それが現実となった。

もつとも、宗教や土着信仰により魔物によつては水面を歩くものもあり、吸血鬼もそんな魔物の一種だが、そも人の形をしているものが水面に浮かべるとは考えにくく、少なくとも吸血鬼となったヴラド3世は水面を歩けないらしく、自分の装備や服によつて沈んでおり、さらに若干ながら敏捷と筋力のパラメータが若干落ちていた。



だが窒息死することはない、なぜなら沈み切ったために水中を歩けるからだ。

別に泳げないというわけではない、それにオルレアンの南を流れるロワール川の水深は3mもない、水面にもすぐに顔を出すことは可能でしばらく水中にいても酸素はもつ。

「愛知<sup>タ</sup>らぬ哀<sup>ラ</sup>しき竜<sup>ス</sup>よー！」

そこに、聖女の宝具が繰り出される

突如水中を泡立てながら高速で接近する物体はただでさえ動きにくい流れのある水中にいるヴラドに直撃する。だが、例え弱点とされる流水に浸かったところで耐久力にたいしてデメリットが発生していたわけではない。吸血鬼と呼ばれる所以である不死性にも似た耐久力の高さを発揮し、無理やり体を削られながらその回転を使い水面へと一気に浮き上がりそのまま体を打ち上げてもらう形で水中から脱し空中に上がった。

身体中に肉と骨がむき出しとなっている箇所があるが回復すればまだ十分に戦えた。そう、戦えた。

「落ちて沈み打ち上げられて空を飛ぶか、吸血鬼も大変なようだな」

「ッー！」

だがその水面には一人の剣士が聖剣を構え待っていた。

別に化け物でなくとも、例えば湖の精霊の加護を受けたものであれば水面を歩くこと

が出来る。それが海だろうが川だろうが関係ない、それが別の側面として現界した場合でも。

「蹴散らす」

手に持つ黒い聖剣を下段に構え、水面を蹴り空中にいる敵を空中でぶつかると同時に切り上げカーミラやジャンヌらがいる反対側の橋のたもとへと吹き飛ばす。

先ほど爆破された橋が作った瓦礫による水しぶきほどでは無いが、土煙を上げ地面を転がっていく。

「な、なんか飛んできた!？」

「っ気をつけて下さい、まだ倒しきっていません」

「下がっている」

魔力放出によって叩きつけられた聖剣は吸血鬼の胸を下から切り上げ、その肉と骨を絶った。

切りつけられた肉体は骨も絶たれたことよってさらに臓物もむき出しになろうとしているが、それでもまだ死なない。戦闘続行のスキルが効いているのだ。

「……………」

それだけの傷を負ってもなお、地面を転がったままであってもヴラドの目が虚ろになることは無く生気を宿していた。ただ、その目でカーミラを探そうとするもその姿を見

つけることはできなかつた。

「……すでに彼女は倒れた、残るのはお前だけだ」

「……だからどうした、余は悪魔であり貴様らの敵である、敵である余にあやつが倒れたことを教えて降伏するとも思つたか」

「いいや、お前は王で仲間を大切にする奴だと思つた、だから教えただけだ」

「……………」

転がつている敵に対してジークフリートは見下ろしながらもそう伝える。

その言葉を聞き、ただ空を見上げたあと、そつとヴラドは腰を上げ武器を構えた。その起き上がる動作は、立ち上がる姿は、とても王としての気品や、化け物としての畏怖も霧散していた……が、騎士としての誇りはいまだ纏っている。

「余を倒すか、竜殺し」

「……………ああ」

「ならばこれ以上の言葉は不要、ただ剣と槍を交えるのみ」

「そうだな」

両者ともに思う

勝負は一瞬で終わる、終わらせる

奇遇にもそれは、さきに決着がついた騎士同士の戦いと同じだった

竜殺しは黄昏の剣を構え、王である吸血鬼は護国を担う槍を構え

そして互いに仕留めにかかる

◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆?

「……どうにか倒せたな」

《さあいよいよ最期の相手だ、君たちがいるところからもう見えてるだろうけど、オルレアン城、そこに彼女と元帥はいるよ。カルデアからも確認できる》

「なら……仕留めよう、ここからは作戦通りに、だよな?」

「指示するのは貴様だ、まあその通りだが」

「そ、そっか……」

同日 現地時刻 11:13

2体の吸血鬼であるサーヴァントをオルレアンの手前で倒しきったカルデア一行は人である藤丸のために一息ついていた。なにせヴラド三世の宝具である杭をひたすら回避していたのだ、途中マシユやゲオルギウスに担がれてはいたものの、ただ担がれているだけでも即死級の攻撃を回避するための動きのため、心身ともに疲れる。

「フム、結局私は何もしてませんでしたな」

「そんな事はない、おたくのフォローがなければマシユもマスターも最初で串刺しだった。守護騎士の名は伊達じゃないのを見させられた」

「そういうえげそうでしたな、ですがこのような騎士でも役立てて何よりです」

「ジークフリート、そっちはどうだった、最後お前さんが仕留めたのはわかったが」

「ああ、こちらはそちらほど手こずることは無かった……もつとも、もう少し遅ければ誰か一人は確実に宝具でやられているところではあったが」

「宝具……鉄の処女か」

「残念ながら……と言うのは間違いだな。幸いにも宝具が発動する前に俺が介入出来た、おかげで宝具の名前までは分からなかったがその逸話からして女性に対して強力な

攻撃なのだろう」

「正直、彼が飛び込んで来なかったらマリアかジャンヌのどちらかは倒されてたと思うよホント」

「分断されるとは思っても見なかった、すまない」

その間に女性陣は女性陣で集まり先程までの戦鬪を振り返り、情報共有をしていた（マスターもそっち側）。そうなると思察で2人ほどいなくなっているお陰で3人しかいない男衆も自然と集まり、先の戦いについて労う。そんな場でも謝罪するジークフリートにアマデウスが突っ込んだ。

「イヤイヤ、あれは予想とか事前の予防とかっていう話じゃないでしょ、ていうか君が謝ることで無いいし」

「強いて言うなら油断だな、今度から後衛の守りも考えた方が良いがそれは全体の問題だ。反省しただしたらキリがない、それにまだ相手は残ってるしな」

実際のところ、スネーク自身も反省点を見つけている。具体的には最初の杭での攻撃を避けるようマシユに対して声を発した時。あの時はとっさに『マスターを守れ』と言いい、それに対して律儀にマシユが返答したことに『違う』と怒鳴ってしまったマシユは固まり動けなくなった。

結果としてはゲオルギウスによって助けられたものの、最適解ではなかった。もっと

も戦術や戦略において最悪の事態だけは避けるため、保険や安全装置は何重にも用意しておくものであり、今回のゲオルギウスの存在はそういったある種の安全装置が働いたとも言えるが、『運が良かった』と言ってしまふ方が今回は正しいのかもしれない。

いずれにしても反省会を開くのはこの場ではないと考えを断ち切り、スネークは離れた場所に置いてある車を呼び出すと女性陣に囲まれている藤丸へと声をかける。

「そろそろ休憩も十分だろう、さっさと乗れ坊主」

「あつうん、行こうマシユ！」

「はいセンパイ！」

「他にも休めるだけ休んでおけ、10分もかからず着く」

スネークは藤丸、マシユ、ジャンヌの霊体化することの出来ない者……とちやつかり藤丸の隣に座ろうとする清姫が乗車したのをため息をしながらも確認し、ステアリングを握りアクセルペダルを踏む。

《スネーク、聞こえるか》

「エミヤか、聞こえるぞ、こっちは敵を突破したこれからオルレアンに乗り込む、そつちはどうした」

《ああ、道具を連発していたサーヴァントは倒した……随分と離れてしまったが》

「すぐに合流できるか」

《問題ない、もつとも私たちが合流する意味があるか微妙だが。それでもあの槍兵はバツ……随分と急いでそっちに向かっているさ》

「そう言うな……まあ獲物を残す理由もないが」

《だろ、とにかく私たちを待つ理由は無いさ、そちらで終わらせておいてくれ》  
「だと良いがな、了解した」

一行は最終決戦となるオルレアンへと向かう。



## 邪竜百年戦争オルレアン：13

1431年 6月〇〇日

フランス ロワレ県 オルレアン、現地時間 11:30

オルレアン城下にて

「……攻撃が、飛んでこない？」

「みたいだな、向こうは籠城するのを選んだか」

《冬木で検知した同じ反応がある、間違いなく聖杯だ。その反応と同じところにサーヴァントの反応もある》

わずか数分のドライブを経て、カルデア一行はオルレアンに突入し竜の魔女であるジャンヌ・ダルクラが拠点としている城元へとたどり着いた。全員が車を降りるのを確認するとスネークはiDroidを取り出し、車を回収させた。

……その方法が車の真上にワームホールが開き、車が浮き上がって物理的に消えていくという近未来どころかいつの技術だと突っ込みたくなるアレだったが、誰一人突っ込まなかった。初見であろうエリザベートですら『あ、金ピカと似たことできるんだこ

のオジサン』程度の認識である。

そして、そんな結構な質量のある物体がどこかへと吸い込まれる光景よりも気になることがあるのか、ジャンヌ・ダルクは手を顎に当てあからさまに首を傾げる。その光景にマシユが突っ込む。

「えつとジャンヌさん？何か変なことでも……？」

「あついえ、大したことでは無いのですが……らしく無いなあ」と

「らしくない、とは？」

何か隠している、というよりは理解しがたいと感じているらしいジャンヌ

ダルクにマシユは続けて首を傾けた。

「えーとですね、こんなこと私が言うのも変なのですが、『私』なら籠城なんて絶対にしないなあ」と

「そ、そうなんですか？」

「はい、たとえ数的不利でも敵陣に突っ込んできつさと逃げるのが私ですから」

「そ、そうなんですか……」

史実のジャンヌ・ダルクが実際に敵陣に向かって突撃、先陣を切っていたという記録は残っている……そして奇襲・夜襲は当たり前、捕虜となった敵兵の殺害命令、そして15世紀から本格的に普及し始めた城壁を破るための大砲を世界で始めて火器として

対人に向けて使用したという過激な実績。あと並行世界というか外典のような世界では敵の根城を攻撃するために魔術の秘匿など御構い無しに戦略爆撃機やミサイル、さらには米軍が保持している『神の杖』……文字だけで説明すれば『運動エネルギー爆撃』……の使用を提案するという割と結構周りがドン引きする強硬派である。

そんな割と脳筋な彼女に言わせて見れば。

「ええ、橋の上にサーヴァントを配置させ時間を稼ぎ、その間にジルに大量の海魔を召喚させて、私自身も聖杯を持っているなら追加の戦力を召喚して決戦を挑みます。その追加戦力が私たちに宝具を撃ってきた一体だけだとはとても思えません」

という話だった。

「で、では私たちは畏にハマっている?!」

「あつそれはありません。わたし、畏にかけるなんて難しいことできませんから」

そして至極もつともな疑問から焦るマシユをよそにあつさりジャンヌは否定する。

……それはそれでどうなんだろうと思うマシユと藤丸とその仲間たちだが、スネークはあえて当然の疑問を訪ねることにした。

「……先程から気になる話をしているが、なら“お前”ならこの状況でどうするんだ?」

「単純です、室内での戦闘に向いているサーヴァントを用意するか——」

「よく来たわねあなたたち!!」

と、そこで上空からよく通る声が聞こえてきた。

全員が上を見ると、どこから登って上がったのか城の一番上にある三角形みたいな屋根を片手でつかんで堂々と仁王立ちをしてこちらを見下す黒い姿が見えた。

「……室内じゃなく、屋根の上で宣戦布告するのかわ？」

「い、いくらなんでもこんな事まで想像できません！ 憧れますけど!!」  
(憧れるんだ)

彼女の素直な感想に若干わからなくもない藤丸だったが、そうじゃないよなと思いついて直しこちらをカッコよく見下ろしている竜の魔女を再び見上げる。

「……チョット無視するんじゃないわよ!」

そんなカルデア一行が私を無視して何かやってると感じたのか、若干キレ気味に竜の魔女であるジャンヌは吠えた。

「……それで、竜の魔女様がそんなところから何のようだ」

「ふっ、貴方達に最後の言葉をわざわざ掛けに来たのよ」

「ハッよくほざく、こっちはお前をわざわざ倒しに来たのだが?」

そんな竜の魔女に対して、黒い聖剣を肩に担いで思いつきり煽るアルトリア。まるで不良である……学校の窓ガラスを跨ぎ、窓のヘリで威張っている黒服で銀髪の聖女と黒く輝く聖剣を肩に担いで構える王さま……うんレディースかな?

それにしたって、随分と若干黒いジャンヌ・ダルクにあたりが強いアルトリアオルタである。

「あつそ、けど残念ね『女王様』？どう頑張ってももう無駄よ、だつて私の計画はもうとつくに終わってるのよ！『あなた達のおかげ』でね!!」

「・・・えっ?」

その言葉に藤丸は驚く。とつくに終わっているという話もそうだが何より自分がいつのまにか手を貸したという事が信じられなかった。それはマシユも同じだったように、他のサーヴァント達も表情に出すほどでは無いがその言葉を耳にし訝しんでいる。すぐにスネークは無線を起こす。

「おいロマン、この特異点はもうとつくに崩壊してるのか」

《い、いや特に変化は無いよ!?!それ以前にこれといった変化も無い!》

「なら嘘、つていう訳でも無いだろう……それで、お前ならどうするんだ」

スネークは地上にいるジャンヌに尋ね、その答えは至ってシンプルだ。

「……先程は言えませんでした、私なら『もつと強い』のを出します」

「それって——」

「ファヴニールよりも大きい竜つてこと!?!」

「……恐らくは」

「……………」

ジャンヌの発言に、実際にファヴニールをみたゲオルギウスやジークフリートは驚きを隠せない。あれ以上の竜など想像がつかないからだ。タラスクを知っているマルタや、竜を見たことのない他のサーヴァントの面々も少なからずヤバいのが出てくることを察した。

……その一方でスネークはどこか納得している。

「……今さら気づいたってもう遅いわよ、すでに召喚は終わってるわ、あとは私が言葉を紡げばそれで終わり」

「で、ですが私たちはそんなことに協力した覚えなど——」

「ああソレ?……そうねどうせこの場で終わりだもの、1から丁寧に説明してあげるわ」  
そんな中、マシユが当然の疑問を問う。

そんな特異点の解決が目的である自分たちが、逆に崩壊の方へ、敵の手伝いをしていなど思い当たる節もなく到底信じられないのだ。だが実際に敵であるジャンヌ・ダルクはここから彼らに感謝している。

そして何一つ嘘を言っていない。

「そうねえ……あなた達にはむしろ感謝してるわ、ここまで材料が揃うなんて思わなかったもの」

「材料……?」

「ええそうよ?まず最初に私が竜の魔女であること、そのおかげか知らないけどワイバーンや竜にまつわるサーヴァントを私は召喚したわ……まあそこにいる聖女様が死んでないことには驚いたけれど、正直どうでもいいわ」

「・・・あーアレ知ってるわ僕……まじでヤバイやつだコレ」

「?どういうことアマデウス?」

「……良いかいマリア、普通サーヴァントが寝返ったら大きな戦力ダウンだ。

ただでさえ十人以上のサーヴァントがこっちに居て、向こうは彼女ともう一人だけだぜ?なのにあれだけ大口叩けるのは現実逃避で頭がやられたか本命があつて本当に余裕があるときだけさ」

「じゃあ彼女は本当に余裕があつてあなたは頭がやられたことがあるということね!」

「……ウン、そうだ」

せつかくシリアスな低い声で発言したのに、自分の信用値が低すぎるせいでいらぬ真実をまたマリーに知られてしまったことを諦めながら、それをもきにする余裕がないレベルでヤバイとアマデウスは顔を歪ませる。その顔が本当に余裕がないと悟った王妃様も、微笑みながらも周りに様子を気にしてキョロキョロし始めた。

「ちよつと待つてください!竜にまつわるとはどういう意味です!?!たしかにマルタさん

はそうですが——」

「そのままでの意味よ、最初に倒れたバーサーカーは竜殺しの逸話が。」

あなた達がさつき倒してくれた4体のサーヴァント、ヴラド3世とデオンは竜騎兵とドラゴン騎士団でしょう？それもカーミラとアタランテには化け物の因子、つまりモンスターよ」

「アタランテ……？」

「エミヤ達が相手してた奴だろう」

スネークはそう答えながら屋根に立つ竜の魔女を見る。

今の一行で有効に遠距離攻撃ができるのは銃を持つ彼だけ。一応アマデウスや同じライダーであるマリー・アントワネットも出来ないことは威力など無いがたかが知れている。火力の点ではスネークも一撃必殺の武器を持っているわけでは無いが、膝を狙えば屋根から相手を落とすことくらいは自信があつた。

だが、彼女を撃ち上げる形でクイツクショットするには条件が厳しい。何より外せば即戦闘になる。確実に狙えるタイミングか、せめて外した際の退避手段が揃わなければ迂闊に手が出せない。

そんな算段をスネークはつけながらも、彼女は余裕そうに歩き語り出す。

「そしてあんたがどんなタネでやったのか知らないけど、その男が倒したファヴニー



ルは幻想種、それも竜。

……それはそれで腹立たしいけど、これは全部原料でしかないわ。野菜を放っておいてもただ枯れて、腐って、消えるだけ。私が召喚したサーヴァントも所詮魔力の塊に竜に関わる逸話が付いてるだけ、所詮放っておけば倒されようが何されようが、魔力が切れてただ消えるだけ。けど加工すれば触媒と燃料になる」

「触媒と燃料……？」

意味がさっぱりわからない藤丸は、どういうことなんだろうと少し考えるもさっぱりわからない。魔術については一般素人ではないマシユでもあまりピンと来ないようだが、勘の鋭いサーヴァントや、カルデアでモニタリングしている者たちは嫌な予感と予想が立った。

《……藤丸くんたちが倒したサーヴァントの魔力を聖杯に注いで竜を召喚する気か!?!》

「だからあの女、ファヴニールで味方ごと俺らを焼き払うのにも躊躇しなかつたわけか」  
「っそんなことできるの!?!」

「た、たしかに聖杯は万能の願望機、しかもファヴニールの召喚も成功してますから——  
!」

「そういうこと、しかも本来なら7体のサーヴァントの魔力が聖杯に注がれることで願望機として機能するそうじゃない」

《藤丸くん達が倒したサーヴァントは……バーサーカー・ヴラド三世・シュヴァリエ デオン・カーミラ・アタランテの5体、それとファヴニール・・・6体しか居ないぞ!?》  
「……ああ、忘れてたわ。サンソンとかいうアサシンも居たわね。もつともその王妃様に散々やられたせいで仮初めの肉体しか残ってなかったからそのまま魔力に還したわ」

「っ」

「……あいつ」

竜の魔女の説明に一瞬マリーは顔をしかめそうになり、わずかに口元を誤魔化すようにズラした。そのわずかな変化を見逃せなかったアマデウスは、竜の魔女への嫌悪か、はたまたどこかの執行人に対しての愚痴なのか。ただ、少なからず隣にいる彼女が反応したから彼もそんな言葉を漏らしたのは間違いない。

「そういうわけで、あなた達のお陰で私はファヴニールより強い竜を……いいえ! 竜の王をここに呼ぶわ!!」

「……あれはもうダメですわ、完全にふっ切れて全部破壊する気満々ですよますたあ?」  
「じ、じゃあわたし達このままじゃヤバイじゃない!」

《君たちどころかこの国、いや特異点が崩壊だ。そのままカルデアに戻れないついでに人理も崩壊する……!》

そんな中、たった一人勘の鈍いサーヴァントはやつと今自分たちが置かれてる状況がやばいことに気づいたらしく慌てふためく。同時に藤丸もとつくに決めていた覚悟をさらに踏み込み、そこにアルトリア・ベンドラゴンが後押しする

「命令を出せ、マスター」

「つ令呪解放！ジークフリート！アルトリア！それぞれ宝具を解放！！」

「私にあわせる竜殺し、外せば殺す」

「だろうな……！！」

急速に膨れ上がる魔力が全てそれぞれが持つ魔剣へと注がれる。

それにより二柱の魔力は天を貫き、あたり一帯を暴風で包み込みながら急速に広がり、さらに魔力を増強させていく。

事前のプランでは各個撃破、その後聖杯回収だったがそんな悠長なことを言ってる場合ではない。

ゆえに令呪を二画切り、速攻で城ごと敵をぶつ倒し、聖杯の回収は後回しにする。この場で最悪なのは聖杯を破壊してしまうことでは無く、この特異点もろとも人理が崩壊してしまうこと。そのことについてマスターはよく理解していた。

「つ今よジルー！」

だが、邪魔されることくらいジャンヌ、といよりも元帥であるジルは分かっていた。

だからこそ姿も現さず、カルデア一行が仮に対城宝具を放とうとも竜の魔女だけ生き残れる程度に威力を減衰させる程度の高魔を大量に召喚できるよう準備していたのだ。

「……であの化け物か!!」

まるで塔のように突如オルレアンの城の目の前に築かれた……いや、積み重ねた高魔は竜の魔女の姿をカルデア一行から完全に隠す。その竜の魔女と一行の直線上には二振りの魔剣が構えられており、完全にジルの思い通りになった。

このままでは最悪の事態竜の王の召喚を招くだろうとその場の誰もが察した。

「ただで済まず気なんてサラツサラ無いのよッ!星のように!『愛知らぬ哀しき竜よタラスク!』」

だが積み重ねただけの高魔は文字通り肉壁でしか無い。キャスターであるジルの宝具によつて召喚された生物とはいえ、その宝具の出典・性質上、一個一個の個体が強力なわけでも硬いわけでも無い。そんな肉壁の高魔に風穴を開けることはサーヴァントも万全であれば宝具を使えば余裕だ。

タラスクによつて塔に一つの大きな穴が開く。

すぐに塞ごうと、穴の周囲にいる高魔がモゾモゾと動き出すが、肉塊ごと潰すことなど造作もない。

「……?……ッ!!?」

「つマスター……?……先輩ッ!」

サーヴァントとマスターが万全の状態であれば、だが。

「汚らしいモノですね、私も焼き払いま——」

「!? ちよ、つアンタストップ! ストローツプ!!」

「……何ですかトカゲ」

「子犬の様子がおかしいのよ!」

「え……」

清姫はエリザベートを睨むジト目から、見開いた両眼を後ろにいるはずの藤丸の方へと変えた。

すると胸を思いっきり押さえつけ前のめりに倒れこむ彼の姿があった。

《魔術回路に異常値ツ! それとバイタルも不安定になつてゐる!!》

「先輩ッ!!」

「落ち着けロマン、マシユもだ。坊主、痛いのはどこだ」

「む、むね……」

「OKだ、喋れるなら致死性のものじゃない、呼吸も苦しいわけじゃないさそうだ、ゆっくり呼吸しろ」

「ツツ！二人ア宝具ツ!!」

「喋るな」

ここで仕留めなければいけないと感じている一般人は、胸痛に耐え大声で頼みの二人に指示を出す。そのせいでさらに痛みが増し胸を押さえスネークに怒られる藤丸。

だが、そこまでやられて、頼られて、なにもしないで何が英雄か。少なくともマスターが倒れている前で魔剣を握る二人の英霊はその期待に全力で応える。

「まだ未熟なマスターだ、無理はさせられん、ここで決めるぞ」

「元からそのつもりだ、長引かせる気は元からない……!」

「ほお……ただ謝るだけの奴かと思っていたがそんな顔もできるか」

「ただ苦しむ顔を見たくないだけだ、俺のせいでそうなるならなおさらだ」

「……そうか」

それだけ答えると輝きを増した二柱は二人の英雄が余力を考えず自前の魔力も注ぎ込み全力でたたきつけることを示していた。

「邪悪なる竜は失墜し、世界は今落陽に至る。撃ち落とす!」

「卑王鉄槌。極光は反転する。光を呑め!」

『『バ  
ルム  
ンク  
ク』  
『幻想大剣・天魔失墜！』』  
『約束された勝利の剣！』』

聖剣であり魔剣ともいえる二振りが、

それぞれの魔力を帯びたまま、目の前に立ちはだかる肉塊ごと全力でオルレアンに叩きつける

「反動くるぞお!!」

《宝具は使っちゃダメだ！藤丸くんの状態が悪くなる!!》

「なら対シヨック姿勢!」

「ソレどんな姿勢だい!？」

「地べたに張りつけ!!」

「ツマスタ―は私の後ろに……!!」

「我が旗よ。我が同胞を守りたまえ!」

「ニヤニヤツ!」

叩きつけられた青と漆黒の光は暴力的にフランスの大地を抉りながら竜の魔女が立つ城へと襲いかかった。

スネークはすぐに匍匐姿勢になり五体投地するように腹ばいになり、頭部両手で守る。ほかのサーヴァントもそれぞれの持つ得物やスキルで自分の身を守り、藤丸の周囲はマシユとジャンヌが固めた。

直後、周辺に圧倒的な暴風と粉塵とが混ざり合った嵐を巻き起こり、カルデア一向にも襲いかかる。

その嵐の元は肉塊へとも襲いかかり、さらに二色の柱が追撃する。

最初は真正面から受け切ったものの、肉の壁はやがて吹き飛びながら蒸発していき、そのまま形を崩していきながらオルレアンの城へと激突した。城と二本の柱に挟まれ何か奇声をあげる海魔だったが、暴風によって誰の耳にも届かず、そのまま潰され、蒸発していく。さらに二柱の勢いは止まらず、そのまま城の外壁を破壊する。

片方は竜特攻を持つ対軍宝具、もう片方は対城宝具であり、その威力・相性は今置かれてある条件下において発揮できる最大火力となる。その分類名の通り、漆黒の光は城を完璧に攻略していた。



◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆?

やがて嵐はやみ、スネークはマスターの様子を確認する。

「マシユ、マスターの様子はどうか?」

「い、一応安定、しているように見えます!」

周りのサーヴァントも他のサーヴァントを確認しながら、周囲を確認する。かの聖剣使いの2人の姿は確認できたが、まだ前方の城があったであろう場所の様子は砂埃で分からない。そんな中、ロマンが藤丸の状態を説明する。

《多分魔力欠乏症だ。サーヴァントを運用するための魔力は全てカルデアの発電によって賄ってるから召喚者の魔力量に依存しない、あくまで藤丸くんは君たちを繋ぎ止めるパイプだけど……》

「パイプでも過剰に流れれば損傷する、それが慣れてない状況下での連続運転ならなおさら、か」

《幸い、少しでも休めばすぐに復帰できる。バイタルもさつきまでは不安定だったけど今は安定してる、君たちを現界させるくらいなら問題はないよ。流星に宝具を撃たせるわけにはいかないけど》

「ですが、その心配は——」

「よせ、まだ仕留めたか分からん。おい、そっちは大丈夫か？」

「……ああ、私は問題ない」

「……すまない、正直私は休みたい、これ以上の戦闘は難しい」

マシユはまだよくわかっていない因果律の調整方法の定番をしようとしたところでスネークは冷静に止めに入り、前線で宝具を全力で放った2人の確認をする。竜殺しは本人も申告した通り、剣を地面に突き刺しながら肩で息をしており、弱点である背中を晒している状態だった。仕留めるなら絶好の瞬間だろうが、それをわかっている周り……といってもフリーで動けるのはゲオルギウス・マルタ・スネークの3名のみだが、その背中をカバーしつつも攻撃を防ぎ、すぐはんげきが出来るようになっていた。

一方のアルトリア・オルタはそれと比べると余力があるように見え、自力で立つており息も上がっておらず、ジークフリートと同様に地面に剣を刺してはいるものの、両手で柄を持ち構えているだけだ……が、実際は宝具を撃つのはもちろん魔力放出でかつ飛ぶ余力も残っていない。もちろん自衛やジークフリートの背中を守る程度は出来るが、そのジークフリートの背中を気にする余裕が無いお陰で、今その背中をカバーすることができていない。

「まあ無理はするな、坊主の側に居てやれ、ここから先は俺らが出張る」

「……すまない、頼んだ」

「私は頼んでいない」

「お前もだ騎士王、無茶して無駄に魔力を消費してあいつに迷惑かける方がお前にとつては癪だろう」

「……………フン」

そう言つてジークフリートは素直にゲオルギウスに付き添われながら、騎士王は不機嫌そうにゆつくりと後ろに下がり、代わりにスネークとマルタが前に出る。

2人の前方に広がっていた土煙は晴れていき、暴力的に通り過ぎた光の柱の爪跡が現れた。

城はほぼ全壊。

一柱ではなく二本による同時攻撃だったため、左右末端は全て消し飛び、城の中央部は衝撃波で砕け散り、中央にあつた土台の一部、それも宝具が直撃した方とは真逆の最後方の部分だけが原型を留めているだけで、他は全て瓦礫と粉塵になつている。

だがそこに肉塊や血の跡はなく、死んだり倒れたりした痕跡は残っていない。

「……………あいつはどこかしら」

「正しくはあいつら、だが……………そういえばもう一人はどこにいる？」

《さっきの宝具のお陰でその空間の魔力量がすごい、おかげでこつちのリーダーでも

サーヴァント反応がわからない、もちろん君たちの位置も正確に把握できてない。けど、聖杯の反応は確かにあるよ、どうやら君たちの前方みたいだけど……」

「ならアレの後ろよね」

そう言つてマルタが指差すのは、唯一残った土台。

そこ以外に姿を隠す場所などなく、何よりワイバーンを誰も見てはいないが、あの嵐と衝撃波の中ではワイバーンもろくに飛べない。そのワイバーンの死体も見当たらないとなれば隠れているに違いない。

「……おかしいな」

「何がよ？」

「……嫌な予感がする」

「え、ちよつ、ちよつとー！」

スネークは敵が投降してくることも、制止を待つこともなく、M16を構えながら急ぎ残った土台部分の裏側を確認する。すると、やはりと言うべきかそこに敵の姿はなく、ただのスペースしか無かった……が、代わりに一人分幅がある穴が空いていた。

深さを確認することもなく、スネークは腰から下げているグレネードのピンを引き抜き、時間差で2個投げ入れる。

「一体なん——穴？」

「離れる、爆発する」

「ん」

慌ててマルタも付いてきたが、すぐに離れるように促す。

爆発という言葉に驚きもせず、かの聖女はさつきと穴から離れ、手に持つ得物……ではなくて杖を構えいつ敵が出ていてもいいよう備えた。それはスネークも同様で、銃の狙いを穴の付近に固定する。

だが穴からは何も出てくることはなく、数秒がたったあとに小さな爆発が2回続いた。

「おかしい」

「だから何がよ、それこそ彼女が消えたのはこの穴に逃げ込んだんでしょ」

「よく見ろ、この穴は湿っていない、少なくとも掘られてから1日以上は経っているだろう。それに俺たちが感じたグレネードの爆発があまりにも小さい、お前も揺れは感じなかったよな？」

「え、ええ」

「だとすればこれは単に縦穴を掘った代物じゃないということだ。日本ではタコツボと言ったか、少なくともそういった簡易的な塹壕ではなさそうだ」

そう言いながらスネークが銃を構えながら穴を覗く。だが穴の奥底は視認すること

が出来ず、陽の光は途中から途切れ、グレネードが爆発したのは確認できる範囲外だとしかわからなかった。

「そうなるよこの穴の中に入る……わけにはいかないわよね」

「地下に要塞、は言い過ぎだろうが、いわゆる工房が作られてるだろうから……こう言う時にドローンでもあればよかつたんだが」

《そうだねえ、索敵用のツールはカルデアでも用意してなかったなあ、検討の余地ありだね》

《けど確実にその先に敵である竜の魔女であるジャンヌ・ダルクはその先に……》

「問題ない、この手の専門家が俺たちの仲間にいるからな」

「専門家？」

「おいとレニヤー」

「ニヤニヤツ！」

そうスネークが地面に向かって呼ぶと、ポコッと土が盛り上がり、バサアとトレニヤーが黄色いヘルメットをつけたまま、地面から顔だけを出して現れた。

「すまんがその穴の先を見てきてくれないか、俺たちじゃ入った瞬間にバレるが、お前ならバレずにこの穴の先がどうなってるかわかるはずだ」

「わかったニヤー！みて戻ってくればイイニヤー？」



の表情をしている。とりあえずマルタは、はじめてのおつかいで家を出発できない子を相手する様に優しく声をかけた。

「すぐ逃げるニヤツ!!」

「・・・なに?」

「あのお姉さんデッカイモンスターといたニヤア !!」

《デカいツて、ファヴニールよりも!》

「おミヤーも逃げるニヤ!!」

トレニヤーは早々に地面に潜り、その場から逃げ出し始めた。

やり取りを無線を通して聴いていたメンツは、その大きさに驚いていたが、スネークはトレニヤーをよく知っているからこそ、言葉の本質を見抜き、すぐに車を藤丸の近くに呼び戻した。

「坊主!すぐに撤退だ!!」

《ツ地下から超強力な反応!?!彼女がいつていた竜の王か……!》

「とにかく城から離れる!」

「ここで仕留めきればいいんじゃないの!」

「無理だ!トレニヤーがデカいと言った、つまりあの女が召喚したのはファヴニールより強い!」



《そりやデカいなら強いよね!!》

「違う!!野生の本能でデカいと言っただけだ!ファヴニールを見て素材としか思わなかったあいつが逃げた!そういうレベルだ!!」

トレニヤーはこの世界とは別の世界からやってきた生物であり、極めて生命力の強い動植物がそこかしこにいる自然界でサバイバルしてきた一族の一員である。ハッキリ言つてファヴニール程度の化け物ならいくらでも見慣れているし、素材でしかない。

だが素材どころか生き残ることすら難しい化け物もまた見慣れている。  
敵わない時は逃げる、トレニヤーはわかっているのだ。

「……すまない、余力を残しておけば」

「そう言ってる暇はありません!すぐに車に!!」

「霊体化できるやつはそうしろ!他は車に乗れ!」

「わ、わかった!!」

一時的に体調が悪くなった藤丸だが、どうにか復帰した。

だが誰かが魔力を大量に消費すれば、またすぐに状態は悪くなるだろう。だからこそスネークはこの場にとどまらず、一旦距離を置くことを選んだ。

車には藤丸やマシユ、ジャンヌに体力を消耗しているジークフリートが乗車した。

「ここに救世の旗を再び掲げよう!ここに集え!ここで率いられよ!ここで統べられよ

!!なぜなら彼女がここにいるのだから!!」

「ジ、ジルの声!」

「全員乗ったな!?!出すぞ!!」

車を一旦ワームホールで返していたのが幸いし、宝具の荒らしの被害にあうこともなかった軍用車両はスムーズにエンジンがかかり、アクセルを一気にベタ踏みされても急発進した。

《・・・ハアアアアア!?!》

「どうした!」

《こっちの計器の異常を疑いたいくらいだよ!!生命反応がもはや測定不能って!?!》

《ツ観測は維持!絶対に藤丸くんとマシユの存在証明は途切れさせないでよ!》

その間にも事態は悪くなる一方らしく、ロマンは叫び、ダヴィンチはまじめに指示を飛ばしていた。その超巨大な生命力はサーヴァントを始め、藤丸ですらわかる代物になってきていた。それに比例する様に、地面が揺れはじめ、城があつた土台部分が盛り上がりはじめた。誰が見ても城があつた場所から何かが出てくるのは明白だ。

「い、一体何が出てくるの!?!」

「分かん!いくらか検討はつくが、どれも面倒な相手だ!!」

「検討がつくんですか!?!」

「トレニヤーが逃げたならトレニヤーの世界にいるモンスターで間違いない!」

「そ、そんな別世界の生き物を彼女は召喚できたんでしょか!」

「触媒と聖杯さえあればできるだろうな! それでも竜に関わるサーヴァントだけで召喚できるとは考えにくいが……」

「ニヤー!」

「と、トレニヤーさん!」

「こつちに乗った方が安全だニヤ、どうにか間に合ったニヤー!」

「ここで、車体のドア部分からトレニヤーが這い上がってきた。」

野生の勘は自力で逃げるよりも、スネークらが乗る物体に張り付いた方が安全かつ確実だと判断したらしく、地面を潜って早々に合流していたらしい。

「車の下に張り付いてたか……お前、あのモンスターの正体わかるか?」

「真つ暗で何にも分からニヤかったケド、とにかくデカかったニヤー!!」

「リオレウスと比べるとどつちがデカい?」

「オイラがさつき見た方がまだデカいニヤー!!」

「そうか、なら——」

「すまないが何か出てくるぞ!」

後部座席で座らされているジークフリートがそう報告する。

「いまだ魔力が回復しきつておらず疲れてはいるが、ただならぬ気配から無意識に剣を握る力が強まっていた。なによりファヴニール以上の竜の気配がそうさせていた。姿はまだ盛り上がった土で見ることができないが。」

「……何だろう、アレ」

《間違いなく竜の反応だけど……なんなんだこの反応……!?!》

「これほどまで強力な竜がいるのか……」

「悪いがファヴニールは確かに強い、だがトレニャーの世界からきたモンスターは、あの竜よりも強いのもっといえる」

「そう言いながらも車はさらにスピードを上げながらも、大きく弧を描くように城の外周を走る。ここで離脱した場合、召喚された竜は好き放題に暴れ始めるだろう。そうなれば打つ手がない。急いで離脱したのは様子見もあるが、藤丸の体調を考慮したのと、距離を取った方がまだ柔軟に対応できるために過ぎない。」

決して逃げるためでは、ない。

「……倒せるんでしようか」

「倒すしかない、ただでさえ今のフランスはワイバーンで荒らされてる。そこに竜の王が放たれてみる、それこそ終わりだ。ましてやトレニャーの世界の竜はさつきも言ったが厄介な性質を持つ奴が多い、聖杯によるバックアップもそこに乗つかればもはや手が

つけられない」

《……安全を考えれば今すぐ藤丸くんを一旦帰還させたいけど》  
《ダメ、そうしたらもう聖杯回収どころか人理修復も失敗する、ここで決めるしかないよ》

カルデアの観測チームもここで逃げれば全て手遅れになることを見抜いていた。

なにせ、ロマンが計器の異常だと信じたと言ったように、いま竜の魔女が召喚したと見られる竜の生命反応は、カルデアのあらゆる情報を拾う事象記録電脳魔・ラプラスのデータを基に、霊子演算装置・トリスメギストスによつて観測データを分類しているにもかかわらず、測定不能を示した。

それはつまり、地球上で今まで同等のものが観測されたことがないほどまでに生命力にあふれているのだ。

その事実気づいているマッシュは、弱音を混じらせながら呟くのも無理はない。それに対してスネークも励ますことはなく、為すべきことを言うだけだった。一方で藤丸はマスターとしてどうしたらいいのかを彼なりに考えていた。

「こんなこと聞いたら怒られるかもしれないけど……ジークフリートさん」

「……何だろうか」

「ジークフリートさんの宝具で倒せる？」

「……致命傷は与えられるが倒しきることは難しい、それはかの騎士王でも同じだろう」  
「貴様、勝手なことを言うな」

「事実だろう」

「……………」

霊体化した状態でアルトリアは抗議するも、深く追撃できない、つまりはそう言うことだ。だがそれをあまり気にすることなく、藤丸はさらに考える。

「……クー・フリーンの即死宝具で仕留められる？」

「悪いなマスター、そいつの期待にはちと答えられそうにねえわ」

「随分と久しいなマスター」

「あ、クー・フリーン、エミヤさんも」

そこに斥候二人組が走りながら合流し、エミヤの方は車のドアに手を引つ掛け体を車の外で預けていたがクー・フリーン。

どうやら2人ともやや着ているものがボロがあつたがそれほど消耗はしていない様子で、余裕そうな雰囲気を醸し出していた。だがマスターの提案に対して随分と消極的な意見を出したのはクー・フリーンだった。

「え、それでクー・フリーンの宝具じゃダメなの？」

「ダメ、じゃあないがな？俺の知ってる限りあの手のバケモンは心臓ぶっ刺したところ

で死なねえんだわ」

「そうなの!？」

「それは貴様ぐらいだ……と言いたいが、私も同じ見立てだ。まだ全容は把握できてないが、これほどの力を持つ竜ともなれば即死する可能性は低い。もつとも、十分致命傷は与えられると思うがね」

「……令呪でジークフリートさんの宝具を撃ってもらった後に、クー・フリーンの宝具のコンボでいける?」

「おつ、最初の騎士王様の作戦通りになったな?」

「何が言いたいランサー?」

「別に?」

そう言つて挑発的に何も無いところへ向けて喋るアイルランドの御子。

しかし、その場にいる誰もがその何も無いはずの空間で黒いライオンがいるのを幻視したとかなしいとか。

「ちなみにだがマスター、エクスカリバー・モルガンを使わない理由は何かね?」

「え、多分ジークフリートさんはこのまま戦わせるのはきつそうだけど、宝具なら令呪のバックアップさえあれば撃てそうだから。アルトリアさんに宝具を撃ってもらつてもいいけど、ジャンヌ・ダルクを倒さないといけなから、その時のための戦力温存……つ

て、なんで笑ってるの!？」

「いいや、中々に考えていたようだからね」

「……………」

だがすぐにライオンは大人しくなったとかなんとか。

「イイぜ、そういう流れに任せていく感じは嫌いじゃない、むしろ好ましいぜマスター」

「私も異論はない、まだ戦おうとしている邪魔をするほど私は落ちブレてもいない」

「プランは決まったな、なら気分良く宝具がぶっ放せるよう他全員でバックアップだな」

作戦、というよりやる方法と流れが決まってしまえば、あとは勝手にやれる程度に戦いに慣れている英霊たちが具体的にプランを決め始める。

その一方で藤丸は一般人らしい心配を投げかけた。

「仮に……………ここで決められなかったどうしよう?」

「坊主が心配する……………ことだろうがその時はそのときだ、できることをやる以外ない。もし心配なら見届けながら考えろ」

「……………わかった!」

「とにかくジークフリートの周りを固めろ、宝具を撃った後には回復させるために離脱だ」

「ならあらかたのサーヴァントは彼の背中を守りましょう、私の旗は癒しの効果もあり」



「ますすし」

「じゃあ彼を私の馬に乗せればいいわね！」

「追撃は俺も付いていく、ほかにいるか？」

「私もいくわ……ちよつとあの娘ぶん殴らないと気が済まなくなってきたし」

「ニヤニヤ！姿が見えるニヤ!!」

作戦は決まった、ジークフリートの宝具で致命傷を与え、クー・フリーンの呪いの朱槍でとどめを刺す。双方ともに狙いを外すことは許されないが、外すことはまず無い。問題になるのはこの二段階の攻撃で1匹の竜を仕留められるのかということ。

その相手となる竜は——

「……黒？」

「いや、紫色と黒だ、大きさはファヴニールの方が高さがあるが、全長で20m以上はありそうだが——」

「トレニヤ、アレは……」

「……ニヤ、オイラは見たことないニヤ」

「だが居たよな、伝承で伝わる伝説で、『黒龍』が」

「ニャア」

「何、黒竜つて？」

「……分からん、だがこいつの世界ではこういう伝説がある」

そう言つてスネークとはある伝説の一節を暗唱しだした。

それは運命の戦争、あるいは避けられぬ死を意味する伝説の黒龍。

数多の飛竜を駆逐せし時

伝説はよみがえらん

数多の肉を裂き 骨を砕き 血を啜った時

彼の者はあらわれん

土を焼く者

鉄【くろがね】を溶かす者

水を煮立たす者

風を起こす者

木を薙ぐ者

炎を生み出す者

その者の名は

運命の戦争  
ミラボレアス

## 邪竜百年戦争オルレアン： 14

「ハハハ！勝った！勝ったわジル!!ついさつきまではどうなるかと思ったけれどコレは勝ったわ！こんなの相手にして倒せる奴なんていないわ!!」

「ええ、エエ！そうですともそうですとも！我々が、ましてやコレほどの竜を召喚できるあなたが負けるはずありません！」

現地時刻 11:45

かの竜らが地上へと現れた瞬間……彼女たちが言うところの竜の王を召喚した時点で彼らの中で勝敗は決した。彼ら2人はステータスの幸運がともにEランクである。逆にここまで思い通りに進んだのは、ジル・ド・レエの狂気に満ちている発言の通り、奇跡の賜物といって過言ではなかった。何より召喚した竜の王は竜の魔女からみても最強の竜だった。なにせファヴニールと比べても数倍強く、さらに竜の息吹（ドラゴンブレス）のみならず多彩な攻撃ができて、しかも動きが早いのだ。

コレを上回る生物なんていないわ！とジャンヌ・オルタは満足し、これらを召喚しさらに支配下に置いた私すごい!!と完全に舞い上がっていた。

時間を少し遡り、ジャンヌ・オルタらがあの嵐をどう凌いだのか。

早い話、スネークが見つけて推測を立てた通り、オルレアン城の地下に空間を作り魔術的な工房を作っていた。なぜそんな大それたことをしたかといえば、先の竜の王の召喚を行うためだった。

『そんな儀式めいたことをして……』と思ったジャンヌではあったが、先に説明した竜に関するサーヴァント等の魔力を触媒として、地下にそれらの触媒を供え、竜の魔女である彼女が事前に用意された歌詞を歌い上げ、竜の王を喚ぶという行為は儀式以外の何物でもない。邪神やら眷属やらを召喚するのと決定的に違うのは、完全に自分の制御下に置くことができるという点くらいで、まさに儀式である。

話を戻して。

ジルの指示によって事前に目立つ場所……彼女は屋根の上を頑なに譲らなかつたりしたが……で待機。敵であるカルデア一行が通ってくるであろう場所に自身の支配下にあつた3体のサーヴァントを配置し、遠距離から宝具（エクスカリバー）を撃たせないうために遊撃に1人を当てさせた。

そして『あいつらに倒されて死ぬ』と命じた。その理由とともに。

結果として4体のサーヴァントは見事に勤めを果たし、純度の高い燃料と触媒となつた。

想定外だったのは初動の段階で遊撃を任せていたサーヴァントが計画通りに動けず、斥候2名を相手する羽目になったことだが、斥候が先にこちらに来ようとしていたため、護衛に控えさせていたワイバーン全てをそちらに回した。どうせ全て倒されるなら、召喚する時間稼ぎのついでにその倒されたワイバーンたちすらも燃料にすれば良い、それによつて私たちは詩の通りの最強の竜を呼べる。ジルのその判断に従った。

結果としてこちらが2人だけだと踏んでカルデアは宝具をぶつ放すことも無くノコノコと城に近づいてきた。本当なら屋根の上で最期の詠唱をする予定だったが、カルデアのマスターが令呪を切り宝具の同時使用というキチガイ染みたことをやってくれたせいで、本来は空気穴のために開けておいた大きめの穴に飛び降りることで嵐からは避難した。

こうして書き上げると運が良かっただけではあるが、運も実力のうちである。地上で召喚しなかったおかげで、未だカルデア側は召喚した竜の王の正体が正確に把握できていない。もし地上にいたならば専門家によつてすぐに正体を見破られていただろう。……見破られても苦戦することは必死の竜を召喚したのも事実だが。

「そうよねー！ そうよね、ジル!? ……これで本格的にこの国を、フランスという名の愚かな土地を沈黙する死者の国へと変えることができるわ、そうよね、ジル?」

「そうですとも我が聖処女よ……これほどの竜を従えられる貴女が間違っているはずが

ない！この奇跡はまさしくジャンヌ・ダルク以外に起こせるはずがない！！」

「そうね、今だけは私を褒め称えることを許します。……ですがまだ終わりではありません」

「おや、それはそれは私としたことが。しかし連中も呆れ目が悪い、もはや勝ち目などないと言っている」

「ハッ！それはそうでしょう、彼らはまだチャンスがあると信じているのですから。向こうにかつてファヴニールを屠った竜殺しがいるんですもの、頼り甲斐も勝機もあると言うもの。……もつとも、頼られた方はその期待に答えられるとも、見えているのが全てとも限りませんが」

「全く嘆かわしい……このまま逃げれば命はまだ助かると言うのに」

「英雄様ですもの？逃げるなんてできないでしょう、それにここで逃げたところで何も残りませんが。もつともこちらに向かつてきたところで私が何も残しません」

そう言うのと距離を取り、カルデアのマスターを乗せて外周を走っていた箱型の物体が急速にこちらに向かつてきていた、どうやら最後の攻勢に出てきたらしい。なんて無駄なことを……そう思いながらも竜の魔女は、黒い鎧を太陽で光らせながら召喚した竜の元へと近づく。それを目にしたジルは、その後ろで跪き、指示を乞うた。

「では……竜の魔女よ、（さ）指示よ」

「……私の理想を否定するものたちを皆殺しにしなさい！特に私そのものを否定する私を徹底的に!!」

彼女は指示を出した。

自分の理想である死者の国を作り出すために皆殺せと、まるで自分の理想であるかのように。

「……承りました、我が聖処女よ」

そう答えたのを確認した竜の魔女は、後ろを振り返り確認することもなく召喚した竜の王にさらに近づき指示を出し始めた。そしてジルは立ち上がり、おもむろに魔道書を取り出しページをめくる。

「……ああ、やはり私は間違いではなかった……間違いではなかったのだ……い」

彼女の前では、竜の魔女の前ですら見せたことがないような顔を浮かべる。それは狂気に飲まれた顔でも、狂喜からきた破顔した顔でもなく、ただただ泣きじやくった様なクシャクシャにさせた顔だった。

「私の願いは果たされた！さあ我が主よ!!我々に御身の祝福を!!さすれば私は貴方が望む世界を実現しましょう!!」

時はきた。狂喜はすでに満ちた。

希望は此処にあり、望みは叶い、後は彼女の道を邪魔する愚者どもを殺すだけ。



……かの竜を、詩にあつた通りの“彼の者”を本当に召喚できた、これこそ神の祝福であり彼女の奇跡である、ならばもはや負けるはずがない。ジルは何度もその奇跡を確認し、満足し、確信していた。

普通なら考えそうな、ここまでの偶然への見返りや報いというものをまるで考えることもなく

◆? ◆ ◆? ◆ ◆? ◆ ◆? ◆ ◆? ◆ ◆?

例の竜は現在身動きせず、ただ居るだけだが、召喚された竜の王はファヴニールと同様に翼があるが“デカい”。実際には体長が20m以上はあるもの、大きさそのものはファヴニールよりやや大きい程度。

しかし、紫がかつた黒を全身に纏っているという見た目とその場にいる誰もが感じ取れる程のあまりにも巨大な生命力がデカさという印象を生き物全てに印象付けている。

「全員準備はいいな？特に坊主とマシユ」

「よっしゃー！もう当たって碎ける！」

「ダメです先輩!?! そんなに興奮したら血圧が上がります！それに碎けちゃダメですつて!!」

《ふざけてる場合じゃないよ?》

軽口を言える程度には回復した藤丸とカルデア一行は最後の攻勢を開始した。

ある意味で、ここで止められなければもうどうしようもないと言う状況が藤丸を壊したともいえるが、発狂しているわけでも、混乱やパニックに陥ってるでもなく、武者震いのなもので触発されて少しおかしくなっているだけで、話も聞いているし言動も……言動はおかしいが、問題ない。

「元氣そうで何よりだ……ここがいい、止めてくれ」

「わかった」

車はかの龍がやや大きく見える場所、仮に標的が急に向かってきても藤丸だけでも逃がせるだけの猶予を持たせたとところで停車した。逆に言えば他のサーヴァントがどうなるかはわからないわけだが、これ以上距離を空ければ致命的な致命傷を与えられないと竜殺しの直感も告げていた。

すぐにジークフリートは降り、藤丸やマシユ・ジャンヌも降りると、霊体化していた

サーヴァントたちも一斉に実体化し周りに現れる。車に乗っているのは運転しているスネークとマルタのみ。

《……藤丸くんのバイタルは安定してるけど、いつ悪化するかわからない。だから極力魔力の消費は控えて欲しい。もっとも藤丸くん自身の身に危険が及ぶようなら別だけど……》

「ご安心を、守護聖人として彼を守り通しましょう」

「マスターがヤバくなる前に仕留めろってこった、まあ化け物倒すのはアレだが速攻は得意だしな」

そう言いながら朱槍を軽く振り回し、トーンと音を鳴らすランサー。

車に乗っているよりも自分で走った方が早いため車には乗っていないが、スネークらとともに龍を追撃。いや、正しくは追撃するクー・フリーンにスネークらが車についていき、サーヴァントである竜の魔女や魔術師を仕留めるのがスネークらの役割だ。どちらにしろ、クー・フリーンが龍を仕留めるのに重要な役割を果たすことには変わらない。「確認するね、ジークさんが最後の令呪で宝具を撃つ、その後にはクー・フリーンの刺し穿つ死棘の槍（ゲイ・ボルグ）であの竜に留めを刺す。あとはさらに召喚される前にあのジャンヌと変なのを倒す」

「安心しろマスター、あれだけのがでかけりやハズしはしねえよ。こいつがぶつ放して

俺がここで終わらせる、それだけだ」

「……本当なら私の手で仕留めたいところだが、私では終わらせそうにない、よろしく頼む」

「そう言いなさんなって、俺だけだと骨が折れんだ、お互い確実に効率よくやろうや」

なんてことを言って笑いながらジークフリートの肩を叩くクー・フリーンに気負いは一切見られなかった。考えてみれば絶対絶命なんて状況は、彼からすれば日常の一部に過ぎなかったのだろう。仲間が全滅しそう程度なら不安になることもないのだろう。その姿にハツとしたのか、エミヤが顔を見上げゆつくりと近づいて行く。

「ランサー……お前……」

「ああ? どうしたそんな深妙な顔して……らしくねえぞ?」

「いや………まさかお前の口から効率だとか確実だとか建設的な言葉が出るとは思いもしなかった」

「テメエは俺を煽る以外の言葉はねえのか!？」

「いや、本当に純粋な驚きなんだが……」

「だったら尚更タチ悪いわ!!」

そう言いながらもこの2人の言葉からは心から嫌悪している感じは無い。……互いに嫌いな節はあるが、相手の嫌味を言い合える距離にあるのがこの2人の関係性である

とも言える。

「……今更だけど、エミヤさんってクー・フリーンだけ態度が違い過ぎない？ていうか知り合いなの？」

「……腐れ縁、と言うべきかわからないがそのランサーとはいつも会っているといたけど」

「……会う機会なんてそんなあるの？」

「それについてはまた今度語るとしようかマスター、いまは目の前なのが先決だ」

エミヤは弓を投影すると剣のようなものを軽くつがえ、竜の王がいる方を見据える。

この場にいる誰よりもいい目（鷹の瞳）をもつ弓兵の目には、今から相手取るモンスタアの側に同じく黒い魔女がいるのが見えた。

「向こうもこちらを相手するようだ、ジャンヌ・オルタはあの龍の隣にいる。叛逆されないかと期待したが……どうやら完全に手なづけているようだ」

「わかりやすくして良いこった……そっちの宝具が合図だ、ぶっ放したら俺が走り始める」

「後続のことは気にするな、速攻で仕留めてくれ」

「言われるまでもね、つうか早くしねえと俺が全部仕留めるからな？」

「それだと助かる、坊主の体調的にもな」

「……おまえさんを煽つても意味ねえか、なら遠慮なくやらせてもらおうかねえ」

朱槍を一度回転させクー・フリーンは一行の先頭に立ち、穂先を下へ向け、構える。それは同時に姿勢を低くし、重心を下げ一瞬で最高速度を得るための瞬発力を得るための姿勢。この体勢から生み出されるスピードが決して狙いを外さず、ただ一刺で仕留め切る所以でもある。

「……」つちはいつでもイケるぜ、始めなマスター」

「……ジークフリートに命ずる！ 宝具を解放！ 俺たちの道を切り開いてくれ！！」

最後の令呪が藤丸の手から消え爆発的な魔力がジークフリートに流れ出す

同時に竜殺しの聖剣から天を貫く青き光が溢れ出す

「……いいだろう、その願い、俺が叶える！」

1度目の生では願いを持たず、それ故に自身も周りをも破滅させた。

それ故に、だからこそ彼は、サーヴァントとして生を受けたなら、

「邪悪なる竜は失墜し」

自身が生前に唯一望んだ正義のためにその剣を振るう。

令呪によってジークフリートに満ちた魔力が全てブースターとして宝具に使用され、天を貫いていた青い光の輝きが増したのを合図に、青装束の槍兵の構えが解かれる。

「世界は今落陽に至る！！」

「ッ」

「撃ち落とす！ 『幻想大剣・天魔失墜』 バルムンク!!」

大地を断つかのようには黄昏の剣が振り下ろされ、土を弾き飛ばし大地を抉り空間を裂きながら光線が、ガレキと化した城に召喚された竜へと一直線に突き進む。だが、宝具を用いて攻撃しているにもかかわらずこちらの狙いである黒龍は回避することもなくその場で佇んでいる。実際にジークフリートが繰り出した宝具を黒龍は認識しているがそのまま受け止めること決めたらしい。

瞬間、

大地ごと抉りとばし来た青い光は一匹の黒龍を捉える

黒い体躯ごと切り裂かんと辺りに光が弾け飛ぶ

一方の黒龍は宝具の効果から抗うかのように叫び、光を浴び続けている

ヴイイアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!

「……ん（ニヤ）？」

《効いてるぞ！あの竜の魔力が弱まつ——》

「すまない！やはり仕留めきれないようだ!!」

《ええ!?そんな?!》

「いいや本当さ、殺しきれない」

黄昏た空はやがて夜を向かえる。

青い光が途切れ始めた途端、黒龍が羽ばたかせたかと思うと叫びは咆哮へと変わり、土煙が凄まじく舞い上がりその漆黒の姿を城の瓦礫ごと隠したのを鷹の目が見届ける。その壁の様にも見える砂嵐は魔術によつて目を強化することもできない藤丸でもみることができた。

ただその場に在り続けるその龍は、なるほど確かに幻想種であるドラゴンでありとてもない化け物だろう

竜殺し1人では有利を取れても殺しきれないのは確かだ

なにせ竜殺しは一匹の竜を相手にしたが化け物を何匹も相手にしたわけではないましてや“竜”殺しであつて“龍”殺しではない

だからどうした

「穿つは心臓、謳うは必中……！」

何も一人だけで化け物を相手取る理由はない、使えるものはなんでも使えば良い



協力する、と言えば恰好が悪いなら共闘とでも言えばいい

一帯に舞がっていた凄まじい黒い土煙のカベに朱槍の光一閃の軌跡が描かれる

青装束を身にまとった槍兵の得物は、例え対象物が直接見えなくとも的を外さない

真名解放によって砂の壁を貫通した一閃はただ砂嵐の中にある心臓を穿つ

「刺し穿つ死棘の槍『ゲイ・ボルク』!!」

呪いの朱槍は確かに一つの心臓を穿ち、その感触をクー・フリーンへと確実に伝えた。

《おうさあ!》

「ッ!」

同時に無線に流れた「音」で仕留めたことを把握したスネークは、車を急発進させる。車に同乗するのはジャンヌとマルタの聖女2人である。

「あの竜は仕留めたわね」

「……だが、どういうことだ」

「どうしたのよ?」

「まだ確証はない……無いが、明らかにおかしい」

「さつきからおかしいって、一体何がよ」

シフトチェンジをしながら3人と一匹を乗せた4WDの車両は龍の元へと迫っていくが、運転するスネークは明らかに違和感を感じていた。なぜそんな違和感を感じるのか、トレニャーにスネークは尋ねた。

「・・・さっきのあいつの咆哮、いや声だが……」

「だから一体何よ」

「アレが砂を巻き上げる直前にしたあの咆哮・・・俺は聞いたことがある」

「・・・はあア!?!」

「き、聞いたことがあるってどういうことですか!?!」

突然トングデモないことを言い出したスネークを聖女2人が身を乗り出して問いただす。

だがスネークはあくまで端的に事実を確認するように言葉を続けた。

「そのままの意味だ。もつとも聞いたことがある気がする、と言った方が正しいが……!」

その時、スネークは鋭い視線を前方の砂嵐の中から浴びた。ハンドルを思いつきりに切り当然ながら車に乗っていれば慣性の作用で右に体が振り回される。

「ちよっ、もう少し優しく運転しなさいよ!」

「ツエミヤ！クー・フリーン向かって範囲攻撃できるか!？」

《……なに?》

「早くしろ！アレはまだ倒せていない!!」

《——I am the bone of my sword!》

スネークからの後方支援要請に対してエミヤは投影魔術によって応えた。

無線からながれてきた詠唱の数瞬後、走らせている車の後方から数射の剣が砂嵐の中へと飛翔し、爆発する。

「だ、大丈夫なんですか!?!あの中にはまだ——」

「味方のFFに当たるような奴じゃないだろうそれに……捕まっている!!」

ジャンヌがクー・フリーンの心配をするが、構うことなく砂嵐の中を注視していたスネークは再びハンドルを切る、それも先ほどよりもデタラメに。そのせいでリアタイヤは滑り車はドリフトの様な状態で急激にスピードが落ちる。

それによって——嵐の中から飛来してきた火球が車の右側で炸裂した

「ツアツイな!」

「ちよつと何いまの!?!」

「竜からの攻撃だ、竜の息吹ドラゴンブレスじゃないが——来るぞ捕まれ!!」

スネークが説明する暇もなく、すかさずギアを変えて車を急反転、今度はタイヤを滑

らせずに全ての摩擦をタイヤに伝えスピードを上げ始める。

直後、今度は三つ連続で火球が車の方へと飛んで来た。それらは車が加速していなければ確実に直撃していたコースであり、的確に前後の逃げ場を塞いでいたが、スネークが乗る車には熱だけが届くだけに留まった。

《今の火の玉なに!?!》

《悪りい! 肝心なところでトチツタあ!!》

マスターの声が無線越しに聞こえてくるが、同時にクー・フリーンの声も届いた。そしてどちらも声に余裕がない。

《ツ!?!トチツタってどう言う——》

「クー・フリーン、2匹いたな?」

《ああ、1匹は確実に当てたが俺が当てたのは1匹だけだ、もう1匹はジークフリートの  
が当てたが仕留め切れてねえ》

「2匹もいるってわけ!?!」

「そうなる……しかも最悪なことに単なる竜じゃない」

《……ニヤア》

わずかに無線から悲しそうなトレニヤアの鳴き声が聞こえてきた。

その意味をスネークは悟ったが、ほかのサーヴァント達は先ほどジークフリートや

クー・フリーンが宝具を放った場所から膨れ上がる魔力に反応する。

《ツなんだこの反応!?!もはや生命反応どころじゃない、もはや魔力そのものだぞ!?!しかも聖杯とまるで違う!!》

「『竜』だ、ワイバーンの意味でのな、それも——」

《うん間違いないね、その上で確認するけど君は最悪な竜と言ったミラボレアス、だったかな?それじゃない個体、しかも二体いるわけだけど、検討がついているわけだね?》  
「ああ、ほぼ間違いない、あの色合いは初めて見るがな」

「『黒龍』の予想通り、漆黒の体ではあるものの、記憶を遡ればあの咆哮は確かに『竜』である。」

そして記憶通りの『竜』であり、さらにもう一匹ここにいるというならば、『チコ』の話でしか知らなかった夫妻だろう。それも黒いというのであれば……二つ名だろうと。

「簡潔に言う。あれの名前はリオレウスとリオレイア、番のワイバーンみたいな竜だ、しかも通常個体じゃない」

《通常個体の定義も気になるけどね!?!》

ドクターがもつともなツツコミをするが、スネークは当然のように反論する。

「いいや、あれはその中でも特殊な個体だ、色も違うが強さが段違いだろう。その強さに畏怖を込めてあの個体には二つ名が付いてるらしい」

「二つ名……?」

「そうだ」

「ハハハハハ！勝ったわ!!これであなたたちに勝ち目はないわ!!」

砂嵐の中から声高々に竜の魔女が宣言する。

その声音は一切の疑いもなく自分自身の勝利を信じており、実際にその通りの存在が彼女の側にはいた。宣言直後に砂嵐は晴れ、先ほどの紫黒色の個体が・・・黒い十二かと共に現れた。

「本当に2体もいる!」

「あれほどの力を持った竜が2体、なぜ争わない……!?!」

「ツ先輩は我々の後ろに!」

その巨体は離れた場所にいる藤丸たちからも確認でき、ジークフリートは驚きを隠せなかった。なにせ彼が知る竜とは欲望の権化となった悪竜であり、そんな存在が仮に同時に出現したのなら仲間割れをするのが当然だと経験から知っている。

だが、今出現している竜は彼の知っている、いや、この場に召喚され現界しているサーヴァントたちの常識からはかけ離れた世界からやってきている。それを知っているのは……

「間違いないニャ!あれはリオレウスとリオレイヤに違いないニャ!!」

「……道理で聞き覚えがあるわけだ」

《スネーク、手短かに教えておくれ．．．あの竜は何なんだい？》

かの万能の天才はあくまで冷静に、しかし声音からは好奇心とそれ以上の危機感が混ざった焦りがたしかに伝わってきた。そしてスネークは言葉を返した。

『黒炎王』リオレウス、『紫毒姫』リオレイアだ」